

平成27年度  
特別経費プロジェクト成果報告書

「グローバル人材育成プログラム」の開発  
—幼稚園から大学までの系統的カリキュラムの策定を目指して—

平成28年4月  
京都教育大学



「グローバル人材育成プログラム」の開発  
---幼稚園から大学までの系統的カリキュラムの策定を目指して---

はじめに

20 世紀後半から 21 世紀にかけて交通手段や通信手段が急速に発達して経済のグローバル化が進み、多くの日本人が観光などで海外にでかけるとともに、仕事などで海外に居住するようになってきました。また、日本への外国人観光客、留学生や日本で就労する外国人が増えています。さらに、パソコンの普及とインターネットの急速な拡大によって、個人が世界中のウェブサイトや人々に日常的にアクセスするようになってきました。このような国境を越えた人々の移動や物資、情報などの流通は、世界の国々で急速に拡大しています。

このように急速にグローバル化が進む 21 世紀の社会では、民族や文化・風俗習慣の異なる人々を理解し、良好な関係を築いて平和に生きる能力を育成する教育が必要であり、そのような教育に携わる教員の養成が求められています。

京都教育大学は、平成 26 年度から「『グローバル人材育成プログラム』の開発-幼稚園から大学までの系統的カリキュラムの策定を目指して-」プロジェクトを立ち上げ、幼稚園から高等学校までの附属学校園と一体となって、幼少期からの発達段階に応じたグローバル人材育成のための系統的カリキュラムの研究開発に取り組んでいます。

平成 27 年度は、昨年に引き続き、グローバル人材育成に関する国内及び海外の調査を実施し、幼稚園から高校までの系統的グローバル人材育成カリキュラムのフレームワーク素案を提案するとともに、各附属学校園において実践授業の開発に取り組みました。さらに、大学においては、グローバル人材を育成できる教員の養成を目指し、グローバル教員育成プログラムを具体化し、平成 28 年度から本プログラムを運用するための準備を行いました。

この冊子は、これらの取組と成果を報告するものです。ご一読くださり、忌憚のないご意見などを伺うことができれば幸いです。

最後になりましたが、この開発研究を進めるにあたり、京都府教育委員会・京都市教育委員会をはじめ、関係諸機関、様々な方々のご協力をいただきましたことに深く感謝致します。また、今後ともいっそうのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

京都教育大学長 細川 友秀

# I. グローバル人材育成プロジェクト国内調査報告

## 1. 北海道教育大学グローバル教員養成プログラムの調査報告

報告者 中 比呂志

- (1) 調査日程及び調査大学：2015年8月6日（木） 北海道教育大学札幌校  
2015年8月7日（金） 北海道教育大学旭川校

(2) 調査内容：北海道教育大学グローバル教員養成プログラムについて

(3) 調査内容：

本プログラムは、3年ほど前から北海道教育大学の国際戦略室を中心に構想され、平成27年4月より、北海道教育大学札幌校、旭川校、釧路校の3校にてプログラムの運用が始められた。運用組織としては、「グローバル教員養成運営委員会」が立ち上げられ、各キャンパス3人体制（英語教員2名、プログラム・アドバイザー1名）で構成されている。本運営委員会は、札幌校を本部に、テレビ会議等を活用しながら行われているとのことであった。大学としては、交換留学等の業務を担っている国際交流センターが設置されているが、グローバル教員養成運営委員会はセンターとは別組織として設置されているとのことであった。

運営委員会メンバーの英語教員2名は大学の専任教員であり、プログラム・アドバイザー1名は本プログラムのために特別に新たに雇用されたスタッフ（平成26年10月から）である。大学教員はプログラム特別科目（別紙資料）の授業等には関わっておらず、プログラム・アドバイザーがプログラム特別科目を担当するとともに、学生に対するアドバイスや一般教養科目も2科目程度担当しているとのことであった。

本プログラムには、国からの補助金が措置されているようで、アドバイザーの雇用経費や海外への視察調査の経費が補助金から支出されているとのことであった。また、補助金により、札幌校及び旭川校の2キャンパスでCALLシステムの更新が行われたとのことであった。プログラム特別科目のE-learning I～VIは、新たに導入されたソフトを用いて行われているようである。なお、補助金が切れた後は大学の持ち出しとなるとのことであり、第3期中期計画では経費要求をする予定のようである。

運用を開始した平成27年度の申込者数は107名（札幌校50名：1年生45名、2年生5名、旭川校：28名、1年生28名、2年生0名、釧路校29名：1年生21名、2年生8名）であり、受講許可者数は35名（札幌校22名：1年生17名、2年生5名、旭川校：10名、1年生10名、2年生0名、釧路校3名：1年生1名、2年生2名）であった。今年度は、1年生及び2年生から募集を行ったようである。英語に関係した専攻の学生の応募が多かったが、英語に関係する専攻以外の学生の応募も見られた。定員としては、各年度60名（各キャンパス20名定員）としていたが、最終的には35名の受講許可であった。選考方法として自己推薦書と語学スコアにて選考することとな

っている。語学スコアは、TOEIC530 点以上（TOEIC-IP も可）か TOEFL-iBT54 点以上となっている。高校生年代までは英検の資格取得が中心であり、英検の資格しか持っていない学生が多く、入学後に大学が経費を負担する形で TOEIC-IP を実施し、最終的に 35 名に受講を許可したとのことであった。各キャンパス間で学力的な違いがあり、選抜の結果にも差が見られたということであった。旭川校では留学経費等の問題もあり、すでに 2 名の辞退があったようである。選抜テストは大学負担であったが、最終の規定の語学スコア（TOEFL-iBT92 相当以上）を取得するためのテストは自己負担で行われるようである。本プログラム受講者の中には、入学時において、本プログラムを目指して入学してきた学生もいるとのことであった。

グローバル教員養成プログラムカリキュラムは別紙資料のように設定されている。グローバル教員養成プログラムの修了のためには、正規授業科目及びプログラム特別科目から合計 20 科目以上を習得する必要がある。プログラム特別科目には、必修科目及び選択必修科目の区別がある。また、A. 豊かな国際感覚、高い英語力を身につける科目群、B. 異文化理解促進力を身につける科目群、C. 国際化推進力を身につける科目群の区分が設けられており、A 科目群から 10 単位以上、B 科目群から 6 単位以上、C 科目群から 4 単位以上の習得が必要となっている。学生の負担面では、英語に係る専攻以外の学生にとっては、負担が大きいかもしれないとのことであった。

プログラム特別科目の履修期の例

	1 年生		2 年生	
	前期	後期	前期	後期
A 科目群	◎E-learning I ◎E-learning II	◎E-learning III ◎E-learning IV	◎E-learning V ◎E-learning VI	留学
B 科目群	◎ Presentation I	◎Teaching Methodologies for English mediated Instruction	Presentation II	
C 科目群	○Business Writing	○Business Communication & IT		

◎必修科目、○選択必修科目

さらに、本プログラムの修了のためには、運営委員会が認めるボランティア・インターンシップなどの活動に 30 時間以上参加することとなっている。ボランティア活動は、既存の各自治体（教育委員会等）で行われているボランティア活動であり、大学が紹介した活動を中心に参加しているようであった。教育委員会と合同で実施して

いる子どもたちを対象としたイングリッシュキャンプ（1日8時間程度）に参加を促しているとのことであった。

また、海外留学については、原則1学期以上の海外留学が設定されている。原則として1学期以上となっているが、実際には3ヶ月程度の留学期間も認めるとのことで、大学が締結している交換留学制度をメインに活用する計画であるとのことであった（別紙資料）。長期及び短期の語学研修でも可能であるが、授業料が自己負担となるなどの問題があるとのことであった。交換留学制度を活用すれば学生の経費的な負担が軽減されるが、本プログラムとは別に国際交流センターが交換留学制度を運用しており、それぞれの大学への交換留学の学生数が限定されているために、交換留学の枠内に収まらないことも想定されるとのことであった。そこで、海外の大学附属の語学学校と協定を締結し学生を送ることも検討しているとのことであった。交換留学制度を活用した場合は、語学スコアをクリアする必要があるが、語学学校では語学スコアがいらぬなどのメリットもあるが、留学経費が高額になるなどの問題があるようである。

今年は、1年生2人が夏休み中に実施される短期プログラム（大学が夏休みや春休みを利用して行う語学研修や異文化体験プログラム）として、南ユタ大学短期プログラムと韓国の漢城サマープログラムに参加予定であるとのことであった。

指導面においては、プログラム・アドバイザーを雇用して専任スタッフを置き、きめ細かい指導体制をとっていた。4年間で卒業するためには、留学をどの時期に設定するか、卒業要件となる単位習得と併行して、プログラムの単位習得やボランティア活動への参加を促していくことが重要でとってくる。留学時期としては、教育実習もあり、2年生後期か4年生後期が考えられていた。しかし、2年生後期に交換留学制度を活用する場合は、語学スコアを1年前にクリアする必要があることから、1年前に語学基準をクリアする必要があるなどの問題があるようである。4年間で卒業を考え、本プログラムを修了するには、入学時点でのきめ細かい履修指導が重要となるように思われる。1年間の交換留学を考え、5年間で卒業を目指す考えを持っている学生もいるとのことであった。初年度の今年は、前期期間中に学生に対する指導をすでに2回実施し、留学先などの要望を聞いたとのことであった。また、夏休み中もプログラム・アドバイザーが学生を集めて、様々な活動を実施していたことや個別にアドバイスをしていたのは印象的であった。

平成28年度からは、本学においてもグローバル教員育成プログラムの運用が開始される予定であるが、北海道教育大学における上記の取り組みは非常に参考になるものであった。学生の意欲をどう高め、どのようにサポートしていくが重要であると考えている。そのための人の確保やサポート体制作りが十分に進んでいないことが気がかりである。

## 2. 附属桃山小学校からの調査報告

### ・筑波大学附属中学校の研究発表会へ参加

報告者 高橋 詩穂

平成27年11月14日(土)

テーマ「中学校教育の中でできるグローバル人材の育成」

教科の枠組みの中で実践するグローバル人材育成について提案があった。

例えば、国語科では、「学習者の主体性を考える」とのテーマのもと、グローバル人材に求められる能力を「課題の発見⇒課題に関する調査・研究⇒グループによる議論⇒解決法の発表・提案」の中で育成するとしている。音楽科では、多様な音楽とのつながりを学ぶことができるように、缶三味線を創作して、弦楽器のつながりで世界の様々な楽器にふれるという授業提案となっていた。

このように、各教科において、教材がどのようにグローバル人材育成と関わっていくことになるのかを整理し、提案を行っていた。この点については、本学でも取り組んでいる教材とグローバル人材育成との接点について考えていく際の参考になるであろう。グローバル人材育成については、総合的な学習での提案が多い中、教科の中で取り組むことへの示唆を与えるものであった。

## 3. 附属桃山中学校からの調査報告

### ・国際理解教育学会 第25回研究大会へ参加

報告者 溝部 卓司

1. 日時：2015年6月13日(土) 第1日目 9:30～17:00

2. 会場：中央大学 多摩キャンパス

3. 参加した分科会、およびシンポジウム

(1) 自由研究発表 第2分科会 (9:30～12:00)

(2) 中央大学共催 公開シンポジウム (14:00～17:00)

4. 内容

このシンポジウムの趣旨として抄録では以下のような記述を載せている。

「近年、日本では21世紀の教育政策課題として「グローバル人材の育成」があげられ、高等教育を中心に、経済界や各省庁が一丸となって、改革を進めてきている。そこで求められているのは、「世界に勝てる真のグローバル人材」(日本再興戦略)であり、「経済社会の活力の維持・向上に貢献できる人材」(経団連)である。このような今日の教育改革に対して、平和、人権、民主主義、寛容、持続的発展等の価値を重視したグローバル・シティズンシップの育成(UNESCO)を目標に掲げてきた国際理

解教育はどのような提案ができるのか。グローバル社会に求められている資質・能力とは何か。そのような人材をどのように育てるかを具体的な教育実践の検討を通じて問い直す。」

上記のような趣旨で、IB スクールなどの教員 4 名の報告をふまえて、ディスカッションが行われた。中でも特に、SGH の指定を受けた宮城県仙台二華高等学校の報告は参考になった。趣旨にもあるように、長年、グローバル・シティズン（地球市民）の育成に取り組んできた国際理解教育学会にとって、グローバルリーダーやグローバル人材との重なりや違いは何かを多面的に検討することが必要であるという問題提起は、本学及び本校の今後の研究にも大いに関連するものであった。

#### 4. 附属京都小中学校からの調査報告

##### 1. 宮城教育大学附属中学校の研究発表会へ参加

報告者 内貴 真美子

###### 【研究主題】

「未来を主体的に生き抜く生徒の育成」

～自立・協働・創造に向けた力をはぐくむ授業づくりを通して～（第 1 年次）

###### (1) 研究の概要

###### ① 目指す生徒像

「よりよい未来の実現を目指し、自分のよさや個性を生かして、他者と適切に関わりながら、課題の解決に向けて主体的に追求していく生徒」

###### ② 研究目標

- ① 自立・協働・創造に向けた力をはぐくむ授業の在り方を提案すること。
- ② 教科における学習の系統性や他教科との横断的・相互的な関連を明確に年間指導計画に位置付け、未来を主体的に生き抜く生徒の育成を図るカリキュラムを作成すること。

###### ③ 研究仮説

授業において、次の三つの視点を持った手立てを設定し、工夫すれば、未来を主体的に生き抜く生徒を育成することができるであろう。

- ・「自立」・・・生徒が主体的に課題を追求していくことができるよう、自分の考えを確実に持たせたり、学習の見通しを持たせたり、学習を振り返ったりする場を設定する。
- ・「協働」・・・生徒が他者や社会と積極的に関わる態度を身につけることができるよう、多様な他者と課題を解決する場を設定する。
- ・「創造」・・・よりよい未来を実現できるよう、各教科や実生活との関連を図り

ながら、知識を応用、活用させ、ものの見方や考え方を変容させる場面を設定する。

## (2) 英語科

### ①目指す生徒像

「未来の一員として、地域及び国内外の課題について、自分の考えを持ち、自分の意見を英語で表現したり、相手の意見を聞いて考えを深めたりしながら、多様な人々と英語でコミュニケーションを図る生徒。」

### ②公開授業

学年：中学2年生

単元：Unit5 A New Language Service (NH)

場面設定：「お勧めのレストランを紹介しよう」

ねらい：目的地の情報や乗り物での行き方について適切に尋ねたり、聞き手を意識して教えたりする。

### (3) 指導過程：

「お勧めのレストラン」(I know a good restaurant.)の対話活動において、「聞く側」と「教える側」に分かれてペアで会話練習を重ねた後、ALTを相手にレストラン紹介をするという設定で、全体発表となった。紹介するレストランは事前に準備されていた。紹介者は、「店名」「交通手段」を自分から伝え、質問者は「路線」「所要時間」を尋ね、紹介者はその質問に答えるという流れであった。質問の表現と応答の表現のパターンを言うだけの活動であったので、「店名」「交通手段」「駅名」が変化するのみなので、どの生徒の内容も類似していたのが残念であった。しかしながら、トレーニング活動と捉えるならば、これでよいのかと思った。

ペアでの練習活動のあと、JETとALTのモデル会話を聞いた後、自分たちの会話よりも優れている点や気づいたことを、挙手をさせて発表する場面があった。この時の使用言語は日本語であった。「お勧めのレストランのお値打ちランチの紹介があった」「定休日と営業時間を伝えていた」など、指導者側の意図する発言があった。これは、英語だけではなく、日本語も可としたことで、活発な意見交流となった。その後、指導者によるモデル会話を参考に、自分たちの会話を再検討し、まとめとなった。

### (4) その他：

教科分科会では、近隣の公立中学校の教員が司会をされていたり、大学の先生だけでなく、公立中学校の校長先生が助言をされていたりした。校内だけでなく、地域の先生方と連携をとりながら研究を進めておられることは素晴らしいと感じた。

## 2. 平成27年度教育改革国際シンポジウム（文部科学省）へ参加

報告者 今西 竜也

「初等教育段階における英語教育を考える～グローバル人材の育成に向けて～」

### 1. これからのグローバル人材育成と小学校における英語教育

上智大学の吉田研作氏より本題について基調講演があった。まず示された問題は日本人の内向き志向、つまり英語を使うことへの自身のなさであった。また数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシーについて、2000年以降の日本の平均得点の変化が示され、2003年から2012年において低い位置から徐々に上昇していることが指摘された。この時期国内ではゆとり教育と呼ばれた政策がすすめられており、これらの能力の得点が低いことはゆとり教育の責任とされていたが、ゆとり教育までの指導の在り方が原因で2003年の低さが示されているのであり、ゆとり教育が導入されてからは上昇していることから、この時期に行われた教育は一定の評価がされるべきである。この時期に行われていた指導の根本は昨今研究対象に挙げられているアクティブ・ラーニングの形式があったと指摘された。

またTOEFL iBTの結果では日本はアジアの中で非常に低く、平成26年度の英語力調査の結果においては、高校3年生の大半が英検3級以下であることが確認された。高校生を対象とした、留学に関する調査では、留学したいと考える日本人高校生の割合は4割程度であり、アジア各国の中でも低い。中国では6割程度、韓国では8割程度が海外留学を希望していることを加味したうえで、留学を希望しない理由を見ると、日本人は言葉の壁にさえざられていることがわかる。半数以上の高校生が自身の英語力に自信を持たず、留学に対して否定的な思いを持っている。しかしながら、産業能率大学による新入社員のグローバル意識調査では、9割ほどが日本企業のグローバル化を進めることが必要だと考えている。さらに海外で活躍するために必要だと思う能力では、語学力・コミュニケーション力が必要と答えた回答は8割を超えている。海外で働きたいと答えた割合が6割を超えて行くことも加味すると、現代の英語を取り巻く状況の中で、英語教育が担う立場と、社会において必要とされるあり方が複雑にねじれていることがわかる。英語は全くできないと答えている割合が5割の形相を見るとやはり社会における必要なスキルを学校教育が担っていない現実が浮き彫りだと感じられる。

グローバル化に対応した英語教育改革実施計画では、小学校における英語科・英語活動の充実や、中学校における英語の授業のあり方を改善することや、外部検定試験を活用すべしであることが示されているが、実際に現場では親しみのもてない話である。また小学校における英語学習への意識調査では、英語の授業で学んでいることは役に立つと思うと8割が答えているが、同じ割合で、受験に必要なので勉強するという回答もみられる。英語を話す人と友達や知りたいになりたいや、知らないことばを

学ぶことの面白さ、多文化への理解などにおいては、小学校英語を経験している被験者の方が、経験なしの被験者よりも割合は優っているが、1割程度の差であり、また過半数を超えるものはひとつもないことは、英語の教え方、学び方ではなく、教える意義や学ぶ意義の本質が問われていると考えられる。

吉田氏の指摘されたことは、経験的に感じる部分が多いが、実際にデータを示して論理的に開設された点において非常に説得力のある内容である。英語を話すことや、英語を使って将来の生活（職業や娯楽など）を豊かにすることは今も昔も変わらぬ目的である。しかし、どういった目的で英語を学び、教えるかと言うことが、指導者も学習者も見誤った点が多いのではないか。テストで高得点をとって喜ぶ生徒や教員を見ると、大変残念であり、本来の教育のあり方とはどのようなものであるべきなのかといつも考えさせられる。現代の日本や世界が必要とする力は決して上辺だけの英語の力ではなく、何を伝え、何を目的とするかが大きな視点である。いかに学習者に英語教育をなすかを再度確認させられるシンポジウムであり、本校における英語教育のあり方、英語教員のあり方の問題点をさらに浮き彫りにしたものであった。

### 3. 東京学芸大学附属国際中等教育学校授業研究会へ参加

報告者 國原 信太郎

#### 【研究主題】

持続可能な社会の形成者として必要な資質や能力の育成（2年次）

#### ① 東京学芸大学附属国際中等教育学校がめざす教育

東京学芸大学附属国際中等教育学校では「現代的な課題を読み解く力」、「知識とイメージを自分で再構築する力」、「対話を通して人との関係を作り出す力」を生徒に身につけさせたいと考えている。その理由は、これらの3つの能力は、現代社会において重視されている問題発見能力・問題解決能力の基礎となる力であると考えているからである。

#### ② 目指す資質・能力の育成について

「現代的な課題を読み解く力」は、生徒が自ら現代的な課題を見つけた上で、その問題を解決する方法を発見していくことに繋がる基盤となる力のことである。生徒が現代的な課題を取り上げた多様な言語作品に接する中で、現実の問題との結びつきを考えたり、複数の作品を比較して共通点や相違点を分析したりすることが現代的な課題を読み解く能力の育成に繋がっていくと考えている。また問題を読み解くためには、メディアリテラシーを身につけることも必要であり、各学年で異なる媒体の多様な情報を、どのように処理し、理解していくのかを意識した授業を目指していた。

「知識とイメージを自分で再構成する力」は、ただ知識を身につけるだけではなく、自分の持つイメージを、現実の問題や現代社会とも結びつけ、再構成する力であり現

代的な課題を解決するために必要とされる能力のことであると考えている。知識やイメージを再構成するには、まず、何が問題であるのかを明らかにし、その問題を検証するための論理的思考力や批判的思考力を身につけていく必要があり、特に言語によって論理的に構想する能力を重視していたように感じる。

「対話を通して人との関係を作り出す力」も、実際に多様な現代的な問題を解決するために不可欠な能力であると考えられている。見出した解決策の実現には、問題を抱える当事者や異なる様々な立場の人と、対話を通して関係を作り出す力が必要となり、そして、「対話」をするには、相手が発信する能力と、相手からの応答を理解し、受け止める能力が必要となるからである。

これらの育成したい3つの力の中でも、今回の授業研究会では、特に「知識とイメージを自分で再構成する力」に焦点を当てて授業づくりが行われた。

### ③ 授業の実際

中学2年と高校2年の授業を参観した。中学校2年生の授業は生徒主体型の授業であり、司会、問題提起、板書など全て生徒たち自身で行っていた。教員はファシリテーター的役割であった。自分が目指している授業に近かったため、非常に興味を持って授業を見させてもらった。生徒たちの視点、考え方、そして、発表の様子など感心させられるものであり、「知識とイメージを自分で再構築する力」の育成が普段の授業から育成されている様子がうかがえた。どういう生徒を、どの時期までに育てたいかをもっと明確に持ち、先を見越した指導をしていく必要があると感じた。ぜひこれからも、生徒主体の授業を研究していきたい。

高校2年生の授業は古典の授業であったが、「災害と日本人」というテーマで授業が行われ、「社会を見る眼を読み解く」という副題がついていた。副題の通り、授業では古典の解釈というよりは、「災害」についての古文を通して、当時の人たちが社会をどのように見ていたのかを読み取ることを重点にした授業が展開されていた。また、その文章が数百年を超えて自分たちに伝えられていることの意味を考えさせていたが、教材をどう扱い、どう切り込むかといった視点が面白かった。また、「東日本大震災」の映像を用いることで災害時における「音」の効果に気付かせており、古文の中の音の表現に着目させるのも面白い手法であった。この映像を見せる際、2～3人に一人iPadを配布してグループで映像を見せていたが、映像が重い、グループで一台のiPadでは見辛いなど、機器を用いることでのデメリットもあったが、新たな視点を与えるという意味ではこういう機器を利用することが有効であると感じた。これからは、やはり、情報通信技術の利用、活用を教育の一環として取り入れた授業を組み立てていく必要があると痛感した。

#### 4. 愛媛大学教育学部附属小学校の研究発表会へ参加

報告者 今西 竜也

##### 【研究主題】

未来を拓く人材の育成～新しい「知」を創り出す～（3ヵ年最終年次）

##### ① 新しい「知」を創り出す

愛媛大学附属教育学部附属小学校の教育理念は「未来を拓く人材の育成」とあり、「ともに生きる力」「たくましく挑戦する力」「知を追い求める力」を附属学校園の共通した理念として設定されており、特に小学校では「自己を拓き、ともに生きる児童の育成」を教育理念として掲げている。その中で、集団の一員としての自覚を持ち、他者と理解しあって生きようとする、目標の実現に向けて、自省しながら学び続けようとする、探究心を持って、事前や社会、文化などに関わり合い、学びを楽しもうとする姿を目指している。これらの教育目標は本校が設定している、将来展望を切り開く、という点において共通するものととらえられる。また、本年度の研究主題においては、「新しい『知』を創り出す」を設定し、3年目の研究である。その中で、こころをとまなう知、共に創り出す知、生きることにつながる知を、それぞれ違った視点でとらえ、さらに時間軸と空間軸で広がりとし深まりを研究してきたものである。

講演にあった多田孝志氏の「グローバル時代の人間形成、その考え方と学びづくり」では、グローバル時代の人間形成の主な能力として、多様性、関係性、自己成長・変革力、当事者意識と主体的行動力、共感・イメージ力が示された。それらの力を発揮する中で、多様な他者が悌の時空を共有するための共生を実現させることこそが学校教育の基本的視点であると示された。またそのあり方を実現するためには、高度実践型教師が必要とされ、実践的な問題を研究的に対象化し実践知を吟味・一般化して、教師が自分たちのことばと倫理を作ったり再構築したりする力を高めることの重要性を提起された。

##### ② 英語科の研究および授業について

5年花組「Let's Work Together」においては、クイズを作り、交流するものであった。相手意識を持って英語を話す等部分では、他者性を意識した本校英語科の研究と通じるものがあったが、本時での将来実習にやってくる大学生との交流と言う設定においては、目標がそぐわない活動であった。まず、言うまでもなく英語を話すことの必然性がそこに生まれにくい。日本人同士が英語で話すことに意味が見いだせない。英語を使って慣れ親しむという点においてのみ満足できることであり、指導要領改訂に向けた英語活動から英語科への移行を見据えるには物足りない印象を受けた。またお互いが日本人であることから、いざとなれば日本語で逃げることも可能であるし、多文化出身の人と関わることもつながることはない。せめて本単元の導入において、外国人に向けてクイズを出すこと意識や、最後のまとめとして、外国人を意識した

活動を設定するべきであったと思われる。3年生星組「外国の人と交流しよう—英語で伝えられるかな—」においては、インターネットを通じたビデオ電話システムを使って、協定を組んでいるオーストラリアの小学校の小学生との交流であった。その中で児童は愛媛県のような文化や観光名所などを英語で説明するものであった。写真を用いて相手に伝えることにより、オーストラリアの小学生の興味を引いていた。しかしながら、生徒の表現が乏しいせいで、十分に内容が伝わらず、ALTが翻訳してやっと伝わっていた部分が大きかった。オーストラリアの児童から質問があったら、日本の児童にはその意味が分からず、ALTが間に入って伝えていた。ビデオ電話システムを使った交流では、中学生であればある程度生徒自身の力でコミュニケーションを図れるが、小学生であれば、伝え合うということは非常に困難であると思われた。遊びやゲームの要素を取り入れて伝わらなくても交流できる授業が必要なのではないかと思われた。また相手校との交流は今年度何度か行ってきたということであったが、互いにそれぞれの個人を特定できていないことを考えると、相手意識と言う点ではもったいない部分であった。全体を通して、ビデオ電話システムによる授業は本校高等部のふつう授業でも取り入れている形態であり、この部分における参考になる部分は少なかった。

## 5. 附属高等学校からの調査報告

### ① 金沢大学附属高等学校の第二回SGH研究大会へ参加

報告者 磯部 達彦

平成27年11月21日(土)、金沢大学附属高等学校にて開催された第二回SGH研究大会に参加し、1年生SGH「地域課題研究」生徒発表、2年生SGH「グローバル提案」模擬国際会議を中心に参観し、研究協議会に参加した。

#### (1) 1年生SGH「地域課題研究」生徒発表

「地域課題研究」は石川県内を対象に「地域や人々を幸せにする方法を提案する」を目指し、金沢大学・企業・自治体と連携しながら地域理解をすすめている。1年生3クラス(生徒数126名)が計32グループに分かれ、それぞれのグループが石川県に密着するテーマを設定して大学企業などに出かけ現地調査を行い、そこから問題点を見つけ、それを解決するためのプランを考え発表するという学習活動をしている。研究大会当日は、第1学年の生徒全員が講堂に集まり、各クラスの代表である3チームが研究成果を発表していた。

##### a. C組代表チーム5班の発表内容

金沢の伝統工芸品である「水引き」を作る技術を応用して、グリーティング・カ

ードを作成し海外で販売するプランの提示があり、海外での宣伝方法・価格設定まで計画していた。

b. B組代表チーム7班の発表内容

自分たちの計画を「山里資本主義社会」と名付け、山里でのお年寄りたちの伝統的な暮らし、食べものなどの良さを町へ還元するという計画を提示し、山里で食べられている菓子を実際に作って試食もさせていた。

c. A組代表チーム5班の発表内容

石川県内の高校教育についての発表。都会の私立高校に学力的に負けないように、iPod を利用した反転×反転授業の提案があった。

各発表の後には、フロアー生徒から活発な質問があり、それに対する応答も手際よくこなしていた。各班の研究・提案はすべて金沢のローカルな魅力を世界でどのように発信すればよいかという点に基づき、高校生らしい発想があり、大きな可能性を秘めているように感じられた。また、全員参加の課題研究であるため、他の班の研究・成果発表に対して全員が熱心で真摯な態度で臨んでいるのもよくわかり、好感のもてる発表会であった。

(2) 2年生SGH「グローバル提案」模擬国際会議

2年生全員が14か国の立場になり、「食料安全保障—2050年の世界をどう養うか」というテーマで模擬国際会議を行っていた。会場に第二学年の生徒全員が集まり、グループ毎に各国代表者として世界の食料問題の解決策について交渉・合意形成をしていく模擬会議を行なっている。残念ながら、最終案の採決では合意には至らなかったが、生徒たちは自分が担当する国の実情を調べその国の立場を理解しながら、国際会議の場でどの点を妥協し、どの点は譲らず、かつ、どうやって合意し、問題を解決すればよいかをこの時間に行った。この授業は1年次の地域課題研究・異文化研究などの授業で培った力があって成立するものである。1年次の学習が2年次で継続・発展していることが見て取れた。

② 東京大学附属中等学校の研究発表会へ参加

報告者 高田 敏尚

第17回公開研究会 2016年2月13日

本年の研究主題が「協働で深める学び—探究心に着目して—」であった。東大附属は従来から「学びの共同体」を主張したり、総合学習の時間を使って3年次に卒業論文(研究)を生徒に課すことで知られている。その実践を本校で行おうとしている課題探究に活かさないかという思いで参加した。

私の担当教科は社会なので、2時間の社会の授業を見学した。教室の机の配置は、「コ」の字型で、生徒同士の顔が見える配置だ。どちらの授業も教師が用意した作業

プリントに必要事項を記入したり、正解のない問題を考えたりする。そして、討論の時間になると「コ」の字だった机が動き、4人のグループになる。もちろん机も4つ合わせて作業や討論がしやすい形となる。このような形態の学習をすべての教科で行っている。これが4年次（高1）にテーマを決め、そこから3年かけて立派な表紙をつけた半端ではない論文として結実する。東大附属は、探究心について「役にたつかわからないことでも、できるかぎり多くのことを学びたい、自分と違う考えの人に興味をもつ」などの指標を設けている。今後、本校で実施しようとしている「課題探究」の参考にすべきであると実感した。

### ③ 日本国語教育学会平成27年度大学部会第2回研究会へ参加

報告者 札埜 和男

11月28日於：早稲田大学

S G H校である筑波大学附属高等学校と筑波大学附属坂戸高等学校の国語科の関わりについての報告を聴く。

筑波大附では、個人レベル、学校レベルで積極的に国際的な活動に参加しているが、国語科として整備された体制で関わっているわけではなく、むしろさまざまな言語活動（話す・聞く「領域」）への支援が教科としての課題であるとのことだった。

筑波大坂戸では「卒業研究」という課題研究にあたる科目があり、科目の性格上、国語科が積極的に関わっているという報告がされていた。

### ④ 東京学芸大附属国際中等教育学校の研究発表会へ参加

報告者 佐古 孝義

(Tokyo Gakugei University International Secondary School 以下 ISS と略記)

#### 1. 授業見学

##### (1) 1時間目

●英語 1年・3年（コアクラス）・5年（選択クラス）：Communicators

3年生では、「週刊S Tの活用」が特に印象に残った。切り抜き記事の要約からプレゼンへと、ワークシートを用いて展開する。ペアワークでお互いのスピーチを聴き合い（presentation/listening）、質問をして追加情報を聞き出した後、それを自分の言葉で再生する（reproduction）という活動で、「相手に効果的に伝えるにはどうすれば良いか？」を考えさせていた点は、後述する「Communicatorsの育成」という視点を非常に意識した授業展開であり、大いに参考になった。また時間の後半では、3人グループが活動のファシリテーター役を務め、読解素材について、内容理解と意見交換を行っていた。生徒自身によるスムーズな授業進行は、おそらく先生の普段からの授業のスタイルを踏襲したものであることが窺われ、平生の授業が綿密に組み立てられ

たものであることが如実に示されていた。

5年生の選択クラスでは、リーディングの教材から発展させて、ディベート活動が行われていた。報告者は途中からの見学であったが、生徒自身によるピア・アセスメント（グループのメンバーによるスピーチの評価をし、フィードバックを行う）の的確さに驚かされた。

1年生については短時間の見学に終わったが、All Englishによる活発なやりとりが認められた。

## (2) 2時間目

### ●社会 3年：犠牲なき社会を構築することは可能か

水俣病を例に「科学技術における社会の発展に犠牲が伴うことは必然なのか」についてディスカッションを中心に授業が展開されていた。2時間連続の設定で、化学の教員とのコラボ授業が行われた。

1時間目に化学の教員が「触媒」としての水銀の働きを説明し、水俣病の原因について客観的な事実の理解を深めた。本来は変化しないはずの触媒から、〈副反応〉として水に溶けるメチル水銀が生成されていく過程を知り、当時の化学理解の限界についても考慮する視点（当時としては本当に「仕方ない」出来事だったのか、ということに対する考察をするための情報）を提供していた。

2時間目では、ダンボールで作った円卓に、グループのメンバー（4から5人）が輪になって、そのダンボールに意見を書き込んでいき、途中でお互いの意見を比較するという形で授業が行われた。ペンを2色用意し、賛成的意見と否定的意見を色分けしていたので、視覚化によって理解が容易になる工夫がわかりやすかった。特徴的だったのは、グループで意見交換をさせる前に、必ず自分の意見を整理し、書く時間をたっぷりと与えていたことだ。付和雷同になりがちな生徒にも、自分の意見を持つこと、自分で批判的に思考することの重要性を繰り返し強調していた。今回のテーマのように、議論の終着点がない場合、授業が終わった後も、生徒たちは各自でこの問題を考え続けなければならない。そのための論理的・批判的思考の方法そのものを実践の中から学ぶ、大変奥の深い授業だと感じた。

### ●英語 4年：Global Issues

帰国生が中心で、国際問題に関心の深い生徒が集まる選択クラスで、本時は「キューバ危機」を素材に、外交の視点で交渉技術を学ぶ授業が展開された。国際問題に関心があり、海外での生活体験もあり、また総じて英語力も高い生徒たちだったということもあり、意見が活発に戦わされていた。ともすれば、高度に政治的な事象であり、自分たちには係わりのないことと片付けられそうな話題であったが、「外交官の視点で考えてみる」という場面設定が、生徒たちに自分の考えを深めさせる良い仕掛けとなっているように見えた。後の研究協議会で授業をされた先生が述べておられたが、

普段の授業の中では授業の中ではロールプレイも取り入れているとのことだった。

## 2. 研究協議会

研究協議会では、ISS の外国語科の取り組みについての概説と、中・高にわかれて、それぞれ具体的な問題を通しての意見交換会（ワークショップ）が行われた。

ISS では、どのような生徒を育てたいのか、ということについての教員間（学校として）のゴールの像がはっきりとしている。それは、IB の目指す学習者像の中から「Communicators の育成」という目標を抽出・設定し、その資質の内実である 3 つの要素

- ①考えや情報を理解することができる
- ②自信を持って創造的に表現することができる
- ③他者の考えを尊重し、協力し合い、成果を生み出すことができる

を評価の中心的観点に据えている。この 3 つの要素をさらにリーディング、リスニング、コミュニケーション、言語の使用（主としてスピーキングやライティング）の 4 観点で整理し、課題別のルーブリックを作成している。こうした「観点別評価基準」の確立の元で、系統立てた授業設計がされている。すなわち、まず指導に当たって教員は、

- 1) Communicators の目標である 3 つの要素と直結する評価基準を選択し、到達すべき力を測ることができる評価課題を設定する。
- 2) 生徒に対しては、評価の方法を明示したルーブリックを事前に提示する。
- 3) 授業は、その評価課題を中心に据えて設計され、
- 4) 授業後は、生徒の現在の力と今後取り組むべき弱点をフィードバックする形成的評価をこまめに行い、同時に指導方法を検証し改善してゆく。

Backward Design と呼ばれる、このような〈目標〉→〈評価〉→〈指導〉の流れによる授業設計方法を用いた個々の実践が紹介された。

報告者が強く重要性を感じたのは以下の点である。

- ・適切な評価がないところに授業のデザイン化はない。
- ・評価の基準となる目指すべき生徒像（目標）を共有していることが必要。それは、今日のグローバル化に対応できるものでなければならない。

ISS では評価の基準に IB がある（これは後述の SSH 事業でも同じ）ことで、教員に一定の指導の方向性の統一が見られる。SGH や SSH といった全学的取り組みを成功させるためには、教員間の相互理解と協力は必須であるが、そのためには、教員も生徒も共に同じ方向を向いているという前提が不可欠である。そのことを改めて考えさせられた。

後半は、実際に ISS で使用されている評価のルーブリックを元に、リーディング課題を素材に発問を考えるワークショップが行われ、他校の先生方とも有益な意見交換

を行うことができた。リーディング課題も Output に繋げるといふ、ある意味で当たり前でありながら、実際それをどう行えばよいかについては悩ましい問題について、ある程度具体例を掴むことができた。

その他、質疑応答の中から、興味深かった論点を列記しておく。

- ・学力差（特に帰国生と一般生の間の英語力の差）があるからこそそのグループワークの必要性がある。
- ・家庭での課題は、生徒の学習進度に応じて。答え合わせも、まずはグループで答えをシェアするところからステップを踏むことが大切。
- ・授業で取り扱うテーマ（国際問題）の選定、授業の組み立てを考える場合には、いかに高校生にとって身近で喫緊のテーマだと思わせるか、という仕掛けや構成上の工夫に最も苦勞する。英語教員は国際問題の知識は本などでいくらでも得ることはできるが、それをいかに面白く提示するかということを考えなければならない。
- ・Output 活動をできるだけ多くとることで、生徒自身に自分が何が不足しているか実感させる。それが Input に繋がる。

### 3. 生徒による研究発表

昼休み時間を利用して、SGH の課題探求活動について、生徒によるポスターセッションやプレゼンテーションが行われた。報告者が見学したのは、

- ・シリア難民問題
- ・インドとパキスタンの間の紛争から学ぶ平和構築のための課題とは何か

であった。日本語、英語双方で発表が堂々となされていて、課題研究への取り組みの深さを感じられた。また SGH 事業における高大連携の進展ぶりも浮き彫りとなった。東京学芸大学だけでなく、東京外国語大学、UNHCR などの国際機関などとも綿密な提携がなされていて、高度な研究のバックボーンがしっかりとしている、との感触が得られた。

### 4. SSH に関する情報交換会

高知県、広島大附属高校の実践の紹介のあと、ISS の事業実践の報告があった。ISS での実践では、主に授業での取り組みについて解説がなされた。ISS では、IB（国際バカロレア）を取り入れ、その各項目を学習指導要領と整合させて授業計画を構築してゆく。そこで問題となったのは以下の 3 つの点である。

- ①科学的な研究の方法を習得することが SSH でも求められているということ
- ②現代社会への応用、現代社会の課題を解決する手段としての科学という視点をどのように盛り込むか
- ③IB にある（学習指導要領を超える）発展的学習内容をどのように取り入れることができるのか

この点を意識しながら授業の全体計画が作られている。ここでもやはり注目すべきは、統一化されたグランドデザインの必要性だ。IBに立脚した「評価の観点の明確化」という点が、目指すべき方向性の統一に重要な役割を果たしていると感じられた。

[考察・まとめ]

繰り返しになるが、ISSでは、生徒が国際的視野を持つために必要な Global Context と呼ばれるすべての教科に共通のテーマが、IBの理念に基づいて設定されている。下記のこれらのテーマについて、教科の特性を生かして様々な角度から探求活動を行っている。

- identities and relationship
- orientation in space and time
- personal and cultural expression
- scientific and technical innovation
- globalization and sustainability
- fairness and development

こうしたテーマについて、それぞれ到達すべき目標段階が明示されたフェーズがあり、それに基づいて、授業の題材が決定されてゆく。この徹底した階層化された教育プログラムの組み立てに、ISSの最も大きな特徴、そして我々が参考にすべき部分があると考えられる。今後の本校におけるグローバル教育を考える上で、非常に示唆に富む有益な視察であった。

## 6. 附属特別支援学校からの調査報告

報告者 野村 宗嗣

附属特別支援学校の国内調査としては、本年度も、和文化教育全国大会に教員を派遣し、本校の和 문화にかかわる学習について発表を行った。

その発表資料について以下に報告する。

【発表テーマ】

和 문화から学び、世界に視野を広げる

～京都教育大学附属特別支援学校の指導実践から～

はじめに

今回、12回全国大会で授業実践を発表します京都教育大学附属特別支援学校は、京都の深草というところにあります。深草は、源氏物語にも登場する古い地名で、一説には、深草の【深】は、深田、泥田を意味し、【草】は水辺の底湿地を意味し、深草という地名は、そのような土地であったことに由来するとされます。現在にあっても、近隣地域一体は、畑や竹林が多くみられ、附属特別支援学校もその周囲を竹林で囲ま

れた自然環境にめぐまれたところです。

そういったことから附属特別支援学校には、季節毎の実りや風景があり、季節に準じた学習題材が数多く設定されています。また、学習題材の中には、先人が築いてきた日本の文化を伝承するものもあり、以下に、そのいくつかを紹介します。

#### ①季節ごとの学習題材として

##### 1) 春の学習題材から

まずは、小学部の春の学習題材には「学校探検」があります。「学校探検」の名のもとに、子どもたちが学校中を探検してまわる学習題材です。校舎を飛び出し、隣接する小高い竹林にもものぼります。春の季節の花々を見つけ、その可憐さを目で見えて楽しんだり、実りとしての野いちごを味わったりします。春の季節をその目で発見し、楽しむだけでなく赤く実った野いちごは、指でつまんで収穫し、すぐにその味わいを食して楽しめます。4月から5月にかけては、竹の子を見つけ、竹の子掘りもします。

小学部だけでなく、中学部や高等部も「竹の子掘り」をします。竹林の斜面で竹の子を見つけ、斜面で身体を駆使して竹の子を掘り、収穫します。収穫するだけでなく、調理して味わうことで、仲間との共同や共感といったことも育んでいきます。

##### 2) 夏の学習題材から

夏には、小・中・高のどの学部でも「そうめん流し」をします。「そうめん流し」は、季節を味わう学習題材として、そうめんをみんなで食べるというだけでなく、児童生徒が協力し合って、竹を竹林から切り出し、竹を裂いて節をとることや、竹にあんばいよく水が流れるように竹を配置していきます。子どもたちが、集団として力をあわせながら活動を進める学習題材でもあります。

校内の竹林に群生する竹は、学習活動を支える大切な教材です。調理活動を支える燃料や、簡易な建物を建てる際の資材にもなります。高等部では、竹林を一部開墾し、夏の日差しをしのげる場所をつくり、椎茸の栽培をすすめてもいます。椎茸は季節により、そうめん流しのほどよい具材ともなります。

##### 3) 秋の学習題材から

校内は竹だけでなく、様々な木々に囲まれ、秋には、色とりどりに木々が紅葉していきます。生徒はいちょうからぎんなんを収穫したり、学部の畑で収穫したサツマイモを、木々からあふれ落ちる落ち葉を集めて焼き芋を味わったりもします。そのように、子どもたちは学校のあふれんばかりの自然環境の中で、日本の四季の恵みの中で育っていきます。

##### 4) 冬の学習題材から

冬には、中学部では、門松をつくることが恒例となっています。竹だけでなく、クマザサ、南天、松といったものが自校で自前に調達され、子どもたちが造り上げ

た大きな門松が毎年校門を飾り、近隣地域に正月の訪れを知らせています。

同じ冬の季節の学習題材として、「走ろう会」にむけての活動があります。毎年2月には全校の児童生徒が鴨川堤を走るのですが、走ろう会に向けて、小・中・高の全児童生徒がほぼ毎日、自然いっぱいの校舎まわりを走ります。

「走ろう会」のコースとなる鴨川堤は、20世紀初頭に京都の旧師範学校（現在は京都教育大学）の職員と生徒が、2300本もの桜の苗木を植えたところであり、そこを毎年この季節には、附属特別支援学校の児童生徒たちが力いっぱいに駆け抜けていきます。

## ②特別支援学校の教育課程について

特別支援学校の教育課程には、各教科の指導の他に、領域・教科を合わせた指導というのがあります。指導者は、児童生徒の実態に応じて、何をどのように教えるのかを考え指導を進めていきます。領域・教科を合わせた指導のひとつである「生活単元学習」というのを例に挙げるなら、「カレーをつくろう」という学習題材では、学校の畑で育てた野菜や、スーパーで買った食材を、みんなで調理して食べるというのが活動になります。カレーの材料になる野菜等の名称、個数や量、調理、お金の出納、お店の人とのコミュニケーションの取り方といったことを、活動を通して子どもたちは学んでいきます。指導者は、常に子どもたちに何をどのように教えていくのかを考え、指導を進めていきます。京都教育大学附属特別支援学校の学習題材の中には、日本の文化を継承したものもいくつかあります。単に「自分たちの先人が築いてきた日本の文化を認識する」というだけでなく、「日本文化と世界文化の関連や違いを知ることで、世界に視野を広げていく。」といった視点で指導をすすめていくことが大切と考えています。

以下に、中学部の学習題材を例に、指導をおこなった内容を紹介します。

## ③日本の文化を学び、世界に視野を広げる

### 1) 中学部美術の学習題材から

#### ア「季節の絵はがきをつくろう」

##### 【ねらい】

- ・筆と墨汁をつかって、和紙でつくったはがきに季節の花々とまわりの人への感謝の気持ちを表現する。
- ・日本の筆と絵画でつかう筆の違いについて知る。 ・和紙について知る。
- ・紙の歴史について知る。 ・漢字の持つ意味を考え文章をつくる。
- ・漢字とかなの歴史について知る。 ・短い文章で気持ちを表現する。

#### イ「風をつくって遊ぼう」

##### 【ねらい】

- ・日本の風や世界の風について知る。

- ・ 凧の歴史について知る。
- ・ 世界の凧（カイト）をつくって、グラウンドでとぼす。
- ・ 竹籤やアシをつかってカイトをつくる。

2) 中学部 1 年の学習題材から

ア「かるたで遊ぼう」

【ねらい】

- ・ かるた遊びについて知る。
- ・ かるたの歴史や語源（ポルトガル語）を知る。
- ・ 世界のカードゲームについて知る。
- ・ カードゲームとサンドイッチについて知る。
- ・ 身近な出来事やことわざから、かるたを自分達でつくってみる。
- ・ 小倉百人一首かるたや自分達でつくったかるたで遊ぶ。

イ「うどんをつくろう」

【ねらい】

- ・ 日本の麺と世界の麺について知る。
- ・ 日本の麺（うどん）をつくって食べる。
- ・ 食品の衛生管理について知る。

3) 中学部合同学習の題材から

ア「みんなで門松をつくろう」

【ねらい】

- ・ 門松を飾る意味について知る。
- ・ 日本の竹の文化と世界の竹の文化について知る。
- ・ 日本の新年の迎え方と世界の新年の迎え方について知る。
- ・ 竹を切り出し、松や南天を裏山にとりにいき、門松をつくる。

おわりに

特別支援学校での領域・教科を合わせた指導では、一人ひとりの児童生徒の実態を踏まえ、どのようなことをどのように子どもたちに学ばせる必要があるのかを考えていく必要があります。子どもたちの理解やつきたい力に応じて、学習題材を計画し、一人ひとりのアイデンティティや育ってきた地域や文化への理解を前提として、そこから広い世界へ視野が広がるように、指導者が指導に展望を持つことが必要と考えます。特別支援学校の指導では、一人ひとりの子どもたちの将来を見据え、今なにを学ぶ必要があるのかを考え、指導を進めていくことが大切です。子どもたちには、日々の授業を通して、先人たちの築いてきた日本の文化や、関係する世界の文化を自分のものとして学び、広い視野をもって世界を見渡せる大人に育ってほしいと考えています。

## Ⅱ．グローバル人材育成プロジェクト海外調査報告

### ① 台湾調査報告

#### 台北大学附属小学校・幼稚園・弘道国中学校 視察報告書

報告者

附属桃山小学校 兒玉 裕司

附属桃山中学校 佐々木 稔

附属幼稚園 高野 史朗

視察団員

附属桃山小学校・・・兒玉 裕司 副校長（団長）、桑名 良幸 教諭、

越知 照子 教諭、井上 美鈴 教諭

附属桃山中学校・・・佐々木 稔 副校長、中西 秀晃 教諭

附属幼稚園・・・・・・光村 智香子 教諭、高野 史朗 教諭

### 1. 台湾とは

台湾は、東アジアの島嶼である。

1945年に当時中国大陸を本拠地とした中華民国の統治下に入り、1949年に中華民国政府が台湾に移転した。1955年以降、中華民国は台湾本島以外にも澎湖諸島、金門島、馬祖島及びその他諸島を実効支配しているが、全体の面積に占める台湾（本島）の割合は99%以上になる。そのため、中華民国の通称として「台湾」と表記される（詳細は定義参照）。近隣諸国としては、東及び北東に日本、南にフィリピンがある。首都は台北市である。大合併により成立した新北市は、台北市及びその外港である基隆市を囲む大都市圏を包含し、2015年時点では同島で人口最多の都市である。

かつては「フォルモサ」（ポルトガル語：Formosa、「麗しの島」）として知られた台湾島は、漢民族が同島に移住し始めた17世紀における大航海時代のオランダ及びスペインの植民まで、台湾原住民が主に居住していた。1662年、明寄りの支持者である鄭成功はオランダを追放し、同島初の漢民族の政治的実体である東寧王国を設立した。清は後に同王国を破り、台湾を併合した。1895年に日清戦争の結果下関条約にて台湾が日本に割譲されるまでには、台湾の居住者の大多数は祖先又は同化のいずれかにより漢民族であった。現在のDNAの調査によれば、8割が南方アジア系である。

1912年、中華民国が中国に設立された。1945年における日本の降伏後、中華民国は台湾の統治を引き継いだ。国共内戦後、中国共産党は中国大陸を完全に支配し、1949年には中華人民共和国を設立した。中華民国は政府を台湾へと移転し、同国の法域は台湾及びその周囲の諸島に限定された。1971年、中華民国が当初占有していた国際連合での中国の議席を中華人民共和国が継承した。多くの国が中華人民共和国へと国際

的承認を切り替えるにつれ、中華民国の承認は次第に失われてきた。現在国連加盟 21 箇国及び聖座のみが中華民国と公式の外交を有するが、他の多くの国家とは駐在員事務所経由で非公式な関係を有する。そのため、多くは公式に台湾を中華人民共和国台湾省また台湾地域と表記している[1]。

憲法上、中国大陸及び外蒙古を含む定義における「中国」全てを主権国家として政府が主張するかどうかに関して論争が存在するが[2]、1992 年以來、中華民国は中国大陸を取り戻すことを政治的目標にはしていない[3]。しかし、政党の連立に大いに依存する中国との関係の政治姿勢を定義する政府の立場は責任を負っている。一方、中華人民共和国は自らを中国唯一の合法的な代表であると強く主張し、主権国家としての中華民国の地位及び存在を否定し、台湾を中華人民共和国統治権下の台湾省として主張する。中華人民共和国は台湾独立のいかなる公式な宣言への反応として軍事力を行使すると脅迫し、平和的な再統一はもはや不可能であると考えている[4]。中華民国におけるナショナル・アイデンティティの問題だけでなく兩岸関係も台湾の政治において重要な要因であり、政党及び各政党支持者間の社会的及び政治的区分の原因となっている。

20 世紀後半に台湾は急速な経済成長及び工業化を経験し、現在では先進国である。

1980 年代及び 1990 年代初頭、普通選挙で複数政党制民主主義に発達した。

台湾はアジア四小龍の一角であり、WTO 及び APEC 加盟地域である。世界第 21 位の経済規模を有し[5][6]、世界経済においてハイテク産業は重要な役割を担っている。台湾は言論の自由、医療[7]、公教育、経済的自由、人間開発の観点から上位に順位付けされている。政治実体としての台湾[8]。台湾本島、または台湾島を中心として蘭嶼など 77 の付属島嶼からなる。総面積は 36,193 km<sup>2</sup> (13,974 sq mi)[9]。中華民国の政府が実効支配している全地域を指しており、具体的には台湾本島、付属島嶼、澎湖諸島に中国大陸沿岸の馬祖列島、烏坵島と金門島、および南シナ海の東沙諸島と南沙諸島の一部（太平島、中洲島）を加えた範囲から構成されている。憲法上の公式な名称は「中華民国自由地区」。法令・公文書等では他に台湾地区、台澎金馬とも表記される。この範囲は、国民政府が 1955 年に浙江省・大陳列島の領有権を喪失したことで確定した。なお、福建省に属する島々を台湾省の台湾、澎湖と区別して金馬地区（きんまちく、金門島と馬祖列島の頭文字に由来）と呼称することもある。

これは、国共内戦を経て 1949 年に社会主義陣営の中国共産党率いる中華人民共和国が成立した後に発生した地域概念である。本来、「中国を統治する唯一の合法（正統）な国家」は中華民国のみであったが、中華人民共和国が成立したことにより、「中国を統治する唯一の合法（正統）な国家」を自称する 2 つの政治的存在が並立し、それぞれ台湾に対する権利を主張する事態となった。

その後、冷戦下における微妙な軍事・政治バランスの中、1971 年に国際連合で中華

人民共和国が「中国」の代表権を取得してからは多くの国が中華人民共和国を「正統な中国政府」として承認したが、それ以降も資本主義陣営の中華民国との非公式な関係維持を望むアメリカ合衆国や日本国などの多くの国では、中華民国が実効支配している地域を中華人民共和国の統治地域とは別個の「地域」と判断して、「台湾」という地域名称で呼称し始めた。

台湾の語源は不明確で、原住民の言語の「Tayouan (ダイオワン)」(来訪者の意) という言葉の音訳とも、また、「海に近い土地」という意味の「Tai-Vaong」や「牛皮の土地」という意味の「Tai-oan」などの言葉に由来するとも言われる。大員(現・台南)がダイワンと呼ばれており、そこにオランダ人が最初に入植したためとも見られている。いずれにしても原住民の言葉が起源と見られ、漢語には由来していない。中国の文献に台湾が台湾と呼称されるようになったのは清朝が台湾を統治し始めてからのことである。

台湾島には、フォルモサ(Formosa)という別称が存在し、欧米諸国を中心に今日も使用されることがある。これは「美しい」という意味のポルトガル語が原義であり、16世紀半ばに初めて台湾沖を通航したポルトガル船のオランダ人航海士が、その美しさに感動して「Ilha Formosa(美しい島)」と呼んだことに由来するといわれている。なお、フォルモサの中国語意識である美麗(之)島や音訳である福爾摩沙を台湾の別称として用いることもある。ちなみに、日本では高山国(こうざんこく)、もしくは高砂国(たかさごこく)と呼んだ。高山国や高砂国などは「タカサグン」からの転訛という。これは、商船の出入した西南岸の「打狗山」(現・高雄)がなまったものと思われる。正式の使節ではないが、タイオワン事件に関して、原住民が「高山国からの使節」として江戸幕府3代将軍徳川家光に拝謁したこともある。

台湾は、台湾本土とその周辺諸島(澎湖諸島・蘭嶼など)、および金馬地区と東沙諸島・南沙諸島から構成されており、面積は36,193 km<sup>2</sup> (13,974 sq mi)と日本の九州と同程度(日本の約10分の1)の大きさである。

台湾北東部は日本の琉球諸島の西方海上に位置しており、最も近い与那国島との距離は110km以下である。また、台湾地域西端の金馬地区は台湾海峡を隔てて中国と接しており、最南端の岬である鵝鑾鼻(がらんび)は、バシー海峡を隔ててフィリピンと接している。

台湾最大の島である台湾島は、南北の最長距離が約394km、東西の最長距離が約144kmで木の葉のような形をしている。島の西部は平野、中央と東部は山地に大別されるが、島をほぼ南北に縦走する5つの山脈(中央山脈、玉山山脈、雪山山脈、阿里山山脈、海岸山脈)が島の総面積の半分近くを占めており、耕作可能地は島の約30%にすぎない。台湾最高峰の山は玉山山脈の玉山(旧日本名:新高山、海拔3,952m)であり、富士山よりも高く、同様に雪山など標高3,000mを超える高山が多数連なっ

いる。また、このほかの重要な地勢としては丘陵、台地、高台、盆地などが挙げられる。

なお、台湾はフィリピン海プレートとユーラシアプレートの交差部に位置するため、日本と同様に地震活動が活発な地域である。また日本と同じ火山帯に属し、温泉も豊富にある。

台湾はほぼ中央部（嘉義市付近）を北回帰線が通っており、北部が亜熱帯、南部が熱帯に属している。そのため、北部は夏季を除けば比較的気温が低いのに対し、南部は冬季を除けば気温が30度（摂氏）を超えることが多くなっている。台湾の夏はおおよそ5月から9月までで、通常は蒸し暑く、日中の気温は27度から35度まで上り、7月の平均気温は28度である。冬は12月から2月までと期間が短く、気温は総じて温暖であり、1月の平均気温は14度である。ただし、山岳部の高標高地帯では積雪が観測されることもある。

平均降雨量は年間およそ2,515mmであり、雨期に多く、また降雨量は季節、位置、標高によって大きく異なっている。台湾は台風の襲来が多く、毎年平均3-4個の台風襲来している。台風で給水の大きな部分を賄っているが、同時に損壊、洪水、土砂流などの災害も発生している。1996年の台風9号や2009年の台風8号などは、豪雨をもたらした。また、台風以外にも、夏季には台湾語「サイバックホー（sai-bak-ho）」（普通は西北雨と表記、正しいのは夕暴雨）と呼ばれる猛烈な夕立が多い。

## 2. 台北は

台湾の中心都市は北部盆地に位置する台北市であり、1949年以降は中華民国の首都機能を果たしている。台北市は行政区分としては中心部の台北市（人口第四位）と郊外部の新北市（人口第一位）に分かれている。

遷台以前の中華民国の首都は南京市とされていたが（ただし中華民国憲法および法律などによって明文化はされていない）、遷台以降の台北市は「臨時首都」および「中央政府所在地」という扱いになっている。なお、台湾省の省都も当初は台北市であったが、1957年に台北市から台湾中部にある南投県南投市中興新村に移された。後に台湾省が凍結され、現在では省都として機能していない。

地方の主要都市としては、台北市の東北部に港湾都市である基隆市が、台湾本島南西部に工業・港湾都市である高雄市（人口第二位）がそれぞれあり、両都市の間に新竹市、台中市（人口第三位）、嘉義市、台南市（台湾の古都にして人口第五位）などの主要都市が集中している。これらの主要都市は全て台湾西部に位置しており、台湾東部の主要都市としては花蓮市と台東市がある。

主要都市の人口は、新北市は395万人、高雄市は277万人、台中市は270万人、台北市は268万人、台南市は188万人となっている。（台湾政府公表より）

### 3. 台湾（住民）人

台湾地域の住民は、混血民族と中国系に大別される。原住民族は平地に住んで漢民族と同化が進んだ「平埔族」（ケタガラン族、パゼッヘ族、バブザ族など）と高地や離れ島に住む「高山族」14民族（アミ族、タイヤル族、パイワン族、ブヌン族、プユマ族、ルカイ族、ツォウ族、サイシャット族、タオ族、サオ族、タロコ族、クバラン族、サキザヤ族、セデック族。クバラン族とサオ族は平埔族に分類されていたこともある）。

なお、「高砂族」は日本統治時代の呼び名に分かれる。台湾の漢民族は、戦前（主に明末清初）から台湾に居住している本省人と、国共内戦で敗れた蒋介石率いる国民党軍と共に台湾に移住した外省人に分かれる。本省人が台湾で85%を占めており、本省人は福建（閩南）系と客家系に分かれる。外省人13%、原住民2%（タイヤル、サイシャット、ツォウ、ブヌン、アミなど14民族）。平均寿命は女性81歳、男性75歳で年々上昇の傾向にある。65歳以上の比率は10パーセントを記録するようになった[10]。

少子化が進んでおり、2009年の出生率は0.829を記録、合計特殊出生率は1と世界最低となった[11]。2010年の合計特殊出生率は干支の影響もあり0.895とさらに低下した[12]。

2005年（民国94年）現在、在台外国人は約51万人で、うち在台ベトナム人が約15万人と30%を占める（民国94年の台湾の内政部統計処調べ）。内政部警政署「台閩地區居留外僑統計—按國籍及職業別九十九年（2010）」によれば、2010年現在、滞在日数180日以上長期ビザ取得者が申請できる「外僑居留証」を所持する日本人は、12,056人（男性7,330人、女性4,726人）である。その内訳は、商業人員（2,197人）、15歳未満の者（1,853人）、家事（1,687人）、就学（1,003人）、⑤エンジニア（678人）、⑥教師（640人）、その他（3,472人）となっている[13]。

台湾での総資産が500万ニュー台湾ドルを超えるか、あるいは仕事の技能や専門を例証すれば、台湾移民署に永住を申請することができる。

### 4. 言語は

台湾の公用語は中国語（北京語）であり、国内では国語と呼ばれている。国語は中華人民共和国の公用語である普通話と基本的に同一言語であるが、現在では語彙などの細かい部分に多少の相違点が生じている。他にも日常生活では台湾語（ホーロー語、河洛話、福佬語）、場所によっては客家語、台湾原住民の諸言語が使用される。台湾語は伝統的区分では福建方言（閩語）の一種である閩南語に含まれるが、平埔族の言語や日本語の影響を受けており、その意味でも閩南語とは分化し台湾語、福佬語などと呼称される[14]。

また、台湾原住民の諸言語はオーストロネシア語族の言語であり、多くは台湾諸語に属する（タオ語のみマレー・ポリネシア語派に属する）。その数は、1622年にオラ

ンダ人入植者がやって来た時には少なくとも 30 はあった。その後、日本語の配属下を挟んで二度の中国語の配属下にあったことで、その数は 10 程度に減ってしまった。また、その話者も 2000 人以下ということから、土着語は絶滅する危険にさらされている [15]。

中華民国の実効支配地域の言語としては、金門島では閩南語（台湾語）が話されているが、日本語の影響をほとんど受けていないなど、台湾本島の台湾語とは相異がある。馬祖島では閩東語が話されている。烏坵島では本来は莆仙語が話されていたが、現在は閩南語（台湾語）が話されている。

音声言語の他、日本の手話と類似点の多い台湾手話を母語とする人たちがいる。

## 5. 文字は

国語は普通話と同様に漢字で表記されるが、中華人民共和国で使用されている簡体字ではなく、伝統的な繁体字（正字体）が用いられている。ただし、日常生活ではある程度略字の使用が行われている（「臺灣」を「台灣」と表記）。

また、発音記号としては注音符号という発音記号を現在でも教育現場で使用しており、小学生向けの教科書にルビとして振られている他、鉄道貨車の形式を表したりするのに使われている。それ以外にもラテン文字系の通用ピンインや注音符号二式、ウェード式のような発音表記方式も存在している。

日本統治時代に教育を受けた世代ではひらがなやカタカナを利用している例もあるが、21 世紀初頭では仮名文字を使用して台湾語を表記（台湾語仮名）している台湾人は極めて限定的となっている。

## 6. 教育は

現在の台湾の教育制度は、中華民国憲法の規定（第二十一条、第一百六十条）と各種の教育関連法に基づいて体系化されている。学制は 6・3・3・4 制が採用され、国民小学 6 年、国民中学 3 年、高级中学 3 年、大学 4 年となっている。ただし大学の教育、建築学部は 5 年、歯学部 6 年、医学部は 7 年となっている。普通学校と並行して特殊学校（盲学校、聾学校、養護学校など）と補習学校（専科学校や語学学校など）がある。義務教育（台湾語では国民教育）は、当初は国民小学の 6 年のみであったが、今は国民中学 3 年も含めて 9 年制となる [16]。2001 年より小中一貫教育が全国的に実施されるようになり、2006 年、幼稚園の義務教育化が始まった [17]。学年度は 9 月 1 日 - 8 月 31 日まで、日本の 4 月 1 日 - 3 月 31 日とは異なる。中華民国には 20 歳の男子国民に兵役の義務があるが、大学と専科学校の在学生は卒業まで徴兵延期が許されている。

一般に台湾人は教育に熱心であり、国語（中国語）識字率は 98.29%（2012 年度）に

達する。しかし教育熱心な人が多いゆえに台湾は学歴社会となっており、就職では日本以上に学歴が重視される傾向にある。大学への進学率は70.07%（1997年度）。特に有名高等中学校・大学への入試は熾烈を極める。大学進学・卒業後に海外の大学・大学院へ留学する学生も多く、台湾には日本やアメリカの大学・大学院が出した学位・博士号を持つ者も多い。

大学には総合大学のほかに短期大学（2年制）、工科大学、文科大学、国立空中大学（日本の放送大学に相当）があり、2012年度時点で大学総数162校、学生総数は約136万人に及ぶ。このような大学増設の影響から、最近では大学合格率が100%を超える問題も生じている。文科系進学者よりも理科系進学者が、優秀とみなされる[要出典]。理科系における名門大学は、台北市の国立台湾大学(台北帝国大学、昭和3年)（1945年改編）、新竹市の国立清華大学（1955年復校）・国立交通大学（1958年復校）、台南市の国立成功大学（1961年創立）である。理科系に比べて落ちるものの、文科系では台湾大学のほか、台北市の国立台湾師範大学(台北高等学校（旧制）、大正11年)（1946年改編）や台北市の国立政治大学（1954年復校）が、一流の進学先とみなされている。

国外には華僑子息・子女のための教育機関として、約3750校の華僑学校（日本での名称は中華学校）が設置されており、日本には横浜中華学院、東京中華学校、大阪中華学校の3校がある。日本の華僑学校は歴史が古く、1897年（明治30年）に孫文が設立した私塾に由来する。華僑学校は中国語教育および中華文化の普及を目的としている。教育対象の年齢は各学校によって異なる。（台湾政府-台湾の教育紹介より）

## 7. 視察校（台北大学）詳細

国立台北大学（こくりつたいぺいだいがく、国立臺北大學、National Taipei University）は、台湾の国立大学である。前身は1949年に台北市で創立された台湾省立行政専科学校、1961年国立中興大学法商学院である。2000年に国立中興大学から独立して大学に昇格し、現在の校名となった。現在は法律、商、公共事業、社会科学、人文科学、電機情報学院の6学院（学部）、19学系（学科）、37修士コース博士コースを有し、人文・芸術・社会科学に重点を置いた高等教育を行っている。また台湾大学、国立政治大学と共に台湾法商教育の旗艦大学とされている。

## 8. 歴史

1949年8月 「台湾省立行政専科学校」が開校

成功中学及び台北工専の校舎を借用

1950年 - 「台湾省行政専修班」が開校

1955年8月 「台湾省立行政専科学校」を「台湾省立法商学院」と改称

1955年9月 「台湾省行政専修班」を統合

1955年 10月 夜間部を設置  
1961年 11月 「省立商学院」及び「省立農学院」と合併  
「台湾省立中興大学」と改編  
理工学院及び文学院を設置  
1965年 5月 校訓の誠樸精勤を制定  
1971年 - 国立中興大学「法商学院」に改変  
1993年 - 大学設置の認可が下り準備作業を開始  
1999年 3月 台北大学人文大樓が完成  
2000年 2月1日 「国立台北大学」として改編  
2005年 9月 大学本部が三峡キャンパスに移転開始  
2009年 9月 全学院が三峡キャンパスに移転完了

## 9. 組織

法律学院 法律学系 商学院 企業管理学系 合作経済学系 会計学系 統計学系  
レジャー運動管理学系 資訊管理研究所 国際企業研究所 社会科学学院 社会学系  
社会工作学系 経済学系 犯罪学研究所 公共事務学院 不動産都市環境学系  
財政学系 公共行政政策学系 都市計画研究所 自然資源と環境管理研究所 人文学院  
中国語文学系 応用外語学系 歴史学系 民俗芸術研究所 古典文献学研究所  
電機情報学院 情報工学系 通信工学研究所 電機研究所 研究センター 法律学院比較法資料センター  
人文学院国際裁判及び同時通訳センター 人文学院東西哲学及び注釈学センター  
人文学院語言センター 社会科学学院台湾発展研究センター  
公共事務学院選挙研究センター 公共事務学院土地環境規格研究センター  
校級センター アジア研究センター 教職育成センター 教養課程センター



## 10. 訪問 日時・内容

1月10日（日）

附属中学校

台湾を代表する教育大学である国立台湾師範大学の実験中学として設置されており、一般の公立学校と比較すると独自のカリキュラムを用いているのが特徴である。

カリキュラムのみならず学校編成においても実験的な要素が大きく、他の公立高校に比較して進学に主眼を置かない教育を実施している。

一般クラス以外に、師大附中では非常に特徴のある実験クラスが多く設置されている。1950年から1961年にかけては四二制実験班を設置し、中高一貫教育を試験的に実施している。1978年の科学教育実験クラス、1980年の音楽教育実験クラス、1989年の美術教育実験クラス、2004年の語文資優クラスなど他の公立学校では見られない特殊クラスが設置されている。現在は数学及び自然科学実験クラス（通称科教班）が教育部の立案で設置され、3クラス約100名の生徒に対し、理数系に特化した教育が行われている。このようなクラス編成以外にも教材も実験的な教材を多用している。

台北市弘道国民中学校視察内容

（クラス30名・各学年16クラス 生徒数約1500名）

校長・教頭・教務主任・研究主任2名と対談

・附属桃山中学校と国際交流を進める話しをし、Skypeや生徒作品交流から進めることで話がまとまった。

また、今年、弘道国民中学校の教師と生徒が日本に来ることが決まっていて、京都教育大学附属桃山中学校訪問を計画に入れる方向で進め、今後も情報交換をして交流を実現させたいとの意向を確認した。

その後、日曜参観ではあったが、施設や授業風景を見学させて頂いた。

台北附属小学校 陳映蓉先生を通して連絡のやり取りをして交流を進めていくことを確認出来た。



①中学校 歓迎のパネル



②中学校 校長との友好の品物受け渡し



③中庭を囲む校舎



④中学校3年生の教室



⑤中学校の全天候型プール



⑥中学校の体育授業風景

#### 写真番号説明

##### ① 中学校 歓迎のパネル

中学校入口はガードマン警備で来校者をチェックし、電話で職員室に確認を取り校内に入れる仕組みとなっている。門を入ったところに京都教育大学附属桃山中学校歓迎ボードが飾られていた。

##### ② 中学校 校長との友好の品物受け渡し

会議室にて、校長・教頭・教務・研究主任3名による歓迎を受け、学校見学をさせていただいた。(写真は趙校長と佐々木副校長との歓迎挨拶)

##### ③ 中庭を囲む校舎

基本的に小学校・中学校は中庭(グラウンド)をぐるりと校舎が囲む設計で作られている。

##### ④ 中学校3年生の教室

教室は全体的に狭く、木の机・椅子を使用している。教師は生徒に聞こえるように拡声器を使用しての授業が多かった。

⑤ 中学校の全天候型プール

体育館とプールが同じ建物にあり全天候型プールで1年じゅう使用可能となっている。また、エレベーターも体育館・校舎と付けられていた。

⑥ 中学校の体育授業風景

1つのクラスが種目選択制で授業を行われていた。

## 1 1. 訪問 日時・内容

1月11日（月）

### 附属幼稚園

幼稚園（ようちえん、独：Kindergarten、英：kindergarten）は、満3歳から小学校就学までの幼児を教育し年齢に相応しい適切な環境を整え、心身の発達を助長するための教育施設。

### 附属小学校

国民小学（こくみんしょうがく）は、台湾における初等義務教育を行なう機関。正規教育課程の最初の段階と規定され、基礎教育の重要な部分を占めている。一般に6歳から12歳までを国民小学の学齢児童とし、この段階の教育年限は6年とである。義務教育6年制下においては国民学校（国校と略称）としていたが、1968年の義務教育9年制の施行に伴い国民小学（国小と略称）と改称された。但し、台北大学附属小学校は、京都教育大学と附属との関係とよく似ていて、研究・教育実習に力を入れている。

### 台北大学附属小学校・幼稚園（幼稚園）視察内容

（クラス30名 各学年8クラス 児童約1400名）



⑦友好の品物受け渡し・小学校



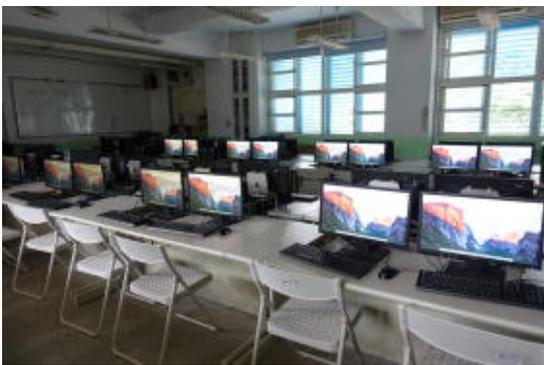
⑧友好の品物受け渡し・幼稚園



⑨ 歓迎ボード



⑩ 研究主任の説明を受ける様子



⑪ パソコンルーム



⑫ 昼食風景（給食とお弁当を選択できる。）



⑬ グランドの周りを囲む校舎  
ことができる。）



⑭ 小学校プール（ワイヤーで屋根を張る  
ことができる。）



⑮ 小学校 門外の掲示版



⑯ 1年生から英語活動にも力を入れている

- ・台北大学附属小学校 方慧琴 校長先生挨拶
- ・台北大学附属小学校 陳映蓉 研究主任（教頭）・幼稚園研究主任 2 名と打ち合わせ
- ・台北大学附属小学校と幼稚園の概要説明・研究説明（パワーポイントにて・その資料添付）
- ・平成 28 年度から、附属桃山小学校と交流をスタートすることでの打ち合わせ
- ・平成 28 年 10 月 23 日～26 日に附属桃山小学校 6 年生 71 名が台北大学附属小学校を訪問して、1 日交流をする。
- ・内容は、歓迎の集い・学校給食交流・授業体験・児童交流を今後、細かく打ち合わせていくことで確認し合う。
- ・小学校の施設見学・幼稚園の施設見学、給食参観
- ・幼稚園と附属幼稚園の交流も作品交流や教師間交流を進めていくことで話し合った。



⑰人工芝とゴムチップトラックコース



⑱保護者の送り迎え風景



⑲高学年の教室



⑳各教室前の廊下



㉑ 補講学習の様子



㉒ 子ども安全見守り隊  
(高学年で組織される。)

#### 写真番号説明

⑦ 友好の品物受け渡し・小学校

⑧ 友好の品物受け渡し・幼稚園

研究主任（教頭）と兒玉副校長との挨拶・張園長と附属幼稚園の高野先生、光村先生

⑨ 歓迎ボード

小学校入口はガードマン警備で来校者をチェックし、電話で職員室に確認を取り校内に入れる仕組みとなっている。門を入ったところの電光掲示板に歓迎、京都教育大学附属桃山小学校歓迎と表示されていた。朝の連絡等を児童、親に知らせる目的で設置されていた。

⑩ 研究主任の説明を受ける様子

陳映蓉 研究主任（教頭）より、小学校施設見学をさせていただいた。

⑪ パソコンルーム

1クラス 30名を基本で、パソコンルームは専任の教師が指導する。36台のパソコンが整備されていた。

⑫ 昼食風景（給食とお弁当を選択できる。）

児童の昼食は、お弁当（業者委託）とお弁当（家から）が選べるようになっている給食でその割合は半々とのことであった。附属桃山小との交流給食は、お弁当（業者委託）を頂く予定。

⑬ グランドの周りを囲む校舎

グラウンドを囲んで校舎が1周している。（校舎は4階建て）また、台北の小学校は全て人工芝・ゴムチップトラックとなっている。

⑭ 小学校プール（ワイヤーで屋根を張ることができる。）

多少の雨で入れるようにも、天気で簡易の屋根が付けられるようになっている。（カ

ーテンのようにワイヤーで開閉できる屋根)

⑮ 小学校 門外の掲示板

保護者の送り迎えが基本の台北では、学校の外に設置することで子どもを待っている親に学校の様子がわかるよう、掲示板を設置している。

⑯ 1年生から英語活動にも力を入れている

台湾の小学校は英語教育に力を入れていて、1年生から英語の授業を取り入れている。本校との交流も日本人、台湾人が交流するツールとして英語を使つての交流を目指す。

⑰ 人工芝とゴムチップトラックコース

台北は街の中心地となるため、砂ぼこり等が周りに影響しない様に人工芝とゴムチップのグラウンドとなっている。

⑱ 保護者の送り迎え風景

保護者の送り迎えが基本で、登校、下校は保護者が送迎する。バイク・車の送り迎えが多い。

⑲ 高学年の教室

机は上にも開けられるようになっている。ロッカーは別の部屋にあり、全ての教室はカギがかけられ管理されていた。

⑳ 各教室前の廊下

決まりが徹底していて、廊下を走る子はなく、きれいに整備されていた。

㉑ 補講学習の様子

学校の中に課外授業(塾)があり、放課後に学校の中にある塾で勉強を受けることができる。

㉒ 子ども安全見守り隊(高学年で組織される。)

高学年(児童会)の取組で、低学年の下校安全を見守り隊が活動する仕組みになっている。

## 1 2 . 出典・脚注[編集]

1. ^ “The Republic of China Yearbook 2009 / Chapter 2: People and Language” . 2010年8月3日時点のオリジナル[リンク切れ]よりアーカイブ。2010年10月31日閲覧。

2. ^

[http://www.judicial.gov.tw/constitutionalcourt/p03\\_01\\_printpage.asp?expno=328](http://www.judicial.gov.tw/constitutionalcourt/p03_01_printpage.asp?expno=328)

3. ^ “Chapter XIII. Fundamental National Policies” . Office of the President of the Republic of China. 2011年5月2日閲覧。 “The foreign policy of the

Republic of China...in order to protect the rights and interests of Chinese citizens residing abroad”

4. ^ “Full text of Anti-Secession Law” . People’s Daily (2005年3月14日). 2012年4月10日閲覧。

5. ^ CIA World Factbook- GDP (PPP)

6. ^ Chan、 Rachel (2009年6月17日). “Taiwan needs to boost public awareness on climate change: EU envoy” . China Post 2009年7月22日閲覧。

7. ^ Yao、 Grace; Yen-Pi Cheng and Chiao-Pi Cheng (2008-10-06). “The Quality of Life in Taiwan” . Social Indicators Research 92 (The Quality of Life in Confucian Asia: From Physical Welfare to Subjective Well-Being). “a second place ranking in the 2000 Economist’s world healthcare ranking”

8. ^ “2010 中華民國人類發展指數 (HDI) (PDF)” (Chinese). Directorate General of Budget、 Accounting and Statistics、 Executive Yuan、 R.O.C. (2010年). 2010年7月2日閲覧。

9. ^ “Number of Villages、 Neighborhoods、 Households and Resident Population” . MOI Statistical Information Service. 2014年2月2日閲覧。

10. ^ 亜州奈みずほ著『現代台湾を知るための60章』 明石書店 2008年 185ページ

11. ^ 出生率が世界最低、17年から人口減少 NNA. ASIA 2010年1月15日

12. ^ 出生率が世界最低の0.895、加速する超高齢化 Taiwan Today

13. ^ 金戸幸子「グローバル化時代の台湾における日本人コミュニティの変容」『日中社会学研究』第21号、2013年

14. ^ 片倉佳史「台湾の言葉について」『旅の指さし会話帳8：台湾』第2版、情報センター出版局、2004年、p82-86、ISBN 978-4-7958-2593-2

15. ^ クロード・アジェージュ「絶滅していく言語を救うために -ことばの死とその再生-」、白水社、2004年、p222、ISBN 4-560-02443-X

16. ^ 小学校から高校まで12年間を義務教育とする措置が執られるようになった（亜州奈みずほ著『現代台湾を知るための60章』 明石書店 2008年 170ページ）

17. ^ 亜州奈みずほ著『現代台湾を知る

## ① ドイツ調査報告（その1）

報告者 藤田 智之（附属京都小中学校）

### 視察から見たドイツの教育

#### I はじめに

##### 1. 視察の目的

今回のドイツへの研修は、以下の2点が目的であった。

- ① ドイツのグローバル教育の動向調査
- ② 各学校でのグローバル教育とその資料の収集

調査は、11月21日（土）から11月30日（月）の10日間である。主に、キスレックとヴァンゲン、ルートヴィヒスブルクが滞在先となった。

##### 【視察日程】

- 11月21日（土）関西空港 → 羽田空港 → ドイツへ  
11月22日（日）ドイツ フランクフルト着 → シュトゥットガルト → キスレック  
11月23日（月）Kisslegg 基礎 - 職業実科学学校 訪問  
11月24日（火）Kisslegg 基礎 - 職業実科学学校 訪問  
11月25日（水）Wangen コミュニティー学校  
11月26日（木）Wangen コミュニティー学校（午前）、Weingarten 教育大学（午後）  
11月27日（金）Wangen コミュニティー学校  
11月28日（土）Ludwigsburg 市議会議員（Frau Steinwand）  
11月29日（日）ルートヴィヒスブルク空港 → シュトゥットガルト空港 → 日本  
11月30日（月）羽田空港 → 伊丹空港

##### 2. ドイツの教育制度

ドイツの教育は、各州によって制度が異なっている。初等教育は、基礎学校において4年間（一部の州は6年間）行われる。中等教育は、生徒の能力・適性に依じてウプトシューレ（卒業後就職を目指す人が進む学校。職業訓練を受ける。5年）、実科学学校（卒業後、職業教育学校に進む人や中級の職につく人が進む学校。6年）、ギムナジウム（大学進学希望者が進む学校。9年）が設けられている。その他に、総合制学校がある。州によっては数や生徒数は異なるが、全体としては少ない。次ページの図1を見てもわかるように、学年が上がるにつれて複雑かつ多様なコースに分かれている。児童生徒の個性や適正等によって進路を決めることができるとも言える。一度、コースを選択するとやり直すことができないのではないかと考えたが、コース変更は可能でやり直すことができるとのことであった。

しかし、職業コースから大学進学コースへ変更することは、非常に難しいという言葉も付け加えてくれた。

今回、訪問した Kisslegg 基礎 - 職業実科学学校は、4年間の初等教育を終了後、中等教育では職業訓練を受けて就職するコース（学校）と新しく専門大学を目指すコース（学校）

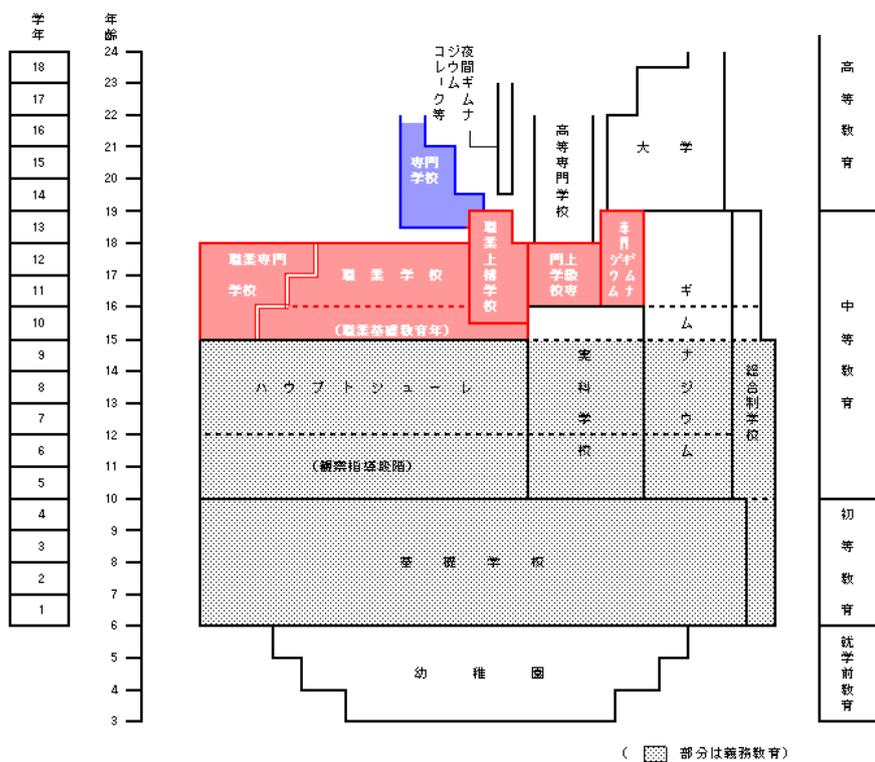


図 1

がある。中等教育である職業実科学学校は、現在、1つの校舎の中に2つの学校が共存している形をとっている。Wangen コミュニティー学校は、ドイツで数少ない総合制の学校であった。

## II ドイツの教育

### 1. Kisslegg 基礎 - 職業実科学学校

Kisslegg 基礎 - 職業実科学学校は、1-4年生と5-10年生の校舎が分かれている。2つの学校を行き来するのに徒歩7分程度であった。閑静な住宅地の中、2つの学校は建っている。都会から離れた少し閑静な田舎という表現が似合う、ゆったりと落ち着いた雰囲気のある学校であった。



Kisslegg 基礎学校外観

## ①国語と音楽の合科授業

いくつかの授業に参観させてもらったが、教科横断的な視点で考えた時に、右の写真に見られるような国語と音楽の合科授業が行われていた。この授業は、今回の訪問のためではなく、授業を進めていく中で、詩と音楽を組み合わせることで、より詩の情景や思いに触れることができると考えて設定されたものであった。教員は2人、1人はこのクラスの担当者、もう1人はサポートが必要な児童への加配の教員であった。常にサポートが必要な生徒と共に学習している部分においては新鮮さを覚えた。加配教員が授業でサポートする場合もあれば、つかない場合もあるとのことであった。



グループで役割を決める様子



国語と音楽の合科授業の発表の様子

今回、参観を見させていただいた全てのクラスでは、サポートが必要な児童も他の児童と共に、学習活動に取り組んでいる姿が見られた。授業によっては、同じ内容を一緒に学習したり、反対に教室にはいるが、異なる学習をしたりしていることもあった。個別の学習に入れば、一人ひとりが自分の課題に沿って、学習が進められていた。児童はお互いのことを知り、認めているようにも感じた。授業後、感じたことをディスカッションする場において、榊原教授からは、教員や児童の様子を日本語に訳すと「寛容」という言葉に近いと教えていただいた。

授業の展開は、全体→個人→グループ→全体という流れであった。全体の場面では、詩を読んだり、自分のグループが割り当てられた部分（連）を知ったりすることに時間が使われた。個人の場面では、個々に楽器がどのような音が出るのかを確かめていた。グループ活動では、それぞれが担当した文や楽器を決め、どのように音を出すのかやそのタイミングを考え練習していた。最後に、全体で詩と音で群読を行った。

授業の展開や方法については、斬新さや真新しさはなかった。しかし、ドイツや日本でも、児童の様子は似ていると感じた。児童のひたむきさや一生懸命は、万国共通であり、異国の地でもホッとする瞬間でもあった。

## ② 6年生の英語の授業

職業実科学校は、5年生から10年生の学校である。この学校では、これまで生徒に手に職をつけ、卒業させていた。しかし、地域や行政、生徒等のニーズにより、より学びたい者やより専門的な職を身につけたい生徒のために、専門大学に行けるコースを設定し、学校を運営している。

ここでは、6年生の英語の授業を参観した。今回、出会ったドイツの人々は、多くが英語を話すことができた。それは、英語が小学校1年生からの必修であることと、話す・聞くに比重が置かれていることにも関連しているように感じた。

授業では、教科書を使用して進められていた。ドイツでは、初等教育から英語が導入されており、すでにスペルを書いたりbe動詞の学習（文法）も行っていた。

授業の展開は、全体→グループ→全体→個人という流れであった。教材提示機で、設定場面を確認し、英語で簡単な質問を投げかけながら生徒を同じ土俵にあげていた。

グループ活動の場面では、提示されたシチュエーションにあった言葉を考え、会話の練習を行った。全体では、いくつかのグループが発表を行っていた。最後に、個人で会話文にでてくる文法の問題を解いて終わっていた。

参観という非日常的な場面だったので、生徒が緊張していたのかもしれないが、英語の授業という意味では、英語を話す回数が少なく感じた。しかし、カリキュラムが組まれ継続した取り組みとして行われているのであれば、もっと話す機会が多い授業もあるのかもしれない。

授業後のディスカッションの場では、日本の中学からの英語教育とは異なり、早い段階から大学に至るまで、話す・聞くという内容が豊富に組みられていることを知った。自分が中学生の時に受けた英語のように、極端に書いたり読んだりといった文法や読解の授業よりも、話すこともバランスよく長期的に取り組まれていることが分かった。



職業実科学校正面



全体で内容の確認をしている様子



ペア学習の様子

## 2. Wangen コミュニティー学校

この学校は、閑静な住宅地の真ん中にあり、学校全体が活気に満ちていた。総合制学校として、実験的な取組をしていることから、州や地域からも期待されていることがわかった。Herr Lindner 校長は、体中からエネルギーを発しているような活動的な人物であった。対照的に、Herr Dreher 副校長は、落ち着いた柔らかい雰囲気ながらも、内に秘めた力強さを感じる人物であった。



Wangen コミュニティー学校外観

Wangen コミュニティー学校の設立趣旨は、これまでドイツでは10歳の時点で、自分の将来を決定しなければならなかった。職業コースに行くのか、大学進学コースに行くのかといった自分自身の人生設計を小学校5年生の段階で決めなければならない。これまでは、進学することだけではなくマイスターという言葉にもあるように、手に職をつける職人に対しても一定の社会的地位があった。しかし、早い段階での選抜は優秀な人材を確保できていないのではないかとといった議論等からも、新しい学校としてWangen コミュニティー学校が設立されたとのことであった。

### ① 新しい取組

さまざまな取組が行われている。私が見聞きしたことのいくつかをあげてみる。

- ・7年生は75人1クラスで5人の教員が担当（15人に1人の教員）
- ・自主的なプリント学習を中心に行っている
- ・一定のまとまりの学習を終えたら、個別にテストを受ける
- ・合格できない場合は、再テストが1回だけ可能  
（ドイツ・英語・数学は83%が合格ライン）
- ・成績によって、進学コースか職業コースに分けられる
- ・1週間に1回、担当の先生と話す（コーチング）
- ・一人ひとりの時間割が違い、時計を見て動いている
- ・第二外国語が必修になっていること（多くがフランス語を履修）
- ・インプット（30分）と一人学習（15分）

で構成されている

- ・バンド制度がある
- ・5・6年生は、3クラスで担任制
- ・7年生に向けて自由度が増す
- ・「静かにする」ことを徹底している



7年生の教室



グループ学習の様子



学習の様子

- ・ 座席が全員、黒板に向いていない
- ・ 教員が独自のプリントを作成している

(現在進行形)

- ・ 宿題なし  
など

これ以外にも、どんどんと新しいことを取り入れて児童生徒の学力の向上を図っている。新しい学校として、7年生の生徒が8、9年生になった時、その後の進路がどのようになっているのかが問われている。成果をあげることができれば、このようなスタイルの学校が増えるが、成果をあげることができなければ廃校になる可能性もあるとのことであった。



5・6年生の教室

## ② プリント学習

7年生では、基本的にはプリント学習が中心となっている。右の写真にあるように、教科によって色が示され、その中から自分がまだやっていない課題プリントをさがし、自分の机で学習を進めていく。一人で学習する部分では、日本の公文式に近い感じがした。「自主性」を重んじているようにも感じた。



一人での学習の様子

左の写真は、一人で学習している場面である。対面式に机が並んでいる生徒もいれば、壁や窓に向けて机が配置されている生徒もいた。机の並びは、5



プリントのケース

人の教員と生徒の希望をもとに考えられている。生徒にとって、1番良い学習環境を提供することが大事であり、学びに取り組めるよ

うに配慮している。中には、途中で席が変わる生徒もいたらしい。およそ学期の初めに席を変え、年に3回程度行いたいとのことであった。

プリント学習による一人学びだけに頼っているように思ったが、課題によっては2人や3人で取り組まなければならないこともあった。

右の写真は、教室の横のエントランスのような場所であり、ここでは自由に話すことが許される場所であった。基本的に、教室では静かに学習することが求められる。そのために、グループ学習や発表練習、友達からの



教室横の学習場所

アドバイスがほしい場合は、この場所に来て活動するとのことであった。

周りに迷惑をかけずに学習することを大切にしており、少し声が大きくなると口の前で人差し指を立てて「シー」という動作が、あちらこちらから出てくる。7年生の教室では、この「シー」という動作を目にすることはまれであったが、5、6年生の教室では、教員や児童が「シー」という動作と声をよく見聞きした。Herr Dreher 副校長は、「学年が上がるにつれて、だんだんと静かにすることに慣れてくるのです。だから、7年生の教室は、こちらが少しでも話をすると、生徒に注意されますよ。」と話してくれた。その「静かにする」ことを視覚的に示しているのが、右上の写真である。教室の壁や黒板、廊下のあちらこちらにこの写真が貼ってあった。一人一人が学習に向き合えるように配慮していることがわかった。



静かにを促す張り紙



個別の時間割

基本的には、プリントによる学習が中心となっている。上記したように、課題によってはグループで考えたり解いたりすることが求められることもある。その場合は、自分で同じ学習をする人を探したり、お願いしたりしてパートナーを見つけなければならない。教員の指示等があるわけではない。

ドイツ語や英語、数学に関しては、「インプット」と呼ばれる一斉授業が、30分行われる。そこでは、話すことや聞くことなど、意見を交わしたり、基本的な内容を把握したりするための時間として使われていた（数学は参観できなかった）。7年生の英語の授業では、インプットが30分と1人学習が15分で設定されていた。



英語のインプットの様子

モニターに写しだされた映像を見ながら、何が行われているのか等を英語でディスカッションしていた。全体で内容を確認したり、基本的な文法事項を確かめたりすることが中心であった。Kisslegg 基礎 - 職業実科学学校の6年生の英語の授業と比べると、かなり機械的な感じを受けた。

最後に、5・6年生では、色バンドをはめている児童がいた。聞いてみると、バンドの色によって、自由度が異なるとのことであった。右の写真のように「虹色」のバンドをしている児童は、1人学習ではどの場所で学習しても良いとのことであった。教員に許可を得なくても好きな所で学習が可能になる。ある女の子は、夏になる



虹色のバンド

と外に出て、木陰で寝ながら学習すると言っていた。風にあたると気持ちよく学習が進むのだそうだ。

緑色→黄色→虹色という順に、自由度があがっていくようである。学習する場所という場合、虹色は教員の許可なしに自由に学習場所を選び、そこで行うことができる。黄色は、廊下までは許可なしに学習場所を選ぶことができ、緑色は、基本的にはすべて教員の許可を取らなければならないといったものである。

このシステムは、あくまでも児童の申請によって、審査される。審査は、3人の教員と児童3人の推薦（署名）が必要となる。自分の行動を振り返り、申請時期や推薦者を探し、承認を得なければならない。学校の中でも、虹色をつけることが1つのステータスになっているとのことであった。虹色バンドの児童は、「虹色をつけることで、責任をもって行動しなければならないし、私自身、虹色バンドをつけていることに自信と誇りをもってわ。」と話してくれた。

この学校では、さまざまな面で「自主性」と「責任」を重視しているように感じた。ある先生は、授業システムについて話をしてくれた。

私は、このシステム（プリント学習）に全面的に賛成ではない。もっと教師が教えるような従来の授業も必要だと感じている。しかし、ここに通っている子どもにとって、このシステムがあっているのならいいが、新しい取組なのでいいところは進め、改善すべきところは改善していけばいい。できない子には、話をしてやらせていくが、最後は自分の責任だから。自分の人生は自分で切り開かなくてはならない。

（榊原教授の通訳と自分で聞き取ったことをもとに）

場所や機会は提供するが、その中で一人ひとりが意欲をもって取り組めるかが大切になってくる。なかには、なかなか学習が進まない児童もいる。最終は、個人の責任であるとのことであったが、それまでの過程でコーチングをしたり、話し合ったり等、教員はできるだけその子が学びに向かえるような手立てを行っていくとのことであった。右の写真は、その一例である。一人の学習では、教員が横につき個別に支援にあたっていた。見ている限り、長い子には20分近く、児童の質問や課題に対して、丁寧に答えていた。

日本のように、まず児童生徒の学習面での課題が教員の指導や学級経営などに返さ



緑のバンド



廊下の机で学習する様子



児童への学習支援の様子

れるのではなく、児童生徒の責任として返される部分においては、子どもであっても厳しい現実の中に置かれているのだと感じた。

### Ⅲ グローバルの視点から

ドイツへの視察を振り返り、グローバルの視点から次の2点に（①寛容 ②自主性と責任）について考察し、まとめとする。

#### 1. 寛容

「ドイツのグローバル教育の動向」という部分では、ドイツは州によって教育制度や内容が異なるため、ドイツ全体で統一して行われているようなものはなかった。今回視察した地域では、外国語ということであれば、第一外国語である英語が小学校の段階からすでに実施されていることがわかった（教科書有）。英語は、その後系統だてて進められ、中学校段階においても話す・聞くといった内容が充実しており、ディスカッションも多いということであった。また、Wangen コミュニティ学校では5年生から、第二外国語の学習が始めっていた。多くの児童は、フランス語を履修しており、ヨーロッパの国々の中でもフランスへの憧れがあることがわかった。このように外国語という視点では、早くから外国語習得に向けた取組が行われていた。

教室には、サポートを必要とする児童生徒が一緒になって活動する場面を目にすることが多かった。Kisslegg 基礎 - 職業実科学学校の技術の授業では、障害をもっている生徒と一緒に活動するなど、児童生徒にとっては特別なことではなく、いつも通りのことであったようだ。どこまで認識できているかは明らかにはできなかったが、常時活動として、サポートが必要な子や障害をもつ子と共に、授業等を通して接する機会があることは重要であると感じた。

移民という部分でも、Kisslegg 基礎学校のあるクラスでは、2週間前にアルバニアから移民してきた児童がいた。言葉の面や学習の理解度など、すでにいる児童とは差があるが、同じ教室でできることは共に行い、できないことは個別や放課後に対応するなどの対応がとられていた。個別対応等については、日本の教室の中でも行われていることであったが、できるだけ一緒に行おうとする部分は、日本とは少し異なる気がした。

また、「待つ」という行為が徹底していた。児童生徒が、質問等に対してすぐに答えられなくても教員や周りの児童がじっくり待つ姿は、参観したどの教室でも見ることができた。今回の報告書には記載できなかったが、日本でいう終礼（終わりの会）では、先生から社会問題（例えば移民のこと）について、それぞれの意見を求められたり、学校や地域の問題について考えたりする場面でも、挙手した子が答えるだけではなく、指名された子の答えをじっと聞き耳を立てて、意見を待っている姿には驚いた。お互いを認め合ったり尊重し合ったりする文化があるのかもしれない。

このようにドイツでは、日本のように海に囲まれた島国はなく、陸続きという点からも、常に違う考えや生活習慣、文化等をもつ人々が常に行き来しており、グローバルという考え方が、すでに生活になかに入り込んでいる感じがした（グローバルの捉え方も再検討しなければならないとも感じた）。

仮にドイツがグローバル化した社会、グローバル教育が先行している国であれば、上記の内容を踏まえて、グローバル教育のキーワードとして「寛容」という言葉があげることができるのではないだろうか。

## 2. 自主性と責任

視察した2校とも、これまでの体制、システムからの変革を目指して果敢に取り組んでいる学校であった。文化や風土的なものであるのかはわからないが、両校とも、児童生徒の「自主性」や「責任」についての考え方は似ており、どのような形であれ、最後は「自分自身で決める」といったことが意識されていたように思う。日本のようにその部分が見え隠れするのではなく、児童生徒自身も常にそのことを認識しているようにも感じた。

例えば、Kisslegg 基礎 - 職業実科学校では、専門大学コースに行くのか、それとも就職コースに進むのかは、それまでの学習に対する過程や結果が大切にされていた。学校側として、一定の質（人材）を保つことで、社会的な評価を得なければならない。そのためにも、できるだけ多くの質の高い人材を育成していくことが、新しい取組の評価となり、学校存続や新しい取組への支援（予算配分）にもなってくる。

また、Wangen コミュニティ学校でも、色バンドの取組やテスト、学習プリントなど、学校生活の中で自主性や自由を獲得でき、反面、行動面や学習面では結果やそれまでの過程に対する自己責任をもたせるといった社会に近い仕組みがあった。

両校ともに、児童生徒の自主性と責任を大切にし、その意識を高めるための手立てがとられていたように思う。すべてを児童生徒に責任を負わせるだけではなく、教員がそれまでの過程において手立てや支援を個々にわかるように提示、提供していた。この自主性や責任については、児童生徒だけではなく教員や学校経営の部分など、すべての部分に関わっているようであった。

グローバル教育のキーワードとしては「自主性」と「責任」をあげることができると考えた。

## IV おわりに

今回の視察が「グローバル」な視点でドイツの学校を見てくることであった。

1つ目の目的であった「ドイツのグローバル教育の動向調査」については、現在の日本のように強くグローバル教育を推し進めているのではなく、すでに人や文化等さまざまな要素が日常生活にも入り込んでいるため、グローバルを意識したことを見

聞きすることはなかった。外国語という視点では、英語教育を小学校段階から教科書を使用して取組んでいることや「話す・聞く」がバランスよく配置され、日本の中学や高校、大学においては英語で議論するような機会が設定されていることがわかった。ドイツで教育を受けた多くの方は、日常会話程度に英語を話すことができていた。また、5年生からは第二外国語の学習が始まることも、斬新であった。

2つ目の「各学校でのグローバル教育とその資料の収集」は、各学校とも英語や第二外国語が履修されていること以外は、目新しい資料はなかった。しかし、附属高校の佐古の報告にもあるように、「難民」に対する関心は高く、そのことは喫緊の問題としてドイツに住む人々は感じているようであった。Kisslegg 基礎 - 職業実科学校の10年生のドイツ語（日本の国語）のスピーチでは、生徒が難民問題に対する国の対策や難民問題の背景などを紹介し、自分の意見を述べ、質問にも答えていた。また、Wangen コミュニティー学校の終礼でも、6年生のクラスでは、教員から児童に難民問題に対する意見を求められ、自分の見聞きした情報をもとに考えを伝えていた。多くの児童が自分の意見を話し、全体でさまざまな意見があることを知り、受け入れ、話し合いが終わっていた。グローバルを意識した教材教具という視点では、各学校で独自に作成したり、系統立てて取り組んでいたりはなかった。

今回のドイツの視察からは、「寛容」や「自主性と責任」といった意識や姿勢、態度を育成することが、これからのグローバル社会において必要な資質・能力であると考えられる。

個人的には、ドイツの教室に入り参観できたことは貴重な経験となった。TVや雑誌、書物で他者の目を通して紹介されている教室ではなく、自分自身の目、耳、肌で感じたことは、本当に価値あるものであった。この経験を生かし、日本の教育や自分自身の教育に対する考え方を再考し、目の前にいる児童生徒によりよい授業を提供できるようにしていきたい。

最後になりましたが、今回の視察では、教育大学の榊原先生、山梨大学の秋山先生、附属高校の佐古先生、大学院生の嵯峨根さんには、大変お世話になりました。初めてのヨーロッパで、多くの不安を抱えて出発しましたが、みなさんの温かさや優しさによって、無事に充実した実り多い視察を終えることができました。本当に感謝しております。ありがとうございました。

## V 参考文献

### 1) 文部科学省ホームページ

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/015/siryu/08102203/001/016/004.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/015/siryu/08102203/001/016/004.htm)

### 2) ペーター ヒューブナー『こどもたちが学校をつくるードイツ発・未来の学校』鹿島出版会 2008年

- 3) ジョン・デューイ『経験と教育』講談社 2004年
- 4) 下条 美智彦『ヨーロッパの教育現場からーイギリス・フランス・ドイツの義務教育事情』春風社 2003年
- 5) 堀 真一郎『ニイルと自由な子どもたちーサマーヒルの理論と実際』黎明書房 1999年
- 6) ジョン ポッター『サマーヒル教師の手記ー世界でいちばん自由な学校での2年間』文化書房博文社 1986年
- 7) Kisslegg 基礎 - 職業実科学校ホームページ <http://www.gwrs-kisslegg.de/>
- 8) Wangen コミュニティー学校ホームページ <http://www.gms-wangen.de/>

### ③ ドイツ調査報告（その2）

報告者 佐古 孝義（附属高等学校）

#### I. PH Weingarten（ヴァインガルテン教育大学）訪問

日時：11月25日（水）午後

主な対応者：Gregor Lang-Wojtasik 教授 Herr Kuld、 Frau Peiffer 他 学生等

#### 【訪問先】

##### 1. Basilika St. Martin (Weingarten)

ヴァインガルテン教育大学訪問に先立ち、隣接するバロック様式のバシリカ教会を訪問した。ヨーロッパ屈指の様々な意匠が施された教会建築には、歴史の重みを感じられ、その荘厳な佇まいに圧倒された。



##### 2. ヴァインガルテン教育大学

グローバル教育についてのプレゼンテーションと学生とのディスカッションを行った。

[テーマ] What Is Global Education?

(「グローバル教育」とは何か?)

[要旨] 1) What Is Globalization?

- ・ グローバリゼーションの歴史的経緯について
- ・ グローバル化を推進する2つの要因  
: 「市場経済」と「科学技術」の進歩
- ・ What kind of age are we living in now?

/ What will the world be like in 2028?



: YouTube の映像で見る 2028 年の将来予測

・ グローバリゼーションに対する賛否両論

2) How Important Education is in this Information Age

・ 情報化時代（グローバル化時代）における「教育」の重要性について

3) What Is Educational Tourism?

・ グローバル教育における「観光」の活用について～京都・伏見を例に～

[ディスカッション]

ここでは、上記の論点に関して特に興味深かった点を中心にまとめる。

(1) Globalization / Internationalization の差異とは何か？

いわゆる「ヒト」「モノ」「カネ」の世界規模での流動性の高まりという現象に関して、それを Globalization と表現するのか、Internationalization と名指すのかについては、単に言葉の問題ではなく、認識上の大きな論点が伏在している。つまり後者の Internationalization においては、inter + nation の語源どおり「国民国家(ネーション・ステート)」の存在を前提として議論が出発している。ところが、ヨーロッパにおいては、



EU の存在に象徴されるように、「国家」の枠組みそのものを解体したより広域の連合体が志向されている。日本（語）における「国際化」の問題認識には、いまだ「国家」の存在を前提とした Internationalization の側面が根強いが、EU の牽引役であるドイツにおいては、Globalization の含意する「国境（領域）横断性」がより意識されている、という趣旨の指摘が Gregor Lang-Wojtasik 教授等からあった。たしかに、いみじくもユダヤ人社会学者ジクムント・バウマンが活写した「リキッド・モダニティ」の様相が、ここドイツでは日本よりも顕在化していることが意識の面でも感じられた。

（現実の場面における明白な表れについては、後述するルートヴィヒスブルク市での視察内容を参照のこと。）

## (2) 日本とヨーロッパにおける「観光」（特に国外旅行）観の相違について

この点に関しても上記（1）と同様、日独間の地理的な差異が浮き彫りとなった。日本においては、「海外」旅行という言葉に含意されるとおり、外国に出る（海を渡る）という経験そのものが「異文化」と触れ合う経験であると一義的には考えられている。一方ドイツでは、EU 圏内を周遊することへの敷居は、日本における海外旅行よりもはるかに低いようである。この点が、グローバル教育における「海外旅行（研修）」に対する意識の違いに繋がっているということが、議論を通して明らかになった。端的に言えば、日本では「異文化体験」は自らの「外」にある体験であり、ドイツにおいては自らの域「内」にある、ということである（ドイツにとっての「外部」とはアジアを含む EU 圏外を意味するのであろう）。ドイツにおけるグローバリゼーションの日常化の一端を感じた。



## II. ルートヴィヒスブルク (Ludwigsburg) 市議会議員 Steinwand 氏訪問

日時：11月27日（金）・28日（土）

主な対応者：Elfriede Steinwand-Hebenstreit 氏

### 1. ルートヴィヒスブルク市議会議員 Steinwand 氏の自宅を訪問

「難民問題を含む住民の社会的統合政策」を含め、幅広い話題について議論し、情報交換を行った。ここでは、その議論を踏まえ、ドイツにおける難民政策と教育における問題点などについて考察してみたい。

[難民あるいは移民に対する日独間の認識上の相違について]

移民の背景 (Migrationshintergrund) を有する住民が全人口の2割に迫ろうとしているドイツにおいて、移民政策は不可避の重要課題である。彼ら移民がドイツで生活し、いわゆる“ドイツ人”と同じ機会を得て社会に関与していくためには、ドイツ社会への統合が不可欠になってくる。その中心にあるのは、ドイツ語の習得の問題、つまりは「教育政策」ということになる。実際にキスレグの小中学校でも、あるギリシャからの移民の子が、同じ教室にいる他の児童とは切り離された形で、一人ドイツ語の基礎を学習している光景が見られた。

また、問題は言語だけに留まらず、ドイツの歴史、文化、法秩序などの理解も統合教育の重要な鍵となってくる。従来、移民の背景を持つ人々の出身国は、トルコ、ポーランド、ロシアなどヨーロッパ圏内が多かったが、近年では、日本でも連日報道されているとおり、シリアをはじめとする中東諸国からの難民が急増しており、

宗教における差異も一層明確化してきている。教育の場面で何を教えるべきか、という議論も今後ますます難しい論題となってくるはずである。

このような背景を念頭に置きながら、われわれはSteinwand氏に「急増する難民と地元住民の間に何らかの軋轢やトラブルといったものはあるか？」と率直に尋ねてみた。すると、氏からは意外とも言える答えが返ってきた。「そういうのは、急進的な右派による扇情的な情報であり、現実には見られない。」

ここにも、グローバル化する社会に対する日独間の“基礎体力”の違いのようなものを端的に見て取ることができよう。移民に固有の文化の放棄を求める「同化」政策ではなく、個々の文化の独自性を尊重する「統合」を移民政策の柱に据えるドイツの異文化理解への寛容性を実際に体感した経験となった。

## 2. 地域住民と難民との交流会へ参加

Steinwand氏の誘いにより、市内のCarl-Schäfer-Berufsschule(職業学校)の体育館で行われた地域住民と難民との交流会を見学させてもらう機会を得た。

# Stimmung in der Cafeteria

Flüchtlinge mit Gesang und Tanz beim „Nachmittag der Begegnung“

Viel Stimmung in der Sporthalle der Carl-Schäfer-Berufsschule in Ludwigsburg gab es am Samstag bei einem „Nachmittag der Begegnung“ zwischen den dort untergebrachten Flüchtlingen aus sechs Nationen und den Anwohnern.

GUNTHER JUNGNICKEL

Ludwigsburg. Die Stimmung erreicht ihren Höhepunkt als am Schluß die Anwohner an der Reihe sind. Die jungen Männer aus Gambia und Liberia singen zusammen mit dem Vorsänger an der Trommel im Lied „Gott ist mit uns“ und schreien sich ihnen beim Refrain „Obi, Obi“ auch die Syrer, die Pakistaner, die Russen an und am Ende singt die ganze Cafeteria mit. Als dann der Gesang abrupt abbricht, hätte der Mann an der Trommel das letzte Wort „Danke Deutschland!“ rufen in die potatische Stille hinein und erröte dafür prasselnden Beifall von seinen Mitsingern.

Der Landkreis der Stadt Ludwigsburg und der Okaunische Arbeitskreis Asyl haben zu diesem „Nachmittag der Begegnung“ eingeladen und die Stühle der Cafeteria reichen schon früh nicht mehr aus für die vielen Gäste. Bürgermeister Konrad Seigrist und einige Ludwigsburger Stadträte waren darunter, aber auch zahlreiche Anwohner, die die Familien aus Asien und Afrika kennengelernt wollten, die seit Anfang Oktober in der Sporthalle ihrer Berufsschule campieren. Denn nichts anderes wollten die Veranstalter erreichen, um manchen die Angst zu nehmen und andere dazu zu animieren, sich ehrenamtlich mit einzubringen.

Allerdings dürfen sie an diesem Tag keinen Blick in die Sporthalle werfen, in der die 120 jungen Männer notdürftig untergebracht worden sind. Dafür wurde die Halle mit einem Füllbodenbelag versehen



Am Samstag fand ein „Nachmittag der Begegnung“ in der Cafeteria der Flüchtlingsunterkunft der Carl-Schäfer-Schule in Ludwigsburg statt. Junge Flüchtlinge führten dabei den Gästen einen syrischen Volkstanz auf. Foto: Hermann Rie

und durch Bauzäune und Planen in kleinere Wohneinheiten aufgeteilt. „Wir wollen damit ihre Privatsphäre schützen“, begründete Volker Hennig diese Maßnahme. Er ist bei der Stadt Fachbereichsleiter für Bürgerschaftliches Engagement und zusammen mit Anne Kathrin Müller für die Flüchtlinge zuständig.

Sozialarbeiterin Natalja Kusmin vom Landratsamt ist für die Männer in der umgebauten Sporthalle zuständig. Sie muss sich um die Unterkünfte, die Verpflegung, die Asylanträge und vieles andere kümmern. Aber ihren Schützlingen zuhört man hat ein sehr warmes und

sches Gebäck und Tee vorbereitet, sondern auch das kleine Kulturprogramm vorbereitet, das an diesem Samstagnachmittag den Besuchern geboten wird. Die warten auch ge-

### Erol Schirin: Landkreis im Verzug bei der Aufnahme

duldig, wenn einmal eine lange Pause entsteht und Natalja zum Mikrophon greifen muss: „Sie müssen entschuldigen, dass es hier manchmal etwas chaotisch aussieht, aber

wir haben den Programmablauf nicht so genau festgelegt“.

Während aber kurz danach die rund 250 in der Cafeteria versammelten Menschen sich mitreißend lassen vom heißen Rhythmus der syrischen Tänzer, berichtet der im Kreishaus für Flüchtlingsfragen zuständige Sozialarbeiter Erol Schirin, dass der Landkreis leider im Verzug sei mit der Aufnahme von Flüchtlingen.

Zwar habe man inzwischen 3460 in diversen Unterkünften unterbringen können, doch allein im November waren dem Landkreis wöchentlich 272 Menschen zuzuteilen. „Wir

hätten eigentlich rund 600 mehr aufnehmen müssen, aber es gibt nicht“, sagte Schirin, obwohl es zeitlich auch in Windeseile in diversen Kommunen auch Unterkünfte gebaut werden. Deswegen werde es in den nächsten Wochen und Monaten die Schlagenzahl erhöht sein müssen.

Wie er das schaffen will, ist Schirins Geheimnis. Aber als Berufsmann glaubt er fest daran, „den Bereitschaft der Menschen zu fördern, ist hier nicht wie vor 90 kommt er unter diesen Umständen überhaupt noch dazu, zu schlaf Manchmal“, sagt er und lächelt

## ▲地元紙に掲載された6国からの難民と地域住民との交流会

”Nachmittag der Begegnung”の様子

Carl-Schäfer-Berufsschule(職業学校)の体育館にて

雑駁な感想になるが、日本で報道されている、いわゆるシリア難民のイメージとは異なった姿を垣間見ることができたと感じた。登録を待つ難民は、自治体の用意する

「一時滞在施設」(上掲の体育館などもそのひとつ)に滞在しているのだが、この日交流会に参加していた難民の多くは精悍な若者であり、身なりもある程度整っていた。報道されているような「不自由な生活を余儀なくされ、体調を崩す者たち」とは、およそかけ離れている実像に、正直驚かされた。無論、われわれが見た風景は事態のほんの一部に過ぎず、それをもって断ずることはできないが、市当局の難民政策への一定の取組は認められるといえよう。交流会は、難民の若者が(おそらく祖国のものであろう)歌やダンスを披露し、終始和やかな雰囲気の中で行われた。

訪問団の団長である榊原教授の友人が、次のような趣旨の発言をされていた。「私たち(ドイツ人)は、これまでもギリシャやトルコなどから移民を受け入れてきた。今度(つまりシリアなど中東からの難民について)も、なんとかうまくやれるだろう。」これは、われわれが視察した光景と符合する発言のように思われ、非常に興味深かったと同時に、報道の一面性という問題についても考えさせられた。

とはいえ、難民を巡るドイツ国内の状況は悪化の意図を辿っているのが実情である。われわれが訪問した11月末以降、ドイツに流入する難民の数は増え続けており、西部の大都市ケルンでは、年末に500名以上の女性が大勢の男に囲まれ、暴行や窃盗の被害を受けたとの報道もあり、またその容疑者の半数以上が難民であったことから、難民問題に関して国論を二分する論争が起きているようである。極右勢力によると見られる難民排斥運動も激化しており、2016年1月29日には、バーデン・ビュルテンベルク州の難民宿泊施設の敷地に手榴弾1個が投げ込まれる事件(難民ら約100人が暮らしていたが、手りゅう弾が不発のためけが人なし)があったと報じられている。

#### 【考察・まとめ】 多民族国家ドイツにおける教育と日本との違いについて

今回の視察を通じて特に強く感じたことは、ドイツにおける教育の「個」重視の姿勢である。もちろん日本においても、進路指導の面をはじめとして「生徒の個性を尊重する」ことの重要性は喧しく叫ばれている。しかし、*Gemainschaftsschule*(コミュニティスクール)における「習熟度(到達度)別課題」学習の制度や、クラスサイズ、教室の形態など、ドイツにおける教育のスタイルは、制度として(ハードの面から)「個」を重視する姿勢を感じさせるものであった。日本では近年、アクティブ・ラーニングが脚光を浴び、次期学習指導要領の中核を成すと目されているが、ドイツにおいての協働学習に対する姿勢はむしろ「設定された課題内容に応じ、必要であれば協働で課題に取り組む」という限定的なものに留まっているように見えた。Stephen R. Coveyの言葉を借りれば、「相互依存 *interdependence* の前に自立 *independence* が先行していなければならない」という意識が表れているといえるかもしれない。

また「到達度」による評価という観点も、日本よりも徹底されていると感じた。周知のとおりドイツでは、アビトゥーアは単に「中等教育の修了」を意味する資格では

なく、その試験への合格が（ギムナジウムでの成績とあわせて）大学など高等教育機関への進学のパスポートとなる、という点において、日本における「高卒資格」とは全く様相を異にしている。事実、ドイツで会った学生が「卒業した学校名を履歴書に書くことには意味がない」と語っていたことは、「到達度重視」の側面を如実に物語っている。

無論、ドイツのいわゆる「三分岐型の教育制度（10歳にしてギムナジウム／実科学校／基幹学校の3つに進路が振り分けられてしまう）」には、教育格差を助長したり、あるいは職業など社会的地位の固定化（ピエール・ブルデューの言う「再生産」）をもたらしたりするという点で全く問題がないとは言えないが、日本の教育の硬直化した単線的制度や等閑視されている授業や学級のあり方を批判的に検証する視点として、ドイツの教育を参照することは一定の意味があると考えられる。

（参考文献）

・ジクムント・バウマン『リキッド・モダニティ—液状化する社会』（森田典正訳 大月書店、2001年）

・Gregor Lang-Wojtasik、” World Society and the Human Being ---- The possibilities and limitations of global learning in dealing with change” *International Journal of Development Education and Global Learning* 6(1) 2014、pp. 53-74

・木戸裕「ドイツの外国人問題—教育の視点から—」『レファレンス』平成18年11月号（国立国会図書館調査及び立法考査局）

[http://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/refer/200611\\_670/067003.pdf](http://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/refer/200611_670/067003.pdf)

・Stephen R. Covey *The 7 Habits of Highly Effective People* Simon & Schuster、2013

#### ④ インドネシア調査報告

報告者

大栗 真佐美（附属桃山中学校）

柴田 大介（附属桃山中学校）

##### I 初めに

2015年度、第1学年（4クラス）と帰国学級、文化祭実行委員会、国際交流委員会、各教科（特に英語、美術、社会、家庭科）が協同学習をする形で、ジャパンアートマイルの「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」へ初参加することとなっ

た。

ジャパンアートマイルは、日本人として自国の伝統文化に誇りを持ち、グローバルな視野をもって自ら考え行動し、世界の人々と協働して世界の調和と平和に貢献する次世代を育てることを目指してアートマイルプロジェクトを国内外で展開しており、本校の研究課題であるESDの取組の1つでもあり、グローバル人材育成の1つでもある。このアートマイルの取組に参加することで、生徒たちに対して様々な国際理解のための活動を生み出すことになる。

そのため、アートマイルについては文部科学省の英語教育ポータルサイトでも紹介されており、「えいごネット」で「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」が紹介されている。日本と諸外国の児童・生徒・学生がともに英語を用いて活動でき、実在する仲間と協働できる場としている。

また、24年度から採用されている中学校の教科書「美術1」（開隆堂出版）に日本とインドネシアの中学校のアートマイルの取組みが掲載されており、23年度から採用されている小学校の図画工作の教科書「思いをこめて」（開隆堂出版）に日本とカナダの小学校のアートマイルの取組みが掲載世界と芸術を通してつながること、その中に各校との交流で取り決めた、文化学習（伝統文化を調べ交流する）や将来の夢についての交流学习などが含まれ、それぞれの国や文化、人々の暮らしを学ぶこともできる。

このジャパンアートマイル初参加にあたって、本校の文化祭での展示や、スカイプ会議やフォーラムでの生徒同士の活動、可能であれば2月の研究発表会での交流学习などについて話し合うため、両校について知るために視察した。

この視察では、両校の各学校長をはじめアートマイル担当には大変お世話になった。この場を借りて感謝の意を述べたい。さらに、今回の視察からインドネシアの学校が多く、多くの国と国際交流学习の取組を果たしていることもわかった。本校での国際交流学习の参考にしていきたい。

## II インドネシアの学校教育（外務省 諸外国・地域の学校情報より抜粋）

インドネシアの教育委員会、行政機関等は国家教育省と宗教省の2つある。

### 1. 現地の教育の概要と特色

学校制度	6・3・3・4 制
義務教育期間	7 歳～15 歳（小学 1 年生～中学 3 年生）
学校年度	7 月第 3 週～翌年 6 月第 1 週
学期制	【2 学期制】1 学期：7 月～12 月、2 学期：1 月～6 月

### 2. 教育概要・特色

義務教育は小学校 6 年間と中学校 3 年間だが、就学率ほぼ 95、71 パーセントの小

学校に対し、中学校は首都のジャカルタ特別州、大都市周辺で同レベルとなっている。

またジャカルタ特別州は義務教育を現行の 9 年から高校を含めた 12 年に延長するとともに公立高校の授業料の無料化を段階的に導入し 2015 年度中の完全実施を目指しているが、現在まではまだ達成していない。現在、ジャカルタ市では公立の学校よりも環境整備などの視点から富裕層の保護者は私立学校を選ぶことが多いということであった。

公立学校は中学校が Sekolah Menengah Pertama と呼ばれる。学習言語はインドネシア語だが、第 2 言語として 33 州の各地の言語と英語も学ぶ。パンチャシラ（インドネシアの国是とする 5 原則：神への信仰・民族主義・民主主義・人道主義・社会正義）の教育が小学校から行われ、そのほかに Pramuka（ボーイスカウトに近い組織）と称して小学校の低学年からしつけや人間関係について学びながら学校外で活動することがある。

一方、宗教省が管轄するマドラッサ（小学校～中学校）、プサントレン（小学校～大学）という学校も存在し、一般的な教科に加えて宗教を重視した教育（イスラムのしつけ）を実施している学校もある。また、私立学校では、カトリック系、プロテスタント系、仏教系、など各宗教理念に基づいて運営されている学校が多数ある。

### 3. 義務教育

小学校へはほぼ 98、7 %が就学しているが、中学校は 1994 年に義務化がスタートした。

義務教育の学校段階(インドネシア共和国国家教育省資料 2013 年度統計)

#### (1) 種類および就学状況

小学校：6 歳～12 歳、1 年生～6 年生、就学率 95.71%

中学校：13 歳～15 歳、1 年生～3 年生、就学率 78.43%

高等学校：16 歳～18 歳、1 年生から 3 年生、就学率約 58.25%、大学就学率：28.57%

#### (2) カリキュラム・教授言語

全国統一の基準に沿って各学校がカリキュラムを作成し、パンチャシラあるいはインドネシア語の学習が特に重視される一方、必ず地方語（各州のそれぞれの言語）を学習するようになっているが、訪れた各学校では地方語は学ばれてはいなかった、アラビア語は学んでいた。中学校では英語が加わり、ジャカルタ首都特別州ではさらにコンピュータ学習が加わる。私立・公立においても学校によっては小学校から英語、コンピュータの学習が既に始められている。

### 4. 制服と卒業について

公立校には全国共通の、私立校には各学校の制服がある。小学校・中学校の卒業時に全国統一内容の国家試験があり、10 段階評価がなされる。基準に満たなければ卒業できない。

### Ⅲ 2015年8月14日（金）

#### 1. SMP Labschool Kebayoran（ラブスクール ケバヨラン校）視察

##### 学校の概要

学校名：SMP Labschool Kebayoran

住所：Jl. K. H Ahmad Dahlan no. 14 kebayoran Baru

South. Jakarta-Jakarta、Indonesia(12130)

学校 URL [www.labschool-unj.sch.id](http://www.labschool-unj.sch.id)

（1年4組：帰国生徒学級14名とのアートマイル交流校）

（本校帰国生徒滞在国内 アメリカ、中国、香港、ドイツ）

南ジャカルタ市にある、ラブスクール ケバヨラン校は、国家教育省管轄の私立校であり、高校が併設されている。制服は、上は白で校章入りのカッターシャツ、下は、男子は紺色のズボン、女子はかかとまでのロングスカート・金曜日だけは頭にジルバブというスカーフをかぶるが、普段はかぶってはいないそうである。この学校に通う生徒は、イスラム教の生徒だけではなく、他の宗教の生徒も在籍する。

今年度の受験希望者は1、300人、入学できるのは200人、ジャカルタのトップクラスの学校の1つである。保護者もこの学校へ入学させたいとの希望も多いそうである。学費も高く、入学金は2600万ルピア（約26万円）、毎月の学費120万ルピアである。副校長によれば、大学進学はインドネシア大学、ガジャマタ大学、イテベ大学などで、192人国内の大学へ、21人は留学した年もある。

英語以外の授業はインドネシア語で行われている。英語の授業は教員2人体制で、7グレード（中1）～9グレード（中3）まで1週間4クラスある。今回視察できた授業はオールイングリッシュで行われていて、テーマは「学校でのルールを英語で標語にしよう」であった。最後にはグループでの話し合い活動、標語作成、発表の流れであった。教員はインドネシア人とネイティブの授業の時がある。生徒たちは積極的に授業に参加している様子が見受けられた。本校の生徒たちがアートマイルの活動の一つである、ファーラムでの英語での交流を通して、双方向の文化交流がなされていくことが期待できる。



写真① 英語の授業



写真② 英語の授業（グループ活動）

日程の都合上、美術の授業を見学することはできなかったが、ラブスクールの美術室の様子を見学させていただいた。教室には、デッサン、ドローイング、粘土を使った立体造形、透視図法を用いた部屋のスケッチ、水彩画、お面などたくさんの作品が展示されていた。活動内容としては、日本における中等学校の美術教育と非常に近いものを感じた。作品には子供たちの自由な発想から生まれる表現の豊かさ、おもしろさがあった。また、教室にはインドネシアの伝統芸術である、ワヤンが飾ってあった。厚紙と竹の棒を用いたシンプルな作りであったが、人形の手足が動くように工夫がしてあり、その表面は色鮮やかに描かれていた。これまでの美術の学習で学んだ画材の扱い方や色の配色等、培った知識や技術と国の伝統芸術が融合されたすばらしい作品であった。このような作品を作る子供たちが、本校の生徒とどのような作品を交流の過程の中から導き出していくのか、非常に楽しみである。

また、この学校は国際交流として、アートマイル事業を始め、日本の山口県、オーストラリアのシドニー、イギリス（文化交流）などがある。

今回の交流で、本校の要望（文化交流が中心であることや、アートマイルのプログラムを文化祭に合わせてもいただきたいこと、スカイプ会議の時間決めなどの下準備、2月の研究発表会についてなど）を伝え了解を得た。

## 2. 学校名：SMP Islam Amalina（アマリナ校）視察

### 学校の概要

住所：Jl. Raya Pondok Aren No. 8, Tangerang selatan, Banten 15224-Indonesia

学校 URL [www.amalina.net](http://www.amalina.net)

（1年1組：一般学とのアートマイル交流校）

アマリナ校は、幼稚園から中学校まで併設されている宗教省管轄の私立校である。さらに、ブリテッシュスクールとボディソープの援助で、ビサスクール（貧困層の子どもたちへの教育支援施設）を近隣に設置し、アマリナの生徒たちはこのビサスクールにおいて先生となり、20名を超える子どもたちの学習補助を行い社会への奉仕活動も体験させている。

校長先生は積極的に国際交流を推奨している、この理由の1つとしてイスラム教の学校や生徒に対する偏見をアマリナ校の生徒たちと世界の学校との交流によって、「排除したい」と考えていることが挙げられる。そのためには、世界に自分たちを知ってもらうことが大切であると、様々な国際的な交流のため、校長先生自ら、英語を駆使し世界を飛び回っている。参加している国際交流として、アートマイルを始め、ASIAN STUDENT EXCHANGE PROGRAM（台湾語では亞洲學生交流計畫）やフィンランド、ブルガリアからのゲストティーチャーを迎えての講演会、シンガポールとの PLAYMOOLAH を通じての学習、タイや日本などとの ESD 学習（ライスプロジェクト）などに参加し

ているということであった。今回の視察では、台湾高雄市立瑞祥高級中学の中高校の中学生 20 名と教員 3 名が交流に来ていた。

授業については、英語の授業は 7 グレードから 9 グレードまで 1 週間 4 時間である。英語学習については、英語の本を読んだ感想を書く、または日記を書くなどの授業を視察した。それぞれが、自分の好きな本を読んで感想を書くことに取り組んでいた。授業見学は英語、数学、芸術（美術・音楽）、アラビア語（コーランの学習）、お祈りの時間などを視察できた。

アマリナ校もラブスクール同様、芸術の時間にワヤンに取り組む活動があり、自国の文化を大切にしている姿勢が伺えた。芸術の教科書には「こころのとも」という日本の楽曲が取り上げられており、この曲はインドネシアでは誰もが知っている曲であるという。異国の地で日本の歌に親しむ人々の姿は、私たちに驚きと喜びを与え、みえないけれど確かに存在する、つながりを感じさせてくれた。このつながりこそが、世界を持続させていくに通ずるであろうし、このつながりを可視化するような作品がアートマイルの交流を通して生まれることを期待したい。生徒たちは 25 名の少人数クラスで熱心に授業を受けており、先生との距離も近く、私たち外国人に対しても丁寧な挨拶（右手を生徒の額にあてる）をどの生徒もしてくれた。生徒たちから受ける印象はとても素直で、優しく、学業には熱心に取り組んでいた。

こちらの学校へも、アートマイルの本校の計画について伝え、本校の行事や ESD 学習の研究発表へ ESD 学習の一つであるアートマイルの作品がスムーズに交換でき、生徒同士の交流が時差を越えて行えるように授業のタイムスケジュールなどについても話し合った。こちらの学校もとても友好的であり、私たちの学校の要望について了解してくれた。



写真③数学の授業



写真④芸術の授業

### 3. 2015 年 8 月 17 日 独立記念日各校での祭典の視察

2015 年はインドネシア独立記念日 70 周年の節目に当たり、毎年 8 月いっぱい市内は紅白の国旗や紅白の花で埋め尽くされるようである。道路も飾られ、一般家庭の玄関先などにも国旗が掲揚されていた。インドネシアとの過去の歴史として日本人として知っていなければならないことに、日本が 1942 年から 1945 年までの期間この地を軍事占領している。これは、独立記念塔の歴史にも描かれている。日本の敗戦から 2

日後の 17 日にインドネシア共和国として独立を宣言したが、オランダの支配がその後 5 年続いたあと名実ともに独立したのである。

このような歴史を生徒たちは学んで知っており、心から戦時中に亡くなった人々を悼み、現在の平和に感謝をしているとのことであった。この独立記念日の祭典は各学校で行われ、ラブスクールの生徒たちの中には、学校の中で前日から泊まり込んで準備する生徒もいたそうである。先生方や保護者たちは朝の 5、6 時から学校に駆けつけていた。選ばれた生徒たちは、独立記念日が 17 日なので 17 キロメートル市内を走ってから学校に帰校し、それから独立記念日についての校長先生のお話を約 1 時間きちんと立って聞いていた。

そのあと、生徒会の新旧引き継ぎのセレモニーが行われた。生徒会の行事がきちんと行われているのかを管理する旧 15 人の生徒たちとその新後継者たちの引き継ぎの結団式、生徒会を運営してきた旧生徒たち 60 人と新生徒会 60 人は、それぞれ下級生に制服を渡す場面では、これまでの活動を振り返り役目を終えたことに対して、お互いに泣いている姿が見られ、保護者もその輪を見守りながら、我が子の成長を誇らしく思っているようであった。自分たちが学校の行事を自治し、運営することで生徒たちは大きく成長を遂げていると先生方も話していた。

一方、アマリナ校でも同じように独立記念祭典が行われた後、ASIAN STUDENT EXCHANGE PROGRAM で交流している台湾高雄市立瑞祥高級中学との交流が行われていた。

生徒たちの交流内容はアマリナ校の生徒たちが決めているということで、綱引きやうなぎ運びなどの小運動会の活動や歌の交流、カップに絵を描くなどの交流が行われた。生徒たちは、少しずつ活動を通して仲良くなっていて、英語で会話をしている様子が見られた。生徒たちは 20 人程度、お互いにこの交流を通して、双方の国へ赴きホームステイをしているそうである。原則として校内での生徒の携帯電話の使用は禁止されているが、この日は特別に認められており、ホームステイ先の生徒同士だけでなく、交流を通じて共通の趣味や話題を見つけた生徒同士が友達となり、自然とつながりが広がっていく様子が見られた。大人が介入できない、彼らだけの関係がそこにはあった。東日本大震災の時、アメリカのオバマ大統領は「TOMODACHI」という言葉を使った。友達になることが国際理解の一番の近道かもしれない。これらの活動を通して、生徒たちはそれぞれの国の情勢や相手を思いやる気持ちを直接感じるができる。相手国の良い面や悪い面、さらには自国を振り返る活動にもつながるであろう。



写真⑤整列、学校長の講和



写真⑥生徒会新旧引き継ぎ式（ラブスクール校）



写真⑦台湾、インドネシア、日本対抗（アマリナ校）



写真⑧生徒たちの交流

#### 4. 成果と課題、感じたこと

成果として、まず、インドネシアで訪問した2つの学校は、ユネスコスクールへの参加や他の国際交流プログラムも参加しているということを知ることができたことである。アマリナ校を訪れていた台湾の学校も、3月に大学からのグローバル人材育成の台湾視察の時に学んだ「国際教育活動」が生かされており、こちらの学校も多くの世界の学校と交流をしているそうである。

このように、国や学校の経営者（私立校）や先生方が自国の生徒たちをグローバル社会で生き抜く生徒に育てるために、世界の同年代の生徒や先生方と交流できるプログラムやプロジェクトを調べ参加していること、また、今回のアートマイルでは本校を通して、日本を理解しようとしているということや日本文化についてある程度テレビドラマやアニメ（ちびまるこちゃん、クレヨンしんちゃん、NHK など）を通じて知っているということが理解できたのである。

次に、間違っても恥ずかしがることなく、生徒や先生は日本語および英語を使っの挨拶や言葉の話したり（言語活動）、日本文化について話したり、（日本文化）と積極的に交流しようとしてくれることが強く印象に残った。この点は本校の生徒達にも積極的に関わらせていく上で、話しておきたい部分である。

しかし、この英語・インドネシア語教育重視の裏側には多民族、多言語国家である

インドネシアにとって、本来の自分の民族の言葉や文化を学ぶ機会が少なくなっており、どの民族にも伝わるインドネシア語が普及していく中、話されない言葉となっているようだ。さらに、学校で学ばれる第2言語も英語の学校が多いので、これは残念なことである。

本校の生徒たちもアートマイル参加を一つの機会とし、世界を学び、グローバル人材となり、持続可能な社会をつくることができる人へと成長してもらいたい、自国の言葉や自国の文化を大切に考えて守っていきけるように育てほしい。

また、互いに第二言語の英語を用いて交流することは、英語圏との交流とはまた違う意味があり、本校の生徒にとってリアルに英語を実践する場でもある。その経験は計り知れないものがある。この交流が互いに良い刺激となり、英語力の向上につながっていくことに期待したい。

小規模の学校でありながら様々な国際的な取り組みをアマリナ校は同時並行で行っている。先述した通り、校長先生自らが生徒のため、学校のために飛び回り、1年の半分以上を海外の学校訪問や視察、交流などに費やしているという。校長先生は学校の先生方や職員のことを「チーム」だとおっしゃっていた。プログラム毎に担当の先生がいるけれども、一人でやるのではなく、チームで関わっていく。共有していくことが大切なのだ。その真意は次の言葉にあった。「学校におけるすべての取り組みは“プロジェクト”ではなく“プログラム”である。」単発で終わってしまえばそれは一過性のものであり、大切なのは続けていくこと、そして続けていくために情報を共有し、チームとして、個々が互いに連携をしていく。アートマイルプロジェクトではなく、今回の交流を通じて継続的に生徒同士が関係を築けていくことが大切である。

各校とも、学校長を始め、英語、美術や音楽など他教科も協力してアートマイルに参加している。課題として、本校でもそのような協力体制を構築していくことがこのプロジェクトの成功を左右するだけでなく、今後も継続してグローバル人材を育成していく上で必要不可欠だと考える。インドネシアや日本文化については、夏休みの宿題で美術や社会で各自まとめてくるので、フォーラムを通してのメール交換、スカイプを使っての会議を行い、生徒同士の交流を活発にしていきたい。

インドネシアはSNS 大国である。両校とも校内での携帯電話の使用は原則として禁止していたが、特例を設けて校内でも活用できる時間を設けていた。現代社会においてインターネットの活用は必要不可欠である。もちろんその危険性は無視できないが、今後さらに傾倒していくことは明白である。10年前、誰がLINE や Facebook の到来を予測できたであろうか、日々それらは進化していく。そして生徒はそれらに囲まれて成長していく。校内で禁止していようが、一歩外に出ると生徒は情報社会の中で生きているのである。今回のプロジェクトではフォーラムや Skype を活用して生徒は交流していく。ICT 機器の学校現場での活用をさらに充実化していくとともに、ルール

やマナーを制定し、情報との関わり方を考えていくことが重要だと考える。

その他（インドネシア歴史・文化など）

○モナス独立記念塔 National Monument (MONAS)

[歴史博物館](#)併設、歴史ジオラマや初代[大統領スカルノ](#)の[独立宣言文](#)を所蔵する。

○ジャカルタの日本人街（ブロックM）

リトル東京ブロックM縁日祭は、街の活性化と環境整備を目的とし、この地域で飲食店を経営する日本人と目的に賛同する有志により、南ジャカルタ市やブロックM地域に働きかけて開かれ、現在では南ジャカルタ市の公認イベント、日本大使館及びJETROの後援も得て、ジャカルタの日本関連のイベントとなっている。

開催日	テーマ	来場者数（推計）
第1回 2010年7月4日 ----		2万人
第2回 2011年7月9、10日	Pray For Japan 立ち上がれ日本	17万人
第3回 2012年6月30日、7月1日	ありがとう心の友 Arigato kokoronotomo	20万人以上
第4回 2013年5月25、26日	maju bersama 共に歩む	20万人以上
第5回 2014年5月24、25日	飛躍 It's time to jump!	25万人以上
第6回 2015年5月9、10日	Always Smile!	

また、ブロックMには日本語の看板をはじめ日本語表記がいたるところにある。



看板：HOTMOTTO、吉野家などの飲食チェーンやコンビニエンスストアなどの日系企業が多数あり、日本食レストランも目立つ。セブンイレブンにはおにぎりが並ぶ。

○インドネシア国立博物館 National Museum ○ワヤン人形博物館 影絵や人形

参考文献等

- ・外務省HP、インドネシア共和国HPなど
- ・村井吉敬編著『現代インドネシアを知るための60章』明石書店
- ・金子正徳『インドネシアの学校と多文化社会 教育現場をフィールドワーク』京都文教大学 文化人類学ブックレット No.6

◎帰国後の1年1組と4組のスカイプ会議の様子

1年1組（8月25日実施）



① アマリナ校とスカイプ会議でつながる。



② 食い入るように画面を見つめる生徒達。

1年4組（8月27日実施）



① 英語圏の生徒が中心になり話しを進める。



② 画面に映るラブスクールの様子。

成果：生徒の感想にはもっと英語が話せるようになりたい、日本文化を伝えたいとあった。

### Ⅲ. 平成 27 年度幼稚園から高校までの系統的グローバル 人材育成カリキュラムの開発

#### ーグローバル人材育成カリキュラムのフレームワーク素案ー

村上 登司文（グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会委員）  
はじめに

平成 26 年度より、各附属学校園の先生方と、グローバル人材育成カリキュラムについて検討してきました。大学内で、多文化共生、コミュニケーション力、英語力の 3 つの WG を設置しました。平成 26 年度に、各附属学校園に「グローバル人材育成に関連する授業など」の実態アンケートをお願いし、それを大学でまとめました。平成 26 年度末に、各附属学校園からグローバル人材育成に関連する授業実施計画（平成 27 年度）を出してもらいました。それに基づいて、平成 27 年度は各附属学校園で、グローバル関連授業を公開していただき、40 近い公開授業を実施することができました。プロジェクト委員会での協議、実態調査のまとめ、実施された公開授業などを検討して、平成 27 年 12 月に開催された、京都教育大学フォーラムで「グローバル人材育成のカリキュラム素案」を発表しました。

さらに、平成 28 年の 2 月に開催された京都教育大学附属学校部合同研究発表会でも、「グローバル人材育成カリキュラム」の開発について報告しました。ここでは、平成 27 年度の各附属学校園での教育実践より明らかになった研究成果と課題も示しました。

#### ○研究成果（長所）

創意工夫された題材と教材も提示されている。

社会、国語、道徳、英語、総合学習、国際交流活動、体験活動の多様な領域で実施されている。

情報機器の利用や授業方法が工夫されている。

外国の学校とのつながり（相互訪問・帰国生徒など）を活かしている。

授業方法や活動方法も視野に入れている。

#### ○課題（短所）

グローバル人材育成としての学習目標（ねらい）が十分に意図されていない。

教育内容（コンテンツ）か、教育方法（汎用的能力）の区別が未整理である。

授業間や活動間のつながりがあまり意識されていない。

児童生徒の発達段階や学校段階が十分に考慮されていない。

授業の事後協議を行い、提案授業について研究成果を検討し、教育実践研究を深める。

本稿では、平成 26 年度と 27 年度の各附属学校園でのグローバル人材育成に関わる

実践状況を検討して、以下の様なグローバル人材育成のカリキュラムの素案を提示します。提示の中身は、①グローバル人材育成カリキュラムの枠組み、②枠組みの〈出会う〉〈広がる〉〈つながる〉〈重ねる〉の各ステップの説明、③系統的な発達段階別学習目標の構造の説明、④「発展期」の高等学校段階における学習目標、⑤各附属学校園でのカリキュラム開発（平成28年度）についての提案、となります。

## 1. グローバル人材育成カリキュラムの枠組み

まず、京都教育大学が規定するグローバル人材像はプロジェクト委員会で以下の様にまとめられた。「グローバル人材とは：暮らしている地域や自国及び世界の国々の歴史や文化について広く深い知識をもつとともに、母語や国際共通語としての英語を活用して、多様な価値観や文化的背景をもった人々と対話し、協働して様々な課題を解決しようとする人。」(2014.10)

これをベースにして、素案では人材育成の「カリキュラムの骨子」を次のようにまとめる。

目的： グローバル人材をめざして、必要とされる資質・能力を育成する。

対象： 幼稚園～高等学校、特別支援学校の児童生徒園児。

目標： “これからのグローバル社会をより良く生きる” に向けて、子どもを育成するうえで有効・系統的なカリキュラムの開発を進める。

グローバル人材育成カリキュラムの枠組みとして次のステップを提案する。

(出会う→広がる→つながる)×重ねる

## 2. 枠組みの〈出会う〉〈広がる〉〈つながる〉〈重ねる〉の各ステップの説明

〈出会う〉では、異なる言葉や文化に出会う体験を通して、関心を持ったり、意欲を高めたりする。

〈広がる〉では、異なる言葉や文化に対する知識や理解を広げ、技能を深化させる。

〈つながる〉では、異なる文化や人々となつながら、思考や判断を深め、表現したり行動したりする。

〈重ねる〉では、(出会う→広がる→つながる)のサイクルを繰り返し、その学習を積み重ねる。

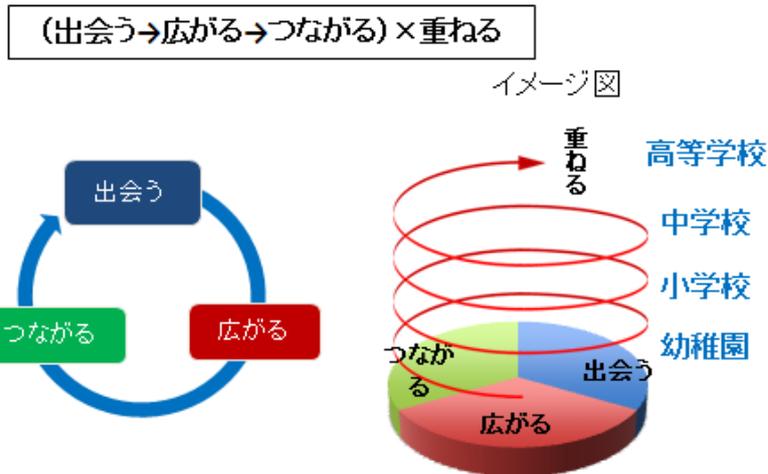


図1 グローバル人材育成のイメージ

図1における左図は、(出会う→広がる→つながる)をサイクルととらえている。右図は、〈重ねる〉について、そのサイクルが、スパイラル的に重なっているのをイメージ化したものである。サイクルを、子どもたちが幼稚園、小学校、中学校、高等学校、及び特別支援学校で重ねる(繰り返す)ことにより、発達段階に応じた系統的なカリキュラムになることを示す。

【出会う】…主に関心・意欲・態度(観点別評価項目)と関連する。

子どもは、自分とは異なる人や文化に出会う体験を通して、関心を持ったり、学習意欲を高めたりする。

新たな人や場所と出会い、何かをやる、社会に参加する。英語を用いて、日本とは異なる人や文化に出会う。出会う文化の中には、異なる国や民族性だけではなく、自文化や伝統文化を含み、さらに異年齢や障害の有無なども含まれる。出会う対象が、身近な人や集団から地域・日本・世界の国・グローバルな社会、さらにグローバルな課題へと発展する。

【広がる】…主に知識・理解・技能と関連する。

「出会い」を基にコミュニケーション力を高め、異なる文化に対する知識を広げ、理解を深め、技能を高める。自分の周り(ものや人々)がグローバルな社会とつながっていることについて、またグローバルな課題について理解が深まり、視野が広がる。メディアを活用して、異なる文化について広く情報を得る。英語の運用力の向上により、相互理解が深まり、コミュニケーションの対象や訪問先が広がる。

【つながる】…主に思考・判断・表現と関連する。

異なる文化や人々とつながり、思考や判断を深め、表現したり行動したりする。異文化の人々とつながり、遠くの文化や場所とつながる。共感的理解を基に、異なる文化や異なる人々と連帯感を持ってつながる。グローバルな社会や課題について批判的

に思考し、適切に判断して、課題解決について表現し行動しようとする。メディアを活用して、グローバルな課題について情報発信をする。英語を活用して、異なる文化の人々と仲間としてつながり、グローバルな課題に協働して取り組もうとする。

つながる対象のレベルは、発達段階に対応して発展する。人や文化や場所とのつながりを広げ深めながら、より高次のつながり方へと発展し、つながる対象との共感的理解や、連帯感を高める。同時に批判的思考力、課題発見・解決する力に結びつける。情報発信や英語の活用力を高めることにつなげる。

【重ねる】(出会う→広がる→つながる)のサイクルを繰り返し、学習を積み重ねる。

子どもの各発達段階において、(出会う→広がる→つながる)プロセスを、スパイラル的に重ねていくことにより、子ども自身がグローバル人材育成の目標に近づいていく。子どもは、各教科・総合学習・特別活動などにおいて並行的、および相互交流的に学習を行う(重なり合う)。こうした〈重ねる〉を繰り返して、平和で民主的な社会の形成に貢献でき、世界の人々と違いを認め合い、グローバルな課題の解決に対して協働できる人への成長をめざす。

### 3. 系統的な発達段階別学習目標の構造の説明

子どもの発達段階

幼稚園から高等学校までの子どもたちの発達段階を次の5段階に概略化して、カリキュラム案を考えるベースとする。各段階の特性として、まず《前基礎》の幼児期は、自分の周りの人との人間関係が始まる段階にある。次の《基礎前期》は学年では小学校1・2・3・4学年であり、この小学校低学年・中学年は、具体的なものを使った思考が中心である。周りの人との人間関係が広がる発達段階にあり、社会性が育ち、集団生活に適応できるようになる。次の《基礎後期》は学年では小学校5・6学年であり、この時期の児童は、抽象的思考が始まり、論理的・抽象的な思考力が発達し始める段階にある。抽象的な内容を理解し、論理的思考力ができはじめる。中学校は《充実期》と捉え、学年では中学校1・2・3学年であり、自我の形成が進み、自己主張が強くなる。抽象的・仮説的に思考する形式的操作が可能になってくる。中学生は前の基礎期で学んだことをベースに、思考力を高めていく段階にある。高等学校は《発展期》と捉え、学年では高等学校1・2・3学年であり、カリキュラム素案では最終段階に当たる。高校生は、論理的・抽象的思考力が発達し、個を自覚し、自他の区別を明確に意識し、自分の興味・関心に応じて自分なりの世界観を持つようになる発達段階にある。

表1 グローバル人材育成のための系統的な発達段階別学習目標

発達段階	学校段階	出会う	広がる	つながる
発展期	高等学校	重ねる	重ねる	グローバルな課題を共有し、協働して解決に向かおうとする
充実期	中学校	重ねる	グローバルな課題について考える	グローバル社会の一員としてつながる
基礎後期	小学校高学年	グローバルな課題について関心を持つ	グローバルな社会について考える	世界の文化や人々とつながりを深める
基礎前期	小学校中学年	グローバルな社会に関心を持つ	世界との関係を知る	異なる文化や人々とつながる
	小学校低学年	世界の国々と出会う	異なる言葉や文化を知る	
前基礎	幼稚園	異なる言葉や文化に出会う		

上記の子どもの発達段階の理解を基に、表1では、(出会う→広がる→つながる) × 重ねる の枠組みを用いて、グローバル人材育成の学習目標を整理した。幼稚園を前基礎、小学校を基礎前期と後期に分ける。中学校を充実期、高等学校を発展期と捉える。子どもの、認知力や理解力、また社会性の発達に照らして、グローバル人材育成のための学習目標が系統的に示されている。まず、幼稚園において子どもは、「異なる言葉や文化」に出会う。それが小学校低学年において、異なる言葉や文化を知ること広がる。そして小学校中学年では、異なる文化や人々とつながる、というように学習が進んでいく。次に、〈出会う〉を示すタテの列にあるように、出会う対象として、まず幼稚園では異なる言葉や文化、小学校低学年では世界の国々、小学校中学年ではグローバルな社会、小学校高学年ではグローバルな課題へと、出会う対象のレベルが上がる。中学校や高等学校では、小学校までに出会った学習を重ねていく。

表1において、幼稚園での「異なる言葉や文化に出会う」ことから始まり、最終的には、「グローバルな課題を共有し協働して解決に向かおうとする」高度な最終目標が設定されている。発達段階に応じて、〈出会う〉の学習目標が、順次右下の〈広がる〉、〈つながる〉へとスライドする関係を想定する。表1のように、グローバル人材育成のための学習について、(出会う→広がる→つながる) × 重ねる の学習目標を発達段階別に示すことで系統化する。

発達段階別にみたグローバル人材育成の特徴

《前基礎》：幼稚園

異なる言葉や文化に出会う。周りの子どもや大人との出会いが増え、異年齢の子どもと交流し、外国人と出会う。

《基礎前期》：小学校 1・2・3・4 学年

《小学校 1・2 学年》自分と異なる言葉や文化や外国の人と出会う。異なる言葉や文化を知る機会があり、異なる世界に触れる。

《小学校 3・4 学年》世界が一つにつながるというグローバルな社会に関心を持ち、世界の国との違いを知る。異なる言葉や文化の人々と出会い、共感的につながる。英語を使って外国の人と言葉を交わし、つながりを深めていく。

《基礎後期》小学校 5・6 学年

身近な場所で様々なグローバルな課題に出会う。グローバルな社会について教科などで学び、知識を得て、理解するようになる。メディアを使ったコミュニケーション力を高める。

《充実期》中学校 1・2・3 学年

異なる言葉や文化や外国の人々と出合いを重ね、またグローバルな社会についての知識を基に、グローバルな課題について考え、グローバルな社会の一員として世界とつながる。英語運用力を向上させて、グローバルな社会について意見を交流する。

《発展期》高等学校 1・2・3 学年

中学校までのグローバルな社会についての理解を基に、グローバルな課題に対して理解を深める。グローバルな課題を自分の課題でもあると共有し、その課題の解決に向けて貢献しようとする。グローバルな課題について意見を交流する力や、課題解決に活用できる英語力の形成をめざす。

#### 4. 「発展期」の高等学校段階における学習目標

グローバル人材育成カリキュラムにおいて、最終段階の「発展期」にある高校生の学習目標を検討しておくことは特に重要となる。

【出会う】グローバルに考える機会を与える文化や人に積極的に出会う。異文化体験者と交流し、異文化理解の困難性と克服方法について学ぶ。例えば、留学生、在日外国人、難民や戦争体験をした人々との出合いがある。

【広がる】グローバルな内容について知識を広げ理解を深める。より広い世界を意識し、違うものの見方や考え方をしている人がいるという多様性を常に意識することができる。日本の歴史や文化について深く理解する。グローバルな社会の課題、例えば多文化共生、国内外での平和形成、世界における人権尊重、地域紛争や戦争、世界における経済格差や最貧国の現状、持続可能な発展などを理解する。

【つながる】グローバルな課題について、自分の問題意識に従ってまとめて発表したり、意見交換したりする。多文化共生のあり方や平和の形成方法について思考し、発表する。学んだ内容を、ICT を活用して説明できる。日本の文化や歴史について英語

でプレゼンテーションする。ディスカッション、ディベート、協同学習などを活用して、異文化理解や合意形成の方法を習得する。複合的な課題について条件や本質を見極める問題発見力や、課題解決について考えることができる。人種、国籍、民族の違いを越えて平和のために協働できる。かつて言われた Think globally、 act locally できる人を越えて、Global innovator の人材形成につなげる。

【英語でつながる】世界の人々と交流し協力できるように英語運用能力を高める。社会的な話題や抽象度の高い内容について読んで内容をつかみ、普通の速さで話された英語を聴き取とれる。グローバル社会について自分の意見を英語で述べられる。グローバルな課題について意見を交流し、発信できる。

## 5. 各附属学校園でのカリキュラム開発（平成 28 年度）についての提案

グローバル人材育成に向けて、各附属学校園での授業実践づくりと、公開授業の実施を、目的を持って効率的に結びつけるためには、そのための開発指針を提示する必要がある。以下に、単元や授業の作り方を提案する。

単元や授業の作り方

### 【単元目標・単元計画】

単元目標や単元計画にグローバル人材育成に関連する記述を入れる。

### 【固有（特徴ある）の学習目標の作成】の留意点 b

- ①「グローバル人材育成カリキュラム」の学習目標（めあて・ねらい）を確認する。
- ②指導案に「教科等」と、「グローバル人材育成」の学習目標を並記する。
- ③グローバル人材育成に関わる重要概念（キーワード）を用いて、単元や授業の目標を明文化する。

### 【題材の選択】留意点

- ①教育内容（教材、題材）にグローバル社会に関する事項を入れる。
- ②グローバルな題材を提示し、課題発見や課題解決についても発達段階的に扱う。
- ③教科や総合学習、特別活動などで扱うグローバルな題材のつながりを視野に入れる。

### 【教育形態の選択】いかなる教育形態で、どのようなスキルを身につけさせるのか。

- ①教育方法に、グローバル人材に必要な《汎用的スキル》を育成する手法を活用する。
- ②アクティブ・ラーニング（協同学習、参加型手法、プレゼンテーションなど）を活用する。

### 【系統性をもたす】

- ①単元または教科・総合学習・特別活動に入れたグローバル人材育成の学習目標

を相互に関連づける。

②（教科、学年、学校）カリキュラムの中に、グローバル人材育成に沿った学習目標を段階的に設定する。

③学校内のグローバル人材育成のカリキュラムを、連結する学校種のグローバル人材育成との連携（関係）を明示して連携を図る。

## おわりに

平成 28 年度は、平成 26・27 年度の研究成果と教育実践とを発展させていく。平成 27 年度の公開授業の実践を踏まえ、グローバル人材育成に向けてさらに固有の授業実践を積み上げていくことが可能である。ゆえに、各教員が行う教育研究や授業実践の集合体として、カリキュラム開発を進めていく。平成 27 年度に多くの公開授業を実施したので、平成 28 年度はそうした授業実践を上記に提案した「単元や授業の作り方」に基づいてカリキュラム開発を進めていく。

他方で、平成 28 年度の公開授業と同時並行的に、グローバル人材育成の学習内容（コンテンツ）のマトリックス（表）を作成する。コンテンツベースでカリキュラムを整理して提示することも必要とされている。

もう一つの方法として、グローバル人材育成に関連する《汎用的スキル》を形成する方法がある。ただし何がグローバル人材育成に必要な汎用的スキルかの吟味と検討が必要であろう。そのためには各附属学校園の教員が、グローバル人材育成に関連する重要概念（キーワード）を整理し、重要度を決めておかななくてはならない。

### キーワードの例（2015 年度の附属学校園での公開授業の授業者より）

#### ①多文化共生（コンテンツベースに近い）

多文化共生、文化理解、共に生きる視点、文化の継承、国際交流、伝統文化、伝統的な言語文化、郷土の音楽、やりとりを楽しむ、プロとの出会い

#### ②汎用的能力

コミュニケーション力、課題解決、体感的理解、思考力、創意工夫、協働、共同学習、リーダーシップ、ICT

#### ③関連する資質・能力

学習意欲、チームワーク、内省的な思考、主体性、議論、プロ、リアリティ、臨床こくご学

## IV. 附属学校園における平成27年度授業実践の 取り組みと平成28年度授業開発にむけて

### ①附属幼稚園における取り組み

#### 1. 日本の文化に“出会う”

お正月の雰囲気の中で、3学期始業式（平成28年1月8日）の後、琴・三味線の演奏会を行った。演奏者は、昨年度もこの時期に日本文化指導講師として来ていただいた林美恵子さん、林美音子さん親子。海外でも活躍されていて、附属桃山小学校でお琴の講師をしている方である。演奏のあと、年長児は実際にお琴に触れさせてもらい、どのようにして音を奏でているのかを教えてもらった。日本の楽器、日本の文化芸能に親しみ、興味をもつ経験となった。

（写真）



#### 2. 自分とは違う国の人や、異なる言葉、生活、文化に“出会う”

園生活の中で子どもたちは、自分とは違う相手の思いや考えに出会い、気づき、心動かしながら、人とのかかわりを広げ深めていっている。教師は、互いを認め合える人間関係が育っていくよう援助している。自分とは違う相手とは、同年齢の友だちであり、異年齢児であり、小学校・中学校・特別支援学校のお兄さんお姉さんであり、園で育てている生き物であり、そして、外国人であると考えた。そこで、今年度9月より外国人非常勤講師の活用を取り入れることにした。附属桃山小学校・中学校の外国人講師でもある。毎月1回、人間関係も広がり言語や思考面での育ちが見られる年長児を対象として出会いの機会をもつことにした。また、同じ外国人と続けて出会うことで、より親しみをもってかかわろうとしたり、親しみをもった人の生活や言葉、文化を進んで知ろうとしたりできることを大切にしたいと考えた。そして、日本語が話せることで、子どもたちが積極的に自分で尋ねたり伝えたり、知ったりすることが出来ると考えた。

毎月（9月・10月・11月・12月・1月・3月）の“出会い”の様子を以下に示す。

(1) 平成27年9月30日



- ・地球儀を見て、ジョン先生の国を探す
- ・ジョン先生の膝に座ったり、積極的に話をしに行ったりする。「ぼくのお母さん、外国の国、行かあったことある」「アメリカって知ってる？」
- ・ジョン先生の腕時計が、きらきら光っていることや、文字盤のローマ数字に関心をもって見る
- ・髪が気になって触る
- ・肌の色や手のひらの色に関心をもって「なんで？」と尋ねる
- ・自分たちが楽しんでいる“しっぽ取り”の遊びを一緒にする

(2) 平成27年10月21日



- ・法被を着て、“よさこいソーラン”を踊り、ジョン先生に見てもらおう
- ・ジョン先生の国、ブルキナファソの踊り“ワルバ”を踊ってもらい、まねと一緒に踊る
- ・自分たちが楽しんでいる“綱引き”にジョン先生も加わってもらい、共に喜んだり悔しがったりする。
- ・“リレー”にも加わってもらい、ジョン先生を応援する

(3) 平成27年11月4日



- ・前日にクラスで話し合っておいた、英語ではどのように言うのか知りたい身近なものを写真で見せながら尋ね、ジョン先生の口元を見て一緒に発音することを楽しむ「カメは？」ジョン先生「turtle」「聞いたことある」
- ・「3びきのこぶた」の絵本（英語版）を読んでもらう「スロー？スローて聞えた」

ジョン先生「ああ、これは straw、 わらという意味です」

(4) 平成27年12月2日



- ・「はらぺこあおむし」の絵本（英語版）を読んでもらう
- ・一緒に縄跳びをして遊ぶ

(5) 平成28年1月20日（日案参照）

(6) 平成28年3月9日



- ・「ジョン先生！」と来園を喜び、遊んでいた竹馬に乗って、背比べをする
- ・合奏「パレード」を聴いてもらう。「すばらしい」と言って拍手をもらい、喜ぶ
- ・「ジョン先生も一緒にしよう」と誘い、トライアングルの持ち方、ならし方を子どもたちが教える



- ・一緒に合奏をしたことを喜び合う
- ・幼稚園でジョン先生に会うのは今日が最後であることを担任が伝える。また、附属桃山小学校では英語の先生として出会えることも伝え、「さよなら」「顔、覚えていてね」と言葉を交わす

#### (7) コミュニケーションの力を育む遊具を“出会う”

日本文化指導教材としてスクーター8台を購入した。

スクーターは、運動能力を養うだけでなく、コミュニケーションの力を育むものである。乗りたい人数が台数よりも多いと、取り合うなどのトラブルがおこる。相手の気持ちや考えに気づき、交渉したり、我慢したり、譲ったり、順番やルールを決めたりしながら、みんなで楽しんで遊べるようにコミュニケーションをとることが必要となる。従って、グローバル人材育成のもととなる力を育む遊具であると考えた。

#### (8) 海外の幼稚園の教育に教員が“出会う”

ここでは、台湾調査の中の台北大学附属幼稚園参観の内容及び感想を述べる。

平成28年1月11日、台北大学附属幼稚園を、附属学校園の他の教員と共に本園教員2名が訪れ、幼稚園の保育や環境を参観した。遊びの過程がわかるように、子どもの作品のすぐ近くには遊んでいる様子の写真が添えられていた。また、各遊びの場がはっきりとしており、それぞれの遊びの場が保障されているようでもあった。しかし、個人の遊びの過程はよくわかるが、友だちと協同する活動の軌跡は見られにくいように感じた。幼稚園の教員たちは、にこやかで穏やかな印象があり、日本の教員と雰囲気は似ているように感じた。教員のもつベースとなる資質としては共通しているものがあるのではないかと思った。後の研究主任とのフリートークでは、両親の共働きによる保育時間の長さについて話が及んだ。その中で教員が多忙で疲弊しているという話があった。日本と共通の課題がある中、教員のもつ感覚として通じるものがあり、親近感に似た感情が沸いた。この感覚の共有はボーダレスなものであり、教員同士のグローバルな連携の広がりや可能性を感じた。

#### (9) 平成28年度にむけて

- ・これまでより日本の伝統行事を園生活の中で大切に取り入れているが、それと共に、琴や太鼓などの日本の楽器にも関心がもてるような機会を増やしていきたい。
- ・外国人非常勤講師の活用は今年度9月からであったが、28年度は4月から取り入れることが出来るよう計画したい。また、今年度の子どもの姿を受けて、どのような“出会い”をしていくことが必要であるかを検討し、来年度の年間計画を考えていく。
- ・海外からの参観・研修を積極的に受け入れると共に、引き続き教員の海外研修

の機会をつくっていききたい。

## ②附属桃山小学校における取り組み

### 2-1. 今年度の研究について

本校の学校教育目標は、「自分の考えをしっかりと持ち、共に学び合う子ども」とし、今年度の研究主題を「言葉や文化の違いを認め合い、さまざまな人たちとすすんで関わりあえる子の育成」とした。そして、研究の重点をグローバル人材育成プログラムの作成とし、各学年の研究目標（めざす子ども像）を以下のように設定した。

**高学年**：自他国の文化の違いを理解し、その多様性を認め合いながら、さまざまな人とすすんで関わりあう

**中学年**：自国の文化についての知識を深めたり、文化背景の異なる人と関わったりする中で、言語や文化の多様性を知る

**低学年**：自国の文化を体験したり、異文化の人と関わったりする中で、文化や言語について興味を持つ

以下、開発したグローバル人材育成プログラムである。

### 2-2. 第1学年 音楽

- (1) 教科名 音楽
- (2) 授業テーマ 多文化共生
- (3) プログラム名 祇園祭の音色を感じてわらべうたを歌おう
- (4) プログラムのねらい

郷土の音楽である祇園囃子の鉦の音色について、わらべうたをとおして学習することで、郷土の文化に関心をもつ

- (5) 教材とグローバル人材育成の接点

本校では、郷土の音楽を大切に指導している。とくに子どもたちにとっての郷土の音楽である京のわらべうたを教材として取り上げるようにしている。それは言うまでもなく、わらべうたが子どもの文化そのものであり、もっとも基本的な日本音楽の特徴をもつものだからである。

京の町中に住む子どもたちにとって、祇園祭は日常的な風景であり、本教材のわらべうた《こんこんちきちん》もそんな祇園祭に関わる子どもの遊び歌である。わらべうたで遊んだ後、歌詞に注目し、「こんこんちきちん」は何の音なのか考え、祇園囃子を聴き、お祭りの画像をみたりお囃子を聴いたりしながら、お祭りの雰囲気を楽しむ、歌唱表現に生かすことを目指す。京の風景である祇園祭について楽しみながら学習できる教材である。

本校では、祇園祭を核として郷土の音楽のカリキュラムを開発し、実践している。低学年ではわらべうたを通して、郷土の文化である祇園祭に親しみを持つ。中学年では祇園祭や全国各地のお祭りを調べ交流する学習を通して、祭りの文化的背景や音楽との関わりについて学ぶ。高学年は祇園囃子を自分たちで演奏したり鑑賞したりする学習をとおして、郷土の音楽への親しみを持つことをねらいとしている。さらに、はやしことばアンサンブルや祇園囃子の音楽づくりの学習では、その伝統を再現するだけにとどまらず、新たに自分たちの音楽を創り出す。このように、郷土の音楽をさまざまな視点から教材化し、実践を重ねていくことによって、子どもたちがより郷土の音楽を身近な自分の音楽として捉えられるようになるといえるだろう。

#### (6) 指導計画（常時活動＋1時間）

常時活動 「こんこんちきちん」を歌って遊ぶ

第1時 祇園祭について知り、鉦の音色を意識してお祭りの雰囲気想像しながら歌う。（本時）

#### (7) 本時について

- ・ 本時の目標

祇園囃子の鉦の音色について知覚感受し、鉦の音色を意識して歌う。

- ・ 本時の展開

- ・ 評価

鉦の音色を意識し、祇園祭の様子を思い浮かべながら歌っている。

## 2-3. 第2学年 道徳

(1) 教科名 道徳

(2) 授業テーマ 多文化共生

(3) プログラム名 ふるさとに親しみをもって

(4) プログラムのねらい

ALT のふるさとにあるものとそれらに対する思いを通じて、自分が生まれ育ったところにさらに関心を持つ。

(5) 教材とグローバル人材育成の接点

このプログラムは、「小学校学習指導要領解説 特別な教科 道徳編 第3章 道徳科の内容 第2節 内容項目の指導の観点 C 主として集団や社会との関わりに関すること 17 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度〔第1学年及び第2学年〕我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着を持つこと」に基づいている。今回の授業は、ALT のふるさとにあるものとそれらに対する思いを通じて、自分が生まれ育

ったところにさらに関心を持つことを主なねらいとしている。小学2年生の段階では、自分が生まれ育ったところに関心を持っていることを自覚することは難しい。なぜなら、小学2年生の場合、今生活をしているところが生まれ育ったところであることが多いからである。よくあるのが、「自分が生まれ育ったところを離れて、初めて生まれ育ったところのことがよくわかった。」といった場合である。そこで、児童が自分の生まれ育ったところにさらに関心を持てるようになるためには、比較対象となるものが必要だと考え、どの児童にとっても身近であり、異文化の中で育ってきたALTのふるさとを紹介することにした。その時に、ALTのふるさとにあるものやそれらに対する思いを伝え、児童が生まれ育ったところにさらに関心を持つきっかけにしていきたい。このように、道徳では低学年で自分の身近にある文化や生活に親しみをもち、中学年では身近なところから視野を広げ、我が国の伝統や文化に関心を持ち、高学年では我が国の国土や産業、歴史の学習を通して、受け継がれている我が国の伝統や文化を尊重し、さらに発展させていこうとする態度を育てていく。

他教科との関連では、小学2年生の生活科で地域に親しみや愛着を持つために、いわゆる「まちたんけん」をおこなう。これらの学習は、小学3年生から始まる社会科の学習にもつながる。そして、音楽科では、子ども達の遊びの中で歌われている「わらべうた」などを取り上げることで、我が国の伝統文化に触れる機会がある。

また、グローバル人材育成の観点からは、ALTのふるさとを紹介することで、児童が異文化を知ることができたり、異文化の中で育っても共通する思いがあることを知ったりすることができる。そして、異文化に興味を持ったり、異文化を身近に感じたりすることができる。そして、「国際理解、国際親善」に関する指導と相まって、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚をもって、国際親善に努めようとする態度にもつながっていく。

#### (6) 指導計画 (全2時間)

第1時 ALTのふるさとにあるものとそれらに対する思いに興味を持つ。

第2時 自分の身近にある景色や遊び、お祭りなどを紹介しあい、自分が生まれ育ったところにさらに関心を持つ。

#### (7) 本時について

- ・ 本時の目標 ALTのふるさとにあるものとそれらに対する思いに興味を持つ。
- ・ 本時の展開
- ・ 評価

ALTのふるさとにあるものとそれらに対する思いに興味を持てたか。

## 2-4. 第3学年 音楽

- (1) 教科名 音楽
- (2) 授業テーマ 多文化共生
- (3) プログラム名 韓国の音楽に親しもう
- (4) プログラムのねらい

韓国のわらべうたで遊んだり、韓国の打楽器を演奏したりすることを通して、韓国の音楽文化に親しむ

- (5) 教材とグローバル人材育成の接点

本校音楽科では、我が国や郷土の音楽の学びを大切に指導している。それは自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身につけてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができるからである。子どもたちはこれまで、日本のわらべうたに親しんできた。3年生では、世界の子どもたちのわらべうたを学習している。本単元では、韓国のわらべうた「大門遊び」を韓国語で歌いながら遊ぶ。韓国の音楽のリズムには、1拍を三分割しているという特徴がある。これは騎馬民族にルーツがあるとされており、農耕民族である日本の拍感とは違うものである。本単元では遊びを通して、またチャンゴのリズム演奏を通して、韓国のリズムを感じ取り、そのおもしろさを味わうことによって韓国の音楽文化に親しませたい。

- (6) 指導計画（全2時間）

第1時 韓国のわらべうた「大門遊び」を韓国語で歌って遊ぶ。

チャンゴのリズムに合わせて足踏みをする。

第2時 チャンゴのリズムを演奏し、その良さやおもしろさについて考える。

- (7) 本時について

- ・本時の目標

韓国の音楽のよさやおもしろさについて考え、音楽表現に生かす。

- ・本時の展開

- ・評価

韓国の音楽のよさやおもしろさに気づき音楽表現に生かすことができたか。

## 2-5. 第3学年 国語科

- (1) 教科名 国語
- (2) 授業テーマ 英語 ～日本の伝統文化「習字」を通して～
- (3) プログラム名 習字の書き方を伝えよう
- (4) プログラムのねらい

習字の書き方を教える活動を通して、伝統文化への親しみを持つと共に、ベレア校の子どもたちとのコミュニケーションを楽しむ。

#### (5) 教材とグローバル人材育成の接点

京都教育大学附属桃山小学校では、毎年、オーストラリアのベレア校と交流を行っており、今年度は、ベレア校の子どもたちが本校に来校する。3年生の児童たちは、今年度より習字を学校にて本格的に学び始めており、意欲的に集中して学習に取り組む姿が見られている。

本プログラムでは、日本の伝統文化である「習字」について、その道具の名称や書き方等を英語でベレア校の子どもたちと交流しながら、共に習字を楽しむことをめあてとしている。そうした中で、外国の方とのコミュニケーションに慣れ親しむことができるようにしたい。そして、来年度以降のさらなる交流へつなげていきたいと考える。

また、日本の伝統文化である「習字」についても、ベレア校の子どもたちの感想を聞くことを通して、その伝統性について、改めて目を向ける機会としたいと考えている。

#### (6) 指導計画（全2時間）

第1時 習字の書き方や、用具の名称について知り、ベレアの人たちに伝えたいことを考える。

第2時 習字の書き方を教える活動を通して、伝統文化への親しみを持つと共に、ベレアの人たちとのコミュニケーションを楽しむ。

#### (7) 本時について

##### ・本時の目標

習字の書き方を伝える活動を通して、伝統文化への親しみを持つと共に、コミュニケーションを楽しむ。

##### ・本時の展開

・評価 ベレア校の子どもたちに習字の書き方を伝えることができたか。

## 2-6. 第4学年 メディア・コミュニケーション科

(1) 教科名 メディア・コミュニケーション科

(2) 授業テーマ コミュニケーション

(3) プログラム名 めざせプレゼンテーションの達人

(4) プログラムのねらい

プレゼンテーションの特性を知り、聞き手に伝わるプレゼンテーションをする。

(5) 教材とグローバル人材育成の接点

#### (6) メディア・コミュニケーション科とグローバル人材育成の接点

メディア・コミュニケーション科は、メディアの特性について考え、それぞれのメディアを効果的に活用することができる力を育成すると共に、情報を主体的に活用し課題を解決していく力を育成していくことを目標とする教科である。本教科とグローバル人材を育成する上での接点を考えるとすれば、本教科の学習のほぼ全てがグローバル人材の育成につながる学習活動であるといえる。本教科の軸である「メディアの特性を理解する」という点に関しては、メディアとは人と人との媒介するものである。我々が日本にいながらグローバルな視点で世界を見渡す上で、メディアの存在は必要不可欠なものである。コンピュータを初めとするICTを効果的に活用し、日本にいながら他国の人々と情報を交換しあうことは、もはや珍しいことではない。児童一人一人に場面に応じて必要な情報手段を選択させ、それらを効果的に活用する力を育成することがグローバル人材を育成することにつながると考える。また、2つめの軸である「情報を主体的に活用する」という点においても、グローバル人材の育成に深く関係すると考えられる。現代社会では、様々な面での情報化が進み、大量の情報がいつでもどこでも手に入れることができるようになった。そのような状況の中で、社会で求められる人材の能力として情報の量が問われるのではなく、情報をどのように活用することができるのかということに焦点が当てられるようになってきている。情報の量が増えたということは、日本だけの情報ではなく海外の情報も容易に手に入れることができるようになったということである。このような点から、これから生きる子どもたちには、海外から発信される情報を主体的に活用できる力をつけていく必要がある。小学校段階では、様々な情報から必要な情報を選択、整理し、それらをまとめ発信していく力を育成していくことが、今後、海外の情報を主体的に活用していく力につながると考える。以上のような視点から、メディア・コミュニケーション科はグローバル人材を育成する上で非常に関連の深い教科であると考えられる。

#### (7) 本単元のグローバル人材育成の接点

「めざせプレゼンテーションの達人」の単元は、3年生の「かみしばい」の単元をうけた単元である。本単元では、プレゼンテーションソフトを活用し、3年生に自らの体験を伝えるためのプレゼンテーション資料を作成する。本単元とグローバル人材育成の接点は「プレゼンテーションソフトでプレゼンテーションの資料を作成する」こと「作成した資料を提示しながらプレゼンテーションを行う」ことの2点である。ここでは、プレゼンテーションソフトという一つのメディアの特性を知り、それを活用することで、自分の伝えたい情報を効果的に相手に伝えることができるということを学ぶ。また、資料をどのように作れば伝わりやすいのか、資料を提示

しながら話をする際はどのような伝え方で伝えればよいのかということについても学ぶ。このようなメディアの特性を知るといことと、メディアを活用しながら効果的に情報を伝えるということがグローバル人材を育成する上で大きな接点になると考える。

(8) 指導計画 (全10時間)

- プレゼンテーションをするときに様々な方法で行うことを知る。
- 伝える相手によって伝え方が異なることに気づく。
- 3年生に農家宿泊体験のことを伝えるにはどのようなプレゼンテーションの資料を作れば良いかを考える。
- 3年生に農家宿泊体験のことを伝えるためのプレゼンテーションの資料を作る。
- 作成したプレゼンテーションの資料をクラスの友達と見せ合い、改善点を話し合う。
- 改善点を修正する。
- 3年生に農家宿泊体験についてのプレゼンテーションをする。(本時)
- プレゼンテーションについて考える。

(9) 本時について

- ・ 本時の目標
  - 4年生：プレゼンテーションの特性を知り、聞き手に伝わるプレゼンテーションをする。
  - 3年生：4年生のプレゼンテーションに興味をもって聞き、農家宿泊体験について理解する。
- ・ 本時の展開
- ・ 評価
  - 4年生：プレゼンテーションの特性を知り、聞き手に伝わるプレゼンテーションができたか。
  - 3年生：プレゼンテーションに興味をもって聞き、農家宿泊体験について理解することができたか。

2-7. 第4学年 メディア・コミュニケーション科

- (1) 教科名                   メディア・コミュニケーション科
- (2) 授業テーマ           コミュニケーション
- (3) プログラム名       めざせプレゼンテーションの達人
- (4) プログラムのねらい

プレゼンテーションの特性を知り、聞き手に伝わるプレゼンテーションをする。

#### (5) メディア・コミュニケーション科とグローバル人材育成の接点

メディア・コミュニケーション科は、メディアの特性について考え、それぞれのメディアを効果的に活用することができる力を育成すると共に、情報を主体的に活用し課題を解決していく力を育成していくことを目標とする教科である。本教科とグローバル人材を育成する上での接点を考えるとすれば、本教科の学習のほぼ全てがグローバル人材の育成につながる学習活動であるといえる。本教科の軸である「メディアの特性を理解する」という点に関しては、メディアとは人と人との媒介するものである。我々が日本にしながらグローバルな視点で世界を見渡す上で、メディアの存在は必要不可欠なものである。コンピュータを初めとするICTを効果的に活用し、他国の人々と情報を交換しあうことは、もはや珍しいことではない。児童一人一人に場面に応じて必要な情報手段を選択させ、それらを効果的に活用する力を育成することがグローバル人材を育成することにつながると考える。また、2つめの軸である「情報を主体的に活用する」という点においても、グローバル人材の育成に深く関係すると考えられる。現代社会では、様々な面での情報化が進み、大量の情報がいつでもどこでも手に入れることができるようになった。そのような状況の中で、社会で求められる人材の能力として情報の量が問われるのではなく、情報をどのように活用することができるのかということに焦点が当てられるようになってきている。情報の量が増えたということは、日本だけの情報ではなく国内外の情報も容易に手に入れることができるようになったということである。このような点から、これからを生きる子どもたちには、海外から発信される情報を主体的に活用できる力をつけていく必要がある。小学校段階では、様々な情報から必要な情報を選択、整理し、それらをまとめ発信していく力を育成していくことが、今後、海外の情報を主体的に活用していく力につながると考える。以上のような視点から、メディア・コミュニケーション科はグローバル人材を育成する上で非常に関連の深い教科であると考えられる。

#### (6) 本単元のグローバル人材育成の接点

「めざせプレゼンテーションの達人」の単元は、3年生の「かみしばい」の単元をうけた単元である。本単元では、プレゼンテーションソフトを活用し、3年生に自らの体験を伝えるためのプレゼンテーション資料を作成する。本単元とグローバル人材育成の接点は「プレゼンテーションソフトでプレゼンテーションの資料を作成する」こと「作成した資料を提示しながらプレゼンテーションを行う」ことの2点である。ここでは、プレゼンテーションソフトという一つのメディアの特性を知り、

それを活用することで、情報を整理し、自分の伝えたい情報を効果的に相手に伝えることができるということを学ぶ。また、資料をどのように作れば伝わりやすいのか、資料を提示しながら話をする際はどのような伝え方で伝えればよいのかということについても学ぶ。このようなメディアの特性を知るとのことと、メディアを活用しながら効果的に情報を伝えるということがグローバル人材を育成する上で大きな接点になると考える。

#### (7) 指導計画（全10時間）

- プレゼンテーションをするときに様々な方法で行うことを知る。
- 伝える相手によって伝え方が異なることに気づく。
- 3年生に農家宿泊体験のことを伝えるにはどのようなプレゼンテーションの資料を作れば良いかを考える。
- 3年生に農家宿泊体験のことを伝えるためのプレゼンテーションの資料を作る。
- 作成したプレゼンテーションの資料をクラスの友達と見せ合い、改善点を話し合う。
- 改善点を修正する。
- 3年生に農家宿泊体験についてのプレゼンテーションをする。（本時）
- プレゼンテーションについて考える。

#### (8) 本時について

- ・ 本時の目標
  - ・ 4年生：プレゼンテーションの特性を知り、聞き手に伝わるプレゼンテーションをする。
  - 3年生：4年生のプレゼンテーションに興味をもって聞き、農家宿泊体験について理解する。
- ・ 本時の展開
- ・ 評価
  - ・ 4年生：プレゼンテーションの特性を知り、聞き手に伝わるプレゼンテーションができたか。
  - 3年生：プレゼンテーションに興味をもって聞き、農家宿泊体験について理解することができたか。

## 2-8. 第5学年 音楽科

- (1) 教科名                      音楽

- (2) 授業テーマ 多文化共生
- (3) プログラム名 祇園囃子を演奏しよう
- (4) プログラムのねらい

郷土の音楽である祇園囃子を演奏することをとおして、郷土の音楽への親しみを持つ

- (5) 教材とグローバル人材育成の接点

音楽は、人々の文化そのものである。音楽をとおして、子ども達は、世界の様々な文化と出会うことができる。世界の様々な音楽と出会い学んでいく上で大切な素地は、自国の音楽文化の学びである。自国の音楽文化と他国の音楽文化を比較しながら学んでいくことで、より両者の特性の理解につながり、ひいては他文化共生へとつながっていくのである。

本校音楽科では、郷土の音楽そして伝統音楽の学びを大切にしている。郷土の音楽をさまざまな視点から教材化し、実践を重ねていくことによって、子どもたちがより郷土の音楽を身近な自分の音楽として捉えられるようになると考え、祇園祭を核とした郷土の音楽のカリキュラムを作成した。本校音楽科における祇園祭を核としたカリキュラムを作成し、以下の通りまとめた。

学年	単元名	教材	指導内容	活動
低学年	祇園祭の音を感じて わらべうたを歌おう	わらべうた 「こんこんちきちん」	歌と鉦の重なり	歌唱
	声の上がり下がり意識して 「売り声」を歌おう	わらべうた 「ろうそく売りのうた」	声の上がり下がり	歌唱
中学年	日本の祭りに親しもう	祭り	音楽と祭りのかわり	鑑賞
高学年	祇園囃子の音色を感じて 囃子を演奏しよう	祇園囃子「御影」	音色	器楽
	祇園祭のはやしことば アンサンブルをつくろう	祇園祭のはやしことば・ かけ声	テクスチャ	音楽づくり
	祇園囃子を味わって聴こう	祇園囃子 (渡り囃子・戻り囃子)	リズム	鑑賞
	祇園囃子をつくろう	鉦のリズムパターン	変化	音楽づくり

低学年ではわらべうたを通して、郷土の文化である祇園祭に親しみを持つ。中学年では祇園祭や全国各地のお祭りを調べ交流する学習を通して、祭りの文化的背景や音楽との関わりについて学ぶ。本単元では祇園囃子を自分たちで演奏することをとおして、郷土の音楽への親しみを持つことをねらいとしている。さらに今後、はやしこと

ばアンサンブルや祇園囃子の音楽づくりの学習では、その伝統を再現するだけにとどまらず、新たに自分たちの音楽を創り出す。

(6) 指導計画 (全3時間)

第1時 世界文化遺産である祇園祭の文化的背景について知る

『御影』の笛の旋律を口唱歌し演奏する

第2時 鉦のリズムを口唱歌して演奏し、笛と鉦を合わせて合奏する

第3時 太鼓の口唱歌を歌って演奏し、笛と太鼓と鉦を合わせて合奏する (本時)  
祇園囃子に込められた人々の願いや思いに気づき、囃子のよさやおもしろさについて考える

(7) 本時について

・ 本時の目標

祇園囃子のよさやおもしろさに気づき、祇園囃子について自分なりの価値付けをする。

・ 本時の展開

・ 評価

祇園囃子のよさやおもしろさに気づき、祇園囃子について自分なりの言葉でまとめている。

## 2-9. 第6学年 音楽科

(1) 教科名 音楽

(2) 授業テーマ 多文化共生

(3) プログラム名 祇園囃子をつくろう

(4) プログラムのねらい

郷土の音楽である祇園囃子を創作することをとおして、郷土の音楽を自分にとって身近な音楽と捉える

(5) 教材とグローバル人材育成の接点

本校音楽科では、郷土の音楽をさまざまな視点から教材化し、実践を重ねていくことによって、子どもたちがより郷土の音楽を身近な自分の音楽として捉えられるようになると考え、祇園祭を核とした郷土の音楽のカリキュラムを作成し、系統立てて指導している。

低学年ではわらべうたを通して、郷土の文化である祇園祭に親しみを持つ。中学年では祇園祭や全国各地のお祭りを調べ交流する学習を通して、祭りの文化的背景や音楽との関わりについて学ぶ。また、祇園囃子を演奏したり鑑賞したりすることをおして、郷土の音楽への親しみを持つことをねらいとしている。はやしことば

アンサンブルや、本単元の祇園囃子の音楽づくりの学習では、その伝統を再現するだけにとどまらず、新たに自分たちの音楽を創り出す。

本單元では、祇園囃子の特性である鉦のリズムパターンを中心に、囃子づくりを行う。樋口（1991）<sup>1</sup>は、「…音は風景を描き、その風景や空間のシンボルとなることが多い。とくに祇園祭では鉦の音がシンボルとなり、コンチキチンと聴く言葉で音の風景を描く。」<sup>2</sup>と、京の街の風景のシンボルとして鉦を位置づけている。鉦の音色そのものが、郷土の文化理解へといざなっていくのである。囃子は伝承されるとともに、その担い手によって新たに創造されてきた。祇園祭の南観音山保存会に保存されている譜<sup>3</sup>に、大正期の譜にはなかった曲が、昭和の譜には存在しているという事実からみても、創造する姿こそ、伝承の担い手であると考え<sup>4</sup>。

#### （6）指導計画（全4時間）

- 第1時 渡り囃子と戻り囃子を鑑賞し、その特性に気づく。  
鉦のリズムに注目し、リズムパターンを口唱歌する。
- 第2時 巡行の道順に沿って鉦のリズムパターンを組み合わせて囃子をつくる
- 第3時 いくつかのグループの囃子を聴いて、変化について知覚・感受し、自分たちの囃子を工夫する
- 第4時 つくった祇園囃子を発表し、紹介文を書く

#### （7）本時について

- ・本時の目標  
巡行のそれぞれの場面を思い浮かべながら、巡行の道行きに沿って囃子をつくる。
- ・本時の展開
- ・評価  
巡行のそれぞれの場面を思い浮かべながら、囃子をつくることができたか。

### 3. 今年度の研究の成果と課題

#### 3-1. 今年度公開したプログラム

		キーワード
英語	第4学年 英語 第6学年 英語「学校案内をしよう」（ベレア	英語理解

<sup>1</sup> 樋口昭『京の音』「山町鉦町 特別記念号」祇園祭山鉦連合会，1991，132-134頁

<sup>2</sup> 同上書，132頁

<sup>3</sup> 百足屋町史編纂委員会「祇園祭り南観音山の百足屋町今むかし百足屋町史巻2」南観音山の百足屋町史刊行会，2005，202-259頁参照

<sup>4</sup> 古来、鉦の譜面しか伝わっていないため、現在囃されていない曲もある。

	校交流) 第4学年 英語(体育)「ソフトバレーボールをしよう」(ベレア校交流) 第2学年 英語(音楽)「和太鼓と一緒に演奏しよう」(ベレア校交流) 第3学年 英語(国語)「習字の書き方を伝えよう」 全学年 英語 「イングリッシュフェスティバル」	自国の文化紹介   英語活用
多文化共生	第1学年 音楽「祇園祭の音色を感じてわらべうたを歌おう」 第2学年 道徳「ふるさとに親しみをもって」 第3学年 国語「日本の昔話、外国の昔話」 第3学年 音楽「韓国の音楽に親しもう」 第4学年 音楽「四つ太鼓を演奏しよう」 第5学年 音楽「祇園囃子を演奏しよう」 第6学年 音楽「祇園囃子をつくろう」	自国の文化理解  郷土への親しみ 他国や他の地域の文化に触れる
コミュニケーション	第4学年 メディア・コミュニケーション 「めざせ！プレゼンテーションの達人」	情報活用能力 ICT機器活用

本年度は、英語、多文化共生、コミュニケーションそれぞれの視点にそったプログラムを開発し実践することができた。その内容は、自分の経験に基づいた自国の文化理解を基盤とし、他の地域や国々の文化に触れ、学び、さらにそれらを英語を活用して伝えるというものである。教育課程に位置づいている学習内容を、グローバル人材育成の視点で整理することによって、教科の特性が生かされ、子どもたちの学びの「自国の文化や他国の文化について学ぶ⇒深める⇒英語やICT機器を活用して発信する(活用する)⇒学ぶ」といったつながりが明らかになった。

### 3-2. 次年度に向けて

今年度は、授業で取り扱う教材をグローバル人材育成の視点で整理した。次年度は、

教科での学びにの系統性に加え、グローバル人材育成の縦のつながりをさらに整理し、教育課程におけるそれぞれの関係性を明らかにしていきたい。

### ③附属桃山中学校における取り組み

#### 1. 社会科（溝部卓司）

- (1) 日時：平成 27 年 6 月 29 日 6 限目
- (2) 対象：2 年 1 組
- (3) 単元名：（2 年生）世界の人口分布と変化
- (4) 授業のねらい

世界人口は 70 億人を数え、その数と増え方から人口爆発と言われている。教科書では、アジア・アフリカ諸国の増え方が著しいという事実を伝えているが、その地域の人口増加の背景の押さえが弱い。人口増加率が高い地域の人々の意見を知ること、多面的多角的に考えるということ意識した。

#### (5) 成果

自分が生活している自然的社会的環境とちがう環境のもとで生活している人の思いと主張を知ることができたことと、立場や環境が異なる側の意見を、同意できる部分とできない部分に分けて整理させたことによって、知るだけでなく問題解決の方向性をさぐることに意識を向けさせることができた。

#### (6) 課題

すでに知っていることを新たな視点で見ることによって、問題解決の方向性とは違う行動に出ている人たちの主張の中にどのような背景があるかを考えるようになってほしい。今後は、違う主張をどう調整していけるかを考える授業に取り組みたい。

#### 2. 保健体育科（森野聡）

- (1) 日時：平成 27 年 11 月 2 日（月）2 限目
- (2) 対象：3 年 1 組 柔道選択者 21 名（男子 14 名 女子 7 名）
- (3) 単元名：柔道
- (4) 授業のねらい

「払い腰」を伝達学習し、技の構造を理解する。わかりやすく整理された説明方法を考え実践する。

（「グローバル人材育成」・「ESD」との関連）

- ・ ESD の視点につながる「素地づくり」と考えて、学習計画を立案。
- ・ エキスパート学習の導入。班ごとに柔道で学ぶ技 3 種類の事前学習。

「動画」「資料」を読み取りながら、3 種類の技のエキスパートとなり、他の班に

伝達する。

・特に重視した能力・態度：「批判的に考える力」「未来を予測して計画する力」「コミュニケーションを行う力」

#### (5) 成果

事前学習を行う「エキスパート学習」を行うことで、技能・戦術の理解が、一斉授業や普通のグループ学習よりもさら深まり、経験者・運動が得意な生徒が中心であった、ふり返りミーティングでは、「エキスパート」の生徒が、積極的に発言できるようになった。

#### (6) 課題

体育における「アクティブラーニング」「エキスパート学習」の指導実践を数多く行い、ねらいとしている「社会と関わりながら、自己を伸ばす生徒」の育成に体育として、どのように研究を進めていけばよいか検討を進めたい。

### 3. 国語科（神崎友子）

(1) 日時：平成27年6月29日（月） 4限目

(2) 対象：1年2組

(3) 単元名： 古典に親しむ 「古典のヒミツを探る～「方丈記」から考える～」

(4) 授業のねらいと「グローバル人材育成」の視点

- ・古典について再定義する。→日本文化を理解する。
- ・『方丈記』に書かれた往時の京都の災害について理解する。→歴史的に京都を理解する。
- ・近年多発している自然や人的災害にどう向き合っていくかを考える。

→地球的課題について考える。未来への責任。

#### (5) 成果

- ・3つの授業のねらいを概ね達成できた。
- ・小グループによる討議や全体での交流による積極的なコミュニケーション活動で、「知識受容型」の学習ではなく、「知識生産型」の学習ができた。問題の解決を求める生徒の主体的、協働的な学習となった。

#### (6) 課題

・生徒に「グローバル人材育成」という括りでの活動として認識させられていない。また、「グローバル人材育成」の授業について他教科と連携して、評価方法を考えていく必要がある。

#### 4. 国語科（大栗真佐美）

- (1) 日時：平成 27 年 11 月 2 日（月） 6 限目
- (2) 対象：1 年 4 組（帰国生徒学級）
- (3) 単元名：発展学習「日本の文化を相手に伝えよう」
- (4) 授業のねらい

小学校の低・中・高学年の各発達段階では昔話から古文や漢文に至るまで「伝統的な言語文化」学習へとつながる学習があるが、これらの学習活動をつながりとして受け取れるのは一般学級の生徒の場合であり、帰国学級にあてはまることではない。一般学級の生徒達は小学校 2 年生で「いろは歌」を学ぶが、帰国生徒 13 人中①日本人学校出身の 5 人は既習、②現地校などの出身者は、言葉として聞いたことがある生徒が 4 人、③4 人は全く知らなかった。また、「書道」や「筆ペン」などを学んだことがあるか等の点も個々の学習環境によって様々だった。このような課題があることから、国語と書写の「歌」の学習、そして、発展学習「日本の文化を相手に伝えよう」を連続させて流れを作り、以下の概念などを用いて授業を組み立てた。

【ESD の視点】との関連として

「持続可能な社会づくりの構成概念」：I 多様性、V 連携性

「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」：コミュニケーションを行う力を育てる

これは、本校の国語の学習指導で重視する態度・能力の①多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑦進んで参加する態度 に当たる。

#### (5) 成果と課題

国語の単元「いろは歌」では、音読を楽しむことや日本の伝統的なリズムを学び、古文に興味をもつ機会とした。これは七五調の典型的な歌体である。この単元では音読を楽しむことや日本の伝統的なリズムを学ぶことができた。

また、書写では同じ「いろは歌」を楷書で書くという単元があり、ここでは筆ペンを使用して「いろは歌」の作品を作成、交流校のインドネシアへ送る活動とした。

次に、この「いろは歌」を書き表している日本語の文字の由来を調べ自国の言葉を知る機会とし、日本語の成り立ちについてと書道の歴史についてにわかれ、それぞれ調べ学習をさせてまとめた。まとめるために単元「伝える目的や相手を明確にして情報を整理しよう」を使用して、まずは自分の伝えたい内容を整理する活動を個人で行った。整理するためには自国の言葉の成り立ちを詳しく調べ、自国の文化を再認識する必要がある。この過程で、片仮名や平仮名は漢字から作り出されたものだと学ぶことは、日常使用している日本語を、成り立ちや歴史などの知識として理解する上でも重要であり、その言葉の変遷の中に言葉のもつ本来の姿を感じ取る手がかりともなる

だろう。

個人でまとめた後に、グループ活動で更に分かりやすくまとめた。この話し合い活動で、それぞれのまとめ方が違うことや、やさしい言葉で物事を的確に伝えることの難しさを知ったようである。

生徒たちは、日常的に何気なく使っている日本語は、過去から現在へと形や音も含め様々な点で、時代によって、日本だけではなく他の国の影響も経て変化の過程をたどり、現在に至ることなどを再確認した。更に、書道の歴史から日本文化とっていた書道が、実は中国から日本への文化が伝わったものであるという文化の伝播というつながりを知った。

最後に、発展学習として「自分自身の言葉として他者へ発信できる機会」として、帰国生徒の英語圏の生徒に英語訳をしてもらって、相手（アートマイル交流校の同年代の生徒）に伝える。現在、1年生はユネスコのパイロット授業である「ジャパンアートマイル事業」（文部科学省・外務省後援）に参加している。この活動はEDS学習として認められており、今後この活動を通してICTを活用し英語訳を用いて、日本語について伝える国際協働学習をする。評価は関心・意欲・態度である。成果として、自国の言語の成り立ちについての自己探求、話し合いでのまとめ、他者へ伝える等の活動ができた。課題として、日本文化をやさしい言葉で書き換え、相手に伝わるように書き換えることは難しく、時間がかかった。もう少し、話し合い、考える時間を取ることが必要である。

## 5. グローバル人材育成を目指した、国際理解学習・国際交流学習等

※以下の本文や写真は、本校ホームページ「つゆくさフォトアルバム」より抜粋したもので、本文については掲載にあたって一部書き改めた。

### (1) 中国少年友好交流訪日団との交流（7月16日）

7月16日の午後に「京セラ株式会社」が国際交流事業として主催する「中国少年友好交流訪日団」が本校を訪問し、国際交流委員や帰国学級生徒と交流会を行いました。開会セレモニーであいさつを交わした後、プレゼント交換、両国の文化事情、学校の紹介が生徒たちによって行われ、あいさつ言葉の学習や中国の切り絵や日本の折り紙などに取組み、日本語や英語を中心に、あるいはアイコンタクトやジェスチャーで楽しく交流しました。後半は、校内見学を行い、校舎の案内や部活動中の様子を見学し、科学部では特別に「スライム」作りを楽しみました。中国語が堪能な帰国学級生徒の活躍もあり、半日の交流ではありましたが、参加者全員が積極的にコミュニケーションをとりながら、充実した交流会となりました。このような草の根の国際交流によって、一層国際理解が進み、多文化共生社会の実現に一步でも近づくことを願いたいも

のです。



(2) 1年生 アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクトの取組の様子

a. 1年生はジャパンアートマイルについて、講師を招いて学習しました(7月10日)

1年生では、文化祭での展示発表と兼ねて、ユネスコがESD学習のプログラムとして推奨する「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト(文科省・外務省後援)」に参加することになりました。その取組のスタートとして、ジャパンアートマイル実行委員会より、代表の塩飽隆子さんをお招きして、このプロジェクトの目的や趣旨、活動の内容についてお話を聞きました。世界の同世代の人々と協働することで、自分



たち自身の国や文化、良さを再確認し、異質なものに出会ってこそ、私たちの常識が世界の常識ではないことに気づいたり、多様な価値観に触れて、「違いを認める」「違いを超える」ことの重要性に気づいたりできると繰り返し話されました。今後の21世紀のグローバル社会の中で必要とされる英語を駆使したコミュニケーション力も取組の中では必要となります。一人ひとりの力、学級の力を結集して、学年としてこのプロジェクトを成功させましょう。

b. 1年生「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」交流活動スタート!

(8月25日) インドネシア、台湾の中学校と本校1年生各クラスが共同で壁画を作るプロジェクトの具体的な交流がいよいよ始まりました。去る8月25日、まず1年1組の生徒とインドネシアのアマリナ中学校の代表生徒が、インターネットのスカイプを利用して、教室に映し出されるお互いの表情や音声を交換しながら交流しました。一瞬のうちに教室は、約四千キロも離れた赤道直下の国の仲間と心を通わす、高揚した空間に包まれました。美術科、英語科、その他の教員もサポートしながら、本校からは、日本の文化や遺産、食べ物などをモチーフにした壁画の下書きアイディアを画



面で示し

ながら紹介しました。言葉の壁を乗り越えながらも、生徒たちは通じ合えた実感を持ったようで、これからの交流活動に胸を弾ませた1時間でした。27日には1年4組もスカイプによる交流を行いました。2組、3組も近日中に交流をスタートする予定です。

c. 1年生家庭科 調理実習「台湾焼きそば」作り 大成功！（1月27日）

1年生では、1学期より「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」の活動に参加し、台湾とインドネシアの中学校の生徒と壁画の共同制作を通して交流を行ってきました。家庭科ではその取組と連携して、相手国の文化理解の一環として、台湾文化の特徴の一つでもある台湾料理「台湾焼きそば」に挑戦しました。メインは台湾焼きそばの餡作りで、まず、ニンニク、すりおろし生姜をゴマ油で炒めた後、豚挽き肉を台湾料理ならではの豆板醤、甜麵醬で味付けしながら炒め、最後にスープ（鶏がらスープ、しょうゆ、みりん、酒）とモヤシ、ニラを入れて煮て、片栗粉でとろみをつけての出来上がりです。生徒たちは餡作りから盛り付けまで、班で分担しながら手際よく、「台湾焼きそば」を作り上げました。ニンニクをゴマ油で炒めたにおいや豆板醤の香りが調理室一杯に漂う中で、4時間目の授業とあいまって、生徒たちはひときわおいしそうに台湾焼きそばを試食していました。今回の調理は、あえて調理分担や片付け分担をせずに、調理実習を成功させるというねらいも設定された授業で、生徒たちはどの班もチームワークよく、協力しながら調理実習に取り組んでいました。



（3）留学生との交流会の取組（1年生：1月28日 2年生：3月7日）

a. 1月28日、1年生では京都教育大学で学ぶ8名の留学生（韓国2名、ロシア2名、中国2名、タイ1名、コロンビア1名とご家族3名、アメリカ1名）をお迎えして、クラスごとに分かれて交流会を開催しました。体験混入中の帰国学級生徒が英語であいさつをしたあと、留学生の方からは、地図や写真、パワーポイントを使って出身国の文化紹介などをしていただきました。さすがは留学生で、日本語が堪能な方も多く、説明もわかりやすくコミュニケーションがとれて、生徒たちは十分に理解できていたようです。その後、生徒たちは班ごとに、日本の伝統文化から現代の流行しているものまで、また生活習慣や学校についての紹介などをポスターにまとめたものを使ったり、クイズ形式にしたりしながら工夫して説明していました。短い時間でしたが、双方向で交流できた有意義な国際交流の場となりました。



b. 3月7日、2年生では、中国と韓国から京都教育大学に留学中の二人の留学生をお招きして、交流会をおこないました。写真などのスライドも準備していただき中国と韓国のそれぞれの国の文化事情や生活習慣、都市の様子、また韓国語のあいさつことばや日本でもおなじみの韓国の芸能人やスポーツ選手などの話題など、バラエティに富んだ内容で時折クイズ形式で交えながら説明していただきました。その後、生徒たちからの質問（日本文化や日本人に対する印象、教員になった理由、日本の学校との違いなど）に一つ一つ丁寧に答えていただきました。今回は、お招きした留学生が2名であったため、学年全員合同での交流会となり、総務会と国際交流委員が協力しながら進行了ました。とても興味深い内容で、生徒たちは、中国と韓国について、二人の留学生の親しみ溢れたお人柄も加わって、より中国や韓国を身近な国として実感



できたことと思います。

#### （4）帰国生徒学級の取組

a. 帰国学級合同スピーチ発表会・講演会（日本の伝統文化理解と体験学習）（9月25日）9月25日（金）に、帰国生徒学級1・2年生による合同スピーチ発表会を開催しました。この発表会は、今年で36回目となる帰国学級独自の伝統ある行事で、日本語力の向上を目指すと共に、一人一人が自分の海外体験をあらためて掘り起こし、その体験が自分にとってどのような意義や価値を持っているのかを確かめる場として位置づけています。英語と日本語でタイトルや名前を紹介された27名の生徒たちは、海外生活での身近な経験や外国と日本の違い、また現在の国際関係や政治・外交上の様々な課題など、幅広いテーマでスピーチを行いました。帰国生徒ならではの視点でとらえた興味深い内容で充実した発表交流の場となりました。

（発表されたスピーチのタイトル例：抜粋）

・「オレゴン州の学校生活」・「アメリカと日本の学校の違い」・「日本人とアメリカ人を通して感じた人間の優しさ」・「アメリカの法律と日本の法律の違い」・「香港の歴史と様々な国のつながり」・「インドの文化遺産」・「日中関係の改善に私たちができること」・

「兵役のない日本」・「日本と中国を通して世界について考えたこと」 他

午後からは、日本の伝統文化を理解し実際に体験する場として（NPO 法人）京都文化企画室より講師をお招きし、日本舞踊についてのお話と着物着付け体験、日本舞踊の体験を行いました。最初は着物姿に照れながらの様子でしたが、さすがは海外で異文化を体験してきた帰国生徒たちです。すぐに慣れて講師の手ほどきを受けながら楽しい伝統文化体験のひとつとなりました。理解が進み、多文化共生社会の実現に一步でも近づくことを願いたいものです。



b. 「日本文化を学ぼう～茶道を通して～」 （3月8日）

3月8日の放課後、帰国生徒学級合同で、「日本文化を学ぼう～茶道を通して～」と題して、裏千家（今日庵）の鮎子田宗恵（ふしだ そうけい）氏をお招きして、茶道体験教室を開催しました。講師からは、相手のことを思いながら心を込めて抹茶を点てることを通して、古来、受け継がれてきた、日本的な精神や感性について、また茶道が日本の地形、自然、風土によって、また日本の歴史や時代背景のなかで、今日まで脈々と受け継がれてきた日本独自の文化であることが話されました。また「京菓子」についても京都を取り巻く他の地域で生まれた原材料が結集して京都の地で出来上がってきた経緯も説明していただきました。保護者の方や卒業生も参加していただき、おいしいお茶と京菓子をいただきながら、それらの奥に隠れた日本独特の精神文化に触れた貴重なひとときとなりました。

c. ～ようこそ先輩！～帰国生徒学級「卒業生のお話を聞く会」を開催（3月8日）



3月8日、帰国生徒学級独自の行事として、「卒業生のお話を聞く会」を開催し、今回は、2008年度に卒業した小野京香さん（大阪大学4年生）をお招きしました。小野さんが帰国するまでのボリビアでの生活や、帰国してからの小学校への編入、そして、本校に入学してからの学校生活や附属高校進学後の学校生活、大学進学後の留学体験や現在取組んでいることなどを、スライドで写真を交えながら、持ち前の明るさで笑

顔一杯にお話してくださいました。最後に中学生へのメッセージとして「やりたいと思ったことは躊躇せずにやること」「机でやる勉強も、実際に体験してやる勉強もどちらも全力で取り組むこと」「自分の強みは何かを考えてみること」の大切さを、力強く話してくださいました。生徒たちからの質問にも、一つ一つ丁寧に答えていただき、生徒達は進級を前に、先輩から大きな励ましのメッセージを受け取ることができました。



#### ④附属京都小中学校における取り組み

##### 1. 実践授業計画表

No	教科名	テーマ	学年	授業者
(1)	国語	どうぞよろしく	1	福井 博美
(2)	英語	わたしのなまえを伝えよう きもちを伝えよう	1	福井 博美
(3)	国語	スーホーの白い馬	2	小西 かおり
(4)	生活	学校探検	1・2	1・2年担任
(5)	英語	ハロウィンをたのしもう	1	福井 博美
(6)	図画工作	だんだんだんボール	3	梅村 万里子
(7)	国語	よい聞き手になろう	3	深蔵 心理
(8)	国語	よりよい話し合いをしよう	4	河合 晋司
(9)	総合学習	はんなり京都	4	4年担任
(10)	総合	京都のおすすめを紹介しよう	6	6年担任
(11)	社会	わたしたちの生活と食糧生産	5	藤田 智之
(12)	社会	これからの自動車産業を考 える		藤田 智之
(13)	英語	世界の時刻や天気を調べてみよう	5	武内 弥生
(14)	国語	話題をとらえて話し合おう バズセッションをする	7	新庄 泰子

(15)	英語	京都を英語でプレゼンテーションしよう	7	関 温理
(16)	総合学習	京都のおすすめを紹介しよう	7	7年担任
(17)	理科	動物のなかまを分類しよう	8	野ヶ山 康弘
(18)	英語科	Can Anyone Hear Me?	8	内貴 真美子
(19)	総合学習	日本文化体験	8	8年担任
(20)	国語科	豊かな言葉（俳句）	9	國原 信太郎
(21)	社会科	日本の政治について考えよう	9	西田 直記

## 2. 実施指導案

(1) どうぞ よろしく

### 【1. 教科名（プログラム名）】

国語（コミュニケーション力）

### 【2. 授業テーマ】

どうぞ よろしく

### 【3. 授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

「どうぞよろしく会」をひらこう

### 【4. 授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】

みんなで「どうぞよろしく会」をし、楽しく友だち作りができる。

### 【5. 教材とグローバル人材育成の接点（グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ）】

コミュニケーションを図るためには、まず第一歩として、自分の自己紹介をことが大事である。4月から間もないこの時期の一年生は、まだ、学校生活に慣れておらず、教室に誰がいるのか、また、自分の机の周りのお友だちまで気がいくことが少ない。そこで、友だちを作る初めての活動として、名前カードの交換をして、自己紹介を行うことにした。まず、「私の名前は〇〇です。どうぞよろしくお願ひします。」と声に出して言えるようにすることが大切である。学習したての鉛筆の持ち方で、丁寧に自分の名前をカードに書き、お友だちと名刺交換を行う。お友だちが書いたカードをもらうことで、自分以外のお友だちとの繋がりができ、これから一緒に遊んだり学習し合ったり、あらゆる場面でコミュニケーションをとることになるお友だちのとの繋がりを少しでも繋がれたという安心感をもたせたいと考えた。また、この自己紹介カードには、自分の名前はもちろん、好きな食べ物やスポーツなどの絵を描くことにした。そうすることで、自分とお友だちのと似ているところに目がいき、話しに広がり生まれ、友だちとの関わりを活発にさせたいと考える。

### 【6. 指導計画（単元計画）】

第1時 友だちと仲良くなろうというめあてをもち、鉛筆の持ち方、書くときの姿勢に気をつけて文字や自分の名前を書く。

第2時 みんなと仲良くなるために、平仮名で自分の名前や好きな食べ物やスポーツなどを絵に描いて、自己紹介カードをつくる。

第3時 みんなで「どうぞよろしく会」をし、楽しく友だちづくりをする。(本時)

#### 【7. 本時について】

① 日時・校時 平成27年4月17日(金) 2校時

② 対象学年・組 1年い組

③ 場所 1年い組 教室

④ 本時の目標

- ・「どうぞよろしく会」に進んで参加することができる。
- ・自分の名前や好きな動物などを友だちに紹介できる。

⑤ 本時の教材について

本教材は、4月の中旬の教材でまだ入学して間もない子どもたちが、自分の名前や好きな動物を紹介する

教材である。前時で作った自己紹介カードを友だちと交換し、自分の自己紹介を行う。交換する前には、「はじめまして。私の名前は、〇〇です。どうぞよろしくお願ひします。」と言ひ合ひ、自己紹介カードを交換していく。ただ、子どもの中には、初めて話す友だちに対して不安を感じるものもいると考えられる。「どうぞよろしく会」を始める前に、何回か練習をして自信をもって活動できるようにさせたい。

⑥ 本時の展開

⑦ 評価

- ・楽しんで、「どうぞよろしく会」に参加し、自己紹介をすることができたか。
- ・自分の名前や好きなものを自己紹介カードを見ながら、言うことができたか。

### 3. わたしのなまえを伝えよう きもちを伝えよう

#### 【1. 教科名(プログラム名)】

英語 (コミュニケーション力)

#### 【2. 授業のテーマ】

わたしのなまえを伝えよう きもちを伝えよう

授業名(単元名、教材名、プログラム名)

えいごでつたえよう

#### 【3. 授業目標】

- ・あいさつ、自分の名前、気持ちを元気に伝えることができる。
- ・元気で積極的に話そうとすることができる。

#### 【4. 教材とグローバル人材育成の接点】

あいさつや自分の名前が言えるようになることと、教室内で使われる英語の指示(クラスルームイングリッシュ)を知る学習を行う。コミュニケーションにおいて、自分は誰なのかを伝えることは大変重要である。今はまだ自分の名前だが、後の単元では、自分の好きなものを伝えたり、年齢や出身地を伝えたりする活動にもつながる。英語での挨拶では、Hello と挨拶した後に、気分を聞く How are you? (調子はどう?) という表現を多く使うことが多い。そこで、本単元は、自分の名前を英語の表現を使って伝えたり、気分を伝えたりする活動を行う。また、入学から日が浅い子どもたちにとって、ALT (他民族の人) とも積極的にコミュニケーションをとることを大切にしていきたいと考える。だが、英語の学習が初めてという子どもも多いと思われ、英語で何かを言われても、何のことか理解せず、何もできないで不安を感じる子どももいるであろう。JTE が、子どもに寄り添ったり、ALT とデモンストレーションを行ったりすることで、安心して子どもが大きな声で挨拶したり、自分の気分を言ったりすることができるようにしたい。

#### 【5. 授業計画】

- ・あいさつと自分の名前を言ってみよう
- ・自分の気持ちを伝えよう (1/2) 本時

#### 【6. 本時について】

- ① 日時・校時 平成27年4月28日(火) 10時50分～11時35分
- ② 対象学年・組 1年い組(男子16名女子16名 計32名)
- ③ 場 所 1年い組教室
- ④ 本時の目標
  - ・Hello. Hi. Good morning. を使って元気にあいさつをすることができる。
  - ・How are you? と尋ねられて、自分の気持ちを伝えることができる。
- ⑤ 本時の教材

前時で習った英語でのあいさつに慣れ親しむことと、自分の気持ちを英語で伝える挨拶をすることを学習する。また、学習に必要な指示に慣れ親しむために、Simon says ～. (船長さんの命令ですゲーム) を行い、ALT が話す言葉をよく聞き、行動できるようにしたい。また、感情を表す表現はたくさんある。本時は fine、happy、hungry、angry、sad、sick、sleepy を扱い、それぞれの表現はなるべく日本語で意味を言ってしまうのではなく、意味を推測させたり、日本語の介在なしのイメージをもたせたりして、わかるようにしたいと考える。それぞれの意味については JTE が生徒と一緒にあって、発音については ALT が先導して学習することで、子どもたちが安心して活動できるようにしたいと考える。Simon Says のゲームについても日本語で意味を教

えるのではなく、動きと英語を直接リンクさせ直感的かつ身体的に学習していきたいと考える。表現としては簡単ではないが、体を使って楽しく取り組んでいけるようにしたい。

⑥ 本時の展開

⑦ 評価

- ・元気に大きな声でALTとあいさつをすることができたか。
- ・I'm fine など、自分の気持ちを伝えることができたか。

#### 4. スーホの白い馬

【1.教科名（プログラム名）】

国語科（異文化理解）

【2.授業テーマ】

お話をそうぞうしながら読もう

【3.授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

「スーホの白い馬」

【4.授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】

・場面の様子について想像を広げながら読み、考えたことや心に残ったことを伝え合うことができる。

【5.教材とグローバル人材育成の接点（グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ）】

本単元の教材「スーホの白い馬」は、モンゴル地方に伝わる民話をもとにした物語である。小学校低学年の子供たちにとって外国の物語や民話との出会いは、日本とは違う国の様子や文化を知るきっかけとなるだろう。本単元では「スーホの白い馬」を場面の様子を想像しながら読み進めていく中で、折に触れながらモンゴル地方の文化や物語に登場する楽器「馬頭琴」について話す機会をもち、異文化に興味関心を持つ態度を養っていきたい。また、単元の冒頭では他の国々の民話をもとにした絵本を複数用意し、並行読書を進めるようにしていく。様々な国の民話を読み比べる中で、多様な文化の存在や日本との共通点や相違点などを考えるようにしたい。

【6.指導計画（単元計画）】

第1次 学習計画をたてる

第1時 様々な国の民話と出会う

第2時 「スーホの白い馬」を読んで、はじめの感想を書く

第2次「スーホの白い馬」を詳しく読む

第3～5時 お話の順に、人物がしたことや言ったことを確かめる

第6時 詳しく読んで初めの感想と考えが変わったところを話し合う

第3次 いろいろな国の民話を読んで感想を伝え合う

第7時 気に入った民話の感想を書く

第8時 気に入った民話について心に残ったところを伝え合う（本時）

【7.本時について】

① 日時・校時 平成28年3月8日（火）

② 対象学年・組 2年ろ組

③ 場所 2年ろ組教室

④ 本時の目標

想像を広げてお話を読み、心に残ったことなどが伝わるように感想を伝え合うことができる。

⑤ 本時の教材について

「スーホの白い馬」は、モンゴル地方の民話をもとにした物語である。物語の冒頭には、モンゴルの広い草原の様子が描写され、日本とは異なる自然豊かなモンゴルの様子がイメージできるような始まりになっている。本単元では、導入で「スーホの白い馬」の読み聞かせを行った後、様々な国の民話をもとにした絵本を複数紹介し、並行読書を進めていくことにした。紹介した本は、インド民話「ランパンパン」、中国民話「王さまと九人のきょうだい」、韓国民話「トラとほしがき」、ウクライナ民話「てぶくろ」、タンザニアのお話「チンパンジーとさかなどろぼう」の5作品である。それぞれに、登場する人物や動物は異なるが、繰り返しの話であったり、弱者と強者が出てきたり、何かの由来や始まりのお話だったり、話の型に共通する部分がある。いくつかのお話を読み比べる中で、それぞれの国にも関心をもったり、その他の国のお話に興味をもったりできるように紹介する際に簡単に国の様子を説明することも行った。

本時では、読んだお話の中から、特に気に入った作品の「おもしろかったところ」や「心に残ったところ」を伝え合う活動を行う。自分の選んだお話とは異なるお話の紹介を聞き合うことで、たくさんの物語や外国の文化に興味をもてるようにしたい。

⑥ 本時の展開

⑦ 評価

- ・気に入った民話について、心に残ったところや面白いところとそのわけを分かりやすく伝えられたか。
- ・友達の話聞き、よかったところに気付いて伝えることができたか。

## 5. 学校探検

### 【1.教科名（プログラム名）】

生活科（コミュニケーション力）

### 【2.授業テーマ】

新入生（1年生）に上級生（2年生）が学校を案内するという活動を通して、コミュニケーション力の向上を図る。また、上級学年（2年生）が下級生（1年生）に対し、優しく接したり、見本となったりすることで先輩としての責任感を感じる。

**【3. 授業名（単元名、教材名、プログラム名）】**

「学校を探検しよう」（1年生向け）

「学校ガイドになろう」（2年生向け）

**【4. 授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】**

- ・新入生（1年生）に上級生（2年生）が学校を案内するという活動を通して、コミュニケーション力の向上を図る。
- ・上級学年（2年生）が下級生（1年生）に対し、優しく接したり、見本となったりすることで先輩としての責任感を感じる。

**【5. 教材とグローバル人材育成の接点（グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ）】**

本教材は、校内の配置などについて詳しくない新入生（1年生）を上級生である2年生が案内するという活動を通して、日頃培ったコミュニケーション力を試したり、さらに高めたりすることを目指すことができる。まず、2年生子どもたちはこれまでに生活科だけでなく、国語科等において「話すこと」「聞くこと」を学習してきた。相手が理解しやすい話し方や聞く時には相槌や返事をするなどで相手が話しやすくなることを学んできた。本単元では、これまでに身に付けてきたそれらコミュニケーションをとるための力を活用する場面として適している。また、1年生はこれらの活動を通して、先輩の優しさを感じ、これからの学校生活に対して肯定的なイメージを持ち、意欲的にコミュニケーション等の活動に取り組んでいくことができるようになるだろう。

**【6. 指導計画（単元計画）】**

第1次 2年生は1年生に朝顔の種をプレゼントし、校内案内（ガイド）をする  
ことを知る

- ・2年生は自分たちが一年生の時をふりかえり、朝顔の種をプレゼントしたり、校内案内をしたりすることを共有する。
- ・2年生は1年生に朝顔の種をプレゼントし、校内案内をしてあげることがを伝える。

第2次 2年生は1年生に附属京都小のどの場所をどのように案内するのか計画  
する

- ・校舎配置図を見て、案内する教室や数などを把握する。

第3次 2年生は案内するために案内図や説明するための文章を作成し、各グル  
ープで模擬練習に取り組む

○案内図や説明するための文章をつくる

- ・画用紙で案内図をつくったり、説明するための文章をわかりやすく書いたりする。

○グループごとに模擬練習に取り組む

- ・グループごとに説明を担当する場所を決めたり、グループで説明し合いながら、改善点や変更点を見出し、2年生は1年生によりわかりやすく説明できるようにしたりする。

第4次 附属京都小学校を2年生が1年生に紹介し、学校をガイドしよう

- ・2年生はグループごとに1年生を迎えに行き、学校を案内する。
- ・ふりかえりをする。

【7. 本時について】

① 日時・校時 平成27年4月20日（月） 9時45分～11時35分

② 対象学年・組 1年生 いろは組・2年生 いろは組・に組

③ 場所 附属京都小中学校（初等部）校内

④ 本時の目標

2年生が1年生に対し、優しく接したり、見本となったりしながら、学校を案内したり、されたりする。

⑤ 本時の教材について

本時は、2年生が計画してきた学校探検を具現化する場面である。2年生の子どもたちは1年生を学校案内するために、案内図や説明するための文章を作成し、各グループで模擬練習に取り組んできた。本時では、それらを活用しながら、学校を案内していく。案内する際には、話したり、聞いたりするコミュニケーションをとる機会が必然的に生まれる。コミュニケーションでは、相手が理解しているか表情等を見ながら話したり、相手の話に頷いたり、返事をしたりしながら進めていく。よって、コミュニケーション力を向上させる良き機会になるだろう。

⑥ 本時の展開

⑦ 評価

相手がわかりやすいように工夫して話したり、相手の話をしっかり聞いたりしながら、学校探検をしている。

6. ハロウィンを楽しもう

【1. 教科名（プログラム名）】

英語 （多文化共生）

【2. 授業のテーマ】

本単元は日本の文化や行事と異なるハロウィンという文化との出会いによって、外国の生活、習慣などに興味関心をもち、異文化を理解する態度を養う。また、既習の

ものを生かして、物のやり取りの表現を定着させることを目標にしている。近年、ハロウィンという言葉は多く知られるようになってきたが、実際にALTより実際にハロウィンのお祭りの話しを聞くことで、より深く異文化に興味をもち理解する態度を養いと考える。また、ただ単にハロウィンを楽しむのではなく、物のやり取りの表現を英語で行うことで、英語においてのコミュニケーションの力を培いたい。

### 【3. 授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

ハロウィンを楽しもう

### 【4. 授業目標】

- ・ハロウィンの習慣に慣れ親しむことができる。
- ・今までの学習を通して、物のやり取りの表現を使うことができる。
- ・ハロウィンビンゴにでてくる人物や物の表現に聞き取ったり言ったりすることができる。

### 【5. 教材とグローバル人材育成の接点】

題材にしたハロウィンは、クリスマスに続いて生徒の生活の中で身近なものになっている。ハロウィンと聞くだけで、楽しい雰囲気を作り意欲的に学習することであろう。このように、近年、多文化の行事や祭りなどが身近なものになってきている。そこで、実際にALTからハロウィンの話しを聞いたり、ハロウィンに関する言葉やゲームに触れたりすることで、多文化を理解する態度を養えと考える。また、ハロウィンに関係する絵が描かれたカードのやり取りを生徒同士で行うことで、物のやり取りの表現を定着せたい。英語を使っての物のやり取りは、挨拶に続いて外国の方とのコミュニケーションをとる大切な手段であると考え。

### 【6. 授業計画】

- ・ハロウィンを楽しもう。…本時（1 / 1）

### 【7. 本時について】

①日時・校時 平成27年10月27日（火） 10時50分～10時35分

②対象学年・組 1年い組（男子16名女子16名 計32名）

③場 所 1年い組教室

#### ④本時の目標

- ・ハロウィンを楽しむことにより、異文化を理解する態度を養う。
- ・「～ Please.」の表現を使って、必要なものを取りに行く。

#### ⑤本時の教材

まず、導入の挨拶では、これまでに学習した今の気分を表す表現を使う機会を設ける。全体でも、挨拶を行うがALTが個々に「How are you?」と尋ねて行く。その後、モジュールDVDを通して、フォニックスチャンツを行う。フォニックスチャンツを

行うことで、クラスみんなで声を合わせて英語を発音する機会を設けることで、英語に対しての抵抗感を低くしたいと考える。また、モジュールDVDの中にあるハロウィンに関する物や人物の単語を発音する。展開では、ALTがハロウィンを楽しむ活動をすることを告げ、ハロウィンの話しを聞く。ここで、生徒たちにALTに質問を受け付け、ハロウィンについて興味関心を持たせていきたい。そして、歌『Let's Go Trick-or-Treating』を歌う。初めて歌う曲なので、戸惑うかもしれないがALTの動作や表情、発音に注意しながら歌わせたい。そして、ビンゴゲームを行う活動に入っていく。ビンゴゲームをするには、まず、ビンゴゲームシートを作らなければいけない。9つのビンゴゲームシートの枠に貼る8つのハロウィンに関する物や人物が描かれたカードを用意し、生徒同志のカードのやり取りでビンゴゲームシートを作る。シートが完成すると、ビンゴゲームを行い、ハロウィンをクラス全体で楽しんでいきたい。

#### ⑥本時の展開

#### ⑦評価

- ・ALTによるハロウィンの話を興味をもって聞き、歌やゲームに楽しんで参加している。
- ・カードのやり取りを行うことができる。

### 7. だんだんだんボール

#### 【1. 教科名（プログラム名）

図画工作科

#### 【2. 授業テーマ】

段ボールを使って、友達と協力しながら、表現を楽しみ、つくるよさを味わう。

#### 【3. 授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

だんだんだんボール

#### 【4. 授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】

- ・段ボール箱や活動している場所から感じることをもとに活動する喜びを味わう。（造形への関心・意欲・態度）
- ・材料や場所から得たイメージをもとに、自分のやりたい思いをもったり、協力しながらつくり方を考えたりする。（発想・構想の能力）
- ・活動する場所のよさや今までの経験を生かしながら、材料を積んだり、重ねたり、組み合わせたり、つないだりするなど工夫して活動する。（創造的な技能）
- ・材料や場所のよさを感じ取ったり、自分や友達の活動を見合って話し合ったりしながら、表し方のおもしろさや感じ方の違いを味わう。（鑑賞の能力）

#### 【5. 教材とグローバル人材育成の接点（グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ）】

\* 本教材に関する子どものこれまでの学びの想定と今後の発展への期待

本単元では、いろいろな形や大きさの段ボール箱を重ねたり並べたりするなど、

友達と協力的に関わりながら、体全体で段ボールの素材に親しむことをめあてとしている。そして、材料や場所のよさから、作りたいものを思いついたり、友だちと話し合ったりしながら協力して活動する。その活動の中で、子ども達は、今までの経験を生かし、はさみや段ボールカッターなどの用具を選ぶなどして、工夫しながらつくったり、つくり替えたりするだろう。

今回の「共同制作」による力で、子ども達のグローバル人材育成の力「コミュニケーション能力」を育みたいと考える。今まで、子ども達は、夏の宿泊学習、普段の学習でのグループワークは常に経験している。本学級の生徒は、比較的に関心の意見を肯定的に聞く子どもが多い。時には、意見が合わず、活動が途切れることもあるが、学習のめあてや活動の流れを再確認することで、再び協力し合って進めることができる。図画工作科の学習では、2人組によるスパッタリングの共同制作は、お互いの表現したいイメージや手法は異なることから、一つ一つの活動を話し合ったり、試したりしながら、個人制作のときより時間をかけて慎重に行っていた。本単元では、役割分担が明確になりやすく、話し合いもしやすい3人組で活動するので、2人組より一層活発な意見交換、活動量が期待される。友達と協力し合う中で、自分がつくりたいイメージをどのように伝えればいいのか、友達と一緒に作るよさを感じることが出来る授業展開にしたい。その時に、「聞く」ことを重視させるようにする。コミュニケーションの第一歩は、「相手の思いを知る・重いはかる」ことである。それをなくしての自己の主張は、一方通行の主張でしかない。どのように作るか、誰がつくるか、協議の段階に入ったときこそ、この力が発揮されるべきである。このような経験を積み重ねることは、人との関わり方を学び、相手の主張を受け容れつつ、自分の主張も明確に伝えられる人材になることにつながっていく。



#### 【6. 指導計画（単元計画）】

- ・第1次 段ボールで、どんなことができるか試す。（主に個人で）2時間
- ・第2次 友達と協力して、「だんだんランド」をつくる。（グループで）2時間

（本時は1/2時間目）

#### 【7. 本時について】

##### ① 日時・校時

平成27年12月3日（木）5校時（13:50～14:35）

##### ② 対象学年・組

3年い組（32名）

##### ③ 場所

西エリア 体育館

##### ④ 本時の目標

友達と協力してつくることを計画し、表現を楽しみながら、友だちと関わり合うよ

さを感じようとする。

#### ⑤ 本時の教材について

前時（第一次）で、どんな表現ができるか、各々が試しながらつくることで、素材研究をする。ここで、切断や接着の仕方などを存分に味わえるように制作時間を確保したい。各々がつくりたいイメージは、時間とともに色々変わることが予想される。それは、切ったりつなげたりするときに、つくりたいイメージが様々に変化するので、表現（形）もそれに合わせて変わっていくからだ。だが、ここで試行錯誤しながら活動することが大切である。本時（第二次）の共同制作において、表したいイメージをつくるときの表現方法の選択の幅が広がるからである。

本時では、友達と共同でつくり、共感や協議をしながら、「だんだんランド」をつくっていく活動である。「〇〇ランド」とテーマづけたのは、多数の大きな段ボール紙でできるダイナミックな表現が、共同制作には適切なテーマだと考えたからである。子ども達は、「話し合い」のみならず、その素材で「遊び」という試行を用いてコミュニケーションを図っていくだろう。活動の終末には、個人制作で味わうことの少ない共同制作のよさを発見してほしいと考える。

よって、ここでは、共同で試行錯誤しながら、友達と一緒にアイデアを伝え合い、表現方法を工夫しながらつくり、自分一人では味わえなかった楽しさを味わうことが本単元のねらいである。

なお、段ボールカッターなど刃物の扱いについて、丁寧な指導を心がける。すでに、「のこぎりトントン」の単元で両刃のこぎりの安全な使い方を習得している。今回の学習においても、安全な使い方ができるように、第一次の学習でしっかり指導する。始めは、恐々使う子どももいると思われるが、繰り返し使っていく内に慣れてくるだろう。また、材料の段ボールについては、子ども達が、十分に試しながらつくることができるように、給食調理人の方々に協力してもらい、段ボールをたくさん準備した。

『Ⅰ導入』で、まず、前時にどんな加工ができたかを振り返る。その加工の仕方は、共同制作で、お互いの思いを伝え合うときのヒントになるようにしたい。電子黒板や、カードを有効に活動する。共同制作での約束事は、コミュニケーションの基本は、「聞く」ことから始まる。互いの思いをきちんと交換することが大切なので、3年生という発達段階を考え、指導者側で最低限の約束を提示する。『Ⅱ展開』では、グループ同士がくっついて活動することも予想される。そのときも、それぞれのグループで役割分担して活動しているか、声かけをしてまわりたい。『Ⅲ終末』では、共同制作の意義について触れ、次時の活動に活かせるようにする。

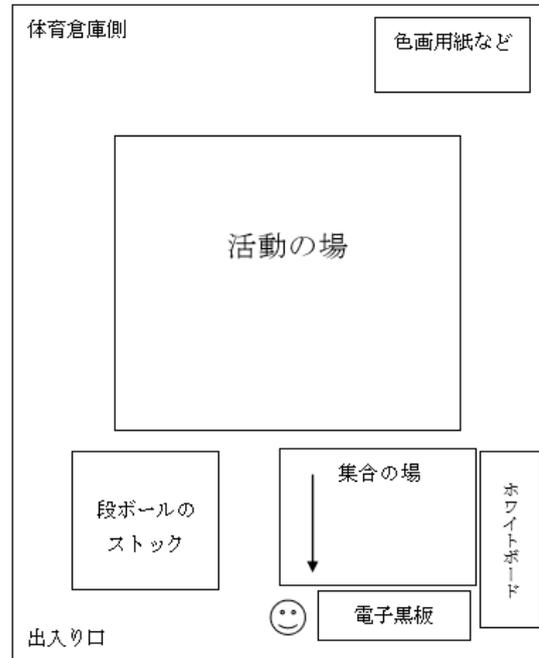
ここでの〔共通事項〕との関連は、活動する場所に合わせて段ボールを重ねたり、並べたりする行為を通して、形や色の組み合わせや自分でしたい活動のイメージをもつことである。ここでは、段ボールという素材をいかしてつくることから、主に「形」と「イメージ」を追究することを重視したい。「色」については、表したいものを深めることができる補助的要素として考える。

⑥ 本時の展開

⑦ 評価

友達と協力しながらつくり、自分だけでつくったときとの違いを知り、一緒につくるよさを感じ取ることができたか。

⑧場の設定



## 8. よい聞き手

### 【1.教科名（ブ

国語科

### 【2.授業テーマ】

よい聞き手になろう

### 【3.授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

どんな質問がいいのかな

### 【4.授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】

- ・話の中心に気をつけて、話を聞くことができる。
- ・話に沿った質問をしたり、自分だったらどうかと考えて感想を述べたりできる。

### 【5.教材とグローバル人材育成の接点（グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ）】

コミュニケーション能力に関して今まで、生徒は話を聞くときに、形式的なことについて学習してきた。内容的なことについては、話の中心に気を付けて聞くことを学習してきている。形式的なことは目につきやすいので、すぐに気づくだろう。しかし、内容に関しては、発達段階にもよるが、意識しないと気がつかない。

本単元では、よい聞き手として、内容的に、話の中心に気を付けて聞くだけでなく、自分だったらどうかと考えて聞いたり、他の聞き手は何を質問したいのかということを考えてたりすることを意識させることにより、話す聞く力（コミュニケーション能力）を育成したい。また、自分が今まで何を意識していたのか、何を意識していなかったのかというこ

とと、何が出来ていて、何が出来ていないのかといことを振り返ることにより、聞き手としての意識かをはかる。

#### 【6. 指導計画（単元計画）】

第1次 よい聞き手とは何かを考える。（本時）

第2次 発表会で話したいことを決め、内容を考える。

第3次 発表会を行う。

#### 【7. 本時について】

① 日時・校時 平成27年5月12日 2校時

② 対象学年・組 第3学年・は組

③ 場所 3年は組教室

④ 本時の目標

よい聞き手について考え、話を聞くときに大切なことは何か理解することができる。

⑤ 本時の教材について

本時の導入では、教師が用意した原稿を用いて生徒にスピーチをさせる。それを聞き手の教師が、よい聞き手とは言えない態度で聞く。以下のような聞き手を演じる。

1 窓の外を眺めている 2 質問や感想を言わない 3 指名されて、自分の好きなことだけを話す

展開では、導入の様子からよい聞き手とは何かを考え話し合う。生徒の発表を形式的なことと内容的なことに分けて板書することにより、あとで整理しやすいようにする。形式的なことはすぐに発表させるだろうが、内容的なことは、なかなか生徒からは発表されにくいだろう。その場合は、内容的なことにしぼって話し合いを進める。そして、教科書（光村）にまとめてあるページをヒントに考えさせる。最終的には、以下の3つに集約させる。

1 自分が知りたいこと確認したいこと 2 皆が知りたいこと確認したいこと  
3 自分とひきつけて

最後には、自分が今まで出来ていたことと、出来ていなかったことを振り返り、本単元で意識して取り組むことをまとめさせる。

⑥本時の展開

⑦評価

よい聞き手として、自分が今までできていたことと、今日から意識したいことを整理している。

### 9. よりよい話し合いをしよう

#### 【1. 教科名（プログラム名）】

国語科

## 【2. テーマ】

よりよい話し合いをするためにはどうすればよいか考えよう

## 【3. 授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

よりよい話し合いをしよう

## 【4. 授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】

互いの考えや、共通点や相違点を考えながら、伝え方、聞き方に気を付けて話し合うことができる。

## 【5. 教材とグローバル人材育成の接点（グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ）】

国語科はだけでなく、全ての学習において、またあらゆる生活の場面において、話し合うことは欠かすことのできないコミュニケーションの方法である。グローバル社会の中でも、それはより重要な位置づけにあると考える。「話し合う」といっても、ただ自分の意見をつらつらと述べるだけではいけない。話す先にいる相手を意識することが大切なことである。相手は自分の思いを理解してくれているだろうか。自分の言葉は、相手に伝わっているのだろうか。相手の年齢・性格・国籍等あらゆる条件を鑑みて、伝え方を考えていかなければならない。

また、「話す」という発信の部分だけではなく「聞く」という受信の役割も、大切にしていきたい。グローバル社会の中では特に「多様性」を認めることが重要と考える。話し合い活動の中であっても、ただただ自分の意見との相違だけで白黒の判断をつけるのではなく、多様な意見に耳を傾け、話し手の思いを感じとろうとすることが大切である。その姿勢をもつことによって、時には思いもよらないところで自分の考えが揺らいだり、また相手の新たな一面に気付いたりすることができる。それは、独りよがりではない、多様性の中でのクリエイティブな論議へとつながると考える。

本教材では、「よりよい話し合いをしよう」という目標のもと学習をすすめていく。4年生の生徒たちにとっての、「よりよい話し合い」とはなんだろうか。おそらく、言葉としては、「人の意見を聞く」「相手のことを考えて発言する」と浮かび上がってくるだろう。しかし、それが実の場でいかに実践できるのか。そこが本教材でも、生徒に気付かせたいところである。実の場で、気付き、考え、実践することによって、本当に生きる「話し合い」につながることを目指す。国語科のみならず、あらゆる場面での話し合いにつながる学習にしていきたい。

## 【6. 指導計画（単元計画）】

第1時 …… よりよい話し合いとはなんだろう

第2時 …… 話し合いをしよう

第3時 …… 自分の意見をもとう

第4時 …… よりよい話し合いをしよう「4ろキャッチフレーズを作ろう」（本時）

## 【7. 本時について】

- ① 日時・校時            5月20日（水）    3校時
- ② 対象学年・組        4年ろ組
- ③ 場所                4年ろ組教室
- ④ 本時の目標

自分の考えと友達のことを比べながら、自分の思いを伝えることができる

- ⑤ 本時の教材について

学年が始まって間もない五月。話し合いについては、3～4人の小グループでの話し合いについては活発に行うことができている。しかし、その人数が増えると、話しの焦点がずれたり、一部の子ばかり発言したりと、まだまだよりよい話し合いには至っていない。

本時では、「4ろキャッチフレーズを作ろう」という議題のもの話し合っていく。前時までに一人一人の意見を書き、伝えられる状態にしている。話し合いでは、学級を2つのグループで話し合う。1つのグループが話し合いを行っている間、1つのグループは話し合う様子を観察し、良い点と改善点を見つけさせる。

話し合いの中では、司会2名・提案者1名を置くこととする。まず提案者が意見を述べる。その意見が話し合いの出発点となる。司会は、話しの流れが散漫にならないように軌道修正したり、まとめたりすることが必要となる。司会者には、指導者からの「司会ヒントメモ」を渡し、円滑に行われるようにする。また、指導者は、グループの一員として話し合いに参加することにする。意見をゆさぶったり、話し合いを活発にするために意見をつなぐ役割となる。

話し合いの途中と終わりに、観察者からのアドバイスを伝えることとする。2回目は観察グループと話し合いのグループを入れかえ、行う。全員が一斉に話し合いをするのではなく、観察するグループを作ることで、自分たちの話し合いについてのアドバイスをもらうことができ、客観的ふりかえりを行うことができる。

まとめには、全体のふりかえりと、個人でのふりかえりを行うことで、今後の話し合い活動へとつなげていきたい。

- ⑥ 本時の展開

- ⑦ 評価

それぞれの役割と話し合いの目的を理解し、他者の意見と自分の意見を比べながらよりよい話し合いになるように参加している。

## 10. はんなり京都

### 【1. 教科名（プログラム名）】

総合的な学習（茶道体験）

### 【2. 授業テーマ】

伝統文化に親しむ。

【3. 授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

茶道体験

【4. 授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】

日本伝統文化のよさにふれ、これからの生活にもそのよさを見いだしたり、生活したりしていくことができる心情を育てる。

【5. 教材とグローバル人材育成の接点（グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ）】

前年度までの総合的な学習は、体験活動やゲストティーチャーを迎えての授業、またそこから学んだことをまとめたり発表したりすることを中心に進めてきた。4年生では、「華道」「茶道」などの日本の伝統文化に触れる機会をつくり、将来の伝統文化の担い手である若い世代が日本文化の理解を深めることを目的にしている。

また、おもてなしの心や相手を大切にすること、自国の文化を尊重するだけでなく、他国の文化を尊重し、大切にすることにもつながる。

【6. 指導計画（単元計画）】

第一次 第1時 日本文化について調べよう

第2時 京都の年中行事について知ろう

第3時 祇園祭について調べよう（祇園祭見学）

第4時 調べたことを新聞にまとめよう

第二次 第1時 茶の湯について知ろう

第2時 茶碗を作ろう

第3時 自分でお茶を点ててみよう（茶道体験）

第三次 第1時 生け花で教室を飾ろう（華道体験）

【7. 本時について】

①日時・校時 平成27年2月19日（月）5校時～6校時

②対象学年・組 第4学年い組は組ろ組に組

③場所 多目的図書館茶道室

④本時の目標

茶道体験を通じて、茶道の作法を習得する。

⑤本時の教材について

本時では、自分で作った茶碗を使ってお茶を点てる。これは前期に、一人ひとりが粘土をこねて作った愛着のある茶碗である。形は様々であるが、色づけされ完成した茶碗は、茶の湯の場に相応しい個性あふれる作品である。

本時で身につけた茶の湯の作法やおもてなしの精神は、日常生活に活かすだけでなく、3月に実施する巣立ちの会でも活かすことを前提としている。

⑥本時の展開

⑦評価

茶道体験を通じて、茶道の作法を習得できたか。

## 1 1. 京都のおすすめを紹介しよう

### 【1. 教科名（プログラム名）】

総合的な学習の時間

### 【2. 授業テーマ】

京都おもてなし絵巻～京都の魅力を紹介しよう～

### 【3. 授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

京都のおすすめを紹介しよう

### 【4. 授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】

- ・伝統文化あふれる京都の町の魅力を発信することで自分の住んでいる町の魅力に気づく。
- ・京都の良さを紹介していく中でおもてなしの精神を育み、国際都市に住んでいる一員としての自覚を持つ。

### 【5. 教材とグローバル人材育成の接点（グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ）】

本教材では、古くから伝わる歴史的建造物や文化・伝統が息づく、国際観光都市である私たちの町京都の魅力について、市民の視点から観光客に紹介する。学習の形態としては7年生・6年生・5年生をそれぞれ均等にグループに分け学年・クラス解体で行う。

7年生・6年生は昨年度の総合学習で京都の良さを発信する学習を行っているため、昨年度の課題を生かして学習できる内容となっている。学年・クラス解体のため1グループあたり6人で5グループが集まって1クラスを形成しており、7年生の約半数が必然的にリーダーを務める。7年生は、グループのリーダー以外にクラスのリーダーも務め、教師は支援役に回り、基本的にはクラスリーダーを中心に生徒達で学習を進めていく。初めに昨年度の取り組みについてふり返る。5年生が初めての取り組みなので丁寧に説明し、その後クラステーマを観光・食・祭事・神社仏閣・伝統工芸・観光地・行事から1つ選び学習内容の検討や調べる方法、作成する資料などグループリーダーを中心に話し合う。3年間の活動の成果を生かしグループの7年生が力を合わせて計画・分担・作業の中心を担っていく。

6年生は自分の取り組みたい内容についてしっかりと計画を立て深めていく。班発表に向けて資料を整理する際、7年生と共に資料の厳選・追加など班テーマに沿った発表内容に向けて、昨年度の経験を生かし、資料を調べるだけでなく、実際に訪れインタビューしたり、写真を撮ったりと活動をより具体的なものにし、積極的に意見交

流させたい。また、7年生の取り組む姿を見て来年度は自分達がリーダーであるという自覚を持たせたい。

5年生は、初めての取り組みであるが、4年生の時に8年生と共同での総合学習を経験している。たてわりで学習する経験は積み重ねてきているが、一人ひとりがそれぞれに課題を決めて取り組むのは初めてのため、昨年度の資料を用意しどのような形で作成するのか7・6年生がサポートする。5年生では、まず伝えたい内容をインターネットや本などの資料を活用して調べ、自分の意見をまとめる活動を主とし、7・6年生と一緒に活動することで、学習に取り組む意欲を持たせたい。

3年間のたてわり総合学習を通して、自分の住んでいる町に誇りを持ち、積極的に京都を訪れる人達に京都の魅力を発信できる人材を育てていきたい。

#### 【6. 指導計画（単元計画）】

- |     |      |  |               |
|-----|------|--|---------------|
| 第1次 | 1時間目 | オリエンテーション  | 自己紹介・昨年度のふり返り |
|     | 2時間目 | 京都のどんな良さを伝えたらいいのだろう<br>(クラステーマ・班テーマを決め、班のテーマに沿って班単位で課題を話し合う) |               |
|     | 3時間目 | 個人の課題を決め、実践計画を立て作成準備にかかる<br>(夏休みを利用して調べ学習に取り組む)              |               |
| 第2次 | 4時間目 | 夏休みに調べてきたこと・やってみたことを発表する                                     |               |
|     | 5時間目 | 班発表の資料作成開始   |               |
|     | 6時間目 | 班発表の資料作成<br>(秋休み中に、さらに必要な情報を調べる)                             |               |
|     | 7時間目 | 秋休みの実践を班で報告し合い、班発表の資料作成に取り組む                                 |               |
|     | 8時間目 | 班の発表練習   |               |
|     | 9時間目 | 班ごとによるクラス内発表(本時)   |               |

#### 【7. 本時について】

- ① 日時・校時 平成27年11月13日(金) 3・4時間目
- ② 対象学年・組 対象学年5・6・7年(29名)
- ③ 場所 6年B組
- ④ 本時の目標

京都を訪れる観光客の人達に、自分達の知っている身近な京都の魅力を分かりやすく丁寧に伝えることができる。

#### ⑤本時の教材について

本時では、京都の魅力、京都に来たらずひ行ってほしいと思うおすすめの場所について紹介する。昨年はいくつかのグループにまとまって発表会を行ったが規模が大きすぎ

たため、発表するだけに終わってしまった所があった。生徒達も一般的に有名な所はある程度知っているが「実際に訪れたことはない」、「行ったことはあるがそれ程関心を持って見ていなかった」など、身近にある京都の良さに気づいていない現状もある。春からグループで1つのテーマを話し合っただけ、そのテーマに基づいて班内で課題を設定し、パソコンや図書で調べたこと、体験したことをリーフレットにまとめた。発表では昨年と同様、調べたことがそのまま説明されているような状態で発表が進んでいったため、初めてその場所を訪れる人にとって果たして分かりやすい内容なのか問いかけた。すると、「その場所は京都駅からどのように行けばいいのか」「そのお菓子は1個から買えるのか」「どれくらいの種類があるのか」など、自分達も知りたいと思う内容が意見として上がってきた。自分達が何となく知っている事でも、初めて訪れる人たちにはガイドブックである程度のことは分かっているイメージがでない。イメージがより具体的にできるような説明をするには、どのような資料を作り、どのような説明をすることが必要か、より京都の良さを伝えるための工夫を再度話し合った。話し合ったことをもとに、再度調べ直す。資料としてはパワーポイントやミニパンフレット、クイズなどを用意し、視覚的に訴えるもの、その資料をもとに掲載しているものだけでなくポイントになる部分を口頭で伝えられるようにしている。

これらの取り組みのまとめとして、リーフレット発表の時のように、書いてあることをそのまま説明するのではなく、書いてあることをもとに自分達で調べたおすすめの所を発表に織り込んでいくことを目標に発表に取り組んでいく。

#### ⑥ 本時の展開

#### ⑦ 評価

- ・京都を初めて訪れる人達の視点に立ち、資料を活用して、自分なりのおすすめを織り込んで具体的に説明することができたか。

## 1 2. わたしたちの生活と食糧生産

第5学年 社会科学習指導案

7月6日(月) 3限(10:50~1:40)

### 「わたしたちの生活と食糧生産」 ～日本のお米の現状から考えよう～

5年A組 30名

ランチルーム(東エリア)

指導者 藤田 智之

#### 1 単元目標

我が国の農業や水産業が、国民生活を支えていることや自然環境と深く関わっていることに気づき、農産物や畜産物の産地と自然環境を関連付けて考え、表現することができる。

#### 2 単元について

5年生の社会では、「国土の様子や環境、国民の生活との関連を理解させ、環境の保全

や自然災害の防止の重要性について関心を深め、国土に対する愛情を育てるようにする。」ことがねらいとなっている。本単元は、学習指導要領の内容（２）「我が国の農業や水産業について、次のことを調べたり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、それらは国民の食糧を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深くかかわりをもって営まれていることを考えているようにする。」の内容である。

ここでは、米づくりのさかんな地域として山形県庄内平野を例にあげ、地形や気候の関係、米づくりに関する人々の工夫や努力などの内容が取り上げられている。日本人の主食であるお米が、どのように作られ、どのように食卓まで運ばれてくるのかを知ること、そこに多くの人々が関わっていること等を理解することは重要である。特に農業は、自然環境の変化や時代の変化にも左右され、さまざまな問題を工夫や努力によって乗り越えてきた経緯がある。そのことを知ることは、21世紀を生きる生徒の生き方にも役立つであろう。

しかし、まだまだ抜本的な解決策がない問題もある。「農業従事者の高齢化」や「お米の消費量や生産量の減少」、そして、「お米の輸入自由化問題」など、日本のお米づくりに関する課題は山積している。現段階で答えがない課題を、仲間と考え、自分なりの解決策を導き出すことは、これからの社会に必要とされる汎用的な資質・能力の育成にもつながる。

### 3 指導計画（8時間扱）

第1次 日本のお米づくりの現状を知ろう

第1時 日本のお米づくりの現状から学習課題を考えよう（本時）

第2次 お米づくりの方法を知ろう

第2時 米づくりに適している地形と気候を考えよう

第3時 米づくりの工夫と努力をまとめよう

第4時 米づくりと地域の関係を知ろう

第5時 農家を支える人たちについて学ぼう

第6時 米の運搬の工夫を見つけよう

第3次 これからの米づくりを考えよう

第7時 日本のお米を守るべきか

第8時 日本のお米についての発表会をしよう

### 4 本時について

(1) 本時の目標

日本のお米づくりに関心を持ち、資料と関連付けながら自分の考えをもつ。

(2) 本時の教材について

本時では、日本のお米に関するさまざまな資料を提示し、そこから見えてくる課題や展

望について考えることをねらいとする。教科書の流れでは、課題や展望については授業の最終部分に配置されている。しかしそれでは、今後の日本のお米やお米づくりのことにについて考える時間が少ない。学習が現状把握だけにとどまってしまわないかと考えた。これからは、現状を把握すると共に、学習した内容を活用することが求められる。そこで本単元では、単元の導入で日本のお米についての課題に取り組み、常に、その課題と向き合いながら授業を進めていけるように設定した。日本のお米やお米づくりの課題を知り、資料を読み解きながら考えを膨らませ、一人一人に問いをもたせ、考えさせる。

授業で提示する資料は、「作付面積と生産量」、「消費量の低下」、「農業従事者の変化」等である。これらの資料を読み、身近なお米について興味関心をもたせ、日本のお米づくりには課題が多いことに気づかせる。最近の話題の1つである TPP の問題（お米の輸入自由化）も取り扱い、生徒に社会の状況について考える機会を設けるとともに、身近なお米にもグローバル化の波が押し寄せていることを認識させる。そして、「化学薬品と農薬の使用量の変化」や「新しい品種ができるまで」等の資料を提示し、農家がどのような努力や工夫をしているのかについても触れ、今後の展望を考えていく資料としたい。

### (3) 生徒分析と指導

感性を育てるための汎用的資質・能力：「批判的思考力」
----------------------------

本時は、複数の資料を読み解きながら、資料や友達の考え方、意見について比較したり、関連付けたりする中で、多様な視点で物事を捉えたり、考えを出し合ったことを統合して新しい解（考え方）を導き出したりできる力を育成することを目的としている。

これまでの授業でも、常に物事を多面的に捉え、さまざまな資料を比べたり、関連付けたりしながら進めてきた。まだまだ、一人では多角的な視点をもつことは難しいが、協働的学習によって、少しずつではあるが視野広がってきたように思う。

授業では、まず、生徒のお米に対する意識を確かめる。「朝ごはんは何を食べましたか」や「そのくらいお米を食べているのか」など、この後のデータと比べられるような内容にしていく。

次に、複数の資料を提示し、そこから考えられる日本のお米に関する課題について出し合う。資料を読み取りながら、お互いに気が付いたことや考えたこと、疑問に思ったことなどを話し合い、全体で共有していく。

そして、お米の輸入自由化の問題に触れ、今後の日本のお米づくりは、どのように対応していけばいいのかを考え、意見を1つにまとめていく。机間指導を行い、グループの話し合い活動が感覚的になったり、資料の解釈を読み間違えたりしないように助言していく。発表では、それぞれのグループの考えの共通点や相違点を考えながら聞くように指示する。

最後に、本時の学習を振り返る時間を設ける。自分のグループの考えだけでなく、他のグループの意見等から、自分なりの視点で日本のお米に関するこれからの展望をまとめる。

その際、授業で取り扱った資料を根拠にして、考えさせるようにする。

(4) 本時の展開

(5) 本時の評価

2つ以上の資料と関連付けながら、日本のお米の展望について自分なりの考えをもつことができる。

### 13. これからの自動車を考える

#### 【1.教科名（プログラム名）】

社会科

#### 【2.授業テーマ】

これからの自動車を考える

#### 【3.授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

自動車をつくる工業

#### 【4.授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】

- ・自動車をつくる工業をとおして、我が国の工業生産について意欲的に調べ、従事している人々の工夫や努力、工業生産を支える貿易や運輸などの働きを理解するとともに、国民生活を支える我が国の工業生産の発展について考えようとする。
- ・我が国の工業生産の様子から学習問題を見だし、自動車をつくる工業を具体例として、調査したり、地図、統計などの資料を活用したりして調べたことを白地図や作品にまとめるとともに、工業生産と国民生活とを関連づけて考えたことを適切に表現する。

#### 【5.教材とグローバル人材育成の接点（グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ）】

これまでの学習では、日本の工業生産についてその特色やさかんな地域について学んできた。自動車づくりでは、自動車を作る工程での工夫や努力、自動車づくりを支える部品の供給、消費者への輸送などの観点で学習を進めてきた。こられの内容の中心は、まず日本国内の現状を把握することが中心であった。本時までの学習では、身近に見る自動車を自分の経験から捉えたり、教科書に掲載されている資料から読み取ったりしながら、少しずつ自動車に関わる人の多さや自動車づくりの工夫に目を向けるようになってきた。

そして、本教材で扱う内容では、人や環境にやさしい車として、環境問題や多様なニーズをもつ人々に対して、どのような取組みがなされ、実際にどのような機能をもつ自動車が作られているのかを知ること、自動車づくりを通して、さらに多くの視点で物事を考え、さまざまなニーズがあることを学ぶことになる。その意味では、多様なものの見方や考え方に触れ、さらに視野が広がることが予想される。この視野を広げ、さまざまな視点で考えることが、これからのグローバル社会に必要な資質・能力につながっていくと考える。

5年生の今後の学習では、日本国内の状況を把握し、さらに未来に向けてさまざまな視点で工業生産が行われたり、情報や環境という視点で自分達の生活を見ていったりすることになる。6年生では歴史の学習に入っていく。日本の歴史を理解し、これからの日本について考えていくことになるであろう。過去、現在、未来といった視点をもつことは、グローバル人材として、身に付けておかなければならない資質であり、能力であると考えられる。5年生では、自分の生活から日本全体のことへの視点の広がりがあり、6年生では歴史を通して、過去と向き合う。このようにして、社会科の学習では視点や視野、立場等の広がりをもたせ、そこで学習してきたさまざまな視点で物事を考えていく力をつけていくことになるであろう。

#### 【6. 指導計画（単元計画）】

第一次 自動車づくりを知ろう

第1時 自動車について知っていることを伝え合おう

第2次 自動車工場について調べよう

第2時 自動車づくりの工程を調べよう

第3時 自動車づくりの工夫を見つけよう

第3次 これからの自動車

第4時 自動車づくりの最先端を知ろう

第5時 グループで調べたい自動車の特徴を調べよう

第6時 これからの自動車づくりについて考えよう（本時）

#### 【7. 本時について】

① 日時・校時 2015年11月20日（金）2校時

② 対象学年・組 5年A組（男子15人、女子15人、計30人）

③ 場所 5年A組教室

④ 本時の目標

- ・さまざまな自動車の特徴を知り、これからの自動車づくりに必要なことを考えることができる

⑤ 本時の教材について

本時の教材は、人や環境にやさしい車に関する資料である。前時までには、10グループに分かれ、「プラグインハイブリット車」や「電気自動車」、「バイオエタノール車」、「燃料電池車」、「空飛ぶ車」の中から1つを選び、その特徴を調べている。本時では、その調べてきた内容をお互いに伝えあい、全体で共有する。それぞれの車の特徴を聞き合い、共通点や類似点、相違点を見つけ、現在の自動車にはどのような工夫がなされているのかを考えていく。

そして、3つの資料（自動車事故率の推移、外国人就労数の推移、日本の年齢別人口推

移)を提示、これからの日本が向き合わなければならない状況の中で、それぞれの立場からこれからの自動車づくりにとって、どのような機能が必要になってくるのかを話し合う。そして、その中から、今回調べてきた自動車に1つ付け加えたとしたら、どの機能にするのかを選び、その理由も合わせて発表する。

最後に、メタ認知を行う。自分だったら、これからの自動車づくりで必要なことは何かを考えまとめる。

⑥ 本時の展開

⑦ 評価

- ・これからの自動車づくりで大切にしなければならないことを1つ選択し、学習と関連付けてまとめることができる。

#### 1 4. 世界の時刻や天気を調べてみよう

【1. 教科名 (プログラム名)】

英語 (異文化理解)

【2. 授業のテーマ】

本単元は、時刻や天気をたずねたり聞き取ったりする単元である。これまでに天気の実表現や100までの数字は学習をしているが、単に今現在の天気や時刻を伝えるのではなく、ニューヨーク・ロンドン・カイロ・シドニーといった世界の様々な都市の時刻と天候をリレー中継している英語を聞き取り、世界には時差が存在することに気づいたり、日本とどのくらいの時差があるのかについても興味を持ってもらいたい。

【3. 授業名 (単元名、教材名、プログラム名)】

世界の時刻や天気を調べてみよう

【4. 授業目標】

- ・曜日・時刻・体調などのテーマで英語を使って対話することができる
- ・聞いて、曜日・時刻・体調などを理解できる
- ・時差や日本の位置などを理解できる

【5. 教材とグローバル人材育成の接点】

世界には時差が存在することは日本で生活をしていると実感する機会はほとんどない、しかし、時差に触れる機会はいくつか存在する。例えば、次のオリンピック開催都市であるブラジルは、ちょうど日本の反対側にあるため、日本とはほぼ半日の時差が存在する。ワールドカップ中継などテレビを見ていると、中継先の現地リポーターが、現地時間の〇時△であると伝えていたり、現地の昼間に開催されている競技中継を見ようと思うと、日本では夜中にテレビ放送をしているなど、これらは時差が存在するから起こることである。生徒たちは、日常的に時差を意識して生活はしていなくても、漠然と時差については知っている。この単元では、国や都市の位置・簡単な特

徴と合わせて、各都市の天候・時刻を聞き取る形で日本との時差に目を向けさせたい。

#### 【6. 授業計画】

- ・世界の時刻や天気を調べてみよう (2 / 2)

#### 【7. 本時について】

- ①日時・校時 12月7日(月) 2限(C組)、3限(B組)、4限(A組)
- ②対象学年・組 5年A・B・C組(各組(男子15名女子15名 計30名))
- ③場 所 語学教室
- ④本時の目標

- ・時刻や天気について対話をしたり、界各国の天気や時刻を聞き取ることができる。
- ・日本と外国との間の時差について知ることができる。

#### ⑤本時の教材

まず、導入では、モニターを見ながら全員でクリスマスソングを歌う。モニターを見ながら歌うことで、歌詞を覚えていなくても顔をあげて歌うことができる。その後、フォニックスワークブックを使い、簡単な単語の聞き取りを行う。これは、少しずつ音声を文字と一致させて書けるようにしていくことで、無理なく7年生以降のライティングにつなげていくことをねらいとして、毎回行っている。その後、前時までの復習として、全員で数字1～100の発音を行い、ペアでもカウンティングゲームを行い、楽しみながら数字の確認を行う。その後、時計を用いて、What time is it?と時刻を尋ね、時刻の言い方を学習する。ここでは、3:00や4:00といったちょうどの時間ではIt's ~o'clock. と言い、それ以外の時間にはo'clock が見つからないことも押さえない。その後、世界各国の国旗を見せながら、この後のリスニングで出てくる国について、さかんなスポーツや有名な動物・食べ物といった主な特徴をクイズ形式で導入し、最後にテレビのスポーツ中継の例を挙げて、それらの外国との間には時差が存在することを確認したい。そして、最後に世界の都市を結ぶリレー中継を聞いて、それぞれの都市の時刻と天候を聞き取る活動をまとめとして行う。

#### ⑥ 本時の展開

#### ⑦ 評価

世界各国の時刻や天候を聞き取ることができたか。

世界の様々な国や都市について知り、日本との時差について知ることができたか。

### 14. 話題をとらえて話し合おう～バズセッションしよう～

#### 【1.教科名(プログラム名)】

国語

#### 【2.授業テーマ】

「少年の日の思い出」 ～「僕」の過ちを許せるか～

### 【3. 授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

「少年の日の思い出」

### 【4. 授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】

- ・ 作品を読み「僕」のちょう収集への熱情と「エーミール」に対する複雑な心理について捉える。
- ・ 「僕」が犯した過ちについて、根拠を示しつつ意見交換することで自らの読みを深める。

### 【5. 教材とグローバル人材育成の接点（グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ）】

グローバル社会において、多様な価値観、考え方の人々と対話することにより課題を解決していくことは必要不可欠である。そのような、対話による課題解決の力を育成するため、本教材を通して、バズセッションのスタイルをベースとした対話の授業を行う。本教材の「少年の日の思い出」とは、主人公「僕」がちょうへの熱情の余り、模範少年「エーミール」のちょうを盗み、つぶしてしまうという「過ち」の思い出であるが、この「僕」の過ちを許せるか否か、ということテーマに裁判を模して対話させる。「裁判」と称する話し合いの中で、5人をひとグループとし、そのうち4人は「僕」の「過ち」を裁く陪審員の立場、1人は陪審員の意見を聞いてそれを評価する裁判官の立場で話し合いに臨ませる。裁判官役の生徒は中立の立場に立ち、話し合いの司会も担当する。同じグループの中に、対立する意見を持つ立場の陪審員がいるわけであるが、生徒には、できるだけ全員一致で判決を下すように指示する。このとき、多様な意見の中で、最も説得力のある意見はそれか、最も重要と考える意見はどれかを見極めて、判決を下すように指示する。したがって、安易な多数決はしないようにさせる。多様な考え方があの中で、認め合いながら何を重要と考えるか、そうすることによって意見をまとめていく。このような対話の学習をすることにより、今後、もっと大きな社会の中で、様々な立場の人々と建設的に対話する力が養われるのではないかと考える。

### 【6. 指導計画（単元計画）】

#### ・ 第1次 内容理解

第1時 全文通読 初読の感想を持つ

第2時 時系列の整理 共感点・疑問点を出し合う

第3時 第1場面（現在）の「私」について考える。

第4・5時 第2場面（回想） 「僕」の熱情と「エーミール」との関係性について考える

#### ・ 第2次 「僕」の「過ち」について考える

第6時 僕の「過ち」を許せるか否か、自分の考えをもつ

第7時 「僕」の「過ち」を許せるか否か、判決を下せるように話し合

う。(本時)

## 第8時 自分の考えの整理と発表

### 【7. 本時について】

① 日時・校時 2016年 2月5日(金) 3限

② 対象学年・組 7年B組 30名

③ 場所 7年B組 教室

#### ④ 本時の目標

「僕」の「過ち」を許せるか否かということを中心に、根拠を示しながら話し合い、自分の考えを深める。

#### ⑤ 本時の教材について

「過ち」を犯した「僕」を許せるか否か、という視点を持って本教材を読んだとき、この物語はどう見えるだろう。一人称で語られる物語は、その大半が「僕」の心情の叙述である。そこからは、「僕」の熱情、「僕」の弱さ、「僕」の後悔が多く読み取れる。悪意ではなく熱情の果てに犯したこの「過ち」に対し、こんなに反省しているのだから許してあげたらいいのでは、と思う。しかし一方で、傷つけた相手である「エーミール」に対しては、「僕」は本当に悪かったと思っているか疑わしい描写もある。心底反省しているなら、「エーミール」に軽蔑されても、自分のちょう収集を馬鹿にされても、「のどぶえに飛びかかるところだった」となるだろうか。そこには「僕」の甘さが見え隠れする。「僕」の目を通して語られる「エーミール」はいけ好かない「模範少年」である。「僕」の謝罪を受け入れず、「僕」を絶望の淵へ追いやる世界のおきての代表者である。しかし、物語を「エーミール」に視点を当てて読んだとき、この模範少年は、「クジャクヤママユ」を苦勞してさなぎから返し、それをつぶされても、何とか繕おうとする努力家の少年である。つぶしたのはまさか隣に住む「僕」であるなどという疑いすら持たず、やってきた「僕」に事の次第を話している。僕の謝罪を受け入れられなかったのは、「エーミール」のここまでの努力からすれば、仕方のないことだとも思える。とはいっても、「エーミール」が「僕」に投げかけた蔑みの言葉はあまりにも高慢で、僕を深く傷つけた。謝罪を受け入れてもらえず、「償いはできない」という絶望感の中で、僕はある程度まで熱情を注いだちょう収集をやめる。それが唯一、自分に科せられる「罰」だったとも読める。このような「僕」の心情を考えれば、あるいは「僕」以外の視点で読んでみれば、果たしてこの「過ち」は許すべきか、許さざるべきか。何を持ってして「許す」「許さない」を決めるのか。それを考えながら本教材を読んだとき、人にとって大切なことは何なのか、ということまでもが見えてきそうである。

#### ⑥ 本時の展開

#### ⑦ 評価

他の意見を聞くことによって、前回持った自分の考えに新たな考えを加えることができる。

### 15. 京都を英語でプレゼンテーションしよう

1. 日時 平成28年3月4日(金) 第5校時 (13:38~14:28)

2. 学年・組 第7学年C組 計29名（男子15名 女子14名）

3. 場所 第7学年C組教室

4. 単元名 *New Horizon English Course 1, Unit10 観光地から* (pp. 94-99)

5. 単元の目標

(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)

・相手の条件にあったお勧めスポットを紹介しようとする。

(外国語表現の能力)

・助動詞 can を使って、自身のできることとできないことについて、述べることができる。

・京都のおすすめスポットを、助動詞を使って相手に伝えることができる。

(外国語理解の能力)

・相手のできることとできないことについての内容を、助動詞 can が用いられた文を聞いたり、読んだりして理解することができる。

(言語や文化についての知識・理解)

・助動詞 can の文法構造や用法を正しく理解することができる。

・京都案内を通して、京都の魅力を再度認識することができる。

6. 単元について

#### ①教材観

本単元は、助動詞 can を取り扱う。助動詞 can を用いることで、自分のできることとできないことについて述べるができる。本単元で学ぶ助動詞 can の意味には①主語のもつ能力②周囲の状況による可能性の2つがあり、この単元で学ぶのはこの2つである。この2つはどちらも日本語では「・・・できる」に対応するため、区別がつきにくいこともある。この表現を使用することで、様々な主語や動詞を用いて自身や友だちの得意なことや苦手なことを表現できる。また、We can ski here. などの文のように、ある特定の場所で何ができるか、できないかということも表現できる。したがって自己表現や、周りの状況を説明する際によく使われる表現であり、英語話者との会話の中で有効である。

生徒は初等部で、自己紹介をする際などに助動詞 can を使用し自己表現活動を行い、ある程度の意味を身体感覚的にとらえていると考える。

7年生になってから be 動詞、一般動詞、現在進行形などを学習してきた。一般動詞を学習する際に登場した does の使用に関しては平叙文と疑問文で動詞の形が変化するにたいして、can はいかなる主語であっても、助動詞の can の後ろは、動詞の原形である。次の単元で過去形が登場するので、その前に助動詞 can 概念を把握しておくということは大切であると考え。8年になると must や will などの助動詞を学習す

ることを考えると、7年の間に助動詞に触れる最初の単元であると考えられる。

## ②生徒観

本学級の生徒は新しい表現を学習するとすぐに使いたがる生徒が多く、授業中のスモールトークなどの場面では英語が飛び交う状況が頻繁に見受けられるので、英語に親しみを感じている生徒が多いと考える。生徒は1年生から9年間の英語カリキュラムに沿って、スパイラルに学習し英語に親しんできた。身体感覚とともに英語に接し、歌やチャンツ、体を動かすこととともに英語を学んできた。そのため技能別に考えると、インフォメーションギャップなどの活動において、比較的「聞く」「話す」について意欲関心が高く、音声優位の生徒が多い。初等部では自己表現活動の際に、何度かcanが登場し、パンプラクティスをやってきたため、生徒にとっては三年間で学習する文法事項でも定着率が高いと思われる。しかし、やはり英語を苦手としている生徒もいる。be動詞か一般動詞かの区別がつかず、教員の問いに答える際に誤って発言する生徒も少なくない。口頭では正確に表現できていても、ライティングになると、語順がわからなくなる生徒も少数ながらもいると考える。ALTとの対話する学習において、自信が持てず小さな声で話したり、インフォメーションギャップでの活動の際に何を言えばいいのかわからずあたふたする場面が多々あった。

前単元において、現在進行形（be動詞＋現在分詞）を学習しているため、canの後の動詞を進行形にしてしまう生徒がいると考える。また、She can play tennis.とするところを、She can plays tennis.と動詞の語尾に三人称単数のsをつけてしまう人がいるかもしれない。

## ③指導観

現在進行形との混乱が予想されるが、まずは口頭で既習事項をパンプラクティスなどで復習し、canの用法をとらえさせていきたい。復習はいくつかの質問を特定の生徒に問いかけ、その返答が正確かどうかを確認していきたい。助動詞canが他のbe動詞などの用法と混同しないように、平叙文、否定文、疑問文について口頭での表現を導入の際にパンプラクティスで多く取り入れ、動詞が常に原形になることになれば、canの理解を深めさせていきたい。その後canの意味や用法をより理解するために、自分ができることやできないことを、①とても上手にできる、②まあまあできる、③少しできるなどの程度をふまえて表現したり、インタビューによって相手を知る活動を取り入れるなどして、生徒同士で伝え合う機会を増やし、生徒の意欲を喚起させるような活動を多く取り入れたい。また、教師のcan、can'tを用いた発話はもちろん、インフォメーションギャップなどを用いて生徒の使用場面を多く設定しcanの定着を図りたい。

## 7. 指導計画（全8時間）

第一次 can の肯定文、否定文 (pp94-95) 2 時間

- ・ can の肯定文、否定文の導入
- ・ can の肯定文、否定文を用いた活動

第二次 can の疑問文と応答 (pp96-97) 2 時間

- ・ can の疑問文と応答の導入
- ・ can の疑問文と応答を用いた活動

第三次 疑問詞をふまえた can の学習 (pp98~99) 2 時間

- ・ 疑問詞をふまえた can の導入
- ・ 疑問詞をふまえた can を用いた活動

第四次 自分のおすすめの場所 (京都) を伝えよう① 1 時間

- ・ 条件にあったおすすめを考える

第五次 自分のおすすめの場所 (京都) を伝えよう② 1 時間 (本時)

第六次 まとめ 1 時間

## 8. 本時の目標

### (1) 本時の目標

- ・ 自らがおすすめする京都を、その場所でできることともに説明することができる。  
(表現の能力)
- ・ 助動詞 can の文法構造や用法を正しく理解し、表現の中で正しく使用することができる。(言語や文化についての知識・理解)

### (2) 本時について

#### ①教材観

本時は、好みや自身のおすすめを紹介する場所を相手の希望を聞いた上で考え、その理由を can を使って表現することを目標とする。

前時では、ALT のオーストラリアに住む友人に京都のおすすめを紹介している。彼女は4月に桜を見に京都を訪れる予定をしており、桜を見た後に甘いものを食べたいと考えている。自身のおすすめを伝える機会は日常的にそう沢山あるわけではないが、生徒に尋ねると一度は道を歩く外国人に場所を尋ねられたことがある生徒が多く見受けられた。

本時は教員が駅で遭遇した外国人に対して、その外国人が京都でしたいと思っていることを聞き取り、その条件にあった場所を考える。その際、ただ自分の好みを伝えるだけでなく、相手が見たい物や、食べたい物をしっかり聞き取り考えることが必要である。

自身の好みやお気に入りの物や食べ物をただ紹介するのではなく、相手の条件にあった場所を伝えるということは、これから国際社会で生きていく彼らにとって大切な

ことである。一方的に話すということはロボットにでもできることであると考え。相手がいるから会話が成立するのであって、相手がいなくて話すのはただの独り言である。相手の心情、好みをくみ取って相手の立場に立って物事を考えること、それこそがこれから国際社会で生きていく生徒にとって大切なことではないかと考える。

## ②生徒観

生徒は本時までには can の用法を学習してきたが、パタンプラクティスやインタビューなどの様子を見てみると、定着度は高いと考える。

導入のビデオを見た際に相手が話している内容を理解できない生徒がいるかもしれない。語彙は聞き取れても、意味がとれない生徒が少なからずいると考える。個人で考える際に、日本のものを英語でどのように表現するのか困惑する生徒がいるかもしれない。表現においては得意とする生徒とそうでない生徒が混在するが、4月から何度か行っているスピーチや show and tell のような表現では、ほとんどの生徒がある程度正しい英語を使って表現することができる。しかし、事前に丹念にスクリプトを準備せず、相手の条件に合った場所を考え紹介するという今回の目標は難しく感じる生徒が多いように考える。また、相手の興味関心に沿った適切な場所を思い出すことはできるが、その理由を述べる語意につまずきが予想される。内容は理解できるが相手の希望に沿った場所を考えることに課題がある生徒もいるかもしれない。

## ③指導観

展開1の場面ではまず、教員が遭遇した外国人からおすすめの場所を紹介してほしいと話す英語を聞くことになる。部分的には聞き取れていても、全体の意味理解が難しい生徒のために、教員がビデオに関するいくつかの質問を問いかけ、聞き取れた英語のキーワードを箇条書きにしてする。展開2の場面では、個人で考え、おすすめの方法とその理由を考えワークシートにメモをとる。その際に日本の建物やスイーツの名前を英語で表現するのに困っている生徒には机間指導で個別に対応する。また良いアイデアが浮かばないものや、効果的に相手に伝えることが苦手な生徒のためにペアワークを用いる。相手の条件にあった場所を短時間で考えることが難しい生徒にはワークシートにある word box を手本に考えさせる。自分で考えたことを効果的に伝えることを助けるためにワークシートにはどのような手順で意見を述べ説明すべきかを提示する。その後、グループ内で各自の発表を行い、効果的な表現の方法や相手の発表の良い点を知る機会としたい。

### (3) 本時の展開

#### ③評価(の観点と方法)

- ・自分のおすすめの方法でできること、can を使ってワークシートに書くことができたか。【関心・意欲・態度】(ワークシート)

・グループ内での活動において、自身の意見を伝えることができたか。【表現の能力】  
(観察)

④板書計画

⑤準備物

⑥教師：ワークシート、DVD

生徒：辞書、教科書、

ファイル

## 16. 京都のおすすめを紹介しよう

【1. 教科名 (プログラム名)】

総合的な学習の時間

【2. 授業テーマ】

京都おもてなし絵巻～京都の魅力を紹介しよう～

【3. 授業名 (単元名、教材名、プログラム名)】

京都のおすすめを紹介しよう

【4. 授業目標 (単元、教材、プログラム) のねらい】

- ・伝統文化あふれる京都の町の魅力を発信することで自分の住んでいる町の魅力に気づく。
- ・京都の良さを紹介していく中でおもてなしの精神を育み、国際都市に住んでいる一員としての自覚を持つ。

【5. 教材とグローバル人材育成の接点】

本教材では、古くから伝わる歴史的建造物や文化・伝統が息づく、国際観光都市である私たちの町京都の魅力について、市民の視点から観光客に紹介する。学習の形態としては7年生・6年生・5年生をそれぞれ均等にグループに分け学年・クラスを解体して行う。

7年生は昨年度の総合学習で京都の魅力を発信するという内容の学習を行っているため、昨年度の経験や課題を活かして学習できる内容となっている。学年・クラスを解体して、1グループあたり6人で縦割りの5グループが集まって1クラスを形成しており、7年生の約半数がリーダーを務めている。7年生はグループリーダー以外にクラスのリーダーも務め、指導者は支援役に回り、基本的にはクラスリーダーを中心に生徒達で学習を進めていく。初めに昨年度の取り組みについて振り返り、5年生にとっては総合学習は初めての取り組みなので、丁寧に説明し、その後クラステーマを観光・食・祭事・神社仏閣・伝統工芸・観光地・行事から一つ選んで、学習内容の検討や調べる方法、作成する資料などグループリーダーを中心に話し合う。7年生にとっては今年度の取り組みは三年間の活動の集大成とも言えるので、二年間の経験や課

題を活かして、リーダーとして自覚を持って計画・分担・作業の中心を担っていくように活躍させていきたい。そして、三年間の縦割り総合学習を通して、自分の住んでいる町に誇りを持ち、京都を訪れる人達に積極的に京都の魅力を発信できる人材を育てていきたい。

#### 【6. 指導計画（単元計画）】

- 第1次 1時間目 オリエンテーション 自己紹介・昨年度のふり返り  
2時間目 京都のどんな良さを伝えたらいいのだろう  
(クラステーマ・班テーマを決め、班のテーマに沿って班単位で課題を話し合う)  
3時間目 個人の課題を決め、実践計画を立て作成準備にかかる  
(夏休みを利用して調べ学習に取りかかる)
- 第2次 4時間目 夏休みに調べてきたこと・やってみたことを発表する  
5時間目 班発表の資料作成開始  
6時間目 班発表の資料作成  
(秋休み中に、さらに必要な情報を調べる)  
7時間目 秋休みの実践を班で報告し合い、班発表の資料作成に取り組む  
8時間目 班の発表練習  
9時間目 班ごとによるクラス内発表(本時)

#### 【7. 本時について】

- ① 日時・校時 平成27年11月13日(金) 3・4時間目  
② 対象学年・組 対象学年5・6・7年(29名)  
③ 場所 7年ABC組  
④ 本時の目標

京都を訪れる観光客の人達に、自分達の知っている身近な京都の魅力を分かりやすく丁寧に伝えることができる。

#### ⑤ 本時の教材について

本時では、京都の魅力、京都に来たらぜひ行ってほしいと思うおすすめの場所について紹介する。昨年はいくつかのグループにまとまって発表会を行ったが規模が大きすぎたため、発表するだけに終わってしまった所があった。生徒達も一般的に有名な所はある程度知っているが「実際に訪れたことはない」、「行ったことはあるがそれ程関心を持って見ていなかった」など、身近にある京都の良さに気づいていない現状もある。春からグループで1つのテーマを話し合っ決めて、そのテーマに基づいて班内で課題を設定し、パソコンや図書で調べたこと、体験したことをリーフレットにまとめた。発表では昨年と同様、調べたことがそのまま説明されているような状態で発表が進んでいったため、初めてその場所を訪れる人にとって果たして分かりやすい内容

なのか問いかけた。すると、「その場所は京都駅からどのように行けばいいのか」「そのお菓子は1個から買えるのか」「どれくらいの種類があるのか」など、自分達も知りたいと思う内容が意見として上がってきた。自分達が何となく知っている事でも、初めて訪れる人たちにはガイドブックである程度のことは分かっているイメージがでない。イメージがより具体的にできるような説明をするには、どのような資料を作り、どのような説明をすることが必要か、より京都の良さを伝えるための工夫を再度話し合った。話し合ったことをもとに、再度調べ直す。資料としてはパワーポイントやミニパンフレット、クイズなどを用意し、視覚的に訴えるもの、その資料をもとに掲載しているものだけでなくポイントになる部分を口頭で伝えられるようにしている。

これらの取り組みのまとめとして、リーフレット発表の時のように、書いてあることをそのまま説明するのではなく、書いてあることをもとに自分達で調べたおすすめの所を発表に織り込んでいくことを目標に発表に取り組んでいく。

⑥ 本時の展開

⑦ 評価

- ・京都を初めて訪れる人達の視点に立ち、資料を活用して、自分なりのおすすめを織り込んで具体的に説明することができたか。

## 1 7. 動物のなかまを分類しよう

第8学年 理科学習指導案

7月1日(水) 3限(10:50~11:40)

### 「動物のなかま」

8年C組 28名

多目的融合教室(東エリア 南棟1階)

指導者 野ヶ山 康弘

#### 1 単元目標

- ・身近な動物の観察を行い、動物に対する関心をもち、動物を観察するとともに、観察の視点や方法を身につける。
- ・セキツイ動物の五つの仲間の体のつくりやふえ方等の特徴を、それぞれの生活の場所やしかたと関連づけてとらえる。
- ・ザリガニやイカなどの観察を通して無セキツイ動物の特徴を知り、無セキツイ動物がいくつかの仲間分類できることを理解する。

#### 2 単元について

グローバル人材の育成や21世紀型学力の問題が今日的な課題となり、それらの資質・能力の育成のための言語活動(コミュニケーション)が重要視されるようになってきている。この視点で科学を見ると、科学そのものがそもそもグローバルなコミュニケーションツールである。自然事象は世界共通であり、それを科学的に考えることも世界共通であり、使

う言語が違うだけで考え方は同じなのである。つまり、科学的なものの見方・考え方を育てることは、グローバル人材を育てることにつながるといえるのである。実際にグローバル人材の資質・能力の一つに、論理的思考力が挙げられる。そこで、本単元では論理的思考力の育成に着目し、これまでに取り組んできたCA授業の授業構成を活用することとした。

これまでに、第3学年「昆虫と植物」では昆虫の成長と体のつくり、第4学年の人の体のつくりとはたらき」では骨と筋肉のはたらき、第5学年「動物の誕生」ではメダカや人の誕生、第6学年「人の体のつくりとはたらき」ではヒトの呼吸や消化・吸収、血液の循環などについて学習してきた。また、第7学年「植物の生活と種類」では、植物の体はたくさんの細胞からできていることを学習している。この中で生徒は、動植物に触れる体験や生活経験の中で、生命に対する感性を育んできている。

本単元では、体のつくりや子の生まれ方などの特徴からセキツイ動物の種類や分類について理解させる。また、観察に基づいて無セキツイ動物の特徴を見出し、セキツイ動物と無セキツイ動物の共通点・相違点について考えさせ、自然界には多様な無セキツイ動物がいることを理解させる。さらに、論理的思考の形式「分類」の概念形成を促し、科学的なものの見方・考え方を深めていく。

この学習を通して、生物の多様性は進化によってもたらされたものであることを知り、生物についての理解を深めたり、生命尊重の態度を育てたりしていきたいと考える。

### 3 指導計画（8時間扱い）

- ・第1次 身近な動物の観察 2時間
- ・第2次 セキツイ動物のなかま 3時間（本時3／3）
  - 子孫の残し方・子の育ち方
  - 体表面のようす・体温の保ち方
- ・第3次 無セキツイ動物のなかま 3時間
  - 無セキツイ動物の体のつくりや行動を調べよう
  - 節足動物・軟体動物

### 4 本時について

#### (1) 本時の目標

動物を仲間分けに対して、観察する観点を決めて比較したり、検討したりすることができる。

#### (2) 本時の教材について

本時の学習のねらいとしては、知識の習得と論理的思考の形式「分類」のブリッジング（一般化）の2点がある。まず、知識の習得の点では、魚類・両生類・ハチュウ類・鳥類・ホニュウ類の体のつくり・生活場所・このふやし方などの相違点を学ぶことである。次に、

これまでの理科学習における「分類（仲間わけ）」のブリッジング（一般化）である。論理的思考（概念形成）の形式「分類」において、生物分野で見れば、第3学年では「昆虫と植物」、第4学年では「ヒトとその他の動物」、第5・6学年では「魚とヒト」、第7学年では「植物」について、文脈を変えながら次第に高度になっていく分類を学習してきている。これまでの学習で獲得してきた「分類」という概念を、文脈を変えて活用できるようにしていくことが、知識の習得とは別の本教材の大切なねらいである。

そこで、論理的思考の形式「分類」に対する認知的葛藤、分析（社会的構築）、メタ認知を授業構成（アクティブ・ラーニング）に取り入れることにした。また、これまで話し合い活動で活用してきたホワイトボードでは、生徒自身が考え方の変容をメタ認知することが難しく、アクティブ・ラーニングの効果が十分に示すことができなかった。この点を克服するために、即時的でクリアな課題提示や話し合いや討論における考えの集約や発表の際に一度にすべてを提示したり、必要な部分を必要ときに確認したりできるICTの活用によって、より効果的なアクティブ・ラーニングを実現することにより、さらなる論理的思考力の向上を目指すことにした。

### (3) 生徒分析と指導

感性を育てるための汎用的資質・能力：「論理的思考力」
----------------------------

本時は、「セキツイ動物の仲間分け」の学習である。生徒たちは、学習した知識や経験をもとに分類することはできるが、そのときに目の前にない事実にとらわれてしまい正しく分類ができなくなることがある。理科において、与えられた条件をもとにどう分類するのかという思考は重要であり、科学的なものの考え方の大切な要素の1つである。知識をどう論理的に組み立て、誰もが納得できる結論を導き出すのかという「感性」が必要となってくる。このことから、生徒が動物を分類する際に、目の前にない定かでない知識にとられることなく、動物のからだのつくりに着目して仲間わけをする必要性（属性）に気づかせることが大切となってくる。

そこで、本時では、動物の絵・生息場所・食など、生徒たちが持っている知識から役に立つ属性を考えさせることにした。そして、生徒が選んだ属性はすべての動物に一貫して適用されなければならないが、この本時の課題にはいくつかの異なる解がある。これによって、班や学級での議論の中で、誰もが納得する属性について考える授業展開を試みることにした。

まず、生徒の関心を高めるために、タブレットを教材提示装置として使用し、いくつかのセキツイ動物を観察させ、その特徴を班で話し合わせる。これによって、生徒の知識と属性の関係について、考え方の視点を整理させる。

次に、本時は教材として、「Thinking Science L6」のセキツイ動物の絵5種類（魚類・両生類・ハチュウ類・鳥類・哺乳類）を用意し、それを3つ、または4つに分類する活動

を行う。ただし、仲間分けの条件として、「①各グループには少なくとも2匹の動物が入らなければならない」、「②1つのグループのメンバーは少なくとも1つの共通の特徴を持たなければならない」、「③各グループは他のすべてのグループと違うものでなければならない」を提示し、このルールの中で分類させる。このルールによって、学習した知識では分類できず、新たな属性を見つけ出す必要性が生じる。

これによって、論理的思考の形式「分類」に対する認知的葛藤を引き起こし、班でしっかりと話し合わせて、自分の考えをメタ認知させる。この話し合いの中で、論理的思考の形式「分類」に対するメタ認知をさせ、概念形成を促し、論理的思考を深めていく。このとき、タブレットをホワイトボード同様に使用したり、各班の考えをさかのぼって共有したり、コミュニケーションツールとして使用する。

最後に、鳥類とホニュウ類の両方の特徴をもつカモノハシを提示し、分類しきれない動物が存在することに気づかせる。そして、動物の多様性と生物の進化、動物の体のしくみに意識が向くようにしていきたいと考える。

(4) 本時の展開

(5) 本時の評価

動物を分類するとき、動物のからだのつくりの特徴（くちばし、手足、羽毛、鱗など）に着目して、比較・検討して、仲間わけをすることができる。

※本研究授業は、パナソニック教育財団より平成27年度実践研究助成（一般研究）を受けて理科部が中心となって行っている研究の一環です。

研究主題「ICTを活用したアクティブ・ラーニングによる論理的思考力の育成」

#### 仲間分けのルール

- ①各グループには少なくとも2匹の動物が入らなければならない。
- ②1つのグループのメンバーは少なくとも1つの共通の特徴を持たなければならない。
- ③各グループは他のすべてのグループと違うものでなければならない。

「考える科学：授業6より」

## 18. Can Anyone Hear Me?

【1. 教科名（プログラム名）】

英語科

【2. 授業テーマ】

環境問題を主題にした短編小説の英訳を読み、「ゴミゼロ社会」を目指して自分ができることを考え、発信する。

【3. 授業名（単元名、教材名、プログラム名）】

New Horizon English Course 2 Let's Read 3 Can Anyone Hear Me?

【4. 授業目標（単元、教材、プログラム）のねらい】

- ・物語を構成する起承転結を考え、先を読み取るような読解ができる。
- ・物語の登場人物の言動を正しく理解することができる。
- ・本文の内容を理解し、質問に適切に応答できる。
  - ・物語の続きを考えて英語で書くことができる。
  - ・ゴミ問題について、「自分ができること」を英語で書くことができる。

#### 【5.教材とグローバル人材育成の接点(グローバル人材育成から見た本教材の位置づけ)】

日本のゴミ焼却場数は世界一である。これほど多くのゴミを出し、燃やしている国はない。一人1キログラムのゴミを毎日出しており、年間で一家庭から1~2トンのゴミが出ている。ごみ焼却量は、ヨーロッパの環境先進国の10倍以上で、ダイオキシン排出量も世界一である。「燃やすとダイオキシン」、「埋めると土壌汚染」といった認識のもとヨーロッパなどの環境先進国では、厳しい規制がある。このため、環境先進国を中心に「ごみゼロ社会」といった社会作りが、実践されるようになってきている。ごみは燃やすことで量は減るが、それでは、根本的な解決にはならない。そこで、日本のゴミ処理の現状と海外の取組を知り、「ごみゼロ社会」を目指して、自分ができることを考えさせたい。

#### 【6.指導計画(単元計画)】

第1時 ディストグロスを用いて内容理解をする。(本時)

第2時 「ごみゼロ社会」を目指して、自分ができることを考える。

#### 【7.本時について】

- ① 日時・校時 平成28年3月8日(火)2時間目、5時間目、6時間目
- ② 対象学年・組 8年A組・B組・C組
- ③ 場所 8年A組・B組・C組 教室
- ④ 本時の目標
  - ・物語を聞いて、物語の流れを理解することができる。
  - ・物語を聞きながら、ポイントとなる語句を書き留めることができる。
  - ・ポイントとなる語句を手がかりにして、物語を語るすることができる。
- ⑤ 本時の教材について

星新一の短編小説「おーい でてこーい」という、環境問題をおもしろく小説化した作品を英訳したものである。ストーリー性があり、生徒が興味をもって読むことができる内容である。特に新しい文法事項はなく、これまでの既習事項の総復習となっている。

リスニングを起点とした英文復元練習の手法(ディクトグロス)を導入する。聞こえてくる英語の要点についてうまくメモを取り、話しの全体像を復元し、元のテキストと比較する。リスニング能力の向上だけでなく、ディクトグロスの手法は、メモをとる能力の向上が図られ、さらに文法に気をつけながら仲間同士で英文を復元するプロセスを経ること

で、文法能力やライティング能力の向上が期待できる。

⑥ 本時の展開

⑦ 評価

- ・物語を聞き取り、絵をストーリーの順番に並べることができる。
- ・物語を聞き取り、ポイントとなる語句をメモすることができる。
- ・物語を口頭で復元することができる。

## 19. 日本文化体験

### 【1. 教科名（プログラム名）】

総合的な学習の時間

### 【2. 授業テーマ】

- ・日本文化体験学習
- ・タイ国調べ学習

### 【3. 授業名】

日本文化体験学習

### 【4. 授業目標】

- ・他国の人とつながりを持ち国際交流を深めるために、自国の文化について知り、習得する。
- ・交流国タイ国について理解を深め、タイ国の交流を通しておもてなしの精神を学ぶ。

### 【5. 教材とグローバル人材の接点】

8年生は「タイ国生徒歓迎行事・交流行事」の中心学年です。昨年度はホームステイ受け入れ家庭以外は、直接交流できる機会が少なかったのですが、今年度は中心学年として様々な取り組みを行います。そこで貴重な体験を充実するために、交流先のタイ国がどのような国なのかを学習します。また、日本文化をタイ国の人たちに知ってもらい、体験してもらうために、日本文化についても学習します。

〈学習内容〉

#### ①タイ国についての基礎知識をつけよう。

・基本的なタイ国の情報を知り、自分の興味をもったことについて更に調べる。（壁新聞作成）

#### ②日本文化を体験・習得しよう

- ・講師の先生方から日本文化を学ぶ。（日本文化体験講座）

#### ④ 習得した日本文化をタイ国の人に披露・及び体験してもらう

・習得した日本文化を披露し、タイ国の人たちに日本文化を伝える。（タイ国生徒歓迎行事）

- ・実際にタイ国の人たちに日本文化を体験してもらう。

#### 【6. 指導計画】

- 第1次 1時間目 オリエンテーション・日本文化講座希望調査  
2時間目 タイ国についての調べ学習
- 第2次 3時間目 日本文化体験学習①②  
4時間目 日本文化体験学習③④  
5時間目 日本文化体験学習⑤⑥  
6時間目 日本文化体験学習⑦⑧  
7時間目 日本文化体験学習⑨⑩
- 第3次 8時間目 タイ国生徒歓迎会  
・日本文化披露  
・タイ国生徒の日本文化体験（体験ブース）  
9時間目 まとめ

#### 【7. 本時について】

- ① 日時・校時 平成27年10月20日（月）5・6時間目  
② 対象学年 8年生A B C D組（90名）  
③ 場所 東エリア体育館  
④ 本時の目標

・習得した日本文化を披露し、体験してもらうことで、タイ国の人たちに日本文化を伝えることができる。

#### ⑤ 本時の教材について

本時では、習得してきた日本文化（箏・尺八・華道・茶道・空手・民踊・和太鼓・日本舞踊）を、8年生主催の文化交流授業で、タイ国に生徒に披露する。実際に発表するものは、民舞、和太鼓、日本舞踊、空手の4つとし、それ以外のものについては、ブースを設置しその中で、実際に体験してもらうこととする。

体験ブースでは、タイ国生徒一人ひとりに、日本人のホスト生徒を一人つけ、説明をしながら時間毎に順番に体験してもらう。華道コーナーでは、実際にお花を生けたり、日本舞踊コーナーでは着物をきて写真を撮ったり、また茶道コーナーでは、お茶を点ててもらいなど、見て説明を聞くだけでなく、体験してもらうことで、より日本文化に親しんでもらうことを目的とした。

#### ⑥ 本時の展開

#### ⑦ 評価

・国際交流をより深めるために、自国の文化について理解・習得し、それらをタイ国の人たちに伝えることができたか。

## 20. 豊かな言葉（俳句）

第9学年 国語科学習指導案

3限（10:50～11:40）

### 「俳句の可能性・俳句十六句」

9年A組 38名

9年A組 教室（東エリア 北棟3階）

指導者 國原 信太郎

#### 1 教材目標

俳句に用いられている言葉や表現の価値に気付く感覚や力（俳句を読む感性）を養う。

（具体的目標）

- ・俳句を読む楽しさを知り、その表現の美しさや素晴らしさを味わおうとする態度を養う。
- ・俳句を読み、そこに使われている言葉や表現に則して情景や心情を想像する。
- ・心情や情景が伝わるように表現の仕方を工夫して、俳句を創作する。

#### 2 教材について

俳句は、日本の詩歌の伝統から生まれた詩の一種であり、その成立は十六世紀頃と言われており、実に400年以上前から今日まで継承されてきた日本の代表的な伝統的言語文化の一つである。俳句と言うと難しく感じるかもしれないが、その大きなきまりは、五音・七音・五音という十七音からなることと、季節を表す言葉である季語が入っていることの2つだけであり、非常にシンプルである。しかし、季語を含め限られた十七音で情景や心情を表現しなければならないため、きまりは非常にシンプルであるが、そのレベルは三十一音で表現する短歌よりも高いといえる。にもかかわらず、現在の俳句人口は600万人以上とも700万人以上とも言われている。（注1）また、その年齢層も幅広く、年配者はもちろんのこと、若年層にも俳句は親しまれている。株式会社伊藤園が主催する「お〜いお茶新俳句大賞」において、今年度の文部科学大臣賞には8歳の小学生の作品が選ばれている。また、愛媛県では毎年「全国高校俳句選手権大会」が開催され、高校生が、創作した俳句を持ち寄り、お互いの句を鑑賞し合うという大会が行われている。このような取り組みを見ると、俳句にはもちろん難しさもあるが、さまざまな年齢層に幅広く支持されているといえる。

更に、俳句は日本国内のみならず、世界的にも広く知られた短詩型文学であり、英語等の非日本語による三行詩が「Haiku」と称され、世界でも親しまれている。ただ、日本語以外で創作される俳句では五・七・五のシラブルの制約が無く、季語がないことも多いため日本の俳句とは若干その形式が異なる。日本語による俳句とは若干形式の異なる外国語による「Haiku」が世界中で親しまれている一方で、フランス出身の比較文学者マブソン青眼、オーストラリア出身の海洋学者ドゥーグル・J. リンズィー、アメリカ出身の詩人アーサー・ピナードなどは、自らを俳人と名乗り、外国語ではなく日本語で、日本のきまりに従った俳句を創作している。俳句を取り巻くこのような状況を見ると、日本の代表的な

伝統的な言語文化である俳句が、グローバル化していると言える。

このような状況の中、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々とその価値観を共有していくために、自らの国の伝統的な文化や歴史についての理解を深め、尊重していく態度を身に付けることが非常に大切である。そして、そうすることが日本人としてのアイデンティティーの確立に繋がり、ひいてはこれからのグローバル化社会を担う人材の育成に繋がるはずである。

したがって、本教材では、日本の代表的な言語文化の一つである俳句に親しみ、また学習することで自国の代表的な伝統的な言語文化である俳句についての理解を深め、尊重する態度を養い、そこから俳句に用いられている言葉や表現の価値に気付く感覚や力（俳句を読む感性）を養いたいと考えている。

俳句の学習で大切なことは、用いられている言葉ひとつひとつにこだわり、細かい読みによる解釈をすることではない。五・七・五という日本語の言葉のリズムに深く根差した俳句の定型は、日本人に脈々と受け継がれてきた伝統的な韻律美であるといえ、その韻律の美しさを読み味わうことが重要である。その上で、厳選された十七音を手掛かりとし、想像豊かに読むことで、俳句の世界へのイメージを膨らませていくことが必要になる。しかし、読み手がどれほどイメージを膨らませてもそれは単なる想像や空想に過ぎず、俳句を生み出した作者本人の想いに完全に一致させることは不可能に近い。場合によっては、読み手が作者のイメージを全く読み取ることができないこともあるかもしれない。自分と作者のイメージの開きがあると、「理解することができない」という理由から俳句に対して及び腰になってしまう可能性がある。よって、「句に対してイメージや想い、世界観を持つことは、その句を通し、その作者と向き合うことでイメージや想い、世界観を再構築した自分自身の考えに過ぎない」と、まず生徒には認識させる必要がある。そして、この自分自身の考えを学習の柱とし、言葉のひとつひとつに追っていくというただの解釈や読み取りに終始することなく、自分自身のイメージや想いを大切にできる態度を本教材で育成し、俳句に対しての興味関心を養いたいと考えている。しかし、いくら自らのイメージや想いが大切だからと言っても、与えられた俳句を「思うように自由に鑑賞してよい」などと、各々の好き勝手に読ませるだけでは、もちろん学習効果は生まれない。そこで、本教材である、俳人宇多喜代子による解説文「俳句の可能性」は、俳句を読み味わう際の手掛かりになるため、俳句鑑賞の視点として活用させたい。「俳句の可能性」に掲載されている解説文と俳句によって、近現代の俳句のおおよそを理解して慣れ親しみ、その後、「俳句十六句」を読み味わう。

「俳句の可能性」は平易な文章で、俳句の約束事や特色を分かりやすく説明している解説文である。また、有季定型の俳句以外にも、自由律俳句や、無季俳句にも言及し、俳句の姿を広く紹介しており、この解説文を読むことで、俳句を味わうための基本的な観点を

学ぶことができ、主体的に作品に向き合う姿勢を育成することができる。

「俳句十六句」では、成立した時代の雰囲気を変えながら、中学生という多感な時期の生徒たちの心に響くような作品が選ばれている。十六句は作者の生年順に並べられており、時代による俳句の変遷とともに、俳句に様々な姿があることも示されており、俳句の多様な魅力を感じ取ることができる教材となっている。様々な俳句に触れることで、俳句の解釈や読み取りのみに終始することなく、自分のイメージや考えを広げ、変容させ、より作品や作者に寄り添ったイメージを構築する土台を築くことができる教材であるといえる。

### 3 指導計画（7時間扱い）

#### ・第1次 「俳句の可能性」

俳句のおおよそを理解し、親しむことで俳句への興味を持つ。

##### 第1時

「俳句の可能性」を読んで俳句について理解し、筆者の主張を把握する。

##### 第2時

俳句を鑑賞し、作者のイメージや想いを考える。

#### ・第2次 「俳句十六句」

俳句を想像豊かに読み味わう。

##### 第3時

「俳句十六句」から自分の心に響く俳句を見だし、その情景や心情を思い描く。

##### 第4時

前時に選んだ俳句から読み取ったこと、鑑賞したことなどの発表を行う。

#### ・第3次 俳句創作

俳句を創作し、相互批評をおこなう。

##### 第5時

与えられたお題から俳句を読み、相互に鑑賞する。

##### 第6時（本時）

前時に創作した俳句を披講し、句会を行う。

##### 第7時

俳句の穴埋めを行い、俳句鑑賞のポイントについて整理する。

### 4 本時について

#### (1) 本時の目標

- ・俳句に用いられている言葉や表現を手掛かりとし、想像豊かに読み味わうことができる。

・俳句の良さや世界観を聞き手が納得できるように説明することができる。

## (2) 本時の教材（本時に用いる俳句）について

本時は前時までには創作した俳句を用い、句会を行う。句会といってもその形式や方法はさまざまであるが、本授業では愛媛県松山市で毎年八月に開催されている「全国高校俳句選手権大会」で行われている「句合」の形式で行う。「句合」ではあらかじめ指定された2班から、一句ずつ句を披講し合い、その優劣を競いあう。

各班が披講する俳句は、あらかじめ与えられた写真を見て、そこから創作する写真俳句（フォト俳句）とする。俳句を創作する際の大きなポイントは、「何を」、「どのように」詠むのかということである。与えられた写真から俳句を創作するという事は、この大きなポイント二つのうちの「何を」という部分で最初から大きな縛りがかけられているということになる。しかし、写真には目に見えるもの以外にさまざまな情報が含まれているし、その写真からイメージできるもの、連想できるものも多い。また、「俳句の可能性」の中で宇多喜代子氏が「短い字数でいろいろなことが表現できるところに、俳句の可能性が秘められている」と述べているように、俳句はたった十七音であるが、そこに込めることのできる読み手の思いは非常に大きい。よって、写真と俳句が組み合わさることで、俳句のイメージがより広がり、深みを増し、写真の方も俳句が伴うことでそこに潜んでいる情報がより鮮明になってくる。写真を見て俳句を創作することで、写真だけでは伝えられない、俳句だけでは伝えられない、そういうイメージの世界観を構築することができるはずである。

そのような世界観をもった自分たちの俳句を、「俳句の可能性」に書かれた鑑賞の視点を手掛かりとしながら、句会という授業形態の中で相互鑑賞、相互批評する。お互いに鑑賞し合うことで、俳句に用いられている言葉や表現の価値に気付く感覚や力を養うことができ、披講された俳句の世界観をしっかりとイメージできる感性を磨くことが可能ではないかと考えている。

## (3) 生徒分析と指導

感性を育てるための汎用的資質・能力：「批判的思考力」

本学年の生徒たちは、7年生時に「野原はうたう」（工藤直子）、「はじめての詩」（荒川洋治）、「詩四編」、「木は旅が好き」（茨木のり子）、8年生になり「明日」（谷川俊太郎）と詩の学習をしてきている。それらの学習の中で、詩の基本的事項を学ぶと同時に、言葉をきっかけとして詩という短い文章に描かれた世界を自分の頭の中でイメージし、再構築していくことの面白さも感じている。また、詩は日常で見落としていることを気付かせてくれたり、自分とは違った見え方、感じ方、捉え方を示してくれたりするものであり、そこに面白さが潜んでいることもこれまでに体感している。さらに、さまざまな表現

技法を学ぶことにより、詩の奥深さを感じ、想像することの楽しさを味わい、作者の思いを読み取り、表現が生み出す効果についても自分なりの考えを持ちながら読むことができる力を持っている。

また、8年生時には短歌学習の一環として「歌合」に取り組んだ。「歌合」では、自分たちが創作した短歌を相互批評、相互鑑賞しあい、短歌を解釈することだけに留まらず、用いられているひとつひとつの言葉からイメージを膨らませ、その世界観を広げることで短歌の面白味を味わった。本時の「句会」ではこの「歌合」の発展的な学習と位置づけ、7年生の詩の学習から始まった韻文学習の総まとめとなるように指導を行う。

俳句の学習は、短歌の学習と同様に生徒にとってどこかとっつきにくく、難しいという印象を与える。しかし、十七音に精選された美しい日本語の響きには、大きな魅力が溢れており、その魅力に気付かせることが俳句の指導では最も大切なことである。日本人に脈々と受け継がれてきた伝統的な韻律美が存在することに着目させ、詩や短歌の学習と同様、美しい日本語の表現や響きに慣れ親しむことこそが、言語文化の享受、継承、発展の一步になり、言語文化を尊重する態度に繋がる。また、俳句の学習では、言葉や表現をてがかりに、想像豊かに読み味わう力を育成することもできる。俳句の解釈や表現技法の学習だけではなく、想像豊かな俳句の読みを大切にし、さまざまなイメージや想いを持てるような指導を行う。しかし、どんなに想像豊かに読みを深めて作品や作者に対峙したとしても、本質的には作者が思い描く情景や想いと完全に一致するということはありえない。それは、作者が自らの知識や経験、感性などをフル活用して目の前の情景や状況から作品を生み出すのに対して、解釈する読み手は、自らの知識、経験、感性のみで作品の世界に迫ろうとするからである。これでは、作者の思いと読者の読みを一致させることは難しいのだが、本時におこなう句会の目標は、作者のイメージと読者のイメージを完全に一致させることではない。自分の考えを深めることで、作者のイメージするものにより迫ることを目標とし、授業を展開する。

したがって、句会では、披講された句の解釈を重視させるのではなく、作者のイメージに自分たちのイメージをいかに近づけていけるかということ意識させて句の解釈、鑑賞を行わせたい。生徒に俳句の鑑賞文を書かせると、言葉だけを巧みに操り、上手い鑑賞文を書いてくるが、その多くは俳句へのイメージや想いが乏しい。だからこそ、俳句へのイメージを膨らませなければならない「句会」を授業に取り入れ、イメージ豊かに俳句を読み味わわせ、確かな鑑賞力を身に付けさせたいと考えている。

また、句会で俳句の相互批評、相互鑑賞ができれば、学習指導要領第3学年「A話すこと・聞くこと」(2)「ア 時間や場の条件に合わせてスピーチをしたり、それを聞いて自分の表現の参考にしたりすること。」、「C読むこと」(1)「ア 文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読むこと。」、「ウ 文章を読み比

べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。」を達成することができる。

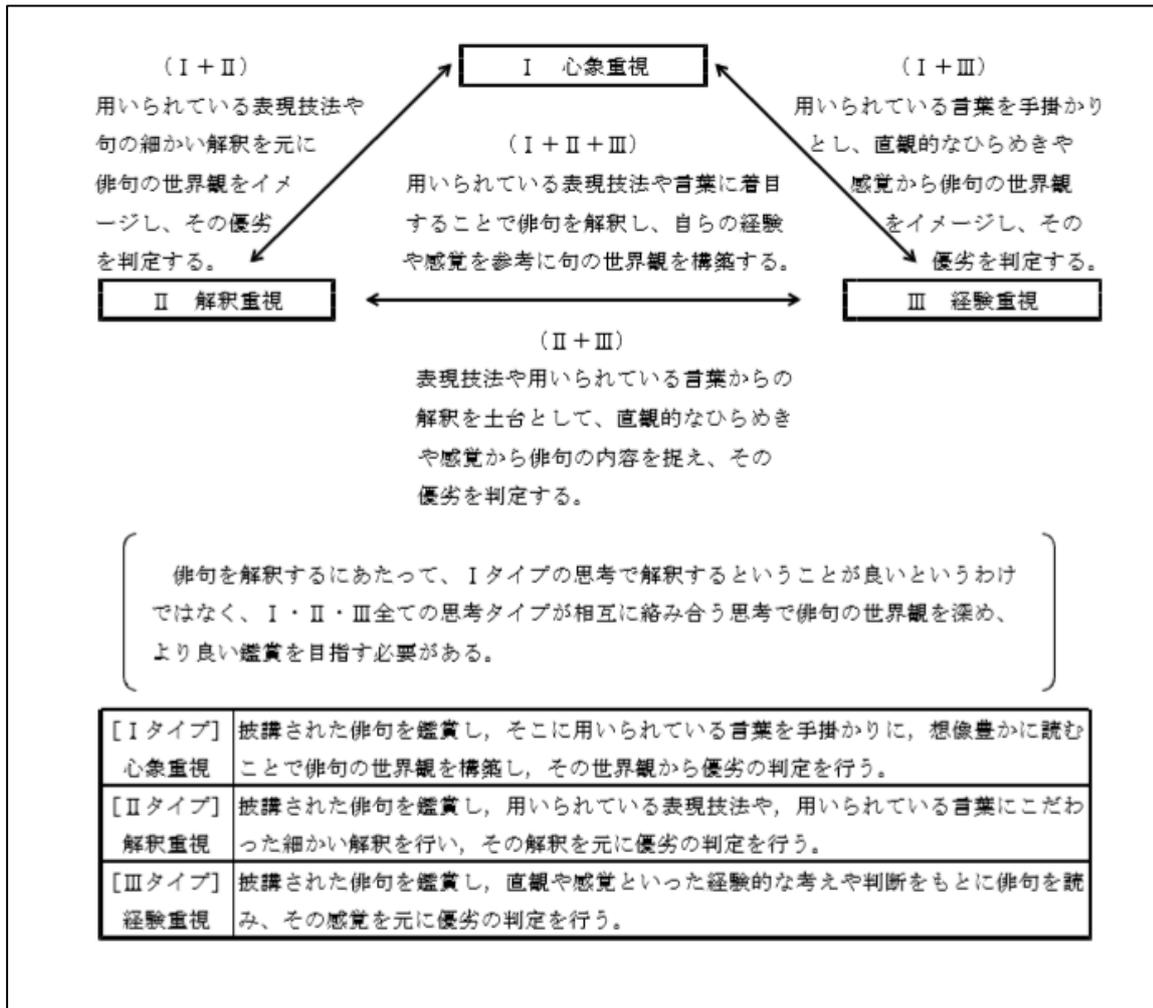
本時に行う「句会」では、班に分かれ、班の中で選んだ俳句を披講し、その優劣を2つの班で競い合わせる。俳句を披講しない班は、披講された俳句を読み、披講された二句について鑑賞、批評を行い、その優劣を考える。

句の優劣を決するためにはまず、「生徒たちは、披講された二句を読み、どちらの俳句がどのように優れているのかという疑問に直面し、その疑問解決に向けて「批判的思考力」を持ち、句をさまざまな角度から捉え、主体的・共同的に学習していく。【着眼】

次に、披講された俳句について自らの批判的思考で鑑賞、批評を行う。（個人活動）その後班の中でそれぞれの鑑賞、批評を発表し、議論する中でさらに深い考えや、新しい考え方を導く。（班活動）そうすることで、披講された2句の俳句に対してのイメージを深め、より深い鑑賞を行う。【分析】

最後に、自分が所属する班以外からの意見や考えを聞き、改めて自分たちの班内で俳句を鑑賞していくことで、その俳句のどのあたりが優れているのか、リライトするのであるならば、どんなふうリライトすればよいのかななどを根拠をもって説明できるようにする。

【一般化】



俳句の学習を行うと、表現技法や、用いられている言葉ひとつひとつにこだわり、細かい解釈を行うというIIタイプの生徒が多くなる。表現されている言葉の解釈ができないと不安になるのかもしれない。もちろん、用いられている言葉をしっかりと理解し、表現技法にも着目するということも大切である。しかし、俳句を解釈する上で最も必要なのは、細かい読みをし、解釈することではない。十七音という厳選された言葉を手掛かりにし、その俳句を想像豊かに読むことで、その俳句の世界観をしっかりとイメージしていくことこそが最も大切なのである。つまり、俳句を作った作者の心情に迫ろうとするのであれば、表現されている言葉にだけとられるのは不十分であり、自らの持つ経験や知識、想像力を総動員して作品の世界観に迫るという行為が必要不可欠になってくる。そのような解釈をし、その俳句に込められた心象を自分の中に抱くことができるような鑑賞を行う必要がある。

したがって、心象を重視するIタイプのような生徒は、作者の世界観に一番近づくことができる生徒と言える。しかし、想像豊かに俳句を読むためには、ある程度の言葉の解釈も必要であるし、表現技法に着目する必要も出てくる。そのため、IIタイプのような生徒

の考え方もまた作者の心情に迫るためには必要となってくる。ただ、用いられている言葉の解釈だけでは作者の心情には迫れないので、言葉の解釈を手掛かりに作品の世界観を味わい、イメージを膨らませるように指導をしていく必要がある。同様に、俳句を読んだ時の直観的なイメージや感覚もまた、俳句の世界観を作り上げるためには有効である。ただ、無意味に築き上げた世界観では作者の心情と大きく乖離する可能性もあるため、ひとつひとつの言葉からイメージを膨らませ、世界観を広げるように指導し、俳句を味わわせる必要がある。

(4) 本時の展開 (注3)

(5) 本時の評価

・俳句に用いられている言葉や表現を手掛かりとし、想像豊かに読み味わうことができ、そこから感じ取った俳句の良さを聞き手が納得できるように説明することができたか。

(注1) 現代俳句協会の松田ひろむ氏「俳句入門」に「俳句はだれにでも作れることの出来るやさしい親しみやすい文学なのです。現在の俳句人口は六百万人とも七百万人ともいわれています。読む文学だけではなく、作る(創作する)文学としては、圧倒的に国民から支持されているのです。」とある。

(注2) 3タイプの思考過程をⅠタイプ、Ⅱタイプ、Ⅲタイプと銘打っているが、これは形式的な表記であり、生徒の理解度を示すようなⅠ、Ⅱ、Ⅲではない。

(注3) 本時の展開では、分節を「着眼」「分析」「一般化」としている。「着眼」の過程では、生徒に問題や課題と出合わせる。ここで、生徒に「なぜだろう」「どうしてだろう」という疑問(問題・課題に対する葛藤)を起こさせ、それを次の「分析」へ繋げる。「分析」の過程では、生じた疑問や葛藤の解決方法を教師が教えるのではなく、生徒自らが試行錯誤しながらねばり強く論理的に考える。その際、「グローバル社会に生きる感性」を育むための資質や能力を育成できるように指導者が工夫をする。「一般化」する過程では、「分析」したことを元に、改めて自分の知識や考え方などについて振り返り、問題や課題の解決へ向かわせる。この「着眼」「分析」「一般化」の考えるプロセスを繰り返すことで問題や課題の本質を見極める力が育ち、「グローバル社会に生きる感性」を育むことができるはずである。

#### **補論** 生徒主体の授業について

本授業は全過程において生徒主体(生徒主導)の授業を行う。着眼時に行う前時の復習から、生徒の手により行わせ、句会の司会も生徒に委ねる。指導者は句会時、句会後にのみ指導、アドバイスを行う。指導者が口を挟む機会を少なくすることで、生徒の自主性を育むことができ、グローバル化社会においてリーダーシップを発揮できる人材を育成できるのではないかと考えている。

#### 21. 日本の政治について考えよう

## 「日本の政治について考えよう」

9年A組 38名  
東エリアランチルーム

指導者 西田 直記

## 1 単元目標

日本の国会、内閣、裁判所のはたらきについて理解し、それぞれの課題や今の取り組みについて資料をもとに、意欲的に調べ、その対策について考えることができる。

## 2 単元について

日本の政治は、日本国憲法に基づいておこなわれている。そして国会、内閣、裁判所は、それぞれ立法権、行政権、司法権をになっており、この三権が分立し、バランスを取って国の政治を進めている。また日本は議院内閣制を採用しており、国会と内閣は連携して政治にかかわっている。そして、主権を持つ国民は選挙や世論、国民審査、裁判員制度への参加、様々な政治活動への参加を通して、国政にかかわっている。この三権の仕組みや現在の課題について理解することは重要である。また第4の権力ともよばれているメディアから情報を集め、政治に関心を持ち、考え続けていくことはこれから日本の社会をつくっていく生徒たちにとって必要なことである。

しかしながら、日本の国政選挙の投票率は高くはない。平成26年の衆議院選挙では全体の投票率が52.66%であった。しかも、20代の投票率は32.58%であった。今の生徒の生まれ年に近い昭和61年度の衆議院選挙では全体の投票率が73.40%、20代の投票率が56.86%であったことから国民全体、また若い世代の選挙権を行使する人の数が明らかに減少していることが分かる。投票率の低さが政治的無関心と必ずしもイコールではないにせよ、前回の平成26年度の衆議院選挙のように60代と20代の投票率に2倍もの差がついている(20代32.58%、60代68.28%)。このような一般的に「政治的無関心」と呼ばれる若い世代の投票率の低い状態では、世代間の意見の偏りや政治団体などの意見が選挙に強く反映されかねない状態であると言える。そのため、期日前投票が利用しやすくなり、一部インターネットを使った選挙運動が解禁され、選挙権を18歳に引き下げるよう動きがあるなど、国民の政治参加を促す動きも盛んになってきている。

本単元では、生徒が自ら判断し問題意識を持って考えることが重要であると考え。国会では、もと地方議員・国会議員秘書の方にゲストティーチャーとして来てもらい、あまり身近に知ることはできない国会議員の一日の仕事や選挙に向けての取り組みなどについて話してもらい、生徒から疑問に思ったことなどを質問し、国民の代表を選ぶとはどういうことかについて考えを深める。また内閣についての学習では様々な行政改革について、当時の新聞記事などからどのような改革が行われたのかを知り、その改革の結果によって現在どのような結果が生まれたのかを調べたうえで、現在の行政の課題と言われるたてわ

り行政なども問題を調べる学習を行なう。また裁判所の学習では、死刑制度の是非について討論をすることを通して、「人を裁くとはどういうことか」ということについて考える。

三権分立では、統治行為論を下した裁判所の判決などから、3つの権力がどのような仕組みでバランスをとっているかを考え、それらの権力に国民がどのように主体的に関わっていくべきかを考える。単元のまとめとして、現代の政治課題について、ディベート型の討論会を行う。現代社会の課題は、どのように解決すべきかについて様々な意見があり、政治的にも民意としても合意に至ることが困難なことがしばしばある。また、他国との関係や国内の様々な団体の利害関係、場合によっては国民の個人的な欲求や世代の利益などのファクターによって、よりよい意思決定が行われにくいこともある。また様々な要素や視点から、様々な「正解」が語られるため、問題の整理がつきにくく、考えることが難しい。

しかし、この「とっつきにくい」課題について、自ら調べ、賛否を批判的に熟考し、意思決定をすることが本来の理想的な公民的資質であるといえる。ただ、投票率が高いということだけでよい政治は実現しない。民主主義は、一人一人がよき主権者であることが、よい政治を実現するために必要な要件なのである。選挙に行かない理由としては、「面倒だから」「忙しいから」「投票したい政党（候補者）がないから」「自分が行っても結果が変わらないから」とあるが、被選挙権やその他の政治的な活動をする権利が保障されていることを鑑みれば、「不勉強でわからない」「考えるのが面倒である」ことがその背景にはあるだろう。考えるのが難しい、簡単には答えが出ない問題について、粘り強く考え、調べて考えようとする姿勢こそが、将来有権者となる生徒には必要であると考え。実際に、政治の学習を進めていく中で、本学年の生徒にあなたは投票に行こうと思うかを問うたアンケートでは、「必ず行く」「行こうと思う」「ほとんど行かない」「行かない」のうち、「必ず行く」が10%、「行こうと思う」が83%、「ほとんど行かない」が5%、「行かない」が2%、と政治的関心が決して低いわけではない。この政治に参加する意欲をさらに高め、考えることに億劫になりがちな課題を考え判断できる素地を養っていくことが、社会参画のために必要であると考え、本単元を設定した。

### 3 指導計画（12時間扱い）

- ・第1次 国会の地位と仕組み
- ・第2次 国会の働き
- ・第3次 国会議員ってどんな職業～ゲストティーチャーを招いて～
- ・第4次 行政の仕組みと内閣
- ・第5次 行政改革
- ・第6次 裁判所の仕組みと働き
- ・第7次 裁判の種類と裁判員制度について
- ・第8次 裁くとはどういうことか～死刑判決の是非から考えよう～

- ・第9次 三権の抑制と均衡～私たちと三権の関わりを考えよう～
- ・第10次 安保法案の集団的自衛権の問題を調べよう
- ・第11次 ディベートの準備をしよう
- ・第12次 ディベート型討論を通して～（本時）

#### 4 本時について

##### (1) 本時の目標

・今回の安保関連法案の集団的自衛権を認める法改正についての是非についての賛否の意見を多面的・多角的にとらえ、自らの考えを述べることができる。

##### (2) 本時の教材について

集団的自衛権は、2015年の国会でもっとも多く時間を費やし審議され、結果的に可決された法案である。この自衛隊や自衛権にかかわる問題は憲法改正ではなく、憲法解釈の変更で政府の立場が変わってきた問題である。憲法の成立過程で、憲法9条には、1項冒頭に「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し」という言葉と第2項冒頭に「前項の目的を達するため」という言葉を追加した国会の小委員会での芦田修正によって、（これについても様々な立場の意見があるものの）、芦田氏の主張では、この修正によって日本は無条件に武力を放棄するのではなく、一定の条件のもとに武力を持たないということになる（1957年憲法調査会にて）。しかし、政府はこの9条の修正にもかかわらず、憲法制定当時は、日本は自衛権を保有するもののその行使はできないという立場をとっていた。これは吉田茂の総理大臣としての発言からも分かる。しかし、冷戦の流れの中で、サンフランシスコ講和条約とともに日米安全保障条約が結ばれ、日本が西側諸国の一員として国際社会に復帰する前の1950年の吉田茂首相「武力によらない自衛権を持つ」と発言し、その後に結ばれた安保条約によって、軍事同盟によっての自衛権を実質得ることになる。またさらに朝鮮戦争を背景にアメリカの要請もあって、自衛隊が作られる。この時に鳩山一郎首相が「自衛のための必要最小限度の武力を行使することは認められる」とし、これ以後、自衛隊は「自衛のための必要最小の実力」であって「戦力ではない」という政府見解をとることになった。そして1991年の湾岸戦争後、戦争に金銭のみの援助で自衛隊を派兵（他国から見れば派兵となる）しなかったことへの他国からの批判を受け、ペルシャ湾の機雷掃海のためPKOは武力行使に当たらないとして（一定の条件のもと）自衛隊の派遣と活動が認められることとなった。このときには、隊員の生命身体を守るための必要最小限度の武器使用は憲法の禁じる武力行使には当たらないと解釈が出された。さらに北朝鮮の核不拡散条約からの脱退・核兵器開発の意思を示したことなどから1997年日米ガイドラインが改訂され、1999年に周辺事態法が成立した。ここでは戦闘行為のおこらない（と想定される）「後方支援」ならば武力行使には当たらず、他国の軍隊との武力の一体化に当たらないとされた。そして、2001年のアメリカ同時多発テ

口を受けて、非戦闘地域であれば自衛隊を派遣できるテロ特別措置法が制定され、自衛隊の活動範囲はさらに広がった。そして、2014年、自衛権発動の3つの要件の見直しをへて集団的自衛権の行使容認（への解釈変更）を経て、2015年の安保関連法案が成立した。このように自衛権の解釈については時代とともに政府見解や法律の変更により解釈が変わってきたという経緯がある。しかしながら、憲法学者を始め、これらの憲法解釈を認めないという意見など政府に対する批判の声も多い。実際に今回の安保関連法案に関しては、世論調査の結果反対が賛成を上回る結果がメディアの世論調査で示されている。

グローバル化する社会をどのようにとらえるかが今回の判断には一つの側面として大いにかかわってくる。また主権国家として国際社会の中でさまざまな国とのかかわりの中で責任を果たすべき日本のふるまいを決めていくのは主権者である国民一人一人である。国の政治に高い意識を持ってかかわっていく主権者としてのふるまいも、グローバル化するこの時代に求められることであり、この問題を通して日本の在り方について考えることで国際社会の一員としてのまた国民としての市民的資質の向上につながっていくことをねらいとしている。

### (3) 生徒分析と指導

歴史の学習では、国家権力を縛るものとして絶対王政から市民革命を通して、近代になった人権が保障されてきたことや大日本帝国憲法、日本国憲法の成立過程とそのきまりについて、そして日米安全保障条約の締結、日米安全保障条約の改定の過程などについて学習してきている。また憲法の学習では、憲法の最高法規について学習し、憲法の基本原理である平和主義について憲法前文や憲法9条についての学習を行っている。憲法9条については政府見解もふくめさまざまな見解があることをふまえ、自衛隊は違憲かどうかについて話し合い、憲法9条や自衛隊の問題をどのように考えるべきかについて話し合いを行っている。そのため、今回の自衛権というテーマは、そもそも個別的自衛権や自衛隊の位置づけなど、広い範囲で賛否のある問題であるが、議論の拡散しすぎることをある程度防ぐためにも、あえて個別的自衛権よりも、今回の議論になった安保法案にかかわる集団的自衛権の是非に焦点を当てて議論を行なう。

先述したアンケートの結果、生徒たちは将来の投票への意欲は高く、「必ず行く」が10%、「行こうと思う」が83%、「ほとんど行かない」が5%、「行かない」が2%であった。これは国会の学習の最後に、国会議員の仕事についてゲストティーチャーを招いて行なった授業において、国会議員に実質的に支払われている給与以外に、交通費が無償であることや文書・交通・通信費が高額であること、秘書給与やその他の手当や保証が非常に高い一方で、政治家にとって唯一ももっとも怖いものは選挙であるという話を受けて、自分たちの持つ一票の重みについて理解したことも、選挙に対する意識が高まったからだと考えられる。しかし、必ず行くと答えた生徒は10%にとどまった。また、政治に関心

のあるニュースを聞いたところ、「興味がない」と答え生徒も15%ほどおり、いま日本が最も取り組むべき課題は何かという質問にも「わからない」と答えた生徒が20%いたことから、政治に参加する大切さは認識していても、「自分が問題を十分に理解していない」「勉強するのが面倒で関心を持ってない」という政治に対する関心のなさも浮き彫りになった。

そこで、今回はディベートの形式を一部取り入れて、先に賛成側と反対側に分かれて討論を行う。これは、安保関連法案が非常に整理しにくい広範囲に議論の観点がある問題であり、問題の所在を簡単に整理することが難しいため、容易に賛成・反対を決めることが難しいからである。政府の説明する安保関連法案で認められることになった、集団的自衛権発動の3つの要件についてだけを共通理解し、安保関連法案に関する賛成意見と反対意見について絞って調べ学習を行うことにした。それぞれの立場に立って（ディベートの方式を取り入れ）話し合いを行うことで、さまざまな論点が浮き彫りになるということを狙いとしている。さらにどちらかの立場に自分たちの主張を通そうとする中でどの側面に重みづけをするべきかを考えることができる。これはさまざまな観点から賛否が分かれる問題をあつかう上で重要なことである。また、ディベートに参加しない生徒をジャッジとして、それらの議論を聞いてどちらの主張がより論理的で説得的であるかを客観的に判断させる。また途中ジャッジから、賛否それぞれのチームに疑問点などを質問する時間をもうけ、そのためにジャッジも相談タイムを用いて意見交流を行う。こうすることでジャッジも積極的に話し合いに参加し、不明な点なども交流によって理解を深めることができ、考えを深めることができる。

国会の議論についても記録的な審議時間を費やしたにもかかわらず「審議が十分になされていない」といった意見があり、一方、野党の審議に対する姿勢も批判に上がることもある中で、今国会やメディアの議論を見ても論点がなかなか広範囲で多岐にわたる（わかりづらい）ものであったため。そこで、十分に論点が整理できるように、生徒の事前に調べた賛否それぞれの意見をまとめたものをもとに主なポイントを4つ提示し、初めの立論はその観点到にふれながら行なうようにする。

1つは、世界という視点から見たときかどうかという視点である。2つに、集団的自衛権の発動の条件が適切なものであるか。3つ目は、国を守るという目的において、個別的自衛権で対処できないのかということである。4つ目は、集団的自衛権に関するメリットとデメリットである。メリットは国の安全保障がより強くなる（戦争を未然に防ぐ抑止力の強化になる）ということで、デメリットとしては、集団的自衛権を認めることが望まざる戦争に巻き込まれ、他国での武力行使を広範囲に容認することにつながるかどうかという点である。

もちろん他の論点をディベートの中で追加して持ち出すこともありうる。たとえば、集

团的自衛権を認めることが徴兵制につながるのではないかという点などである。前時に生徒が考えた賛否それぞれの主な要点を示しておくことで、話し合いの中からこれらの観点が浮き彫りになるようにする。そして話し合いを通して集团的自衛権の問題が様々な観点からの意見があり、容易に決められない問題であるということを、この話し合いを通して理解させる。

最後のまとめとして、本時の話し合いをふりかえり、自分は賛成の立場か反対の立場かを述べる。このときに、問題を多面的・多角的にみており、ポイントに対して重みづけができるようにさせる。ディベートの勝ち負けでなく、このディベート型の話し合いを通して、集团的自衛権について多面的・多角的に考え、意思決定を行なうことを重視する。これはこれから選挙権をもっていくものとして投票などによって社会に参画していく姿勢を養うことが必要だと考えるからである。またその決定は国際社会の中での日本の立場や果たす役割にも直結する。国内だけではなく世界の情勢に目を向けて考え判断していくことは、グローバル社会において重要なことだと言える。

感性を育む汎用的資質・能力：「批判的思考力」

自分の考えを述べるときに、話し合いで述べた様々な観点を踏まえ、それらに重みづけをして自分の考えを構成できていることが、批判的な思考であるにとらえる。そこで、最後の考えを3つのタイプに分類する。一回目の調べ学習ののちに、安保法案における集团的自衛権の賛否のそれぞれの意見を調べたのちに、自分の賛否の立場を明らかにしたものを分析し、生徒を3タイプに分類している。この段階においてAタイプの考えが述べられているものについては、ディベートの際に自分の立場とは反対のグループにチーム分けをする。またBタイプの生徒はジャッジまたは賛否のどちらかにチーム分けをすることでディベートでの議論やジャッジの立場から議論を聞くようにする。Cタイプの生徒については、まずは根拠を持って自分の意見が述べられるようにするために、自分と同じ考え方を支持するグループに分ける。こうすることでどのタイプの生徒もAタイプのようにものごとをさまざまな観点からとらえられるようにする。さらに、議論を通してさまざまな観点からの賛否があるということを整理し、ディベート型の討論でよりよい主張を考える中で、どの観点が重要かということについて考え、重みづけをして自分の考えが述べられるようにすることで、批判的思考力が高まると考えている。

Aタイプ：問題を多面的・多角的にとらえ、自分の考えが述べられている。

Bタイプ：自分の考えが根拠を持って述べられているが、問題が多面的・多角的にとらえられていない。

Cタイプ：問題について理解しておらず、自分の考えが根拠を持って述べられない

(4) 本時の展開

(5) 本時の評価

安保関連法案の集団的自衛権に関する自分の意見を様々な考えをふまえ判断し、自分の考えが述べられているか。

## ⑤ 附属高等学校における取り組み

### 1-1 国語科

夏目漱石『こころ』の授業

——グループによる教え合いと討議の過程を踏まえた学習——

国語科 中井 光

#### 1. 概略

〔対象〕 授業クラス 二年一組・四組

〔単元名〕 現代文 小説 夏目漱石『こころ』

現代文の授業では、授業者が提示した発問に対して生徒が答えるというのがオーソドックスなスタイルだが、ともすればその場で思いついた複数の生徒の回答（場合によっては単語レベルのこともある）を、授業者が意図的に適宜切り貼りして模範解答にしがちである。そのため、個々の生徒が自力で妥当な答えを考え、適切な表現によって一から十まで答えを構築するという過程がなおざりにされがちである。授業者はこの点に問題を感じ、一学年時より適宜アドバイスにより導きつつも、あくまで自力で、また指名された生徒だけでなく受講するすべての生徒が、発問に対して妥当な解答を作成する指導を行っている。しかし、当然のことであるが、地道ではあるがおもしろみに欠けるため、生徒にハードルの高く感じられるこの指導は、とりわけ現代文にあまり興味がない生徒には荷が重い。

一方、生徒が自由に意見を述べ、互いの考えをぶつけ合い、課題に対する妥当な結論を導き出していくのは、現代文授業の別の一つの醍醐味でもある。また、授業者により与えられた発問だけに対応するという受動的なものでなく、そもそもどこに考えるべき課題や考察点が存在するのか自体を考えていく過程は、ふだんの授業ではなかなか成立しにくい。そこで、まったく形を変えて、生徒たちが自ら課題を見つけ、それについて互いに教え合い、解決に至るべく討議をし、それを踏まえた上で、教室全体に還元していくという取り組みを行い、重圧感のあるふだんの授業にひとつの風穴を開けるべく試みた。

なお、アクティブ・ラーニングという文言が喧伝される昨今であるが、このような取り組みは大昔より行われている一つの形式に過ぎず、また、すべての授業がおしなべてこのような形式をとることはむしろ望ましくない。今回の取り組みは、特に理系志望者のみで構成され、現代文授業を軽視しがち、または意欲の感じられない生徒が目立つ学級において、前向きに現代文に取り組ませる一つの方策として機能させた。

#### 2. 方策

教科書所載の夏目漱石の小説『こころ』を六等分し、六つの班にそれぞれ新聞連載二回分を担当とさせた。その範囲内で、難解語彙を調べる、疑問を感じるどころ・考察や説明を要するところを探させ、グループ討議や調査により、妥当な結論を導かせる。その際、討議の過程を細かく記録し、また、結論（解答）は過不足のない表現として提示させる。

また、範囲内や「こころ」に限定されず、調べてみたいことを一つ、テーマとして決めて、それについても調査させる。

これらを踏まえて、班ごとに発表資料をもとに、討議の過程を明らかにしながら、グループ発表させる。

### 3. 評価

評価者は授業者だけでなく、聴者である生徒も、あらかじめ示された評価のポイントに基づき、発表を個別に評価する。評価はグループ単位で行い、討議時のとりくみ態度、資料、発表内容を評価の対象とする。

### 4. 問題点と対応

このような取り組みに対して、昔から指摘されていることであるが、「生徒に自由に」話し合わせても、議論が深まりにくい。なるべく口を出さないようにと当初は自制したが、うわつつらを撫でているだけの議論ではかえって教育効果が低いと考え、随時議論の途中経過を観察し、必要があれば助言を行った。また、議論の方向性が明らかに誤っている場合は、もしそうであればどうなるかという指摘をするなどして、誤りに気づかせる助言も行った。

また、生徒主体の取り組みは、いわゆる講義型の授業とは異なり、定期試験に対応しにくい。その打開策として、各班の結論に責任をもたせ、それが定期試験における作品解釈にそのまま直結するようにした。もちろん、導き出された結論は、随時指導者が目を通してしている。

### 5. 授業を終えて

理系のみで構成される学級と混合の学級の二講座で、同じ取り組みを行った。ふだん理系のクラスでは、あまり授業に対する前向きな姿勢が見られなかったが、この取り組みに関しては、回を追うごとに意欲的な態度が見られるようになった。また、最終発表においても、文理混合クラスよりもむしろ積極的で、なおかつ内容的にも充実したものが見られた。

この取り組みがそのまま国語力の進展に結びつくとはいえないが、現代文に対する「おもしろさ」「色々な見方」などに気づき、今後の姿勢につながる可能性はあるといえるだろう。

ことばの意味調べから始め、担当範囲について検討する箇所を指摘し、グループ内で

それについて討議し、討議の過程を明らかにしながら、発表へ向けての資料作りを行わせた。

## 1-2 国語科 授業者：札埜和男

(1) テーマ「プロのアナウンサーから学ぶ聴く・話すこと」

授業日 6/16

対象 3年国語表現選択者

ゲスト講師 道浦俊彦氏（読売テレビ「ミヤネ屋」プロデューサー・アナウンサー）

内容 音声言語のスキルの習得と言語観の深化をねらいとし、グローバル教育の観点としては聴くこと、話すことのコミュニケーション力の養成を目論見とした。ワークショップ形式でプロの指導を受けることができ、聴くことの重要性が体感的にわかり、言葉への感度が高くなる効果が期待できる。

(2) テーマ「議論の仕方を学ぼうーファシリテーター入門」

授業日 6/22

対象 高校生模擬裁判選手権出場有志生徒（1・2年）

ゲスト講師 河北純子氏（株式会社ひとまち ファシリテーター講師）

内容 模擬裁判をしていくにあたり、ホワイトボードを使った議論の仕方を学ぶことが目的であり、グローバル教育の観点としてはいかに協力して合意形成を目指すかという点である。ワークショップ形式でホワイトボードミーティングの方法を習得し、議論の一方法をつかんだといえる。

(3) テーマ「英語落語ワークショップを通じて学ぶ日本語・英語比較」

授業日 10/28、11/4

対象 「現代文」1年1組

ゲスト講師 林家染太氏（落語家）

内容 日英の言語比較を通じての言語の見方の深化をねらいとし、グローバル教育の観点としては、海外でも通じるコミュニケーション力の育成と日本文化や日本語への理解を図った。英語落語として活躍するプロの落語家より指導を受けることができ、表現力が高まった。コンテスト形式で実施した。

(4) テーマ「国際紛争の現場を学ぶ」

授業日 11/9

対象 「国際同盟」参加生徒（国際関係や外交問題について学ぶ生徒有志のゼミ形式の組織）

ゲスト講師 西谷文和氏（国際ジャーナリスト）

内容 「国際同盟」の活動の最初の学習として、世界の紛争地のリアルな実情を知ることを目論見とした。グローバル教育の観点からは、机上の空論ではなく、世界情勢の現実在即して現場から考える重要性を学ぶことをねらいとした。講師の方が編集された現地映像の視聴を中心に、実際に紛争地に足を運んでいるジャーナリストから話が聴けて、議論もできた。生徒はリアルな実情を生の声や映像から学び、深く考えるようになった。

(5) テーマ「国際政治の現場を学ぶ」

授業日 12/28

対象 「国際同盟」参加生徒有志

ゲスト講師 前原誠司氏（衆議院議員・元外務大臣）

内容 日本とアメリカ、中国、韓国、中東など世界の国々との外交交渉について、防衛の観点から、外務大臣を務めた経験を中心にリアルな話を伺った。事務所のほうにこちらから伺い、インタビューの形式で行った。外交交渉の最前線の話をお聴くことで、いろいろと生徒が考えを揺さぶられるインタビューとなった。

### 1-3 生徒の自主的な活動

生徒の自主的な活動組織として2015年秋に「国際同盟」を立ち上げた。「国際政治や外交問題に興味ある人、平和に関心のある人、将来外国で活躍したい人、地球的視野を持って地域の問題に携わりたい人などを募集の対象とします。大学のゼミのようなイメージです。国際関係にまつわる自主的な学習を重ねながら、学年度末に、学習の集大成として、興味関心に基づいて、外部から講師を自分達で交渉して招いて、テーマを掲げてシンポジウム等を企画運営して、高校生の立場から社会に発信していくことを1つの到着点とします。また他の学校や大学、企業、NPOやNGOなどとの交流も視野に入れています。自主的な活動や学習を通じて、普通なら出会う機会がないような人と出会えます。また基本は自分達で企画運営するので、交渉力や行動力、積極性が身につきます。当然、国際情勢や戦争や平和に関する学習を通じて広くて深い知識も獲得できます」という応募要項に対して1、2年生10名が応募してきて、2016年3月現在1、2年生あわせて7名が週1回活動している。

12月26日(土)には大阪の上本町にある大阪国際交流センターで実施されたOne World Festival for Youthに有志生徒3名が参加し、関西の国際協力や国際交流に関わっている他校の実践発表に触れて大きな刺激を受けた。またこの日2014年度「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」に応募し「一枚の集合写真から」という題で国際協力特別賞に輝いた難波ほのかさん(2年)が招待されて、エッセイの披露を行った。

3月18日午後には、どうやって平和を構築していくのか考えていきたいという問題意識から生徒企画として「難民について考える～命をつなぐパンを片手に～」と題し、本校多目的ホールで、難民と食糧問題の現状を知って平和について考えを深め合うことを目的とした講演会を実施する。ゲストは清家弘久氏（日本国際飢餓対策機構常務理事）である。

また国際同盟生徒有志が大阪大学大学院国際公共政策研究科主催「第2回国際公共政策コンファレンス」に応募し、1次書類審査を突破し、4月に大阪大学で実施される本選への出場を決めた。

## 2-1 英語科

### 授業実践

#### 1. Global Enterprise Challenge への参加

特定非営利活動法人アントレプレナーシップ開発センターが主催する Global Enterprise Challenge 本校から2グループ合計18人が参加予定した。残念ながら、入賞は逃したが、実際に社会で販売できる品を考案し、販売価格やルート、宣伝方法までを考えるとこの普通の授業では体験できない経験をすることができた。

#### 2. 関西学院大学、読売新聞、ジャパン・ニュース主催 「第7回 高校生英語エッセイコンテスト」への参加

1年生1組のグローバル英語Ⅰの授業を使って、全員にエッセイコンテストに参加させ、1名が入賞した。作品は日本のクラブ活動とアメリカでのクラブ活動を比較したもので、日米の教育観・学校の役割などの違いが感じられるものであった。

#### 3. ALTの活用

英語表現ⅠおよびⅡの授業に、それぞれ週5時間ずつ（合計、週10時間）ALT（ケン・ケルシー氏）を招き、speaking から writing への指導と助言をしてもらった。

## 3-1 家庭科

富田滋子

### I 授業テーマ及び授業のねらい

1. テーマ「風呂敷から日本の文化を考える」
2. ねらい

- (1) 食文化や住文化等に通じる日本の文化の特徴を風呂敷を通じて理解する。
- (2) 日本の文化について視野を広めると共に諸外国にも紹介できる知識と実践力を身につける。
- (3) 風呂敷の利用方法を学習し、持続可能な社会の形成に主体的に関わろうとする態度を身につける。

## II 対象生徒 2 学年 家庭総合受講者 (5 クラス)

### III 取り組み内容

#### 1. 風呂敷講習会の実施 (各クラス 50 分)

京都和文化研究所の山田悦子先生を講師に招き、風呂敷講習会を実施した。風呂敷の語源、歴史等を映像を交えて学習すると共に (資料 1)、いろいろなサイズの風呂敷の模様や特徴、利用方法についても学習した。(資料 2) 実習においては、実際に一人一人が風呂敷を手にし、風呂敷の基本的な包み方の他に、瓶包みや風呂敷から作るトートバッグ等の作り方や利用方法を学習し、風呂敷が「包む」だけではなく「運ぶ」、「かける」など多様な利用方法があることも学んだ。



日本人にとっての「包む」ということが何を意味しているのか、日本の包む文化について改めて振り返ることとした。また、一枚の布や着物の転用、再利用の工夫、物や季節感大切にした暮らし、箸や畳文化など日本の文化の特徴と長所を認識するよう、働きかけた。

### IV 成果と課題

生徒たちは、日頃利用する機会の少ない風呂敷の歴史や活用方法を学習することで、環境にも配慮できる風呂敷の活用に改めて興味関心を持つことができた。また、日本人の美意識、心遣い、季節感を大切にした暮らし、持続可能な社会に相応した暮らしの知恵など、風呂敷から見えてくる日本の文化の特徴についても認識を深め、視野を広げることができた。これらの学習から得られた知識や情報、技術を、いかに実際の生活の中に取り入れまた活用するのか、さらに授業者の意図的な働きかけが必要であると思われる。また、自国の文化をどのようにして諸外国の人々に理解してもらうことができるのか、という視点を併せ持つことも必要である。事後学習をさらに充実させたい。

## 4-1 社会科

高田敏尚

本日の授業のながれ

2015年7月2日(木) 5限 『現代社会』 1年4組

グローバル化を考えるーグローバルビンゴを楽しむ

総合学習を楽しもう(社会編)

次のような人をみつけてください

外国に行ったことがある？	外国製品を身につけている？	新聞で外国の記事を読んだ人	英語以外の言葉を少しでも話せる？
名前	名前	名前	名前
国名	国名	国名	国名
目的は	何を	どんなこと	話して
外国人の友達がいる？	行ってみたい外国はどこ？	学校以外で外国語を勉強している？	外国へ手紙を書いたことがある？
名前	名前	名前	名前
国名	国名	国名	国名
きっかけは	どうして	何のため	理由は
外国の電化製品をもっている？	外国の有名なスポーツ選手は？	外国のアーティストを1人あげると？	外国人と話したことがある？
名前	名前	名前	名前
国名	国名	国名	国名
何を	選手名と種目	名前は	どんなこと
他の国に行った経験のある人と話した？	外国のおみやげをもらったことがある？	外国の小説を読んだことがある？	
名前	名前	名前	名前
国名	国名	国名	国名
どんなことを	何を	感想は	

この授業を行って、生徒の感想には、「教室以外で(社会の授業を)やるのが初めてだったので楽しかった」というのが多かった。最初の○の問いでは「アジアやアフリカにアーティストがなかった」「地図に印された国は偏っていた」ということを視覚化して気づいたようだ。また、グローバル化のイメージについては、授業前に「英語

教育」「ネイティブの先生との英会話」と記していた生徒が「教育に関わらず、外国と接していくことがグローバルという感じがした」。また、別の生徒は「グローバル化は自分に関係ないというような遠いイメージを持つが、実際はもっと身近なものなのかもしれないと思った」と最初にイメージしたグローバル化が変わったと述べている。「このようなインタビューでグローバル化について学べるとは思わなかった。グローバル化とはどういうものかもっと知りたい」と意欲をみせている。概念だけの「グローバル化」ではなく、生徒に実感として体得させる、このような授業形態も必要とされていると考えている。

## ⑥附属特別支援学校における取り組み

本年度は、以下の授業について、グローバルの視点から授業実践に取り組んだ。以下に授業実践一覧と代表的な授業についての指導案を載せる。

次年度は、和文化にかかわる授業～うどん作り・門松作り～や高等部の沖縄修学旅行をグローバルの視点から授業実践として取り組んでいきたい。

### 授業実践

実施日時・学年	授業名	テーマ(内容・教材目標)
6月19日(金) 小学部合同生活 小学部 1～6年	世界の国から 英語に親しもう① ※学習指導案 1	音楽に乗せて、世界の挨拶を知ろう。 ・日本以外にもたくさんの国があり言葉があることを知る。 ・ダンスや歌を歌う中で、挨拶のやりとりを楽しむ。
6月23日(火) 小学部合同生活 小学部 1～6年	世界の国から 英語に親しもう② ※学習指導案 2	絵本を見ながら 英語に親しむ。(アンドリュー先生を迎えて) ・みんなのよく知っている動物やその鳴き声を聞く。 ・数字を数えてみる。 ・絵本を読んでもらい英語の響きに親しむ。
12月11日 (金)	校外学習～外国の人にインタビューしよう～Ⅱ	京都にあるお寺や神社を訪れ、京都の町を知る。 海外から訪れている方に、英語で挨拶をして、名前・好きな日本の食べ物・好きな動物を聞く。
1)5月13日 (水)	テレビ電話で遠くの人と話	Skype で遠くにいる人の顔を見ながら話せることを知る。

2)9 月 7 日 (月)	そう・ インタビュー	自分たちが住むところから遠い場所、そこに住む人々、生活などについて知る。
9 月 14 日 (月)	しよう	1) 修学旅行で沖縄に行っている 3 年生と Skype で話す。 沖縄と京都の気候などについて知る
3)9 月 24 日 (木)		2) タイ・バンコク日本人学校ではたらく教員と Skype で話し、タイでの生活について知る
9 月 25 日 (金)		3) イタリア・フィレンツェに滞在している教員と Skype で話し、イタリアでの生活について知る

## 小学部「合同生活」学習指導案 1

指導 小学部教諭全員

1. 日時 平成 27 年 6 月 19 日 (金) 13:30～14:00
2. 場所 プレールーム
3. 題材 世界の国から 英語に親しもう
4. 題材の学習目標
  - ・世界にたくさんの国があり、言語があることを知る。
  - ・簡単な挨拶や言葉を知る。
5. 題材設定理由

### ①児童観

小学部の児童たち各学年 3 名ずつ 18 名で行う授業である。午後の合同生活の授業では児童たちが興味をもつような内容や今日的な話題を提供したりしている。

今回は英語を取り上げる。児童は日常生活の中で、テレビや本等を通して様々な場面で英語にふれる機会がある。また日本語とは違う英語のもつ言葉の響き、外国人の雰囲気に興味をもつ児童もいる。なかには、世界の国に興味をもって簡単な世界地図を書く児童や、英語で数を数えることを楽しむ児童やバスの英語のアナウンスを口ずさんで遊んでいる児童もいる。

### ②題材観

児童を取り巻く環境には、外国語があふれている。先日も実習生に中国からの留学生がいて、簡単な挨拶を教えてくれた

今回はより聞く機会が多い英語を取り上げる。児童たちが好きであろう動物や数や挨拶を取り上げる。次回に大学のオバマイヤー先生にゲストティチャーとして、英語の大型絵本「ブラウン ベア」を読んでいただくので、それに向けて英語に親しんでもらえればと考えている。

この絵本「ブラウン ベア」は「何が見えるの？」というセンテンスの後で、ページがめくられるので、何度も耳にすることになる“what do you see?”という響きを楽しむことができる。また、鮮やかで大きな動物たちが登場するので、ページがめくられることを楽しみにすることができる。

### ③指導観

19日は、23日にオバマイヤー先生と出会う事前学習とする。23日に読んでいただく絵本のキーになる“what do you see?”や絵本に出てくる動物、そして挨拶を中心に授業を展開する。動物や数字カードを見て、英語で発音し、みんなで言ったり、グループで言ったり“hello”の歌を歌いながらダンスをして英語に親しむ。

23日は、ゲストティチャーであるオバマイヤー先生に、歓迎の“hello”の歌やダンスを見てもらう。その後に、指導者は絵本「ブラウン ベア」のキーワード“what do you see?”と言いながら、英語カードを読む。

オバマイヤー先生に絵本を読んでいただくときには、知っている名前や“what do you see?”と児童から言うことができるように指導者たちも一緒に言いながら、英語に親しむ機会とする。

## 6. 題材の指導計画

① 6月19日（金）本時

② 6月23日（火）アンドリュー・オバマイヤー先生を迎えて

## 7. 本時について

本時は、次時のオバマイヤー先生を迎えるに当たって、簡単な挨拶と数字や動物の絵カードを使って、「日本語」や「英語」で言ったり、全員で復唱したりして、英語に親しむ機会としたい。

また、“hello”(音楽の授業でしている「おはよう朝がきた」)の歌をみんなで歌いながらダンスをする。特に“hello、hello”の部分が発音するために、歌う前に全員でhelloと読んでみる。その後で“hello”をはっきりと発音しながらみんなで歌いながら踊る。

次時の絵本のキーになる“what do you see?”を知る機会にするために。“what do you see?”と言いながら、カードを見せ、発音する。

児童たちが楽しみにしている合同生活の授業であるので、指導者たちが笑顔で楽しく歌ったり踊ったり、復唱したりする。

## 8. 本時の目標

- ・英語の挨拶や物の名前や数字を聞き、言ってみる。
- ・英語の挨拶を歌いながらダンスをする。

## 9. 本時の展開

## 10. 本時の評価

- ・helloを復唱することができたか
- ・カードを見て数字や動物の名前を復唱することができたか。
- ・"Hello"の部分を使いながらダンスをしたか。

## 11. 準備物

- ・数字と動物のカード
- ・Hello, What do you see?のカード
- ・ピアノ
- ・歌詞カード

## 小学部「合同生活」学習指導案 2

指導 小学部教諭全員

1. 日時 平成27年6月23日(火) 13:30～14:00

2. 場所 プレールーム

3. 題材 世界の国から 英語に親しもう

4. 題材の学習目標

- ・世界にたくさんの国があり、言語があることを知る。
- ・簡単な挨拶や言葉を知る。

5. 題材設定理由

前時の指導案と同じ。

6. 題材の指導計画

①6月19日(金) helloや動物の名前、数字を言ってみる

②6月23日(火) アンドリュー・オバマイヤー先生を迎えて

7. 本時について

本時は6月19日英語に親しもう①に引き続きの授業で、オバマイヤー先生の絵本の読み聞かせを聞く。

前時は、聞いている間や発音練習の繰り返しには、興味をもてなくなってしまう児童が多かった。しかしながら、お客さんの登場や短いやりとりには興味をもって見ることができた。また「春がきた」のダンスには楽しく取り組むことができた。

本時は発音練習や話を聞く時間を短くし、オバマイヤー先生を迎えて、絵本を聞くことを中心に行う。オバマイヤー先生と一緒にダンスをして"byebye"と言って送る。児童たちが楽しみにしている合同生活の授業であるので、指導者たちが笑顔で楽しく歌ったり踊ったり、復唱したりする。

今後、今回学習した英語をそれぞれの授業の場面で使ったり、英語だけでなく、他の国の言葉や文化に親しませる機会を作っていく。

8. 本時の目標

- ・オバマイヤー先生を”hello”と言って迎えることができたか。
- ・絵本を見ながら英語の音を聞く

#### 9. 本時の展開

#### 10. 本時の評価

- ・オバマイヤー先生に”hello””byebye”と挨拶できたか。
- ・絵本の動物を見ることができたか。

#### 11. 準備物

絵カード（前時に使ったもの）、名前カード、大型絵本、絵本たて、CD「春がきた」

## ⑦附属学校園における授業実践等について

神代 健彦（グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会委員）

### はじめに

平成 27 年度における本学のグローバル人材育成プログラムでは、幼稚園から大学までの系統的カリキュラムの作成という作業と並行して、附属学校園におけるグローバル人材育成を念頭に置いた授業の開発・試行が精力的に展開されてきた。附属幼稚園、附属京都小中学校、附属桃山小学校、附属桃山中学校、附属高等学校、附属特別支援学校という本学の附属学校園において、また、多くの教科・領域・活動のなかで、試行された公開授業の数は 40 を超えており、来年度以降も更なる開発が準備されている<sup>5</sup>。いずれも、児童生徒の発達段階に配慮し、また学習指導要領に基づく既存カリキュラムの学習内容を確実に保障しつつ、グローバル人材育成という新たな目標を組み込むという難題に、着実かつ多様な形で回答を示しており、ひるがえって、計画の主題である系統的カリキュラムは、これらの蓄積の上に今後精緻化されていくものと考えられる。

他方で、よりよい授業・カリキュラムを開発するためには、試行された個々の授業等について、その意義や可能性、また現時点での限界や課題などを明確にしておくことが欠かせない。そのような観点から本学では、様々な機会を利用して、複数回にわたって授業実践の検討会等を重ねてきた。大きなものとしては、以下の通りである。

#### ①第 1 回授業実践検討会

日時：平成 27 年 7 月 27 日

---

<sup>5</sup> 2015 年度の授業については、プロジェクト委員・本学教育学科の村上登司文教授が管理する HP ([kyoiku.kyokyo-u.ac.jp/gakka/global/15kokainittei.htm](http://kyoiku.kyokyo-u.ac.jp/gakka/global/15kokainittei.htm)) にて、その一覧を見ることができる。リストは随時更新されている。

場所：京都教育大学

プログラム：

1) 授業実践者による報告

報告者 附属桃山小学校 高橋詩穂先生（音楽）

附属桃山中学校 神崎友子先生（国語）

附属京都小中学校 藤田智久先生（社会）

附属高校 高田敏尚先生（公民）

2) 授業実践者、大学教員、研究会参加者による意見交換

3) 今後の授業実践に向けて

②京都教育大学フォーラム 2015

日時：平成 27 年 12 月 19 日

場所：キャンパスプラザ京都

プログラム：

1) 講演

テーマ：「いつも世界に目を向けて：「多様性」との接点のすすめ」

講演者：二村太郎氏（同志社大学グローバル地域文化学部助教）

2) 話題提供

テーマ：「グローバル時代に学校は」

講演者：ジェイソン・デヴィットソン氏（京都教育大学附属桃山小学校 ALT）

講演者：佐古 清氏（京都府教育長指導部学校教育課主席統括指導主事）

講演者：光嶋 花英氏（京都市教育委員会指導部学校指導課指導主事）

3) 研究発表

テーマ：「京都教育大学グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト（中間報告）ーグローバルに教育を見つめ、ローカルに教育を考えるー」

報告者：中 比呂志（京都教育大学教育学部教授）

村上 登司文（京都教育大学教育学部教授）

神代 健彦（京都教育大学教育学部講師）

そこで本報告書では、以上の実践検討における議論を踏まえつつ、各附属学校園で試行されたグローバル人材育成の授業について概観するとともに、2 つの実践事例を取り上げ、現時点までに開発された授業の意義と今後の課題について示しておきたい。（なお以下の叙述は、主として上記②で神代が行った報告の内容に依拠していることを断っておきたい）。

1. 平成 27 年度公開授業の概観と分析

すでに述べたように、平成 27 年度グローバル人材育成の公開授業の数は、40 を超

えており、その内容も多彩である。各授業のタイトルや授業者等については、表1にまとめた。ここでは、表1の情報を踏まえて本年度の取り組みを概観し、その意義と課題について検討したい。

## 1-1. 本年度の取り組みの特色

### 1-1-1. 既存の取り組みの「強み」について

まず指摘しておきたいのが、本年度の授業開発の特色ないし傾向性である。とくに、来年度以降の取り組みにおいて基礎となる肯定的な側面（「強み」）の抽出を意識して、いくつか指摘しておきたい。なお文中の（）の番号は、表1の通し番号で示された個々の授業を意味している。

#### ① 幼稚園から高校までの網羅性と系統性

まず一見してわかるのが、幼稚園から高校、また特別支援学校まで、学校種を超えて授業が試行されているという点である。「幼稚園から高校までの系統的カリキュラム」というプロジェクトの趣旨に鑑みて言えば、特定の学校種に偏った授業開発の隆盛は好ましくない。すべての学校園で、それぞれの既存のリソースを生かしながら開発された授業が出そろふことが、その次の課題である学校種間での有機的で滑らかなカリキュラムの接続の、土台となると考えられる。

またその系統性については、今後すり合わせを進めていかねばならない課題ではあるが、現時点において重要な特性が指摘できることも付言しておきたい。すなわち、現状では、幼稚園、小学校低学年において体験的な活動（4、18、32）が、小学校中学年から中学校段階でより教科学習の知的な側面が強調され（6、7、10、11、28、37ほか）、高校段階では、より応用的な内容、また実践的かつ主体的な活動が配されている（9、26、27、29ほか）点である。この点は、今年度より新たに打ち出されたカリキュラムの段階イメージ（「出会う」「広がる」「つながる」）とも対応しながら、さらなる深化が期待できるように思われる。

#### ② 小学校英語の授業開発との相乗効果

高学年を中心に、小学校での外国語活動（英語）のウェイトは今後ますます高まっていくことが予想される。本学附属小学校でもそれに向けた検討が進んでいるが、そのことは、本プロジェクトと大いに関連するところである。その点から言えば、小学校での英語活動の授業開発（11、20）が、本プロジェクトの授業として示されている点は、重要な意味を持っている。小学校の外国語活動は、当然ながら狭義の英語運用能力の向上のみならず、コミュニケーション能力の向上や、他者理解の感性を育てることをその目的・目標に含んでいると思われるが、今回検討しているカリキュラム内においては、他の教科・活動で培われた知識や態度等が、改めて、英語での活動とし

て深められるという有機的な関係性が展望できるように思われる。例えば、後述する伝統文化の学習を基礎として、それらの内容を英語で発信するというような、教科横断的な授業連携も期待できる。今年度のいくつかの授業は、そのステップとして強調しておきたい。

### ③京都の伝統文化を生かした授業

他方、今年度分厚い蓄積を達成したものの一つは、日本または京都の伝統文化についての授業である。例えば、桃小の音楽科では、京都の伝統音楽をモチーフとして、親しみをもつ（4）、演奏する（2、12）、音楽をつくる（3）という一連の課程が、高い完成度を持ってすでに実施されている。また京都小中（14、30、31）、桃中（23）、高校（19、27）など他の学校種でも、同様の蓄積がみられる。

これらの授業で重要と思われるのは、二点である。一つは、一般的で平板な日本文化の学習ということではなく、京都という地域に根ざした主題の選択・教材化が図られている点である。このことは、実際の文化現象が、地理的・時間的な広がりの中で多様な差異を含みこんで存在していることを適切に反映している。

もう一つは、この伝統文化の学習、とりわけ先の音楽の授業などが、日本（京都）の伝統音楽の学習と、他の文化圏の音楽の学習を一つの課程のなかに織り込んでおくことを通じて、いわば自文化中心主義に陥る可能性を慎重に避けている点である。そもそも、「比較する」というプロセスは、それ自体が、自文化と他者の文化の理解をさらに促進させる工夫の一つである（知識・理解）。他方、伝統文化の学習は、それを介した文化的アイデンティティの涵養をもたらすことが期待されるが（価値観や態度の形成）、そのことは同時に、他の文化（他者にとっての自文化）への敬意と尊重の態度を伴う必要がある。そのことを可能にするような教科のシーケンスに注意が払われている点を指摘しておきたい。

## 1-1-2. 課題について

以上のように現時点での達成ないし「強み」をまとめつつ、次に来年度を意識した課題について、私見も含めてまとめておきたい。ただしそれは個々の授業の担当者（実施者）が単独で解決すべき課題という意味ではなく、大学のカリキュラム作成チームと、附属学校園の授業者との間で相互に議論しつつ、共同的に解決しなければならないものとしてのそれだということを強調しておきたい。

### ①理数系教科におけるグローバル授業の推進

平成27年度の公開授業一覧をみて改めて気づくのは、国語や社会、英語などの文系教科、あるいは音楽などの芸術系の教科において大きな進展がみられる一方で、算数・数学や理科などいわゆる理数系の教科では極めて限られている（わずかに22など）と

いう点である。もちろん、あくまで試行期である今年度において、グローバル化という社会現象との結びつきが一見して明瞭な文系教科等から試行がスタートしているということは、まったく無理のないことといえる。しかし他方で、例えばグローバル化をめぐる問題には、環境問題など、理数系の知識を前提にしなければならないものが明らかに存在する。また、例えば技術的なイノベーションをめぐる問題なども、グローバル化と大きく関連しているだろう。これら言わば〈グローバル・イシュー〉を念頭においた理数系の教科におけるグローバル授業の可能性について、今後検討していく必要があるように思われる。

## ②グローバル化を念頭に置いた価値観や人格形成を直接に扱う授業

既存の授業実践においては、例えば音楽の授業における異文化への敬意と尊重の態度の形成、グローバル経済におけるフェアネスの問題などといった形で、グローバル化／多文化共生社会を生きるうえで重要な価値観の形成、態度や人格の涵養といった事柄が扱われている。しかし他方で、知識や技能の教育・学習を重要な構成要件とする教科の学習においては、そのような価値観や人格の形成に直接一定以上の時間や労力を割くことは難しい。したがって、教科学習を通じて育った、価値にかかわる学びを、改めて主題的に扱う授業も必要になってくると思われる。

その点から言えば、例えば「特別の教科 道徳」の時間などをつかった、教科における価値の学びを改めて総合するような授業が、一つの方向性として浮かび上がってくるように思われる。また、近年の道徳教育改革では、従来の心情主義的なものから「考える道徳」への転換が言われている。このことを奇貨として、世界の様々な文化を背景とした諸価値についての学び—むしろそれはいわゆる「価値の押しつけ」とは異なって、むしろ異質な他者への寛容さと結びつくものと考えたい—を検討していくことも必要なように思われる。

表 1

番号	実施日	学校種	タイトル	授業者
1		特支	「世界の国から英語を親しもう」	
2	6/8（月）	桃小	「祇園囃子を演奏しよう」（小6音楽）	高橋 教諭
3	6/10（水）	桃小	「祇園囃子をつくろう」（小5音楽）	高橋 教諭
4	6/12（金）	桃小	「郷土の音楽に親しむ」（小1音楽）	高橋 教諭
5	6/16（火）	高校	「国語表現」（高3国語）	札埜 教諭
6	6/29（月）	桃中	「説明的文章を読む」（中1国語）	神崎 教諭
7	6/29（月）	桃中	「地理的分野 世界からみた日本の姿」（中2社会）	溝部 教諭
8	7/1（水）	京小中	「動物の仲間分け」（8年社会）	野ヶ山 教諭
9	7/2（木）	高校	「グローバルビンゴ」（高1現社）	高田 教諭
10	7/6（月）	京小中	「わたしたちの生活と食料生産」（5年社会）	藤田 教諭

11	7/8 (水)	桃小	「オリジナル辞書を作ろう！」 (小4英語)	平岡、竹内 各教諭 J・デビッドソン氏
12	7/9 (木)	桃小	「四つ太鼓を演奏しよう」 (小4音楽)	高橋 教諭
13	7/16 (木)	桃中	「中国少年友好交流訪日団との交流 (京セラ主催)」	大栗、渡邊、津村各教諭
14	9/2 (水)	京小中	「俳句の可能性・俳句十六句」 (9年生国語)	國原教諭
15	9/25 (金)	桃中	帰国学級スピーチ発表会	大栗 教諭
16	9/29 (火)	大学	講演「クロスカリキュラムの発想にもとづくカリキュラムの再構成」	徳永准教授 (本学大学院連合教職実践研究科)
17	9/30 (水)	桃小	「日本の伝統文化『習字』の書き方を教えよう」 (3年)	大島 教諭
18	10/27	京小中	「ハロウィンを楽しもう」 (1年生英語)	福井 教諭
19	10/2 (水)	高校	「英語 (・日本語) 落語ワークショップ (実演)」 (1年)	札埜 教諭 林家染太師匠 (ゲスト)
20	10/2 (水)	桃小	「好きなスポーツを伝えよう！」 (小2英語)	桑名、竹内 各教諭 ジョン サンフォ氏
21	10/3 (金)	桃小	「韓国の音楽に親しもう」 (小3音楽)	高橋 教諭
22	11/2 (月)	桃中	「物質のすがた」 (中1理科)	中川 教諭
23	11/2 (月)	桃中	「伝統文化を知ろう」 (中1国語)	大栗 教諭
24	11/2 (月)	桃中	「情報の発信」 (中2技術)	中井 教諭
25	11/2 (月)	桃中	「払い腰」 (中3保体)	森野 教諭
26	11/4 (水)	高校	「英語 (・日本語) 落語ワークショップ (実演)」 (1年)	札埜 教諭 林家染太師匠 (ゲスト)
27	11/4 (水)	高校	「風呂敷から日本の文化を考える」 (高2家庭科)	富田 教諭
28	11/9 (月)	京小中	「現代の民主政治と社会」 (9年生社会)	西田 教諭
29	11/9 (月)	高校	附属高校生徒有志による「国際同盟」 (仮称) の勉強会。国際問題などに関心のある生徒の活動。	札埜 教諭 西谷文和氏 (ゲスト)
30	11/13 (金)	京小中	「京都のおすすめを紹介しよう：京都の良さを発信する」 (5、6、7年生総合)	柘植 教諭
31	11/13 (金)	京小中	「京都のおすすめを紹介しよう：京都の良さを発信する」 (5、6、7年生総合)	組谷 教諭
32	11/20 (金)	京小中	「自動車をつくる工業：人と環境にやさしい自動車について考えよう」 (5年生社会)	藤田 智之
33	11/20 (金)	桃小	「めざせプレゼンテーションの達人」 (小3メディア・コミュニケーション)	木村 教諭
34	12/3 (木)	京小中	「だんだんだんダンボール：ダンボールを使って、友だちと力を合わせて活動する」 (図画工作)	梅村 教諭
35	1/20 (水)	幼稚園	「お正月の生活や遊び～日本のお正月、ブルキナファソのお正月～」	村田 教諭 サンフォ・モハマドゥ氏
36	2/5 (金)	京小中	「少年の日の思い出」 (7年生国語)	新庄 教諭

37	2/22 (月)	桃小	「日本で一番やっかいなごみ～高レベル放射性廃棄物について考えよう～」(小4、高2社会)	平岡 教諭 (桃小) 高田 教諭 (高校)
38	2/22 (月)	桃小	「ふるさとに親しみをもって」(小2道徳)	池田 教諭
39	2/23 (火)	高校	「現代文「こころ」(グループによる教え合いと討議の過程を踏まえたグループ発表)」(高2国語)	中井 教諭

\* 学校種はそれぞれ、幼稚園＝本学附属幼稚園、桃小＝附属桃山小学校、桃中＝附属桃山中学校、京小中＝附属京都小中学校、高校＝附属高校である。

## 2. 授業実践例について―その意義と可能性―

ここでは、本学附属学校で実施されたグローバル人材育成の授業実践について、具体的に二つの例を示すことで、その達成について論じておきたい。紹介する実践の選定に際しては、優れた実践であるということはもちろんだが、本プロジェクトの趣旨からみて、後続の授業実践およびカリキュラム作成においてとくに重要な示唆を含むものという基準で取り上げている。

### 2-1. 実践例①

#### 2-1-1. 授業概要

まずは、本学附属京都小中学校より、藤田智之教諭(本節では以下、「授業者」)の社会科の授業である。基本事項については、以下の通りである。

◇タイトル:「わたしたちの生活と食料生産～日本のお米の現状から考えよう～」

◇授業者:藤田 智之 教諭(附属京都小中学校)

◇授業日時:2015年7月6日(月)3校時

◇対象学年・クラス:5年A組

◇教科:社会(単元:「わたしたちの生活と食料生産」)

以下、藤田教諭の指導案に基づいて、本授業の概要を述べたい。

本授業は、現行学習指導要領上の社会科における日本の第一次産業についての学習の一部である。学習指導要領の内容(2)(「我が国の農業や水産業につて、次のことを調べたり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、それらは国民の食糧を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深くかかわりをもって営まれていることを考えているようにする。」)に準拠した単元のなかで、本授業は、その導入部となる。具体的には、日本の米作りを主題にした協同学習を織り交ぜた授業プランで、とくに、「批判的思考力」の育成を念頭に、資料として示された図表やグラフを、協同的に読み解くことに力点が置かれている。

協同学習のポイントは、設定されている課題が、現段階でまだ答えがない諸問題(「農業従事者の高齢化」、「お米の消費量や生産量の減少」、「お米の輸入自由化問題」)

など)ということにある。「作付面積と生産量」、「消費量の低下」、「農業従事者の変化」等についての資料が提示され、子どもたちは、これらの問題について、仲間とともに考え、自分なりの解決策を考えることになる。

## 2-1-2. グローバル人材育成としての特性

以上が社会科の授業としての説明となるが、ここではグローバル人材育成の観点からみたその強み、ないしは特性についていくつか言及しておきたい。

### ①事実のグローバルな理解の促進

まず内容面についてである。本授業では、協同学習で子どもたちに考えさせる問題として、日本の米づくりを、現在議論が進められている TPP（環太平洋パートナーシップ協定）との関わりで考えさせることに、一定のウェイトが置かれている。すなわち、日本の米づくりという既存の社会科の学習内容を、TPP というグローバル社会の課題のなかで考えさせることによって、身近な食品の生産・流通を、国境を超えた経済活動（グローバル経済）のなかにあるものとして捉えることを促しているわけである（事実のグローバルな理解）。

### ②グローバル世界の主体的把握

さらに、TPP を踏まえた日本の米農家（生産者）の後継問題は、この問題に対する主体的な姿勢を導く工夫である。子どもたちは授業開始当初、「日本のお米が食べられなくなるかもしれない」という、言わば消費者目線の問題意識で授業に参加し、農家が為すべき工夫についての提言、という形で考察を深めていたように思われる。しかし授業者は「では、あなたは将来米づくりをしますか？」という、いわゆる「ゆさぶり質問」によって、問題を生産者の側にたって捉えることへと導いていった。このような視点の入れ替えによって、グローバル経済がもたらす論争的な問題、課題に対して、より主体的な取り組みを促すことが目指されていた（グローバル世界の主体的把握）。グローバルな社会的事実とは、ややもすれば日常から遠く離れた出来事のように感じられがちだが、それを自らの事として把握することを促す工夫といえる。

### ③他者理解と合意形成

活動課題の設定上の工夫として、他者理解と合意形成にかかわる力の育成が意識されていたことも挙げておきたい。協同学習の課題は、TPP 発効後の米作危機について、資料を読み解き知識を深めつつ、グループで対応策を策定する、というものだった。とりわけその対応策のまとめ方について、グループ内で話し合いつつ、優先順位をつけるというルールが設定されていたことは、必然的に、グループ内での意見交換を、（さしあたりの）合意形成に向かわせるという効果を生み出していた。グループ内の他者の意見を尊重し、それを適切に理解するとともに、しかしそれにとどまらず、そ

の違いをすり合わせるというプロセスが、周到に設計されていたといえる。そのことは、グローバル社会において求められる、文化的な背景を異にする他者を尊重しつつも、その他者と喫緊の課題について合意を形成する力を育てるという意味で、この授業がグローバル人材育成の授業であることを示しているといえる。

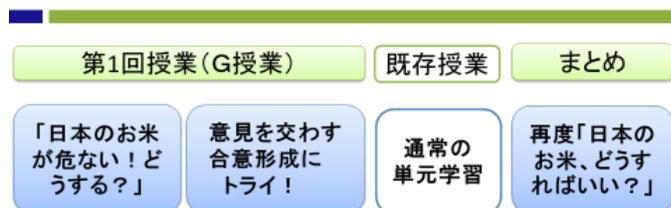
#### ④単元を通じた問題意識を喚起する工夫

他方で、ここで取り上げる4つ目の工夫は、グローバルな視点から授業を再構築することが、教科学習をそれとして改善する可能性を示したものとして興味深い。それは本授業が、単元（小単元）の導入部に位置づけられているということに関わっている。

授業者は、農家の後継問題やTPPなどについての資料の読み解きを踏まえて、「日本のお米が、食べられなくなるかもしれないよ？どうする？」という趣旨の発問をした。この発問は明らかに、子どもたちにある種の動揺を誘った（「日本のお米が食べられなくなるのは困る！」）ように見受けられ、明らかにその後子どもたち同士の議論を活性化させた。このことはつまり、この授業が、グローバルな事実がしばしば含み持つ、緊急性や意外性を、この単元の学習における学習動機づけのためにうまく利用したものであったということを示している。

単元冒頭であるこの授業において「日本のお米が危ない」と気づいた子どもたちは、本時だけではなく、その後の単元学習を通して、この課題を携え、それに動機づけられながら、学習を進めていくことになる（図1）。これは、授業をグローバルな観点から見直し、再構築するということがもつ、授業改善機能の一端といえる。授業のグローバル化は、既存の教科学習に単に新たな要素が加えられるというだけではなく、それ自体、授業がそれとしてブラッシュアップされる契機であるということが、本授業では具体的に示されていると言える。

## G授業としての特性



◇既存学習内容のレリバンスを向上させつつ、新たな力(グローバルに事柄を捉え、議論し、合意形成する力)を保障する。

図 1

### 2-1-3. 小括

以上、藤田教諭の社会科の授業について、グローバル人材育成の観点からその意義を解説した。繰り返しになるが、本授業は、既存の社会科の内容をグローバルな視点から組み替えるという、「授業のグローバル化」であると同時に、そのことによって既存学習の動機づけを行うという「グローバル化による授業改善」の事例でもある。このことは、後続のグローバル授業開発を大いにエンカレッジするものと思われるため、強調しておきたい。

なおこの点から敷衍して、特に工夫④（単元冒頭でのグローバルな授業）は、他の教科・領域においても応用可能性をもつと思われることを付記しておきたい。派生イメージは、下図の通りである。例えば理科の授業、特定の単元の冒頭で、グローバルイシューである地球温暖化を示しておくことは、その単元をグローバルなものとすると同時に、学習の動機づけとなるように思われる。それは例えば、国語（古文）の冒頭で「災害との闘いとしての人類史」などといったことを演出したり、「文化的多元性の一部としての身体文化」という導入から、体育（武道）の授業に入る、などといったことも考えられるように思う（図2）。むしろこれらの「演出」については、その内容（事実関係）や解釈の妥当性も含めて、教科内容論として厳密に検討される必要があるから、あくまでさしあたりの例示に過ぎないが、いずれにしても本授業からはグローバルな授業づくりのアイデアが汲み取れるように思われる。

## 派生イメージ

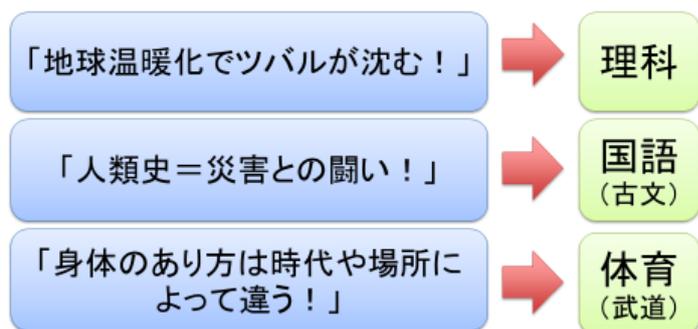


図 2

### 2-2. 実践例②

#### 2-2-1. 授業概要

次に、本学附属桃山小学校より、高橋詩穂教諭（本節では以下、「授業者」）の音楽科の授業を取り上げたい。基本事項については、以下の通りである。

◇タイトル：「祇園囃子を演奏しよう」

◇授業者：高橋 詩穂 教諭（附属桃山小学校）

◇授業日時：2015年6月8日（月）4、6校時ほか

◇対象学年：5年生

◇教科：音楽（単元：「音色の重なりを意識して、祇園囃子を演奏しよう」）

以下、授業者の指導案に基づいて、本授業の概要を述べたい。

本授業は、桃小音楽科で研究開発が進められてきた伝統音楽についての授業の一環である。桃小では、低学年のわらべ歌に始まり、祭りの音楽の学習、さらに京都の伝統音楽である祇園囃子の演奏という形で、一貫した系統的な伝統音楽学習のカリキュラムが構築されてきている。本授業は、そのなかでも5年生を対象としたものである。

具体的な内容としては、1時間のなかで、

「笛と鉦で「御影」を演奏する」

「太鼓のリズムを口唱歌し、太鼓を演奏する」

「笛の旋律と、太鼓や鉦のリズムを重ねて合奏する」

「祇園囃子にはどのような人々の思いや願いが込められているのか考え、演奏する」

「祇園囃子の演奏をふりかえり、天神祭の囃子と比べながら、祇園囃子のよさやおもしろさについて考える」

「祇園囃子について紹介文を書く」

といった活動が配されている。なお、「御影」は、祇園囃子のうちの一曲であり、この曲の演奏および他の地域の祭りの音楽との比較検討により、京都の伝統音楽(文化)についての認識を深めていく、というのが、本授業の基本構成になっている。「御影」の音楽としての特性を理解するのはもちろん、祇園囃子が伝承されてきた京都という地域の文化や歴史、また音楽に込められた人々の心性について共同的に読み解くことも重要な学習内容として位置付けられている。

## 2-2-2. グローバル人材育成としての特性

続いて、グローバル人材育成の観点からみた本授業の特性、強みなどについて、若干の言及をしておきたい。

### ①地域の伝統文化という視点

一般的な傾向として、近年の学校教育においては、日本の伝統文化についての学習の必要性が強調される傾向がある。その背景には、ヒト・モノ・カネ・情報がすさまじいスピードで国境を超えて飛び交うグローバル化を前提に、そのような新たな時代を生きる人間には、核となるアイデンティティの涵養が不可欠という発想があるように思われる。しかししばしば問題となるのは、日本という国家の枠に準拠して発想さ

れる伝統文化なるものが、必ずしも実態を反映しない平板で固定的なものとしてイメージされがちな点である。実際のところ文化現象は、必ずしも国家の枠において捉えられるものではなく、むしろ地域ごとの多様性を持つことはいうまでもない。

その点、本授業は、「伝統文化」の準拠枠として、京都の地域性を強く意識している。もちろん、突き詰めて言えば京都の文化もまた多様性を持つものであるが、少なくとも、国を基準とした平板な文化理解を相対化し、より地に足のついた文化の学習となっていることは確かである。そのことは翻って、グローバル社会を生きるための新しい文化的アイデンティティの涵養という課題に応えるにたる、十分な具体性をもった教育内容を構成していると思われる。

### ②比較という学習プロセス

ただし、地域の文化をただそれだけインテンシブに学習することが、文化学習のベストな方法とは言えないだろう。事柄の特性を真に理解するためには、他の事柄との比較のうちにそれを捉えるということが欠かせない。

この点で言えば、本授業においては、近隣地域(大阪)の祭りの音楽との比較という課題が適切に配されていた点は注目しておきたい。京都と大阪の伝統音楽を聞き比べることによって子どもたちは、「静かな音楽／にぎやかな音楽」など、両者の差異という視点からそれぞれの音楽文化をとらえることが可能となっていた。またこの読み解き自体が、クラス全体の協同学習の形をとっていたことは、両者の差異の捉え方を、より豊かに、子どもたちの独自の視点から捉えることを可能にしていたように思われる。

### ③グローバルな系統性

また、本授業を桃小音楽科のカリキュラム全体のなかに置きなおしてみると、それ自体がまさしくグローバルな系統性を構成しているということが見えてくる。同カリキュラムは、京都の伝統音楽のほかに、近隣の東アジアの音楽、中東を含めた他のアジア地域や南米の音楽、またヨーロッパの音楽（東ヨーロッパを含む）へと、らせんを描きながら系統的に構築されている。したがって子どもたちは、みずからが生活する地域の音楽文化の価値を学習すると同時に、他の地域にも同様に価値ある音楽文化が根付いていることを学ぶのである。

このような系統性は、本授業で示されていたテーマでもある「多文化共生」の視点からみて、非常に重要と思われる。自らの文化の価値の学習が、文化的なナルシズムに終わらないためにも、系統的に配置された他の音楽文化の学習は、他者の文化の持つ価値を尊重する態度を育てるという意味で、まさしく多文化共生の基礎となると思われる（図3）。

## G授業としての特性

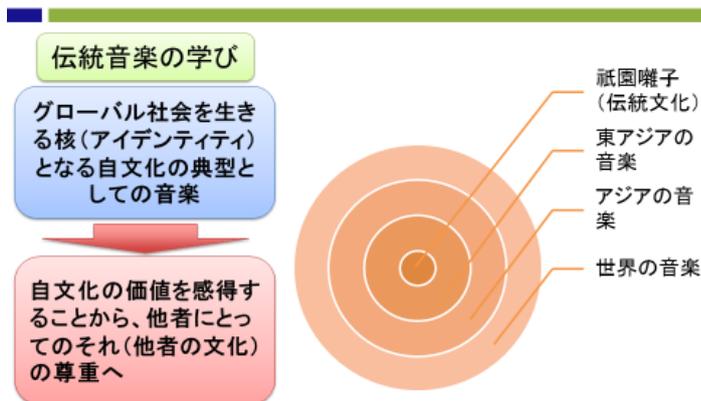


図 3

### ④ 伝統文化の教材化プロセスの構築

他方で、教材研究の方法論としても、本授業は重要な知見を提供しているように思われる。すなわち、伝統音楽文化の教育的組み替え、というプロセスである。

教材化の対象となる伝統音楽は、当該地域社会で、固有の価値観のもと、固有の伝承形態のなかで維持・保存されていると考えられる。本授業で教材化された伝統音楽は、京都市内の祇園囃子保存会が伝えていたものを原型としているが、その保存会において祇園囃子は、そのなかの一つの楽器演奏についてすら、数年から十数年という長い期間のなかで習得されるものである。また保存会の活動は、あくまで伝統音楽の保存・継承であって、音楽の教育を介した人間形成という教育活動とは異なった原理を持っていると考えられる。

そうしてみれば、ここで扱われている伝統音楽は、それ自体として京都で育つ子どもたちに伝えるべき文化的価値を持ったものではあるが、そのまま学校教育に導入可能なものではないということになる。数年から十数年の伝承プロセスを学校の音楽科で実行するわけにはいかないし、また、音楽科が「音楽を介した教育」という側面を持つ以上、教材化には必ず文化の取捨選択や再構成が必要となるわけである。

その点から言えば、授業者の組み換えの工夫は、それ自体が、音楽科に限らず、学校教育において地域の伝統文化を扱う際の、あるいはそれらをもとに教材を作り出す際の、重要な一つの事例となりうる(図4)。教材化にともなう取捨選択や再構成の原理、言い換えれば、そこで組み換えの指標となる教育的・発達的な価値についての知見は、今後のグローバルな授業の開発・洗練において重要な知見を有していると考えられる。

## G授業としての特性

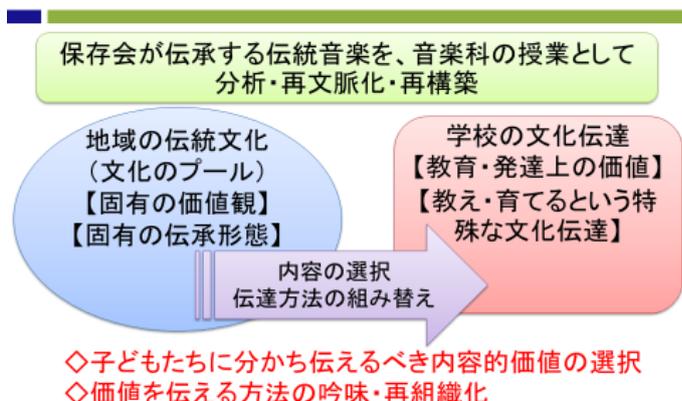


図 4

### 2-2-3. 小括

以上、高橋教諭の音楽科の授業について、本プロジェクトの趣旨であるグローバル人材育成の観点から検討・分析した。

ここで改めて強調すべき点は多岐にわたるだろうが、もっとも重要なインプリケーションは、この音楽の授業が持つグローバル人材育成としての価値が、あくまで既存の音楽の可能性を突き詰めた結果として形成されている点であるように思われる。グローバルな授業の開発は確かに新しい試みではあるが、優れたグローバルな授業は、しばしば、積み重ねられてきた既存の教科内容・授業実践の蓄積を土台としている。新しい内容や方法を「加える」という視点も重要だが、それと同時に、既存の蓄積から新たな可能性を「引き出す」という視点は、真に有効なグローバル授業を開発するためのカギの一つであるように思われる。

### 3. 補論 —3月28日授業実践研究会について—

本節では、2016年3月28日に京都教育大学で行われた、第2回授業実践研究会について若干の言及をしておきたい。同研究会の概要は以下の通りである。なお、本研究会において附属幼稚園、附属特別支援学校より授業等の報告が為されたことで、すべての学校園種の報告が、実践研究会に出そろったことになる。

第2回授業実践研究会

日時：平成28年3月28日

場所：京都教育大学

#### 1) 授業実践者による報告

報告者	附属幼稚園	村田真里子先生
	附属桃山小学校	池田恭浩先生（道徳）

- 2) 授業実践者、大学教員、研究会参加者による意見交換
- 3) 今後の授業実践に向けて

本研究会は、平成 27 年度のグローバル人材育成プログラムの進捗について、知見を学内で共有するとともに、次年度の授業・カリキュラム開発に向けて整理することを趣旨としていた。ここでは以下、附属幼稚園、附属桃小、附属特別支援学校の実践報告について、その意義を確認し、今後の検討へと接続するための、若干の言及をおきたい。

### ①附属幼稚園（村田教諭）

最初の報告は、附属幼稚園の村田教諭から行われた。

同報告は、まず幼稚園教育の基礎的な前提を確認することに始まり、続いて、同園の実践報告が行われた。具体的には、附属桃小に ALT として勤務されているジョン・サンフォ・モハドゥ先生が園を訪問し、子どもたちとともに活動（絵本の読み聞かせ、「しっぽ取り」遊び、など）を行うというものであった。

とりわけ成果として複数のエピソードとともに強調されたのは、ジョン先生との「出会い」によって、園児たちが、彼の故郷ブルキナファソへの関心を深めていた点である。幼稚園段階で外国人（教員）と触れ合う機会を持つことは、子どもたちの生活経験を豊かにし、また彼らの興味関心が国境を超えて広がるチャンスを、確実に提供している点が示された。

### ②附属桃山小学校（池田教諭）

続いて、附属桃小の池田教諭より、道徳授業についての実践が報告された。

同報告によれば、授業は平成 28 年 2 月 22 日に、第 2 学年を対象として行われたものである。同校 ALT ジェイソン氏、ジョン氏から提供された写真を題材に、彼らにとっての「ふるさと」を読み解くことで、ひるがえって子どもたちの「ふるさと」の認識を深めることが、同授業の趣旨であった。

同授業の達成について、そのポイントは多岐にわたるが、重要なものの一つは、子どもたちの「ふるさと」のイメージが、授業のなかで確実に深まりをみせていた点であろう。授業当初の発問「ふるさとはなにかありますか？」に対して、「山、川、田んぼ」など、「概念的」な意見を示していた子どもたちが、授業での写真の読み解きを介して、「ふるさと」の語がもつ情感の認識を深め、授業後半の「ふるさととは？」の発問に、自分自身の生活経験を踏まえた具体的な回答を提出していた点は、特筆に値する。また、そのような道徳授業としての卓越が、外国人（教員）にとっての「ふる

さと」の読み解きという筋道を介して達成されていた点は、グローバルの視点の導入が、既存授業の卓越を媒介するということの例示として重要と考えられる。

### ③附属特別支援学校（橋本教諭）

最後に、附属特別支援学校橋本教諭より、同校の実践が報告された。同校の子どもたちについての基礎情報を確認するとともに、とりわけ高等部における具体的な実践が紹介された。

実践の具体例としては、観光地を訪れている外国人に外国語でのインタビューを行う校外学習、スカイプを利用したインタビューによる外国の生活や文化の学習、沖縄への修学旅行を利用した平和学習が挙げられた。また、これらの成果として、子どもたちの外国（人）に対する興味関心の高まりや、コミュニケーションを介した自己肯定感の向上があげられた。グローバル化のポジティブな側面としては、世界の多様な文化へのアクセスが身近・容易になっていくことが挙げられるが、これらの実践によって、特別支援学校の子どもたちにも、そのようなグローバル化のポジティブな体験が保障されていることは注目されてよい。また、そのプロセスのなかで子どもたちの自己肯定感が向上したという事実は、言わば「特別支援教育のグローバル化」の積極面を象徴する、重要な知見と考えられる。

## V. 本学グローバル教員育成プログラム (KUE Glocal Teacher Program)

中 比呂志（グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会座長）  
政治・経済をはじめ様々な分野でグローバル化が進展する中、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え、我が国においてもグローバル人材の育成が重要な課題となっている。これまで、グローバル人材と言えば世界を股にかけて活躍するグローバルリーダーがイメージされることが多かったが、国内のグローバル化の現状を踏まえれば、全ての社会構成員に何らかの形でグローバル化に対応した意識や行動が求められるようになってきた。すなわち今後は、国際的に活躍するグローバルリーダーの育成に加え、全ての子どもたちにグローバル化に対応できる能力を身につけさせる必要がある。テロの問題、温暖化の問題、中国・韓国・北朝鮮との問題、TPPの問題など、世界を巻き込んだ様々な問題がすでに起こっているのが現実である。

また、現在、次期学習指導要領改訂の作業が進められ、2030年の社会に向けた我が国の学校教育の方向性が議論されている。高度情報化社会やグローバル化社会が今後

一層進行すると考えられ、グローバルな諸課題に先進国の一員として正面から対応することが求められており、このような社会において子ども達が主体的に生きていける資質・能力の育成が必要である。

さらに、教育現場ではグローバル人材を育成するために英語教育が推進されるとともに、スーパーグローバルハイスクール事業や国際バカロレア認定校の設置に向けた取り組みが進められている。また、日本国内の内なるグローバル化も進行し、日本語を母語としない子どもへの対応も課題となっている。このように教育においてもグローバル化が進行しており、このような状況に対応できる教員の資質・能力の育成が急務であり、本学においても教員養成のグローバル化対応が求められている。

しかしながら、岩田（2014）は、我が国の教員養成教育のグローバル化対応が未成熟であると指摘している。その問題点として、①日本の教育現場における「実践性」の要請が教職履修者にとってグローバルな体験を乏しくしている、②教職課程や教員養成課程が教員免許制度と密接に関わり、外国人学生の入ってきにくい場になっている、③大学の教員養成カリキュラムの中に「グローバル化」を意識して位置づけていない、④国際交流的プログラムはあるが教職履修者を対象としたものとなっていないこと等を挙げており、本学においても共通する課題となっている。（出典：岩田康之（2014）：教師教育とグローバルイゼーション、東京学芸大学重点研究費（2013年度）グローバルな視野を育成する教員養成プログラムとその運営等のあり方に関する開発研究報告書。）

本学が立地する京都府・市においても様々な取り組みが進められている。京都府では、「京都府グローバル人材育成推進プラン」を策定し、グローバル化した社会で活躍できる人材育成のための教育環境づくりを積極的に推進している。特に、重点施策として、①児童生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成、②英語を指導する教員の英語力及び指導力の育成、③京都の伝統や文化を学び、発信する人材の育成、④国際的に活躍する人材の育成を掲げている。

また、京都市では、「京都ならではの実践的英語力」育成プログラムを進めている。このプログラムは、「京都市の子どもたちに対して『歴史都市・京都』の伝統文化の知識と、そうした伝統文化を英語で海外からの観光客等に伝えることができる実践的英語力の獲得に向けたプログラムである。具体的には、英語教育推進研究拠点校事業や中高生の実用英語検定の検定料を一部助成することで英検受検を奨励する「英検」チャレンジ事業、世界で通用するコミュニケーション能力の向上を目指して、2016年3月に日吉ヶ丘高等学校内に英語村「ハロー・ビレッジ」を設置する計画などが挙げられる。

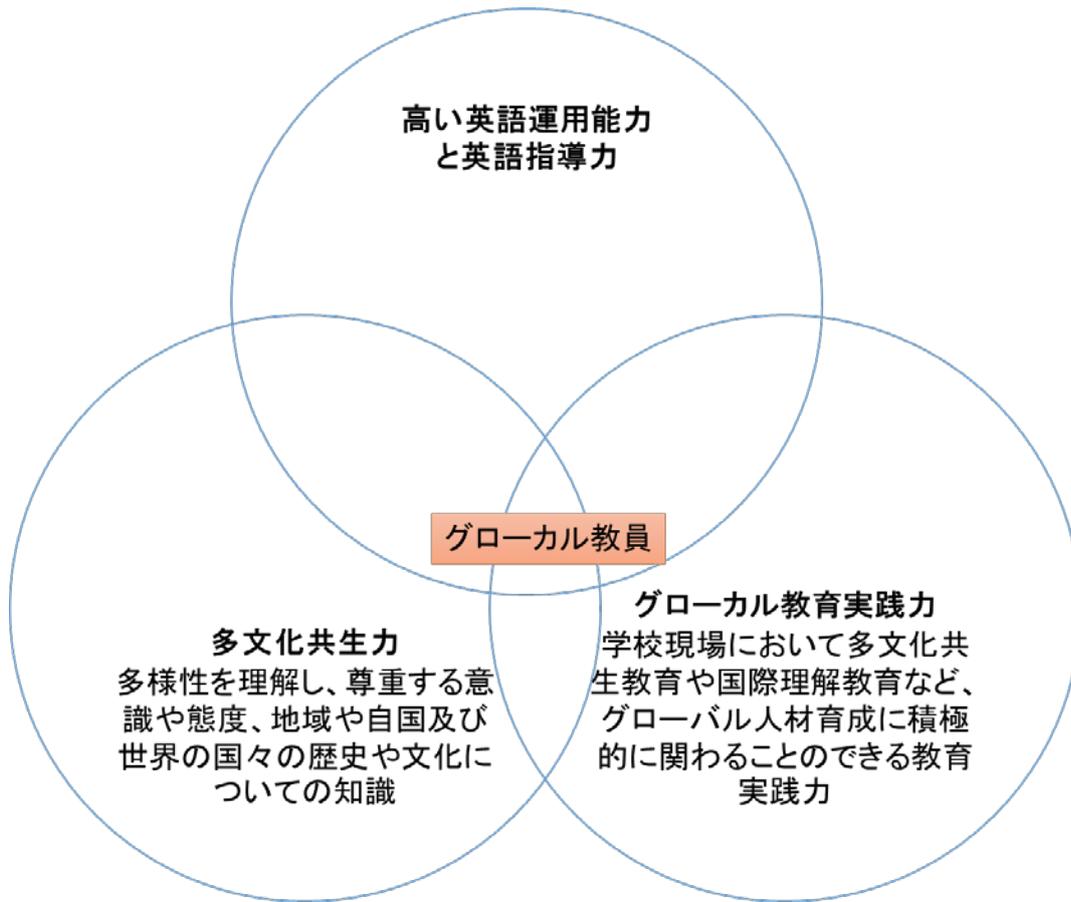
このような状況の中、本学は、地域の教員養成機能の中心的な役割を担う大学として、「歴史と伝統文化のまち京都の立地を活かした国際理解とコミュニケーション能

力を備えたグローバル人材を育てる教員の養成・高度化」をミッションに掲げ、平成26年度から「グローバル人材育成プログラム」の開発プロジェクトをスタートさせた。

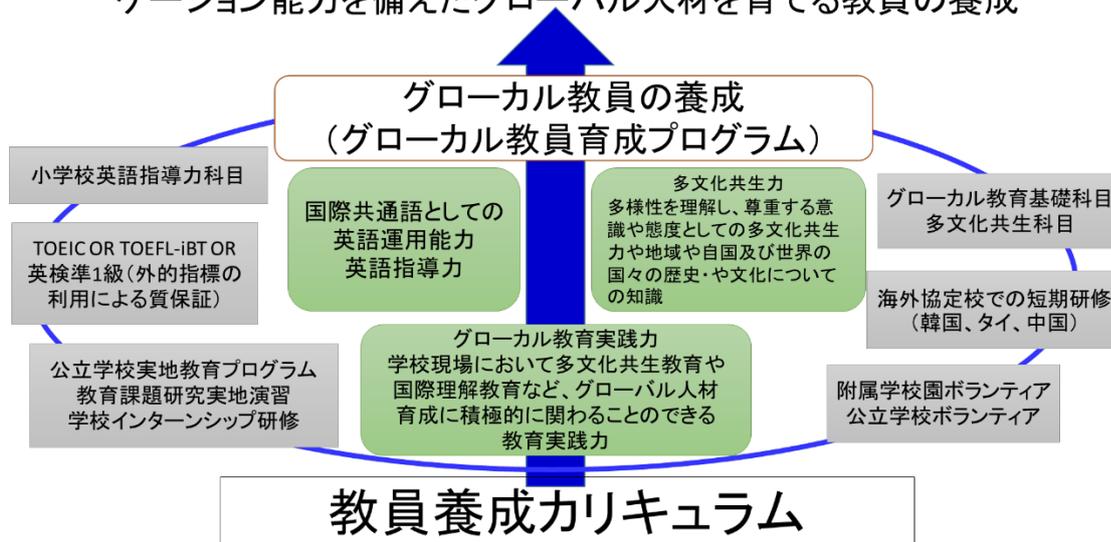
教員養成大学である本学におけるグローバル人材を育成できる教員の養成は、英語運用能力等における一部の高い能力を備えた教員だけでなく、全ての学校教員が幅広い意味でのグローバル人材育成に携わる状況を想定し、そのための資質・能力を備えた教員を養成するためのプログラムを検討している。具体的には「グローカル教員」という新たな概念を提案している。ここで提案するグローカル（Glocal）教員とは、グローバル（Global）な視点を持ちながら、地域（Local）の伝統文化や地域の特色を大切にして地域の学校において地域の特性やリソースを活用しながら、学校現場で教育に携わり、教育のグローバル化に向き合い実践できる教員を意味している。そのための教員の資質としては単に海外経験が豊富であるとか、英語をはじめとする外国語の運用に堪能であるだけではなく、地域の実情を踏まえて教育実践を行う資質・能力が必要不可欠となると考えられる。

本学が進めようとしているグローカル教員育成プログラムは、①英語運用能力と英語指導力、②多様性を理解し、尊重する意識や態度としての多文化共生力や暮らしている地域や自国及び世界の国々の歴史や文化についての知識、③学校現場において多文化共生教育や国際理解教育など、グローバル人材育成に積極的に関わることのできるグローカル教育実践力の3つの資質・能力を育成し、地域の伝統文化や地域の特色を大切にして学校教育に携わり、グローバルな視点を持ちながら教育のグローバル化に向き合い実践できるグローカル教員の養成を目指すものである。

養成するグローバル教員像



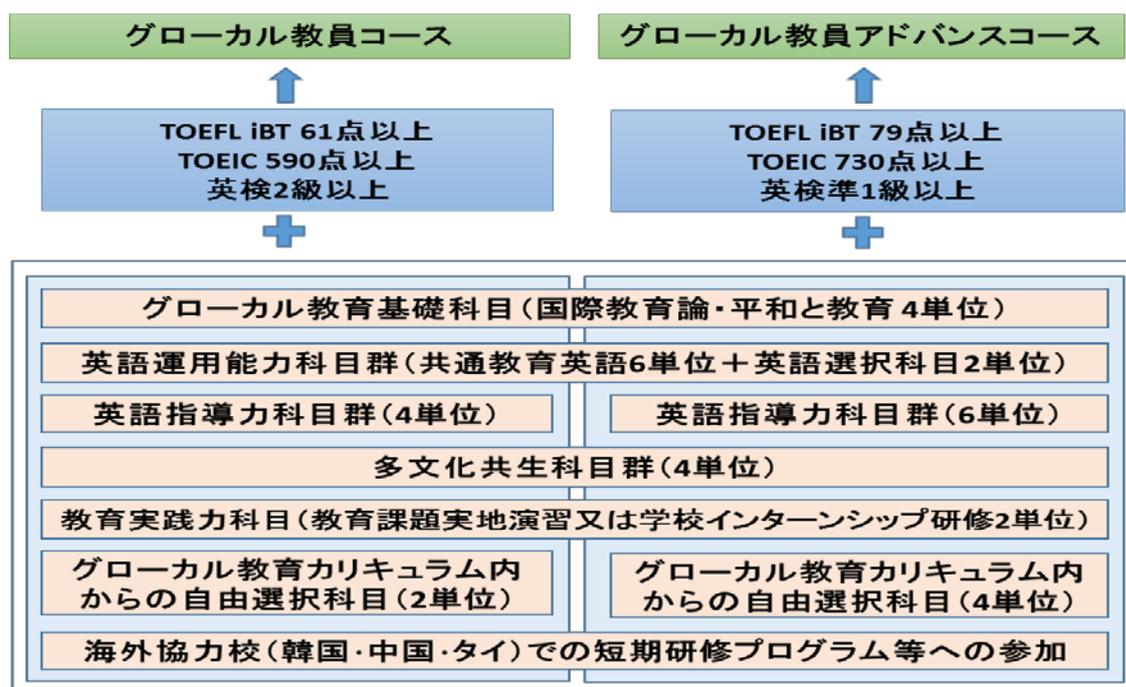
歴史と伝統文化のまち京都の立地を活かした国際理解とコミュニケーション能力を備えたグローバル人材を育てる教員の養成



○グローバル教員育成プログラムの特長

グローバル教員育成プログラムは、海外協力校（韓国・中国・タイ）での短期研修プログラム等に参加するとともに、指定された科目を特別に履修することとなっている。本プログラムには、「グローバル教員コース」とより高度な英語運用能力と専門性の習得をめざす「グローバル教員アドバンスコース」を設けている。

「グローバル教員コース」はグローバル教員育成カリキュラム内から 24 単位以上、「グローバル教員アドバンスコース」は 28 単位以上を履修することになっている（グローバル教員育成プログラム科目の表を参照のこと）。また、規定の語学スコア又は英語資格を取得する必要がある。本プログラムの要件を満たした者は、「グローバル教員育成プログラム履修証明書」の交付を受けることができることとなっている。



グローバル教員育成プログラム科目

科目群		授業科目名等	標準履修期及び単位数等								最低修得単位数等		
			1回生		2回生		3回生		4回生		グローバル教員 コース	グローバル教員 アドバンス コース	
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期			
(グローバル教育) 基礎科目群	基礎科目	国際教育論			②						4	4	
	応用科目	平和と教育			②								
英語運用能力科目群	基礎科目	コミュニケーションのための英文法	①								6	6	
		総合英語		①									
		英語コミュニケーションA	①										
		英語コミュニケーションB		①									
		英語インテンシブリーディング			①								
		英語エクステンシブリーディング				①							
	応用科目	英語(資格検定)Ⅲ 英語ⅢA・ⅢB (LL)(会話中級)(TOEIC中級) 英語ⅣA・ⅣB (会話上級)(TOEIC上級)	すべての単位の算入が可能								2	2	
(小学校) 英語指導力科目群	基礎科目	小学校英語			②						2	6	
		小学校英語指導法				2							
	応用科目	小学校英語教材論					②				2		
多文化共生科目群	基礎科目	人権問題論Ⅱ			②						2	左の単位のほかに2単位修得すること。	左の単位のほかに4単位修得すること。
		地理学			2								
		歴史学			2								
		児童生徒のための日本語教育論A			2								
		児童生徒のための日本語教育論B				2							
	応用科目	社会問題論			②						2		
		市民力入門			2								
		ドイツ語・フランス語・中国語の 各ⅠA・ⅠB コミュニケーションA・B ハンブルⅠA・ⅠB イタリア語A・B	すべての単位の算入が可能 (複数の言語から単位修得した場合も同様)										
教育実践力科目群	応用科目	学校インターンシップ研修						2			2	2	
		教育課題研究実地演習						2					
	※ (基礎科目)	海外協定校での短期研修(韓国、タイ、中国から選択) 海外協定校での短期留学 京都教育大学国際交流活動認定証の取得	いずれかの活動を行うこと。								いずれかを満たす こと。	いずれかを満たす こと。	
		TOEFL-IBT 61点以上 TOEIC 590点以上 英検2級 合格											
		TOEFL-IBT 79点以上 TOEIC 730点以上 英検準1級 合格											
合計										24単位 + ※印欄の要件	28単位 + ※印欄の要件		

(備考)卒業要件の外国語の履修において、「英語学修の成果が本学で定める基準に達している者」は、上記の表において「英語運用能力科目群」の「基礎科目」は、卒業要件単位に充当した6単位(独・仏・中)をもって、読み替えることができる。

本プログラムの運用は平成 28 年度からの予定である。新入生だけでなく、平成 27 年度以前入学生も対象としている。計画的な単位取得が必要なため、入学時にプログラム履修者の登録を行い、定期的な履修指導を実施することとなっている。登録人数は毎年度 20 名程度とする予定である。教員採用試験等に際して、本プログラムの修了者であることを積極的にアピールしてほしいと考えている。

京都教育大学  
グローバル教員育成プログラム  
始まる!

教育のグローバル化に乗り遅れるな!  
あなたも「グローバル教員」  
「グローバル教員になる!  
—それはかなう夢」です。

まずは、説明会に参加しましょう!

**説明会の実施日**  
いずれかの説明会に出席してください。

- 4月13日 (日) 12:50 ~ (約30分) C6 講義室
- 4月15日 (火) 18:30 ~ (約90分) F12 講義室  
4月15日は国際交流プログラム説明会に引き継ぎ実施します。
- 4月27日 (日) 12:50 ~ (約30分) F12 講義室

京都教育大学  
Kyoto University of Education

2016年4月  
グローバル教員育成  
プログラム始まる!

グローバル教員 (Global Teacher), それは・・・  
グローバル (Global) な視点を持ちながら、  
地域 (Local) の伝統文化や地域の特徴を大切にして、学校現場で教育にたずさわり、  
教育のグローバル化に向き合い実践できる教員

京都教育大学  
KUE Global Teacher Program starts in April!

## VI. 本学フォーラム 2015 及び附属学校部合同研究発表会

### 1. 京都教育大学フォーラム 2015 京都発：世界を見つめる教育

研究推進室

平成 27 年 12 月 19 日（土）「京都教育大学フォーラム 2015 京都発：世界を見つめる教育」が、キャンパスプラザ京都にて京都府市の両教育委員会の後援のもとに行われた。

今年は以下のような主旨で開催した。

急速にグローバル化が進む日本では、幼稚園から高等学校までの学校教育におけるグローバル人材育成が急務となっている。それを進めるにあたって、①そもそも日本にとってのグローバル教育とはなにか、子どもたちは何を学ばばよいか、②京都の学校現場において、学校教員や教育委員会はそれをいかに支えていけばよいか、③大学や教育委員会において、グローバル人材育成を担う教員の養成はどうあればよいか、また教員にはどのような資質能力が必要か、これら 3 つの視点から議論を深めていく。

開会に先立って本学位藤紀美子学長が挨拶をされ、本学が附属学校園と一体となつて、「グローバル人材養成プログラム開発プロジェクト」研究に取り組んでいることが強調された。

フォーラムの主な内容は、以下の通りとなっている。

#### (1) 講演：『いつも世界に目を向けて：「多様性」との接点のすすめ』

二村 太郎（同志社大学グローバル地域文化学部）

特別講演は「いつも世界に目を向けて：「多様性」との接点のすすめ」と題して、同志社大学グローバル地域文化学部の二村太郎先生にお願いした。

「現在の日本では、『グローバル教育』『グローバル人材育成』など様々な事象に『グローバル』という形容詞が付いてくる。だが、実際に『グローバル』という語が加わると、何がどう変化するのだろうか。また、それらは世界で共通する概念なのだろうか。答えは否である。地球上に住む人々は価値観も生業も皆同一でないからこそ、普遍的な優しさや相互理解が求められる。」このような問題提起をされながら「グローバル」を特別視すべき概念と捉えるのではなく、世界の様々な文化・社会・慣習・環境・政治経済との接点として理解することを分かりやすくお話いただいた。

#### (2) 話題提供：「グローバル時代に学校は」

次に「グローバル時代に学校は」として、京都教育大学附属桃山小学校 ALT の Jason Davidson 氏、京都府教育庁指導部学校教育課首席総括指導主事佐古清氏、京都市教育委員会指導部 学校指導課 指導主事光嶋花英氏より、それぞれ話題提供していただいた。

○Jason Davidson (京都教育大学附属桃山小学校 ALT)

まず Jason Davidson 氏は、「グローバル時代の今。Today's global world. 世界の舞台上で活躍できる子供たちを育てるために何が必要か? How do you raise children to succeed on the global stage? 世界は日本の何を見ているのか? What kinds of Japanese things is the world looking at? そこにヒントがあるはずです。You can get a hint. グローバルの始まりはローカルにあります。To be global, you must be local. 自分のことをはっきりと伝えるのがその第一歩です。The first step is to know yourself.」という内容を、分かりやすい提示を交えてお話いただいた。

○佐古 清 (京都府教育庁指導部学校教育課首席総括指導主事)

次に、佐古清氏は、グローバル化した社会で活躍できる人材育成のための教育環境づくりを積極的に推進するとともに、人と自然の共生や、人と人を結びつける「こころ」を受け継ぐ京都ならではの伝統や文化に親しみ、また、多様な文化に対する興味・関心を持ち、柔軟に対応できる人材の育成を目指して策定した「グローバル人材育成推進プラン」を中心に、現在進めようとしている京都府の取組について報告していただいた。

○光嶋 花英 (京都市教育委員会指導部学校指導課指導主事)

光嶋花英氏は、京都市教育委員会として、伝統文化など京都の魅力や自ら考えを内外に発信できる実践的英語力を育成するため、小・中・高等学校を通じた体系的な英語教育の充実を図ると共に、学校生活において日常的に英語に触れ体感する機会や、意図的に英語によるコミュニケーションが求められる環境を創り出すなど、創意工夫をした取組を進めていることをお話しいただいた。また、その中心的な取組である「京都ならではの実践的英語力」育成プログラムについて話題提供いただいた。

(3) 第 2 部 :

「京都教育大学グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト (中間報告)」

ーグローバルに教育を見つめ、ローカルに教育を考えるー

グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会

中 比呂志 (グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会座長)

村上 登司文 (グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会委員)

神代 健彦 (グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会委員)

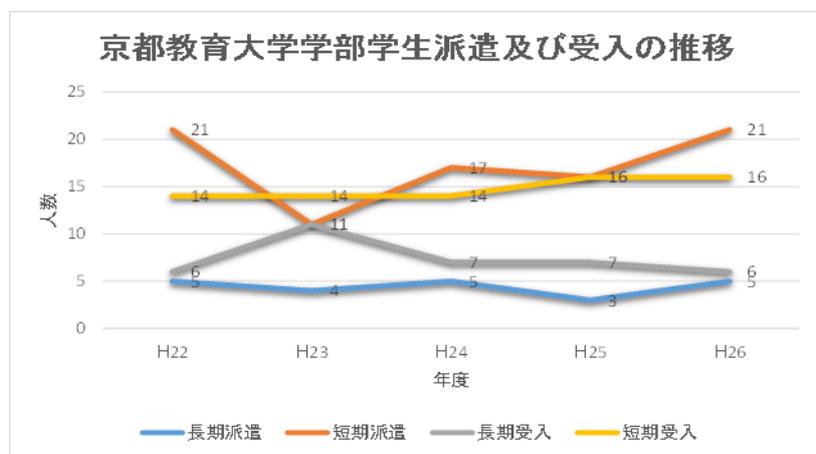
休憩をはさんで第 2 部は本学の取り組みとして、グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会より「京都教育大学グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト (中間報告)」の報告が、同委員会委員の中比呂志氏、村上登司文氏、神代健彦氏からなされた。

以下は、第 2 部の概要をまとめたものである。

政治・経済をはじめ様々な分野でグローバル化が進展する中、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え、我が国においてもグローバル人材の育成が重要な課題となっている。このような状況に対応すべく、学校現場での英語教育が推進されるとともに、スーパーグローバルハイスクール事業や国際バカロレア認定校の設置に向けた取り組みが始められている。一方、日本国内の内なるグローバル化も進行しており、日本語を母語としない子どもへの対応も課題となっている。

これまでグローバル人材と言え、世界を股にかけて活躍するグローバルリーダーがイメージされることが多かったが、国内のグローバル化の現状を踏まえれば、全ての社会構成員にグローバル化に対応した意識や行動が求められるようになってきた。今後は国際的に活躍するグローバルリーダーの育成に加え、全ての子どもたちにグローバル化に対応できる能力を身につけさせる必要がある。

翻って、このような教育のグローバル化に対応できる教員の資質・能力の育成が急務であり、教員養成教育のグローバル化への対応が求められている。しかしながら、岩田氏は、我が国の教員養成教育のグローバル化対応が未成熟であると指摘しており、その問題点として、①日本の教育現場における「実践性」の要請が教職履修者にとってグローバルな体験を乏しくしている、②教職課程や教員養成課程が教員免許制度と密接に関わり、外国人学生の入りにくい場になっている、③大学の教員養成カリ



キュラムの中に「グローバル化」を意識して位置づけていないこと等を挙げている。このことは本学においても共通する課題である。図は、最近5年間の学生の海外派遣及び留学生受入の推移を示したものであり、海外への派遣及び

留学生の受入とも低い水準で推移している。

このような中、京都教育大学では平成26年度から特別経費プロジェクトとして、「グローバル人材育成プログラム」の開発に取り組んでいる。まず、プロジェクトの第一の目的は、大学と附属学校園の密接な連携の下、公立学校において活用できる幼稚園から高等学校および特別支援学校における系統的なグローバル人材育成カリキュラムを開発することである。具体的には、学習指導要領に基づくカリキュラムをグローバル人材育成の観点から見直し、通常のカリキュラムの中にグローバル人材育成を目的とする教育活動を随所に盛り込むことを目指している。このことによって、さま

さまざまな国の出身者や多様な言語のネイティブスピーカーをリソースとして活用することが難しい条件下にある学校においても、グローバル人材育成に資する教育を展開することが可能となる。

次に第二の目的は、英語運用能力等における一部の高い能力を備えた教員だけでなく、すべての学校教員が幅広い意味でのグローバル人材育成に携わる状況を想定し、そのための資質・能力を備えた教員を育成することである。具体的には「グローバル教員」という新たな概念を提案し、その育成プログラムを開発する。グローバル(Global)教員とは、地域の学校において地域の特性やリソースを活用しながら、地域(Local)の伝統文化や地域の特色を大切にして学校現場で教育に携わり、グローバル(Global)な視点を持ちながら教育のグローバル化に向き合い実践できる教員である。そのための教員の資質としては単に海外経験が豊富であるとか、英語をはじめとする外国語の運用に堪能であるだけではなく、地域の実情を踏まえて教育実践を行う資質・能力が必要不可欠となると考えられる。

ここでは、本プロジェクトの全体像について示すとともに、1年目の取り組みを終え、2年目を迎えたプロジェクトの現状や課題を共有し、京都発グローバル人材育成プログラムについて共に考えていきたいという趣旨で研究発表が行われた。

最後に本学副学長(総務・企画担当)・理事 細川友秀から閉会の挨拶が行われ、幕を閉じた。なお司会進行は本学研究推進室員村上忠幸氏が行った。

# 京都教育大学フォーラム 2015

## 京都発：世界をみつめる教育

日時

2015年 12月19日(土)  
13:00~17:00 (受付/12:30~)

場所

キャンパスプラザ京都  
第1講義室(5F) 京都市下京区西門院通堀小路下る

### 【プログラム・タイムスケジュール】

#### 13:00 ● 開会あいさつ

位藤 紀美子 (京都教育大学長)

#### 13:05 ● 講演

「いつも世界に目を向けて：「多様性」との接点のすすめ」

二村 太郎 (同志社大学 グローバル地域文化学部 助教)

#### 14:00 ● 話題提供

「グローバル時代に学校は」

Jason Davidson (京都教育大学 附属桃山小学校 ALT)

佐古 清 (京都府教育庁指導部 学校教育課 首席総括指導主事)

光嶋 花英 (京都市教育委員会指導部 学校指導課 指導主事)

#### 15:10 ● 休憩

#### 15:20 ● 研究発表

「京都教育大学グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト(中間報告)」  
ーグローバルに教育を見つめ、ローカルに教育を考えるー

(グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会)

中 比呂志 (京都教育大学教育学部教授/同委員会座長)

村上登司文 (京都教育大学教育学部教授/同委員会委員)

神代 健彦 (京都教育大学教育学部講師/同委員会委員)

#### ● 質疑応答

#### 16:55 ● 閉会あいさつ

細川 友秀 (京都教育大学副学長(総務・企画担当)/理事)

司会進行：村上 忠幸 (京都教育大学教育学部教授)

主催：京都教育大学

後援：京都府教育委員会・京都市教育委員会

 京都教育大学



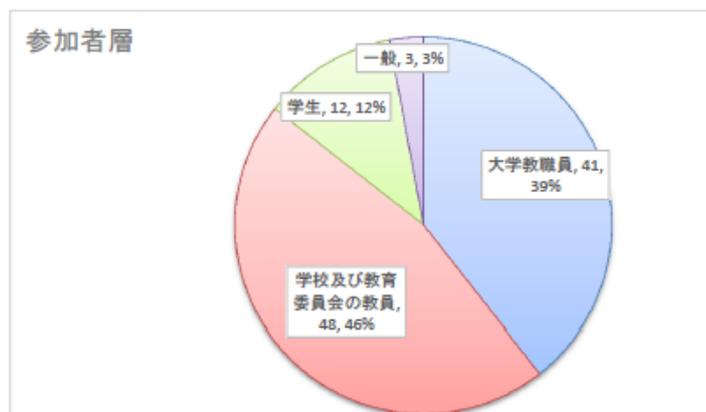
以下は、本フォーラムのプログラム及びフォーラム終了後に行われたアンケートの集計結果である。

フォーラム2015 参加者層調べ

	大学教員	附属教員	職員	学生		計
本学	20	40	4	11		92
スタッフ	8		5		4	
計	28	40	9	11	4	
	大学教員	教員	教育委員会	学生	一般	計
学外	4	1	3	1	3	12
					合計	104

再掲

	大学教職員	学校及び教育委員会の教員	学生	一般	計
参加者	41	48	12	3	104



京都教育大学フォーラム2015アンケート集計

フォーラム参加者数	104
アンケート回収枚数・率	37 35.6%

アンケート集計

問1

1-1	70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代		計
	1	3	13	4	8	8			37

1-2	幼	小	中	高	特支	大学	一貫校	無回答・不明		計
	5	3	4	3		10	1			26

1-3	教委	施設	事務	技術	その他		計
	2		2				4

1-4	社会人	院・大	高校等		計
		7			7

再掲	教員	教育関係	一般・学生	無回答		計
	26	4	7			37

問2	所属	京教HP	チラシ	他人	その他	無回答		計
複数回答	26	4	3	3	2	1		39

問3	極めて良い	ある程度良い	あまり良くない	全く良くない	無回答		計
	8	26	1		2		37

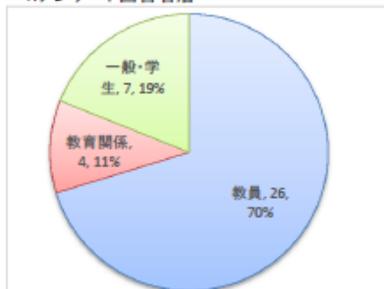
問4	大いに助かった	ある程度助かった	あまり助かった	全く助かった	無回答		計
	8	28			1		37

問5	大いに参考になった	ある程度参考になった	あまり参考にならなかった	全く参考にならなかった	無回答		計
	12	18	4		3		37

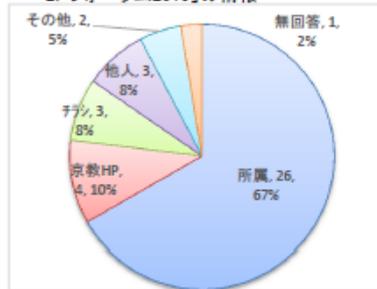
問6	大いに参考になった	ある程度参考になった	あまり参考にならなかった	全く参考にならなかった	無回答		計
	10	20	1		6		37

問7	大いに参考になった	ある程度参考になった	あまり参考にならなかった	全く参考にならなかった	無回答		計
	9	24	1		3		37

1.アンケート回答者層

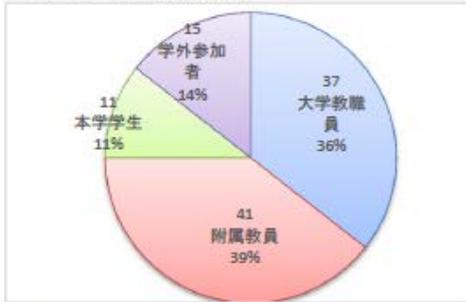


2.「フォーラム2015」の情報

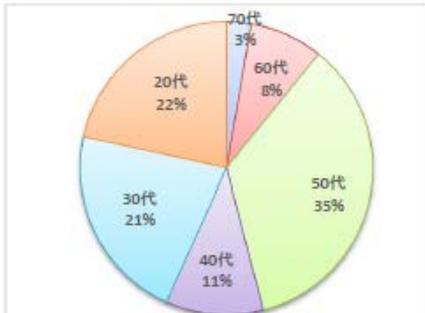


「京都教育大学フォーラム2015」参加者アンケート集計結果

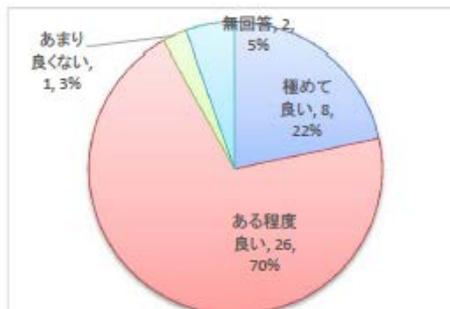
1 フォーラム参加者所属構成



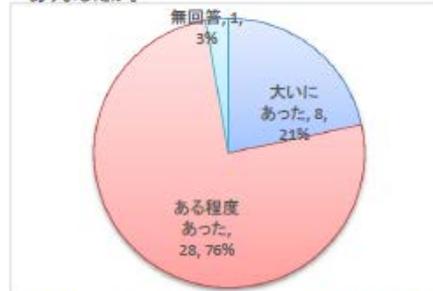
2 フォーラム参加者年齢構成



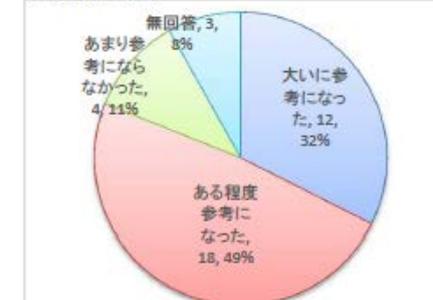
3 本日のフォーラム全体の率直な感想を教えてください。



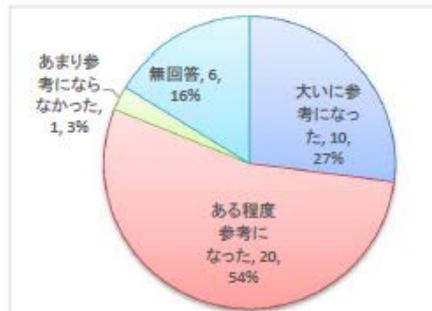
4 グローバル人材育成を考えるうえで参考になることがありましたか。



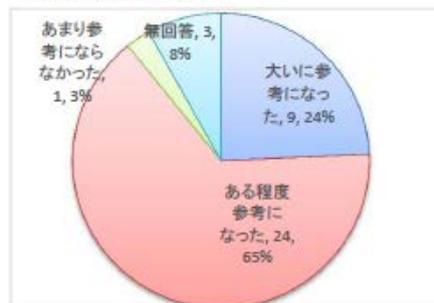
5 講演「いつも世界に目を向けて：『多様性』との接点のすすめ」について



6 「話題提供」について



7 「研究発表」について



## 2. 京都教育大学附属学校部合同研究発表会

2016年2月27日（土） キャンパスプラザ京都

研究発表：「グローバル人材育成プログラム」の開発について

村上 登司文（グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会委員）

本年度も附属学校部合同研究発表会において、「グローバル人材育成プログラム」の開発について、村上登司文委員による発表を行った。

具体的な内容は、現在、大学と附属学校園が一体となって進めている幼稚園から高校までの系統的なグローバル人材育成カリキュラムの開発の現状と今後の進め方に関するものであった。

「発表資料については、Ⅲのグローバル人材育成カリキュラムのフレームワーク素案を参照してください。」

## Ⅶ. 今後のグローバル人材育成プログラム開発プロジェクト

中 比呂志（グローバル人材育成プログラム開発プロジェクト委員会座長）

本プロジェクトは、スタート当初は平成 26 年から平成 29 年までの 4 年間のプロジェクトであったが、平成 28 年度から始まる第 3 期中期目標・中期計画の中では、「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の 1 つとして位置づけられている。第 3 期中期目標期間における本学のビジョンとして、「京都地域に密接して、とりわけ義務教育に関する教員養成機能の中心的な役割を担いつつ、近畿地域（2 府 4 県）を中心とした広範な地域の教員養成機能の一翼を担う。」「歴史と伝統文化のまち京都での立地と様々な特徴を持った附属学校を有する特色とを活かし、附属学校と一体となって、グローバル化する社会や複雑多様化する教育の諸課題に対応することを目指す。」等を明記し、その中で戦略的な取り組みの 1 つとして「グローバル化に対応できる人材育成のために必要な能力を持った教員の養成」を目標として掲げている。

第 3 期中期目標・中期計画の中では、本事業を「グローバル人材育成のためのカリキュラム開発と教員養成ーグローバル化に対応した学校教育の変革を目指してー」としている。事業の概要及び本学独自の評価指標は、以下の通りである。

### 【取組内容の概要】

平成 26・27 年度の 2 年間に於いてグローバル人材育成カリキュラムについて国内外の調査を進めると共に、発達段階別の学習目標の設定やこれらの学習目標に基づく授業開発及び実践を積みあげてきた。このような蓄積のうえに、より幅広い観点から新たな実践を蓄積し、公立学校でも実施できる汎用性を備えた、グローバル人材育成プログラムを幼稚園から高校までの全ての校種において開発する。

さらに、グローバル（Global）な視点を持ちながら、地域（Local）の学校において、地域の特性やリソースを活用しながら、地域の伝統文化や地域の特色を大切にしながら学校現場で教育に携わり、教育のグローバル化に向き合い実践できる教員を「グローバル教員」と名付け、その養成プログラムを開発するとともに、それらの力量を備えた教員を輩出する。年度別の取り組み内容は、表のようになっている。

### 【評価指標】

本事業を評価するために、本学独自の指標として、計画段階において以下の 5 つの指標を設定している。

- ①国内外の関連諸機関への調査の実施状況（平成 28～30 年度）
- ②発達段階別学習目標に基づく実践授業の開発状況（平成 28～32 年度）
- ③発達段階に沿ったカリキュラムの具現化状況（平成 28～32 年度）
- ④グローバル教員育成プログラムの運用・実施状況（平成 28～33 年度）

⑤ プログラム修了生の輩出状況（平成31～33年度）

「グローバル人材育成のためのカリキュラム開発と教員養成」グローバル化に対応した学校教育の改革を目指してー						
	第3期中期計画(1年目) 平成28年	第3期中期計画(2年目) 平成29年	第3期中期計画(3年目) 平成30年	第3期中期計画(4年目) 平成31年	第3期中期計画(5年目) 平成32年	第3期中期計画(6年目) 平成33年
幼稚園から高校までの系統のグローバル人材育成カリキュラムの開発	・カリキュラムレビューローグ構築のための国内・海外調査 ・発達段階別学習目標の見直し・修正	・カリキュラムレビューローグ構築のための国内・海外調査 ・発達段階別学習目標に基づき、継続して実践授業の開発	・カリキュラムレビューローグ構築のための国内・海外調査 ・発達段階別学習目標の見直し・修正	・発達段階別学習目標に基づき、未着手の学年における実践授業の開発	・発達段階別学習目標に基づき、未着手の学年における実践授業の開発	
グローバル人材育成カリキュラムの開発	・発達段階に沿ったカリキュラムの具現化	・発達段階に沿ったカリキュラムの具現化 ・カリキュラムレビューローグの見直し	・カリキュラムの具現化を進めるとともに、開発したカリキュラム案の作成	・カリキュラムの公表 らの意見収集	・カリキュラムの改善 らの意見収集	・一般化に向けたプログラムの充実を図る 公立学校教員が利用できる「手引書」の作成
グローバル人材を育成できる教員の養成	・附属学校園への派遣プログラム開始	・附属学校園への派遣プログラム継続実施	・附属学校園への派遣プログラム継続実施	・附属学校園への派遣プログラム継続実施 ・プログラム修了1期生のの輩出	・附属学校園への派遣プログラム継続実施 ・プログラム修了2期生のの輩出	・附属学校園への派遣プログラム継続実施 ・プログラム修了3期生のの輩出

しかしながら、文部科学省に申請した予算が大幅な減額となっており、平成28年度以降は計画内容を再度吟味し、大学と附属学校園が協働して取り組んでいく必要がある。

**「グローバル人材育成のためのカリキュラム開発と教員養成**  
ーグローバル化に対応した学校教育の変革を目指してー

【戦略】グローバル化に対応できる人材育成のために必要な能力を持った教員の養成  
 【評価指標】地域との対話の場の設定や取組の実施状況  
 国内外の関連機関への調査の実施状況、発達段階別学習目標に基づく実践授業の開発状況、発達段階に沿ったカリキュラムの具現化、グローバル教員養成プログラムの運用・実施状況、プログラム修了生の輩出状況  
 【関連性】大学と附属学校園が一体となって、幼稚園から大学までの一貫した「グローバル人材育成プログラム」を開発すること及び「グローバル人材育成のできる教員」の養成と開発したプログラムの全国への発信を目的とするので事業達成によって当該の戦略を実行することとなり、プログラムの開発状況や地域との対話の場の設定等を評価指標とした。

**本事業では「グローバル教員」という新たな概念を提案する。**グローバル教員とは、地域の学校において地域の特性やリソースを活用しながら、地域(Local)の伝統文化や地域の特色を大切に学校現場で教育に携わり、グローバル(Global)な視点を持ちながら、教育のグローバル化に向き合い実践できる教員である。そのためには単に教員自身の海外経験が豊富であることや語学に堪能であるだけではなく、地域の実情を踏まえた教育実践を行うことのできる力が必要不可欠であり、教員養成カリキュラムへ新たな視点を導入することとなるだろう。

その一方で・・・

- 個々の実践・学校に依存し、体系化されていない
- 研究成果が現場に普及されていない
- 全体の底上げ？リーダー養成？
- 取り組みが一部の教員に限定されている。  
⇒ バラバラのパズル状態

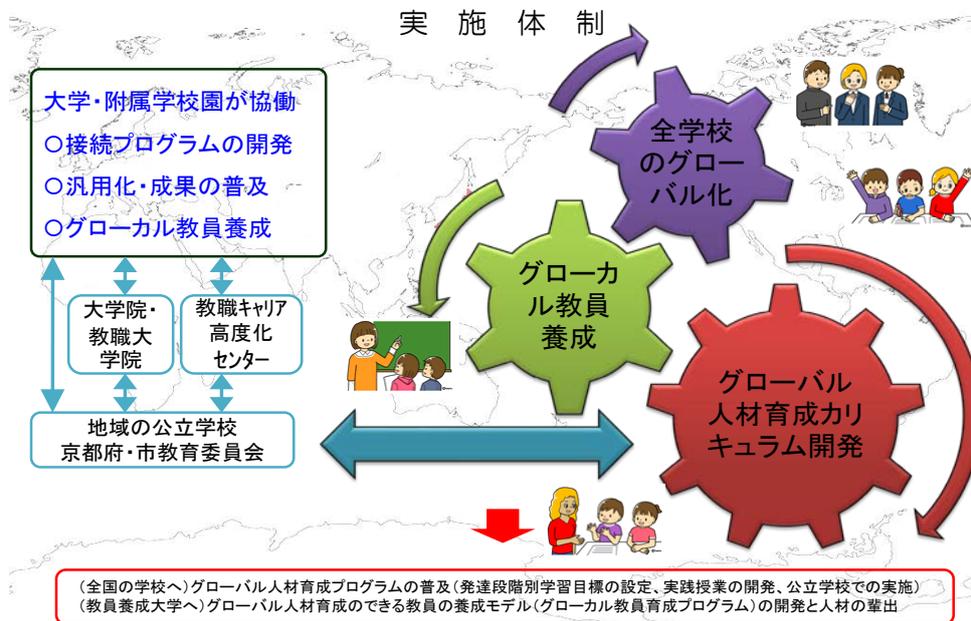


そこで、本学の強み※を活かし3つのことを実現したい！

- 校種間接続や領域・配列に注目したプログラムの開発
- 汎用化、成果普及
- 力量を備えた教員の養成

※本学の強み

- 幼稚園から大学まで全ての校種
- 各校で先進的なグローバル人材育成教育の実績
- 世界遺産を有する文化と伝統のまち、京都にある



平成27年度特別経費プロジェクト  
(公開授業の展開及び資料集)

「グローバル人材育成プログラム」の開発  
—幼稚園から大学までの系統的カリキュラムの策定を目指して—

平成28年4月  
京都教育大学

# 目 次

## ◎附属桃山小学校における取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

1. 第1学年 音楽 「祇園祭の音色を感じて わらべうたを歌おう」
2. 第2学年 道徳 「ふるさとに親しみをもって」
3. 第3学年 音楽 「韓国の音楽に親しもう」
4. 第3学年 国語 「習字の書き方を伝えよう」
5. 第4学年 メディア・コミュニケーション 「めざせプレゼンテーションの達人」
6. 第5学年 音楽 「祇園囃子を演奏しよう」
7. 第6学年 音楽 「祇園囃子をつくろう」

## ◎附属京都小中学校における取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

1. 第1学年 国語 「どうぞ よろしく」
2. 第1学年 英語 「わたしのなまえを伝えよう きもちを伝えよう」
3. 第2学年 国語 「お話をそうぞうしながら読もう」
4. 第1・2学年 生活 「学校探検」
5. 第1学年 英語 「ハロウィンを楽しもう」
6. 第3学年 図画工作 「だんだんだんボール」
7. 第3学年 国語 「よい聞き手になろう」
8. 第4学年 国語 「よりよい話し合いをしよう」
9. 第4学年 総合学習 「はんなり京都」
10. 第6学年 総合 「京都のおすすめを紹介しよう」
11. 第5学年 社会 「わたしたちの生活と食糧生産」
12. 第5学年 社会 「これからの自動車を考える」
13. 第5学年 英語 「世界の時刻や天気を調べてみよう」
14. 第7学年 国語 「話題をとらえて話し合おう ～バスセッションしよう～」
15. 第7学年 英語 「京都を英語でプレゼンテーションしよう」
16. 第7学年 総合学習 「京都のおすすめを紹介しよう」
17. 第8学年 理科 「動物のなかまを分類しよう」
18. 第8学年 英語 「Can Anyone Hear Me?」
19. 第8学年 総合学習 「日本文化体験」
20. 第9学年 国語 「豊かな言葉（俳句）」
21. 第9学年 社会 「日本の政治について考えよう」

## ◎附属高等学校における取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

1. 国語科 夏目漱石「こころ」
2. 家庭科 「風呂敷から日本の文化を考える」
3. 社会科 「グローバル化を考えるーグローバルビンゴを楽しむー」

## ◎附属特別支援学校における取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

1. 小学部「合同生活」学習指導案 1 「世界の国から英語に親しもう」
2. 小学部「合同生活」学習指導案 2 「世界の国から英語に親しもう」

# (公開授業の展開及び資料集)

## ◎附属桃山小学校における取り組み

### 1. 第1学年 音楽 「祇園祭の音色を感じて わらべうたを歌おう」

#### 公開授業の展開

学習の内容と活動	指導者上の留意点
<p>○《こんこんちきちん》のわらべうたを歌って遊ぶ。</p> <p>○わらべうたの歌詞に注目し、何の歌かを考える。</p> <p>○祇園祭の画像をみたり、お囃子を聴いたりする。</p> <p>○鉦の音を聞きながら、もう一度わらべうたで遊ぶ。</p> <p>○鉦がないときとあるときの雰囲気の変化を感じ、音色について知覚・感受する。</p> <p>○鉦が入ると、どういう雰囲気になったのか交流する。 「鉦が入ると、本当のお祭りみたいなかんじがしたよ。」 「歌だけのときは、ただあそんでいるみたいだったよ。」</p> <p>○鉦の音色があるときの雰囲気を意識しながら歌う。</p> <p>○音色についてのアセスメントシートに答える。 ・音色について知覚・感受したことを記述する。</p>	<p>●わらべうた遊びを十分に経験するようにする。</p> <p>●「こんこんちきちん」が鉦の音であることに注目するよう投げかける。</p> <p>●児童が鉦の音色に注目できるようにするために、電子黒板で画像を見せながらお囃子のCDを流す。</p> <p>●実際の鉦を実演する。</p> <p>●お祭りの画像をみて、どう思ったかを問いかける。</p> <p>●自然と鉦の重なりを感じられるよう遊んでいる途中で、鉦の伴奏を入れていく。(子どもの歌に合わせて、この際の鉦は、小さい当たり鉦を使用する)</p> <p>●鉦があるときとないときの変化を意識できるように、座りながら歌う。</p> <p>●鉦がないときとあるときがないときの雰囲気の変化を交流できるようにする。</p> <p>●知覚と感受の言葉を意識できるように、知覚のことばに下線をひく。</p> <p>●子どもの発言に合わせてもう一度歌ったりするなど、適宜発言を音楽に返していく。</p> <p>●鉦の音色を味わえるように、座りながら歌う。</p> <p>●アセスメントシートを配布し、歌のみと鉦の伴奏を合わせた歌の比較聴取をする。</p>

## 2. 第2学年 道徳 「ふるさとに親しみをもって」

公開授業の展開

学習の内容と活動	指導者上の留意点
<p>○ふるさとは何があるのかを想像する。</p> <p>○二枚の写真を見て、感じたこととなぜそう感じたのかをプリントに書き、伝え合う。</p> <p>○二枚の写真がジェイソン先生 (ALT) のふるさとの写真であることやジェイソン先生がその写真を見て感じたことなどを知る。</p> <p>○ジョン先生 (ALT) のふるさとの写真を見る。そして、ジョン先生がその写真を見て感じたことなどを知る。</p> <p>○ジェイソン先生とジョン先生のふるさとに何があったのかを整理する。 「のんびりとした気分になれる景色や場所」 「小さいころからやっている遊び」 「楽しいお祭り」</p> <p>○次時までの課題を知る。 ・自分にとっての「のんびりとした気分になれる景色や場所」「小さいころからやっている遊び」「楽しいお祭り」を探し、ジェイソン先生やジョン先生、クラスみんなに紹介するための文などをプリントに記入してくる。</p>	<p>●ALT (ジェイソン先生) のふるさとの写真 (湖の風景とそこで釣りをしている写真) を提示する。この時に、この写真がどこでだれが撮ったのかは児童に伝えない。</p> <p>●湖の写真から、「のんびり」「ふるさと」、釣りの写真からは「なつかしい」「小さいころ」というキーワードを導き出す。</p> <p>●ジェイソン先生のふるさとである、アメリカ合衆国ミシガン州の地理的な情報などを伝える。</p> <p>●お祭りの写真から、「楽しい」「なつかしい」「ふるさと」「小さいころ」というキーワードを導き出す。</p> <p>●ジョン先生のふるさとであるブルキナファソの地理的な情報などを伝える。</p> <p>●これまでに提示した写真から「のんびりとした気分になれる景色や場所」「小さいころからやっている遊び」「楽しいお祭り」などの分類を導き出す。</p> <p>●プリントには、写真を貼るか絵を描くことを伝える。</p>

### 3. 第3学年 音楽 「韓国の音楽に親しもう」

公開授業の展開

学習の内容と活動	指導者上の留意点
<p>○「大門遊び」を歌う</p> <p>○「大門遊び」でチャンゴのリズムに合わせて歌いながら遊ぶ</p> <p>○チャンゴのリズムを口唱歌し、チャンゴの基本的な奏法を知って演奏する</p> <p>○チャンゴを演奏してみて感じたことを交流する  「『ドン タクンタ クン タクンタ』のリズムは、はね上がるような感じがしました。」  「『ドン タクンタ クン タクンタ』に合わせて歩いていると楽しい気分になりました。」</p> <p>○感じたことを生かして、「大門遊び」を歌う</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●韓国語の歌詞を電子黒板にうつす</li> <li>●チャンゴで伴奏をする</li> <li>●ドン タクンタ クン タクンタのリズムを口唱歌してから遊ぶようにする</li> <li>●チャンゴの口唱歌に合わせて、チャンゴを演奏する</li> <li>●座り方や、ばちの持ち方、叩き方を提示する</li> <li>●ドン タクンタ クン タクンタのリズムに注目する</li> <li>●子どもの気づきを音で確認するようにする</li> <li>●チャンゴの伴奏を子どもたちと一緒にする</li> <li>●ケンガリやプク、チンなどの楽器も重ねて演奏することで、韓国の音楽のおもしろさを味わってほしい</li> </ul>

#### 4. 第3学年 国語 「習字の書き方を伝えよう」

公開授業の展開

学習の内容と活動	指導上の留意点
<p>○ ベレア校の子どもたちと自己紹介をする。 「名前・年齢・好きな物など」</p> <p>○ 習字道具の名称を教える。</p> <p>○ 習字道具の使い方を教え、一緒に習字を書く。</p> <p>○ できあがった作品を、画用紙に貼り、作品を完成させる。</p>	<p>● 「Hi. I 'm 名前.」 「I ' m 年齢.」 「I like 好きな物. What ○○ do you like?」等の構文を用いてコミュニケーションを取る。</p> <p>● 自分の知らない言葉が出てきても、聞き返したり、身振り手振りで伝えたりしながら、積極的にコミュニケーションをとることができるようにする。</p> <p>● 「big brush」筆 「paper」 紙 「japanese paper weight」文鎮 「mat」下敷き 「ink」 墨汁 「ink stone」すずり 「bamboo mat」筆巻きについて英語で説明する。</p> <p>● 「木 (tree)・人 (human)・月 (moon)・生 (live)」の4文字の意味を説明し、ベレア校の子どもたちが選んで書くようにする。</p> <p>● ふでを立てて書くように気をつける。</p> <p>● グループで協力して説明することができるようにする。</p>

## 5. 第4学年 メディア・コミュニケーション「めざせプレゼンテーションの達人」

公開授業の展開

学習の内容と活動	指導者上の留意点
<p>○4年生から3年生に農家宿泊体験で経験したことに対するプレゼンテーションを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これから、4年生から農家宿泊体験についてのプレゼンテーションをします。</li> <li>・プレゼンテーションを見て、農家宿泊体験について少しでも知ってくれれば嬉しいです。</li> </ul> <p>○4年生がプレゼンテーションをはじめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3年生から4年生に質問はありますか。</li> <li>・3年生:プレゼンテーションを聞いてどのようなことを思いましたか。</li> <li>・農家宿泊体験はとても楽しいそうだと思います。</li> <li>・早く来年になって農家宿泊体験に参加したくなりました。</li> <li>・農家の方々とてもやさしいと思いました。行くのが楽しみです。</li> <li>・4年生:3年生にプレゼンテーションを聞いてもらったどうでしたか。</li> <li>・3年生が一生懸命聞いてくれとても嬉しかったです。</li> <li>・3年生に伝えることは難しかったです。本当に伝わっているのか不安になりました。</li> <li>・3年生が質問をしてくれたので、説明が足りなかったところがわかりました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●お互いのめあてを明確にすることにより、それぞれが学ぶめあてをもって学習に参加することができるようにする。</li> <li>●グループごとにプレゼンテーションをするし、3年生は、4年生のブースを訪れてプレゼンテーションを聞く。</li> <li>●3年生から質問をすることで、宿泊体験についてさらに具体的にわかるようにする。</li> <li>●ふり返りをするることにより、本時の自分の学習について考えることができるようにする。</li> </ul> <p>◎4年生：3年生に伝わるプレゼンテーションができたか。</p> <p>3年生：4年生のプレゼンテーションに興味をもって聞くことから農家宿泊体験について理解することができたか。</p>

## 6. 第5学年 音楽 「祇園囃子を演奏しよう」

公開授業の展開

学習の内容と活動	指導者上の留意点
<p>○笛と鉦で「御影」を演奏する</p> <p>○太鼓のリズムを口唱歌し、太鼓を演奏する</p> <p>○笛の旋律と、太鼓や鉦のリズムを重ねて合奏する</p> <p>○祇園囃子にはどのような人々の思いや願いが込められているのか考え、演奏する</p> <p>○祇園囃子の演奏をふりかえり、天神祭の囃子と比べながら、祇園囃子のよさやおもしろさについて考える</p> <p>○祇園囃子について紹介文を書く</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 祇園囃子の特性である鉦の役割について振り返り、情景を思い浮かべながら演奏する</li> <li>● 口唱歌と打ち方の関わりに気づけるよう、口唱歌と一緒に太鼓を打って提示する</li> <li>● 太鼓, 鉦, 笛のそれぞれを順番に回していく</li> <li>● 太鼓の口唱歌を歌いながら演奏するようにする</li> <li>● 祇園囃子には人々のどのような願いが込められているのかを問いかけ、音楽と文化的背景のつながりについて気づけるようにする</li> <li>● 自分たちの演奏を振り返り、他の囃子と比べることで、より祇園囃子のよさやおもしろさに気づけるようにする</li> <li>● 祇園囃子の紹介文を自分なりの言葉でまとめることを通して、郷土の文化について価値付けをする</li> </ul>

## 7. 第6学年 音楽 「祇園囃子をつくろう」

公開授業の展開

学習の内容と活動	指導者上の留意点
<p>○ 鉦町を「くじ取り」で決め、巡行のルートを考える。</p> <p>○ 道行きに沿って、リズムパターンを組み合わせて、お囃子をつくる。</p> <p><b>渡りのリズム</b></p> <p>① ソーレー カン カンカンカン</p> <p>② チキチン チキチン</p> <p>③ マーダー チン チン チン</p> <p><b>戻りのリズム</b></p> <p>① ソレカンチキカンチキチンカンカン</p> <p>② ソレカンチキチンチキチンチキチン</p> <p>③ チャララランラン チャララランラン</p> <p>○ いくつかのグループの囃子を聴き、気づいたことを交流する。</p>	<p>● 1グループ5, 6人にし、「くじ取り」を行って鉦町を決める。そして、町から御旅所へ行き、自分たちの町へ帰っていく道行きを考えるようにする。</p> <p>● 細い路地に面した鉦町からスタートするところや、大通りに面したところからスタートするところ、辻回しや御旅所といった囃子が変化する要因に注目するようにする。御旅所までは渡りのリズムパターンを組み合わせ、御旅所ではオリジナルの奉納囃子を囃子、自分たちの町へ帰るところは戻りのリズムパターンを組み合わせるようにする。</p> <p>● 囃子がどのように変化していったのかを問いかける。</p> <p>「町内に帰ってきたら、もう終わりだという感じがして、囃子が盛り上がる感じで、だんだん強くなっていきました。」</p> <p>「辻回し的时候には、力強く回す感じが、強く演奏することで表されていました。」</p> <p>● 子どもの発言を適宜音で確かめながら、意見を共有する。</p>

## ◎附属京都小中学校における取り組み

### 1. 第1学年 国語 「どうぞ よろしく」

公開授業の展開

分節	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「どうぞよろしく会」のめあてを知る。</li> <li>○どうやってカードを渡したらよいでしょう。               <ul style="list-style-type: none"> <li>・笑顔で</li> <li>・はきはきと</li> <li>・大きな声で</li> <li>・相手の目を見て</li> <li>・自己紹介の練習をする。</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○気をつける点を分かりやすく黒板に書いていく。</li> <li>○言い方を提示し、指導者が見本を見せる。</li> </ul>
二 展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班の中で「どうぞよろしく会」をする。</li> <li>○班の中で自己紹介をして、うまくいきましたか。               <ul style="list-style-type: none"> <li>・カードを渡せてよかったです。(もらって良かったです。)</li> <li>・大きな声で伝えることができました。</li> <li>・好きな動物が○○さんと一緒でした。</li> </ul> </li> <li>○クラスの中で、「どうぞよろしく会」をしよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○女子同士、男子同士に偏らないように、まずは自分の班の人と自己紹介をすることを告げる。</li> <li>○不安に思っている子どもに言い方を助言するなどの支援をする。</li> <li>○男女別名簿の順に並んで、男女のペアで1回、名簿の前後ろで(男子同士女子同士)で1回、自己紹介をする。</li> </ul>
三 終 末	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「どうぞよろしく会」をしてどうでしたか。               <ul style="list-style-type: none"> <li>・初めてお話す人がいたので、緊張しました。</li> <li>・友だちがたくさん増えてよかったです。</li> <li>・友だちの自己紹介カードをもらって嬉しかったです。</li> <li>・今日やっていない人とも、自己紹介をしたいと思います。</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○今日の学習の振り返りをする。</li> <li>○良かったところを中心に話をさせる。</li> </ul>

## 2. 第1学年 英語 「わたしのなまえを伝えよう きもちを伝えよう」

### 公開授業の展開

分節	生徒の学習活動	指導者の支援	留意点
導入	<p><b>あいさつをしよう</b></p> <p>起立をして、「Good morning, ○○ (名前).」の挨拶をする。</p>	<p>○子どもと一緒に大きな声で挨拶をする。</p> <p>A 「Stand up, please.」</p> <p>A 「Good morning, everyone.」</p> <p>J…生徒と一緒に、挨拶をする。「Good morning, Ms. Wendy.」</p> <p>A 「Sit down, please.」</p>	<p>クラスルームイングリッシュ “Stand up, please. Good morning. Sit down, please.”</p>
展開	<p><b>自分の気分を英語で言う</b></p> <p>モデルを聞く</p> <p>○何て挨拶しなのか推測する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・こんにちは。</li> <li>・元気です。と言ったのかな。</li> </ul> <p>感情の表現を知る, 発音の練習をする。</p> <p>自分の気持ちを表現する英語を聞いて, 自分でも言う。</p> <p>ALT と対話する。対話しているクラスメイトの感情を聞き取る。</p> <p><b>“Hello song” を歌う</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Hello song をジェスチャー付きで歌う。</li> <li>・歌詞を2つに分けて, 役割を決めながら歌う。</li> </ul> <p><b>ゲーム『Simon Says』を行う。</b></p> <p>ALT の指示をよく聞いて, ゲームを楽しむ。</p>	<p>○A と J で, デモンストレーションを行う。</p> <p>A 「Good morning .」</p> <p>J 「Good morning .」</p> <p>A 「How are you?」</p> <p>J 「I’ m fine. How are you?」</p> <p>A 「I’ m sleepy.」</p> <p>「何て挨拶したか分かりましたか?」</p> <p>AJ ピクチャーカードを使って, 感情の聞き方と感情を表す表現を紹介する。発音の確認(それぞれ I’ m ○○. のように I’ m をつけて練習)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・PC を指さして, I’ m ○○を言わせる</li> <li>・日本語で感情を言って, 英語で言わせる</li> <li>・隣同士, 前後同士で聞きあわせる</li> </ul> <p>○ジェスチャーとともに Hello song を聞かせる</p> <p>J 生徒と一緒にくり返し動作を付けながら歌う</p> <p>A と J で役割を決めて歌って聞かせる。</p> <p>J 「Hello ,hello,hello,how are you?」</p> <p>A 「I’ m fine. I’ m fine. I’ m fine,thank you and you?」</p> <p>○ALT がゲームの説明を行う。JET が説明の補足する。</p> <p>A…指示を出す。</p> <p>J…生徒と一緒にゲームを楽しむ。</p> <p>J…ALT のマネをして指示を出す。</p>	<p>How are you? I’ m (fine, happy, hungry, angry, sad, sick, sleepy) 気持ちを表す言い方を確認していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の歌や動作を思い出しながら歌う。</li> <li>・教室の席を真ん中で半分に分け, 役割を持たせながら歌う。</li> </ul> <p>Stand up. Sit down. Stop. Walk. Skip. Jump</p>
終末	<p><b>あいさつをする</b></p> <p>別れのあいさつを言う</p>	<p>ALT とあいさつをする。</p> <p>バイバイソングを歌う。</p>	

### 3. 第2学年 国語 「お話をそうぞうしながら読もう」

公開授業の展開

	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 入 導	○本時のめあてを確認する ○お話を読んで心に残ったことや面白いところとそのわけが分かりやすいように伝えよう。	○できるだけ異なるお話を選んだ生徒を集めてグループを作り、様々なお話に触れられるようにする。
二 展 開	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">お気に入りの本を読んで、心に残ったことや面白いところを紹介しよう。</div> ○グループで本の紹介をし合う。 ○紹介を聞いてよくわかったことや感想を伝える。 ・私は、「ランパンパン」を読みました。はちどりの耳に色々なものが入るのが不思議で面白かったです。 ・僕は「王さまと九人の兄弟」を読みました。九人が自分の得意なことで王さまの問題を解決するところが好きです。	○紹介の仕方の例を提示し、グループで順に伝え合うようにする。 ○面白かったところや心に残ったところの中で、一番伝えたいことを話すようにする。
三 終 末	○友達を紹介を聞いて、次に読んでみたいと思った本とその理由を話し合う。	○今後も、いろいろな国の民話に親しめるよう促す。

#### 4. 第1・2学年 生活 「学校探検」

公開授業の展開

	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 導入	<p>学校探検することを確認する</p> <p>&lt;1年生&gt; 1年生は教室で2年生のお迎えを待つ。</p> <p>&lt;2年生&gt; 2年生は、事前に注意事項をもう一度確認する。 2年生は、迎えに行く。</p>	<p>○トイレを済ませておく。</p> <p>○注意事項を伝えておく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・絶対に走らない</li> <li>・手をつなぐ</li> <li>・しずかに移動</li> <li>・親切にする</li> </ul>
二 展開	<p>ペアで学校探検をする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・い組→中央階段をおりて1階から、ろ組→2階から、は組→3階からスタートする。</li> <li>・残り時間5分前になったら、各先生は、巡回して1年生を送るように2年生に声かけをする。</li> <li>・時間があまった場合は、1年生のもう一度見に行きたい場所に行ったり、図書室で一緒に本を読んだりして時間を過ごす。</li> </ul> </div>	
三 終末	<p>本時をふりかえる</p> <p>各教室で学校探検の活動の振り返りをする。</p>	<p>*振り返り終了次第、各クラスで終了する。</p>

## 5. 第1学年 英語 「ハロウィンを楽しもう」

### 公開授業の展開

分節	生徒の学習活動	指導者の支援	留意点
導入	あいさつをしよう 英語であいさつをする。	A 「stand up, please.」 A 「Good morning. How are you?」 A 「Sit down, please.」	「I' m fine.」 英語の挨拶の仕方が分からなかったら J が補助を行う。
	モジュールタイム	○生徒に大きな声で発音させる。 J&A…生徒のモデルとなる大きな声で発音をする。 J&A 「What' s this?」	モジュールDVDを準備する。 聴くことと発音させることに重点を置く。
展開	本時の学習の流れを知り、ハロウィンに関する話しを聞く。	A…本時の学習の流れを説明する。 A…ハロウィンの話しを行う。 J…生徒の質問を聞く。 「Do you have any question?」	本時の学習の流れが書かれた模造紙を黒板に貼る。
	『Let' s Go Trick - or - Treating』を歌う。	A…歌い方を教える。 J…生徒のモデルとなる大きな声で楽しそうに歌う。	『Let' s Go Trick - or - Treating』のプリントを配る。
	ビンゴゲームのシートを作る。 ①ビンゴゲームのカードに出てくる単語を確認する。 ②生徒同士でビンゴゲームのカードのやり取りを行う。	①ピクチャーカードを使用し、表現の練習をする。 A…What' s this? J…生徒と一緒に発音する。 ②A…ビンゴゲームシートの作成の仕方を説明する。 AJ…デモンストレーションを行う。 「Ghost card please.」 「Here you are.」 「Thank you.」	Hat Bat Cat Vampire Treat Spider Moon Broom Ghost Owl Pumpkin etc  ○○○ card please. Here you are. Thank you.
	ビンゴゲームを行う。	A…ビンゴゲームを進める。 生徒に当て、カード引かせ発音させる。	
終末	あいさつをする 別れのあいさつを言う	ALT とあいさつをする。 バイバイソングを歌う。	

## 6. 第3学年 図画工作 「だんだんだんボール」

公開授業の展開

	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 導 入	<p>○段ボールで、どんなことができたか振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・切る・ちぎる・はがす・穴を開ける</li> <li>・つなげる・はる・重ねる・丸める・積む</li> </ul> <p>○本時のめあてを確認する。</p>	<p>○前時の活動を振り返るようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カードを活用することで、活動中のよりどころにできるようにする。</li> </ul>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px auto; width: fit-content;">                     友達と協力して、「だんだんランド」を完成させよう。                 </div> <p>○「ランド」から想像できるものを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・遊園地・乗り物・遊具・建物など規模が大きい物</li> <li>・トンネル・タワー・積んで遊ぶもの等</li> </ul> <p>○共同制作の約束を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・誰かが意見を言ったときには、グループの全員が耳を傾ける。</li> <li>・多数決だけで、意見を決めない。</li> </ul>	<p>○だんだん具体的な物になるように、発表を促す。</p> <p>○加工の仕方をヒントカードに表し、共同作業のよりどころになるように提示する。</p> <p>○視点を示して、全員でつくることを意識するようにする。</p>
二 展 開	<p>○段ボールを切ったり、つなげたりして、遊び道具をつくる。</p> <p>○話し合ったり、試したりしながら、自分たちがつくりたいものをつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・役割分担しよう</li> <li>・〇〇さんの(考え)にしよう</li> <li>・ぼくはこうしたい。どうする？</li> </ul>	<p>○素材を活かしたダイナミックな表現になるように、段ボールを十分に用意する。</p> <p>○刃物を安全に使えているか、見て回る。</p> <p>○制作が滞っているグループには、各々がどのようにしたいかを聞き、自分達で、折衷案にするのか、誰かの考えを採用するのか、新たな考えをつくるのか、選択させるように促す。</p>
三 終 末	<p>○友達と一緒につくった感想を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさん作ることができる。</li> <li>・速くつくることができる。</li> <li>・自分には無かったアイデアがあった。</li> <li>・楽しくつくることができる。</li> <li>・「いいね」と認めてもらえて嬉しい。</li> <li>・作りたいイメージがちがって大変。</li> </ul>	<p>○個人制作と、共同制作での違いを出し合い、共同制作のよさを実感できるようにする。</p> <p>○共同制作の難しさも取り上げ、次時の完成に向けて、どのように協力したらいいか考える機会をもたせる。</p>

## 7. 第3学年 国語 「よい聞き手になろう」

### 公開授業の展開

	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の話聞くモデル（教師）を見る。</li> </ul> （教師が準備した原稿を1人の生徒に発表させ、それを教師が聞いている場面を設定する。）	○聞き手としてよくない態度をとる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・窓の外を向いている。</li> <li>・質問や感想に反応しない。</li> <li>・質問を述べるが、見当違いの事を質問する。</li> </ul>
二 展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・よい聞き手とは何かを考える。</li> </ul> <b>【形式】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・顔を見て話を聞く</li> <li>・うなずきながら聞く</li> <li>・質問や感想を述べる</li> </ul> <b>【内容】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・分からないことを確かめる質問</li> <li>・みんなが知りたいことを確かめる質問</li> <li>・自分に引きつけた感想を述べる</li> </ul>	○形式的なことと内容的なことに分類して整理する。  ○質問や感想を分類する。
三 終 末	<ul style="list-style-type: none"> <li>・よい聞き手についてまとめる。</li> </ul>	○自分が今までできていたことと、これからがんばりたいことをまとめさせる。

## 8. 第4学年 国語 「よりよい話し合いをしよう」

### 公開授業の展開

	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
ㄱ 導入	本時の流れを確認する。 話し合いの準備をする。	前時までに生徒が気付いた、話し合うためのポイントを確認する。 それぞれの役割で大切なことを伝える。
ㄴ 展開	役割に沿ってグループで話し合う。 ① 話し合いを行う ② 観察グループからのアドバイス ③ グループを入れかえ再度行う  観察者は話し合いを見て、気づいたことを伝える。	指導者は、話し合いグループに参加し、生徒の意見をゆさぶったり、軌道修正したりする。  机間指導をして、話し合いがうまく進むようにアドバイスする。
ㄷ 終末	全体のふりかえりをする。 個人のふりかえりを行う	グループの話し合いという視点と、自分はどうだったか、という2つの視点でふりかえりをすることを伝える。

## 9. 第4学年 総合学習 「はんなり京都」

### 公開授業の展開

分節	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
Ⅰ 導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・茶道についての歴史，作法などの話を聞き，質問する。</li> <li>・お点前の模範を見る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意見が出やすいよう，講話の補足を行いながら，茶の湯について説明する。</li> <li>・さまざまな角度から見えるように移動させる。</li> </ul>
Ⅱ 展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・茶道の体験をする。</li> <li>①お点前の模範</li> <li>②茶筥の振り方</li> <li>③お菓子配布お湯を注ぐ</li> <li>④お点前</li> <li>⑤おぼん・茶碗を持ち帰る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お茶室で講師の補助を行う。</li> <li>・①-⑤の点について，気になった所を助言する。</li> <li>・待っている人は，体験している人の良いところを見つけるように指示を出す。</li> </ul>
Ⅲ 終末	<ul style="list-style-type: none"> <li>・振り返りをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習したことを次時に生かすための振り返りをさせる。</li> <li>・自分が体験したことを中心に大切だと思ったところをまとめるように指示する。</li> </ul>

## 10. 第6学年 総合 「京都のおすすめを紹介しよう」

公開授業の展開

	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 導入	○前時までの活動をふり返り、発表の手順・視点を確認する。	・前回のリーフレット発表をふり返り、自分のおすすめのポイントがまとめられているか、再度確認する。
二 展開	<div style="border: 1px solid black; text-align: center; margin-bottom: 10px;">京都のおすすめを紹介しよう</div> ○各班の発表(各班 10 分程度) <ul style="list-style-type: none"> <li>・発表する班は、より具体的に丁寧に説明する。</li> <li>・資料に掲載されている内容のみにならないように注意する。</li> <li>・各班の発表後に質疑・応答</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表者が丁寧にはっきりと話すように促す。</li> <li>・説明と資料がきちんと一致するように、発表者以外の生徒が協力して操作できるように支援する。 (パワーポイント・ミニパンフレット・クイズなど)</li> <li>・発表で感じたこと、疑問に思ったことをメモする。(ワークシート)</li> <li>・初めて訪れる感覚で疑問に思うことや、詳しく知りたいことを具体的に質問できるように促す。</li> </ul>
三 終末	○発表をふり返る。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・自身の班・各班の発表について、感想をまとめる。</li> </ul>	・観光客の視点を意識して分かりやすく説明することができたか、観光客の立場に立ち具体的に質問することができたかふり返る。(ワークシート・発表表)

# 1 1. 第5学年 社会 「わたしたちの生活と食糧生産」

## 公開授業の展開

分節	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 着眼	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お米についての質問に答える。</li> <li>・本時の学習のめあてを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○クリッカーを使用し、お米についての意識を確かめる。</li> <li>○めあてを黒板に書く。</li> </ul>
二 分析	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     日本のお米づくりは何を大切にすべきなのか、順位をつけて考えよう                 </div>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本のお米づくりの現状に関する資料を読み、課題について考える。</li> <li>・お米の輸入自由化について知り、日本のお米づくりは何を大切にすべきなのかを話し合う。</li> <li>・グループで話し合ったことを発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○農業従事者人口の低下や消費量の減少などの資料を提示し、日本のお米づくりの課題について考えさせる。</li> <li>○気がついたことやわかったこと、不思議に思ったことなどを記録させる。</li> <li>○机間指導を行い、感覚的になっていないか、資料の読み間違いがないかを確認する。</li> <li>○3名を指名し、資料から読み取れることを発表させる。</li> <li>○「品種改良」や「化学薬品・農薬の使用量の変化」、「ネット販売」等の資料を提示し、お米の輸入自由化に対して、何を大切にすべきなのかを考えさせる。</li> <li>○何を大切にしていけばいいか、順位を決めさせ、理由も考えさせる。</li> <li>○机間指導を行い、各グループでの話し合いの内容を確認する。</li> <li>○大切にしたいことの順番とその理由を発表させる。</li> <li>○順位が決められなければ、何が議論されたのかについて発表させる。</li> </ul>
三 一般化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いくつかの資料を根拠にして、日本のお米についての展望や課題についてまとめる。</li> <li>・自分が考えたことを発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本のお米に関する課題や展望について、資料を関連させてまとめさせる。</li> <li>○自分の考えやもっと調べたいことを中心に発表させる</li> </ul>

## 1 2. 第5学年 社会 「これからの自動車を考える」

### 公開授業の展開

	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
I 導 入	1. 本時の内容を知る。 2. グループで調べた内容を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のめあてを提示する。</li> <li>・グループで調べたことの中で、相手に伝えなければならないことを確認させる。</li> </ul>
II 展 開	自分達が調べた自動車の特徴を伝えよう	
	3. 発表グループに分かれて、自分達が調べてきたことを伝える。 4. 調べグループに戻り、自分が聞いてきたことを伝え合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3人1グループとなり、自分たちが調べてきたことを2分以内で発表させる。</li> <li>・聞き手は、自分達が調べてきた自動車との特徴を比較して、共通点や類似点、相違点のメモを取るよう指示する。</li> <li>・早く終わったグループは、質疑応答の時間にする。</li> <li>・発表で得た情報をグループで共有させる。</li> <li>・メモをもとに、紹介された自動車のことや共通点や相違点などを伝えるよう指示する。</li> </ul>
	これからの自動車において必要な機能を1つ選び、発表しよう	
	5. さまざまな立場から、必要な機能について考えを出し合う。 6. 出し合った機能の中で、最も大事なものを1つ選び理由をつけた発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな立場で考えるよう指示する。</li> <li>・これまでの資料や活動をもとに、これからの自動車づくりで大切にしなければならないことを考え、プリントに書かせる。</li> <li>・出てきた内容で、最も大切であることを話し合い、理由をつけて発表することを伝える。</li> <li>・まとまらないグループについては、なぜまとまらなかったのか、どれとどれが大切であるのかなど、その理由を発表するよう指示する。</li> <li>・大切にすることとその理由を発表させる。</li> </ul>
III 終 末	7. これまでの学習をもとに、自分の考えをまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで話し合ったことや他のグループの発表を聞いて、自分なりの考えを書いてまとめる。</li> <li>・書けない生徒には、グループで話し合ったことをもとにして、自分の言葉でまとめさせる。</li> </ul>

### 1 3. 第5学年 英語 「世界の時刻や天気を調べてみよう」

#### 公開授業の展開

分節	生徒の学習活動	指導者の支援	留意点
導入	歌を歌おう We Wish You a Merry Christmas を歌う	歌詞の始めの部分を始まる前に英語で言 いながら、内容を示す	モニターを見ながら歌うよ う促す
	フォニックスを確認しよう 教師の英語を聞いて、聞き取った 単語の最初の文字を書く	声には出さず、聞き取った音を書かせる	2回ははっきりと発音する
展開	数字を言おう 1～100までの数字を確認 ペアでカウンティングゲームを 行う	机間指導を行い、進みの遅いペアや間違っ た数字を言っているペアを見つけたら、訂 正して再度言わせる。	13と30など間違いやす い数字は画面を強調し、意 識して発音する
	天気・時間を聞きあおう 好きな天気・時刻を書いて、ペア で質問したり答えたりする	机間指導を行い、間違っている場合はその 場で訂正させ、さらに終了後全体でも確認 する。	メモに沿って質問と答えを 言わせる
	世界の時刻や天気を聞き取ろう 世界各都市のリレー中継を聞い て、天候と時刻を地図に書き込む	全く聞き取れていない箇所があれば、止め ながら何度か流す	繰り返し2回以上放送する。
終末	あいさつをする 答えを確認し、終わりの時刻を言 う	終了時刻を英語で言わせる。英語であいさ つをする。	

## 14. 第7学年 国語 「話題をとらえて話し合おう ～バズセッションしよう～」

### 公開授業の展開

分節	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 着眼	「裁判」のやり方を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どの意見が重要かを見極め、全員で一つの判決を下せるよう意識づける。</li> </ul>
二 分析	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px; text-align: center;">「僕」の「過ち」を許せるか否か、判決を下す。</div> <p>6人グループで話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一人ずつ自分の意見を発表し、その後、裁判官の進行で話し合いを深め、まとめていく。</li> <li>・自分とは違う意見についても聞き、班で一つの判決を下せるよう話し合う。</li> <li>・意見の根拠となる描写には線を引く。判決を下すポイントとなる意見はノートにメモする。</li> <li>・裁判官はこの後の報告内容をグループの陪審員に伝え、確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の意見は、教科書の描写を根拠にすることを指示する。</li> <li>・判決は、多数決ではなく、全員の意見の一致で決めるよう指示する。</li> <li>・どうしても決まらない場合は、司会者である裁判官の立場の生徒が、話し合いの中から、説得力があった、心動かされた方の意見を重視し、判決を下すよう指示する。</li> <li>・裁判官達の報告は、まとめた内容だけでなく、どのような意見が出て、どのような話し合いの流れの結果、どうなったかを報告できるよう指示しておく。</li> <li>・特に注目した描写や考えなど、発表できるようにしておく</li> </ul>
三 一般化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループの話し合いの内容と結果を報告する。</li> <li>・各グループの報告にあった意見の中から、反論したい、更に説明を聞きたい、などの意見を挙げさせ、全体で話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・注目した描写について、ポイントとなった考えについて板書する。</li> <li>・注目すべき意見が出た場合、補助発問をして内容を深めさせる。</li> <li>・話し合いの結果、自分の意見が変わった生徒に発言させる。</li> </ul>

## 15. 第7学年 英語 「京都を英語でプレゼンテーションしよう」

公開授業の展開

○主なる指示・発問 ■評価

区分	学習活動と内容 (予想される生徒の反応)	指導上の留意点・支援・評価 (教師の活動)	準備物・ 資料等
導入 8分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スモールトークの後、ウォームアップとして、歌を歌う。</li> <li>・前時までの学習を振り返る。</li> </ul>	英語の雰囲気を作る。	歌
展開 37分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鞍馬口駅でどこに行こうか迷っている外国人のビデオを見せる。</li> <li>・ビデオ内容の確認・整理をする。</li> </ul>	<p>○ビデオを見せる。</p> <p>○ビデオの内容に関する問いを与える。</p>	映像 ワークシート①
	相手の条件にあった京都のおすすめを伝えよう		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人で活動する。</li> <li>・条件にあったお勧めの場所とその理由を考える。</li> </ul>	○ワークシートを使って、条件にあった場所とその理由を考える。	
	ペアで京都の魅力を伝えよう		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアで活動する。</li> <li>・ペアで情報を共有し、間違いに気づいたり</li> <li>・自分の考えた案をグループ内で発表する。</li> <li>・それぞれの発表を聞いて、最も相手の条件に沿っている案を選ぶ。</li> </ul>	<p>○6つのグループを作り、自分のおすすめを紹介する。</p> <p>■自分の意見をグループのメンバーに伝えているか。</p>	
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学級内で意見の交流</li> <li>○ワークシートに全文を書く。</li> </ul>	○グループ内で最も条件にあっていると感じられるものを選び発表させる。	ワークシート②

## 16. 第7学年 総合学習 「京都のおすすめを紹介しよう」

公開授業の展開

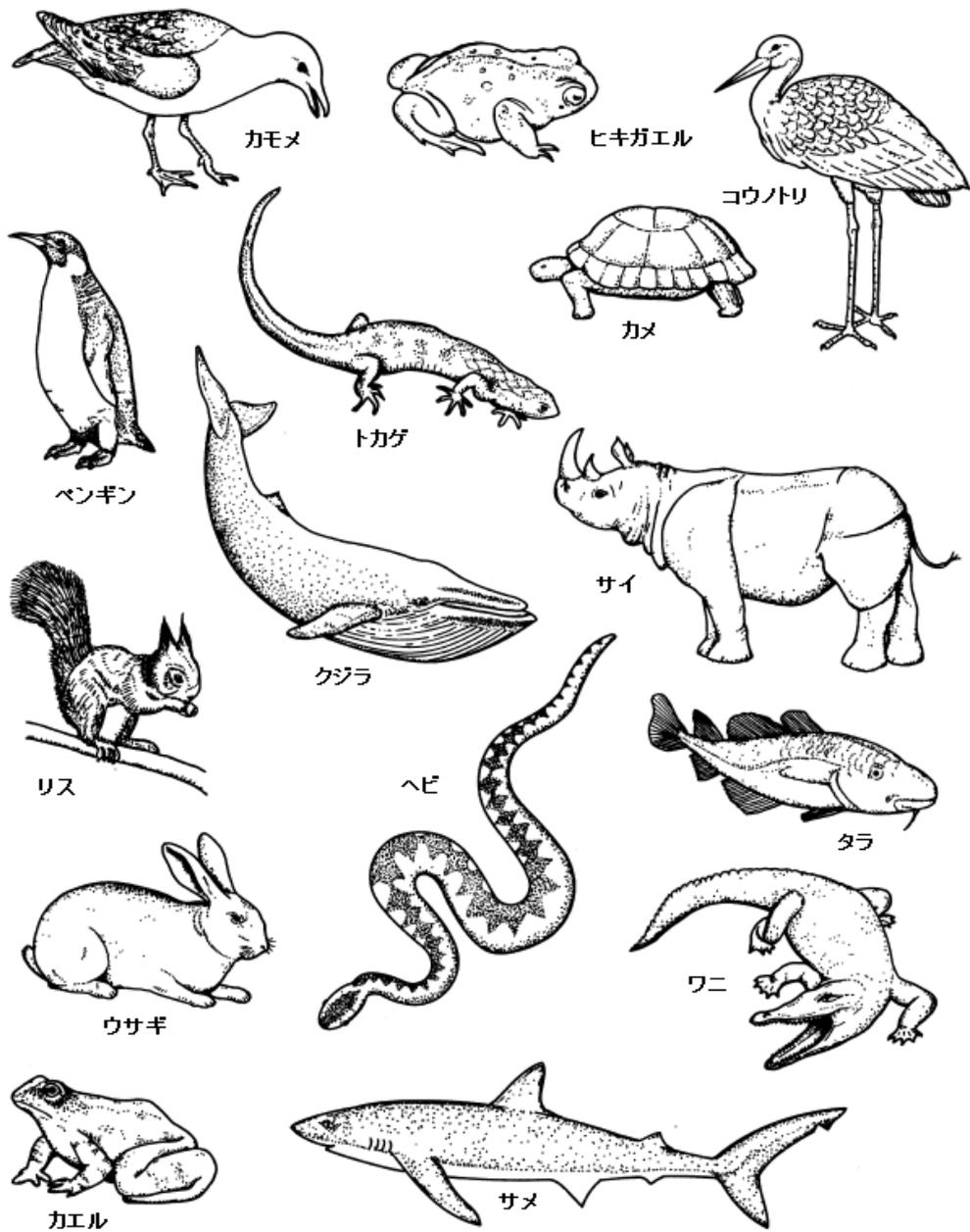
	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 導入	○前時までの活動をふり返り、発表の手順・視点を確認する。	・前回のリーフレット発表をふり返り、自分のおすすめのポイントがまとめられているか、再度確認する。
二 展開	<div style="border: 1px solid black; text-align: center; margin-bottom: 10px;">京都のおすすめを紹介しよう</div> ○各班の発表(各班10分程度) ・発表する班は、より具体的に丁寧に説明する。 ・資料に掲載されている内容のみにならないように注意する。 ・各班の発表後に質疑・応答	・発表者が丁寧にはっきりと話すように促す。 ・説明と資料がきちんと一致するように、発表者以外の生徒が協力して操作できるように支援する。 (パワーポイント・ミニパンフレット・クイズなど) ・発表で感じたこと、疑問に思ったことをメモする。(ワークシート) ・初めて訪れる感覚で疑問に思うことや、詳しく知りたいことを具体的に質問できるように促す。
三 終末	○発表をふり返る。 ・自身の班・各班の発表について、感想をまとめる。	・観光客の視点を意識して分かりやすく説明することができたか、観光客の立場に立ち具体的に質問することができたかふり返る。(ワークシート・発表)

# 17. 第8学年 理科 「動物のなかまを分類しよう」

公開授業の展開

分節	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 着 眼	<p style="text-align: center; border: 1px solid black;">セキツイ動物の特徴を話し合おう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提示されたセキツイ動物の特徴を話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○セキツイ動物の写真を各班のタブレットに送信し、気づいた特徴を書き込み、返信させる。</li> <li>○どんな特徴があるのか質問し、体のつくりを意識が向くようにする。</li> </ul>
ロ 分 析 【 認 知 的 葛 藤 】 ・ 一 般 化 【 メ タ 認 知 】	<p style="text-align: center; border: 1px solid black;">活動① セキツイ動物を3つまたは4つの仲間に分けよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提示されたセキツイ動物班で話し合っ て、ルールに従って、仲間わけをする。</li> <li>・各班の考えを比較し、学級全体で議論する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○セキツイ動物の絵を各班のタブレットに送信し、3つまたは4つに分類させ、返信させる。</li> <li>○分類のきまりを確認する。</li> <li>○机間指導の中で、仲間わけの理由を聞き、体のつくりに着目した分類の必要性に気づかせる。</li> <li>○知識に偏りすぎたり、主観が入ったりすると基準があいまいになり、分類ができなくなることに気づかせる。</li> <li>○各班の考えを電子黒板に提示すると同時に、各班のタブレットに送信する。</li> </ul>
	<p style="text-align: center; border: 1px solid black;">活動② 新しい動物はどここの仲間になるだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・班で話し合っ て仲間わけをする。</li> <li>・各班の考えを比較し、学級全体で議論する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○セキツイ動物の絵を各班のタブレットに送信し、どのグループに当てはめることができるのか話し合わせ、返信させる。</li> <li>○各班の考えを電子黒板に提示すると同時に、各班のタブレットに送信する。</li> </ul>
	<p style="text-align: center; border: 1px solid black;">今日の学習を振り返ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・難しかったところを答える。</li> <li>・わかりやすかった説明を振り返る。</li> <li>・自分の考えの変化に気づく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○机間指導をして、1時間の学習で自分の考えがどのように変化したのか気づかせる。</li> <li>○各班のタブレットに振り返りを書かせ送信させる。</li> </ul>

# グループ分けする



## 仲間分けのルール

- ①各グループには少なくとも2匹の動物が入らなければならない。
- ②1つのグループのメンバーは少なくとも1つの共通の特徴を持たなければならない。
- ③各グループは他のすべてのグループと違うものでなければならない。

「考える科学：授業6より」

## 18. 第8学年 英語 「Can Anyone Hear Me?」

### 公開授業の展開

	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
一 導入	<p>絵カードをストーリーの順番に並べよう</p> <p>Can Anyone Hear Me?のストーリーを聞き、9枚の絵カードをペアで正しく並べる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアで協力して、話の流れに合うように9枚の絵を並べるように促す。</li> </ul>
二 展開	<p>キーワードを書き留めよう</p> <p>再度、Can Anyone Hear Me?のストーリーを聞きながら、単語や語句を中心にメモを取る。</p> <p>ストーリーを復元しよう</p> <p>断片的なメモや記憶をもとに、元の文を復元する。</p> <p>ペアで確認しよう</p> <p>お互いの復元ストーリーを交流し合う。</p> <p>元のテキストと比べよう</p> <p>原文との同一性は求めないが、文法的な正確さやストーリーの論理性を重視する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ストーリーを1回聞かせる。</li> <li>・聞きながらメモを取らせる。</li> <li>・メモにはポイントとなる語句のみ書かせる。英文は書かせない。</li> <li>・ストーリーを口頭で復元するときには、メモの語句を手がかりにさせる。</li> </ul>
三 終末	<p>絵を見て、ストーリーを伝えよう</p> <p>グループになり、9枚の絵を一人ずつ英語で説明し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が発表するように促す。</li> </ul>

## 19. 第8学年 総合学習 「日本文化体験」

### 公開授業の展開

分節	生徒の活動内容	指導者の支援及び留意点
I 導 入	○前時まで習得したことを振り返り、発表の 手順・方法を確認する。	・司会進行、発表、体験、全てにおいて生徒主 導で運営できるようサポートする。
II 展 開	○文化交流授業 →日本文化発表 ・英語での説明（民舞・和太鼓・ 日本舞踊・空手） ・披露 →日本文化体験 ・ブース毎に体験してもらう	・全てのブースが体験できるよう時間配分を調 整する。
III 終 末	○後片付け ○振り返り	・後片付けの指示 ・振り返りシートの記入をさせる。

## 20. 第9学年 国語 「豊かな言葉（俳句）」

公開授業の展開 (注3)

分節	生徒の学習活動	指導者の支援及び留意点
着 眼	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の学習を振り返る。</li> <li>・句会の準備を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の復習を行う。</li> <li>・本時は句会を行うことを伝え、準備をさせる。</li> </ul>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">句会を行い、2チームから披講された歌を読み味わう。</div>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各チーム句を披講する。</li> </ul> <p><b>(個人活動)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・披講された二句の俳句を読み味わい、二句の優れている点、劣っている点を考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・句を披講させる。</li> <li>・披講された二句の俳句を読み味わわせ、二句の優れている点、劣っている点を考えさせる。</li> </ul>
分 析	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">披講された二句の俳句の優劣を考える。</div>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の班の俳句を解説する。</li> </ul> <p><b>(班活動)</b></p> <p>○俳句披講班以外</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・着眼の過程で考えた自分の考えをもとに、班で俳句の優劣を協議する。</li> <li>・どのような観点で俳句の優劣を判定するのか考える。</li> <li>・各班が述べた意見を判定の観点、参考にする。</li> </ul> <p>○俳句披講班</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・班内で俳句の解釈を改めて行い、終了すれば他の班に回り、質問を受けたり説明をしたりする。また、自分たちの俳句を支持してくれる班を探す。</li> </ul> <p><b>批判的思考の3タイプ</b></p> <p><b>Iタイプ (心象重視)</b></p> <p>披講された俳句を鑑賞し、そこに用いられている言葉を手掛かりに、想像豊かに読むことで俳句の世界観をしっかりとイメージし、そ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の班の俳句を解説させる。</li> <li>・どのような観点で俳句の優劣の判定を行えばよいのかという疑問を持たせる。</li> <li>・チームで披講された俳句についての意見を出させる。</li> <li>・言葉や表現、解釈から評価をしているようであれば、俳句に描かれている世界観を広げるように指導する。</li> <li>・班内で再度俳句の解釈をさせる。またそれが終了すれば、他班をまわり質問を受けたり説明をしたりさせる。また、自分たちの班の俳句を支持してくれる班を探す。</li> <li>・俳句に用いられている言葉や表現の仕方を手掛かりに、想像豊かに読ませ、自分達の考えやイメージを大切に、解釈をさせる。</li> </ul>

	<p>の優劣の判定を行う。 ⇒俳句に込められた心象を想像豊かに読み取り、作品や作者に迫る。</p> <p>[判定のための観点]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・句が読まれている情景</li> <li>・作者の思い</li> <li>・作品の世界観</li> </ul> <p><b>IIタイプ (解釈重視)</b></p> <p>披講された俳句を鑑賞し、用いられている表現技法や、用いられている言葉にこだわった細かい解釈を行い、その優劣の判定を行う。 ⇒俳句に用いられている表現や言葉に着目し、解釈をすることでその作品や作者に迫る。</p> <p>[判定のための観点]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・俳句の内容が分かりやすい</li> <li>・写真の内容を上手く表現できている</li> <li>・表現技法</li> </ul> <p><b>IIIタイプ (経験重視)</b></p> <p>披講された俳句を鑑賞し、直観や感覚といった経験的な考えや判断をもとに、俳句を解釈しその優劣の判定を行う。 ⇒何となく思ったこと、感じたことから作者や作品に迫る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・俳句を通して作者に向き合わせ、作者の描く情景や心象を読み取らせる。</li> <li>・俳句の世界へのイメージを膨らませる。</li> <li>・判定の根拠を明確にさせる。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・俳句の言葉一つ一つを吟味させ、句の解釈、用いられている表現技法に着目することで、俳句の世界観をどう広げれば良いのか考えさせる。</li> <li>・俳句の表現のひとつひとつに着目させ、俳句の情景を考えさせる。</li> <li>・解釈にとらわれ、俳句の世界観をイメージできていないようなら、机間指導で想像豊かに読むように指導し、そこから俳句へのイメージを深めさせ、俳句の世界観を広げさせ、鑑賞させる。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞のための観点を提示し、直観や感覚といった経験的な考えや判断だけで俳句の解釈をしないようにさせる。</li> <li>・用いられている言葉に着目させ、俳句の世界観をイメージさせる。</li> </ul>
一般化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・披講された2句の俳句の優劣を判定する。</li> <li>・判定チームがその判定理由を述べる。</li> </ul> <p>(判定理由には必ずその根拠を盛り込む。)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他判定者の意見を聞き、自分たちが気付かなかったこと、改めて考えたことについて考えてみる。</li> <li>・改めて二句の俳句について、詠まれている情景や作者の思いをイメージする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・披講された2句の俳句の優劣を判定させる。</li> <li>・判定チームに判定理由を述べさせる。</li> </ul> <p>(判定理由には必ず根拠を盛り込ませる。)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発表者に発表する姿勢を作らせ、聞き手には聞く姿勢を作らせる。</li> <li>・他判定者の意見を聞き、自分たちが気付かなかったこと、改めて考えたことについて考えてみる。</li> <li>・改めて二句の俳句について、詠まれている情景や作者の思いをイメージさせる。</li> </ul>

## 21. 第9学年 社会 「日本の政治について考えよう」

公開授業の展開

分節	生徒の学習活動	○指導者の支援及び留意点
ー 着 眼	前時までのタイプ分け Aタイプ：問題を多面的・多角的にとらえ、自分の考えを述べられている。 Bタイプ：自分の考えが根拠を持って述べられているが、 問題が多面的・多角的にとらえていない。 Cタイプ：問題について理解しておらず、自分の考えが根拠を持って述べられない	
＝ 分 析	肯定側が主張を述べる } ※ 否定側が尋問をする } 肯定側が回答をする } ※ 否定側も同様に行なう 肯定側が反論する・否定側が反論する 否定側主張・肯定側主張 判定	○時間を過ぎたら発表を打ち切る。 ○議論がそれて、間違った認識に基づいて意見が述べられた場合は、間に指摘する。 ○最後の作戦会議前にジャッジから質問を行う。
≡ 一 般 化	ジャッジはそれぞれの話し合いをきいてどちらの主張が優れていたかを判断する。 ジャッジはそのように判断した理由を述べる ふりかえりを行う。集団的自衛権の是非について自分の意見をまとめ、話し合いを通しての感想を書く。	それぞれに賛成したジャッジの意見を発表させる。 最後にジャッジリーダーからまとめをする。

## ◎附属高等学校における取り組み

### 1. 国語科

夏目漱石『こころ』の授業

——グループによる教え合いと討議の過程を踏まえた学習——

国語科 中井 光

※以下 資料







<資料1>

★ 結び方の動画が見られます



### ふろしき講習会

“ふろしき”に見る日本人の“心”と“知恵”のある暮らし

京都和文化研究所 **むす美** 山田悦子  
<http://www.kyoto-musubi.com>

■ ふろしきに見る日本人の暮らし

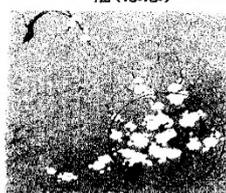
- ・『包み』と『結び』に見る日本人の精神性
- ・日本人は「**最小限のものを最大限に生かす**」達人  
 「ふろしき」・「住空間」・「食環境」 etc
- ・エコ・・・今見直される「循環型の暮らし」……心と知恵のある暮らし＝丁寧な暮らし  
 (例 浴衣 ⇒ ねまき ⇒ おしめ ⇒ 雑巾)

※ 3R (Reduce 削減・Reuse 再使用・Recycle 再利用) + Respect (敬う)

■ ふろしきとは・・・

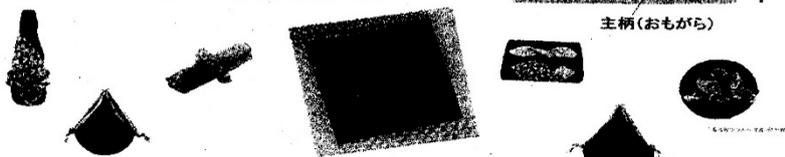
- ・「風呂敷」の名前の語源 と 成り立ち
- ・真四角でない布 【 天地左右 】
- ・サイズ 【 中巾、二巾、三巾、四巾、五巾・・・】 約10種類
- ・中身の目安 【 対角線の1/3 】
- ・意匠・・・日本独特の美意識と心遣いが隠されている
  - ・「色」・・・慶弔の使い分け
  - ・「文様」・・・吉祥文様 花鳥風月
  - ・「素材」・・・正絹、綿、化学繊維 ほか

.....幅(はば).....



.....丈(たけ).....

主柄(おもがら)



最小限のものを最大限に活用する

【真結び】

※ 絶対ほどけない



【真結びのほどき方】

※ 魔法のようにほどける



【ひとつ結び】

※ 使い方のバリエーションが広がる

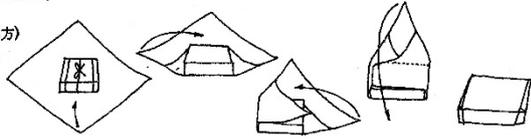


<資料2>

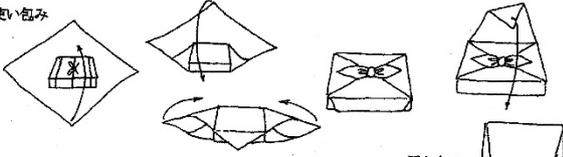
■風呂敷の包み方

(基本の包み方)

・平包み



・お使い包み



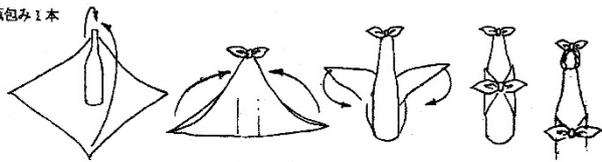
・二つ結び (長いもの・・・掛け軸 など)



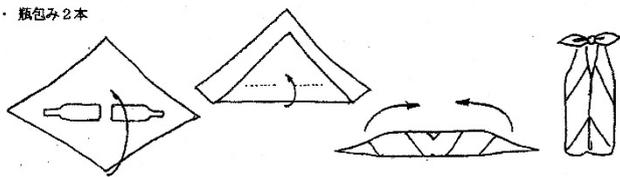
・隠し包み



・瓶包み1本



・瓶包み2本



京都府文化研究所 むす美

■サブバッグ活用法

・スイカ包み (丸いもの、複数もの)



・クイックバッグ

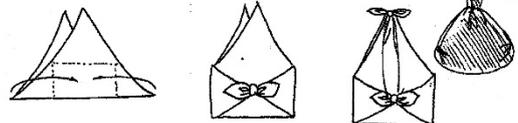
・あろしきトート (小さいもの、複数もの)



・シンプルBAG (不定形のもの、プレート上のもの、天地無用のもの)



・リボンBAG (定型のもの)

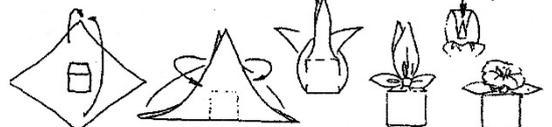


・しずくバッグ

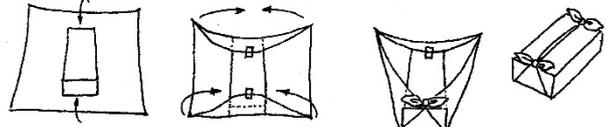
・おでかけバッグ

(応用編)

・花包み (さまざまなBOX類、円筒形など)



・ティッシュケース (ケーキなどひっくり返せないもののラッピングにも適する)



・ペットボトル包み



京都府文化研究所 むす美

<資料3>

「異文化理解」本時学習

美意識と心遣い

風呂敷から見える日本の文化。

母のお櫃の中の赤ちゃんイメージ=大切に守るという精神

大切とは、ものを大切に扱う、相手に大切なものを渡すということ

日本の文化は「 」文化→風呂敷・着物（和服）

西洋は「 」文化→かばん・洋服



<包む文化=日本文化の特徴>

① ( ) の暮らし

\*一枚の布でいろいろ用途を考え、転用する

風呂敷→ ( )  
着物のリフォーム・再利用

風呂敷・着物だけではなく ( ) や ( ) も  
様々な場面に活用できる

② ( ) を大切にしたい暮らし



③ ( ) の良いものを大切にしたい暮らし

\*その時々に応じて暮らしを工夫できる日本人の知恵が様々なところで見られます。あなたの身の回りで気がついたことはあるでしょうか？

### 3. 社会科 「グローバル化を考えるーグローバルビンゴを楽しむー」

高田敏尚

区分	
導入 5分	前時に書かせた「グローバル化のイメージについて」のワークシート（B5）を返却
展開 1 10分	T：本日のワークシート（A4 グローバル世界を楽しもう）を配布、読ませた 海外（外国）に関する問いと答えであることを説明する 右下に1ヶ所、空白の問いがあり、この部分を各自で完成させる T：右下の各自が考えた問いを、数人の生徒を指名して読ませる T：筆記用具と貴重品、そしてワークシートを持って移動することを指示 晴天なら中庭、雨天なら展示ホールに生徒は移動
展開2 15分	T：これはビンゴゲームであることを説明 それぞれの問いについて、友人にインタビューをしてワークシートに書き込む たて、よこ、ななめに4人の人をみつければよい、その時、必ず握手をし、1 対1の会話をすることを指示 また、各1列のなかに異性が必ず含まれることもルールであることを説明 S：開かれた空間のなかで、最初は緊張しているが、各自が握手をして当該者を見つける S：ビンゴになったら、指導者のもとにきて確認をうける T：異性が含まれていることや、気になる回答をしている生徒の氏名などをチェックする ビンゴ達成者2位までの生徒に教室に戻り黒板に世界地図を書いておくことを指示 S：それぞれが、ワークシートに書かれた人物を探す T：適当なところで切り上げて、教室に戻る
展開 3 15分	T：さきほどチェックした気になる回答について確認 「英語以外の言葉をお話する」人を見つけた人は？ S：英語以外の言葉を紹介する T：各自のマイクエスチョンを答えた人を探す S：各自のマイクエスチョンの質問と、回答を紹介 T：（黒板の世界地図をみながら）次のような人を見つけた人は、黒板の世界地図の「その国の場 所」にドットをうちにくることを指示 左の地図には「外国のアーティスト」、右の地図には「外国製品」と指定し、それぞれの問いの 答えを みつけた人は前にでて、作業をする T：この2つの地図を見て、どのようなことがわかるでしょう
まとめ 5分	T：授業のはじめに渡したワークシート（B5）の空白部分に ○には「2つの世界地図をみて気づいたこと」、△には「あなたが最初にイメージしたグロー バル化」 が変化したか（その理由）、変化しなかった（その理由）」そして、■には「この授業の感想」 を記入して提出することを指示

## 総合学習を楽しもう(社会編)

次のような人を見つけてください

外国に行ったことがある？	外国製品を身につけている？	新聞で外国の記事を読んだ人	英語以外の言葉を少しでも話せる？
名前	名前	名前	名前
国名	国名	国名	国名
目的は	何を	どんなこと	話して
外国人の友達がいる？	行ってみたい外国はどこ？	学校以外で外国語を勉強している？	外国へ手紙を書いたことがある？
名前	名前	名前	名前
国名	国名	国名	国名
きっかけは	どうして	何のため	理由は
外国の電化製品をもっている？	外国の有名なスポーツ選手は？	外国のアーティストを1人あげると？	外国人と話したことがある？
名前	名前	名前	名前
国名	国名	国名	国名
何を	選手名と種目	名前は	どんなこと
他の国に行った経験のある人と話した？	外国のおみやげをもらったことがある？	外国の小説を読んだことがある？	
名前	名前	名前	名前
国名	国名	国名	国名
どんなことを	何を	感想は	

# 総合学習ふいかえいワークシート

現代社会 実施日

月

日

( )組 ( )番 (

)

1. あなたはどのような点に「国際化」を見いだしますか。



## ◎附属特別支援学校における取り組み

### 1. 小学部「合同生活」学習指導案 1

### 「世界の国から英語に親しもう」

#### 公開授業の展開

学習の流れ	学習活動	手立て
集合	一本橋にクラス毎に座る。	一本橋を準備し座るように声を呼びかける。(一本橋は窓側に) 全員着席するようにする。
挨拶	挨拶代表希望者が挨拶する。	他に挨拶をしたい児童がいれば一緒にする。
英語の挨拶	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日の学習を聞く。来客があることを聞く。</li> <li>来客を拍手で迎える。</li> <li>英語の挨拶を聞く。</li> <li>"Hello! Good afternoon, Mr. John. How are you?"</li> <li>"Hello! Fine thank you. And you?"</li> <li>"Fine thank you"など</li> <li>Mr. Johnの挨拶を聞く。</li> </ul>	K先生が倉庫から登場する。 拍手で迎える。 K先生はアメリカ人のように振る舞う。 hello, helloと登場する。 HはK先生と並んで立って英語で挨拶をする。 K先生は児童たちに丁寧に挨拶する。
歌いながらダンスをする	「こんにちはで握手をしたら」の「こんにちは」の部分で"hello, hello"に変えて歌う。	インタビュー型式で。 指導者たちは、児童のそばで大きな声で言う。 指導者は一緒に歌いながら児童に二人組を作るように促して一緒に歌い踊る。2番までを2回繰り返す。 (ピアノ H)
数字と動物を読む	<ul style="list-style-type: none"> <li>一本橋に着席する。</li> <li>カードに合わせて、日本語で数字を読む。</li> <li>英語の読み方で読む。</li> <li>「1から10」</li> <li>「犬、猫、猿、豚」</li> <li>"what do you see?"の後にカードを見て言う</li> </ul>	指導者たちは児童のそばで大きな声で言う。 Hが日本語、英語はK先生それぞれの後について、指導者たちも一緒に言う。 Hが"what do you see?"と言うとカードを見て、K先生が答える。 指導者たちは児童のそばで大きな声で"what do you see?"と言う。
終わりの挨拶	挨拶代表希望者が挨拶する。	

2. 小学部「合同生活」学習指導案 2

「世界の国から英語に親しもう」

公開授業の展開

内容	学習活動	指導上の留意点
<p>始めの挨拶</p> <p>金曜日の振り返り 来客があることを聞く</p> <p>来客が登場</p>	<p>一本橋にクラスごとに座る。 代表の児童が挨拶をする。</p> <p>金曜日に来客があったことを振り返る。 来客があるので、挨拶の練習をする。 "hello"を代表の児童が言ったり全員で言う</p> <p>“hello”と言って迎える。 オバマイヤー先生と握手をする。 名前を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が座るように呼びかける。</li> <li>・“hello”や数字や絵カードを見せる。</li> <li>・指導者は大きな声で一緒に言う。</li> <li>・"hello"のカードを見せる。</li> <li>・オバマイヤー先生と児童が握手をしながら挨拶を楽しくすることで、“hello=こんにちは”を知る。</li> <li>・「オバマイヤー」と書いたカードを見せる</li> </ul>
<p>絵本の読み聞かせ</p> <p>ダンスをする</p>	<p>絵本「ブラウン ベア」の読み聞かせを聞く</p> <p>「春がきた」を踊る。 「ともだちになっちゃった」のあと”hello”と言う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ページをめくったときに動物の名前と鳴き声を言ってもらうことで、「自分も知っている」「鳴き声・英語言ってみよう」と思えるように指導者が言葉かけをする。</li> <li>・teacherのページにK先生の写真を貼ったり、childrenのページに児童の写真を貼ったりしておくことで興味が湧くようにする。</li> <li>・ダンスをして、何度も交代し子ども同士がかかわる中で自然と”hello”がでるようになる。</li> <li>・指導者も楽しそうに”hello”と言う。</li> </ul>
<p>さよならの挨拶を聞く</p> <p>オバマイヤー先生を送る</p> <p>終わりの挨拶</p>	<p>一本橋に座る。 "byebye"のカードを見て、言う。</p> <p>“byebye”と挨拶してオバマイヤー先生を送る 代表が挨拶をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者も楽しそうに”hello”と言う。</li> <li>・"byebye"のカードを見せる。</li> </ul>